

# 石橋地蔵久保遺跡

主要地方道太田大間々線地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

群馬県太田土木事務所  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

太田市の中央部に位置する石橋町一帯は、足利方面と足尾方面からの街道が交わる交通の要衝として、古くは周辺で生産された生糸の集荷場として賑わった場所でもあります。

現代においても、主要地方道太田大間々線と足利伊勢崎線とが交差する地域間交通の要衝であり、かねてより重度の交通渋滞が問題となっておりました。

このほど、付近を北関東自動車道が通ることになり、交通量の増大によるさらなる渋滞の激化が予想されたため、県では、渋滞緩和と通行上の安全確保のために交差点の拡幅工事を計画し、工事に先立って埋蔵文化財の記録保存の措置がとられることになりました。平成14・17・18年の3年度にわたって発掘調査が、また平成19年度に整理事業が、県太田土木事務所から当事業団に委託され、ここに本報告書刊行の運びとなりました。

整理作業が進められていたさなかの平成19年6月には、本遺跡から非常に近い場所で、古代の新田郡役所の中核施設の跡が発見され、大きな話題となりました。調査地は、古代の新田郡の中心地域に当たり、新田郡の古代史を解明する上で、重要な資料を提示することができました。

本報告書刊行に至るまでには、太田土木事務所、県教育委員会、太田市教育委員会はじめ関係諸機関並びに関係各位にご高配を賜りました。ここに銘記して心より感謝申し上げますとともに、本報告書が、地域の歴史を知り、豊かな地域社会を創造していくための資料として、広く活用されますことを願ひまして、序といたします。

平成20年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 高橋 勇 夫



# 例 言

1. 報告書名 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第425集、主要地方道太田大間々線地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、石橋地蔵久保遺跡
2. 遺跡所在地 群馬県太田市石橋町
3. 事業主体 群馬県東部県民局太田土木事務所
4. 調査対象地 主要地方道太田大間々線と主要地方道足利伊勢崎の石橋交差点の四方向側 4,770m<sup>2</sup>
5. 発掘調査・整理期間及び調査整理担当者、事務局体制

(1) 発掘：第一次調査 平成15年2月3日～3月31日

調査担当：須田正久(東毛調査事務所調査研究部調査研究第1課主任調査研究員)・増田真次(同)、小林正(調査研究員)

第二次調査 平成17年10月1日～12月31日

調査担当：高島英之(東毛調査事務所調査研究部調査研究第3課専門員、10月1日～31日)、山田精一(主任調査研究員)、田村博(調査研究員、11月1日～12月31日)

第三次調査 平成18年7月3日～10月13日

調査担当：石塚久則(事務局調査研究部調査研究グループ主任専門員(総括))、山田精一(主任調査研究員)

(2) 整理：平成19年4月2日～平成20年3月31日

整理担当：高島英之(事務局資料整理部資料整理第2グループ専門員(主幹))

(3) 調査整理機関組織事務体制

役員 理事長 小野字三郎(14・17年度)・高橋勇夫、常務理事 吉田豊(14年度)・木村裕紀

事務局 事業局長 神保侑史(14年度)・津金沢吉茂、調査研究部長 西田健彦・資料整理部長 佐藤明人、資料整理第2グループリーダー 大木紳一郎

管理部長 萩原利通(14年度)・総務部長 矢崎俊夫(17年度)・萩原勉、総務課長 植原恒夫(14年度)・宮前結城雄(17年度)・総務グループリーダー 笠原秀樹・経理グループリーダー 石井清、総務係長 小山建夫(14年度)・竹内宏(17年度)・経理係長 高橋房雄(14年度)・石井清(17年度)・総務グループ係長(総括) 須田朋子、総務部主幹(総括) 齊藤恵利子、主幹 吉田有光(14・17年度)・今泉大作(18年度)・柳岡良宏、副主幹 矢島一美、係長代理 森下弘美(14年度)・主任 清水秀紀(17年度)・栗原幸代(17・18年度)・佐藤聖行(17・18年度)・齋藤陽子、主事 田中賢一(14年度)・補助員 今井もと子・内山佳子(14・17・18年度)・若田誠・佐藤美佐子・木間久美子・北原かおり・狩野真子・松下次男(14年度)・吉田茂(14年度)・武藤秀典

東毛調査事務所 所長 能登健(14年度)・平野進一(17年度)、調査研究部長 真下高幸(14・17年度)

調査研究第1課長 佐藤明人(14年度)・調査研究第3課長 中沢悟(17年度)・庶務課長 笠原秀樹(14・17年度)・庶務課副主幹 柳岡良宏(14・17年度)・今泉大作(17年度)・主任 清水秀紀(17年度)・補助員 中沢恵子(14・17年度)・金子三枝子(17年度)

6. 報告書作成

(1) 本文執筆

第4章第1節 新山保和(ハツ場ダム調査事務所調査研究部資料整理グループ専門嘱託員)、第4章第2節 植崎修一郎(事務局資料整理部資料整理第2グループ専門員(主幹))、前記以外 高島英之

- (2) 編集 高島英之
- (3) 整理作業 飯田文子・大勝桂子・清水ゆり子・飯田由美子・阿部和子（資料整理第2グループ補助員）
- (4) 機械遺物実測 田中精子・福島瑞希（資料整理第2グループ補助員）
- (5) 遺構写真撮影 須田正久・増田真次・小林正（14年度）、高島英之・田村博（17年度）、山田精一（17・18年度）、石塚久則（18年度）
- (6) 遺物写真撮影 佐藤元彦（資料整理第1グループ主幹（総括））
- (7) 遺物保存処理 関邦一（資料整理第1グループ主幹（総括））、小村浩一・森田智子・津久井桂一・多田ひさ子（資料整理第1グループ補助員）
- (8) 整理指導助言 ①遺構図・遺構写真：石塚久則（資料整理第1グループ主任専門員（総括））・山田精一（資料整理第1グループ主任調査研究員）・須田正久（ハッ場ダム調査事務所調査研究部調査研究グループ主任調査研究員）  
 ②土器・特殊遺物：大木伸一郎（資料整理第2グループリーダー）、坂口一（調査研究部調査研究グループ主任専門員（総括））、神谷佳明（資料整理第2グループ主任専門員（総括））、桜岡正信（事務局調査研究部調査研究グループ主任専門員（総括））、高井佳弘（調査研究部調査研究グループ主任調査研究員）、深澤敦仁（資料整理第2グループ主任調査研究員）  
 ③墳輪：徳江秀夫（資料整理第2グループ主任専門員（総括））
7. 出土遺物・調査記録類保管先 群馬県埋蔵文化財調査センター（群馬県渋川市北橋町784-2）
8. 調査・整理指導  
 発掘調査及び報告書作成に際しては、下記の関係各機関にご高配・ご指導・ご教示を賜った。記して深甚なる謝意を表する（順不同、敬称略）。
- 群馬県教育委員会、太田市教育委員会

## 凡 例

1. 本報告書に掲載する遺構平面図の方位記号は、国家座標の北を表す。座標系は国家座標Ⅹ系である。調査区は、 $X=36420 \sim 36520$ 、 $Y=43690 \sim 44030$ の範囲に収まる。両軸とも上2桁の表記を省略する。
2. 遺構平面・断面実測図に示した標高値の単位はmである。
3. 遺構・遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。
4. 遺構の土層及び土器の色調の表現は、農林水産省農林水産技術会事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1993年版に準拠した。
5. 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・写真図版ともすべて共通している。
6. 本報告書で使用した地形図は、「相生」・「上野境」1/25000である。
7. 遺構の面積はデジタルプランメーターを使用して3回の計測値を平均したものである。
8. 本遺跡で検出された堅穴建物跡の中には、後述するように、竈は有するものあきらかに住居跡とは見なしがたい建物跡も存在するため、本報告書では「掘立柱建物」・「平地建物」等に対偶する建物遺構の概念として学界にも膾炙している「堅穴建物跡」の用語を使用する。

# 目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	6
第1節 遺跡の位置と立地	6
第2節 遺跡の歴史的環境	7
第3章 発見された遺構と遺物	21
第1節 I区の遺構と遺物	21
第2節 II区の遺構と遺物	22
第3節 III区の遺構と遺物	26
第4節 IV区の遺構と遺物	29
第5節 1区の遺構と遺物	50
第6節 2区の遺構と遺物	50
第7節 3区の遺構と遺物	63
第8節 4区の遺構と遺物	92
第9節 5区の遺構と遺物	109
第10節 6区の遺構と遺物	117
第4章 調査成果の整理とまとめ	125
第1節 出土した埴輪について	125
第2節 2区3号竪穴建物跡内1号土坑跡出土の火葬骨について	128
第3節 出土した黒書土器について	129
第4節 まとめ	132
写真図版	

## 図版目次

図1	石橋地蔵久保遺跡の位置と周辺の主な遺跡	20
図2	I A区1号竪穴建物跡平面図(上)、掘方平面図(下)、土層断面図	21
図3	II A区1・3号竪穴建物跡・1号土坑跡平面図・土層断面図	22
図4	II A区1号竪穴建物跡エレベーション図	23
図5	II A区1号竪穴建物跡出土遺物	23
図6	II B区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図	24
図7	II C区5・6号竪穴建物跡・1・2号土坑跡平面図・土層断面図	25
図8	II C区5号竪穴建物跡出土遺物	26
図9	III A区2号竪穴建物跡・1・2号土坑跡平面図・土層断面図	27
図10	III A区表土出土遺物	27
図11	III C区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図	28
図12	III C区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図	28
図13	III C区1号溝跡平面図・土層断面図	29
図14	III C区1号溝跡出土遺物	29
図15	IV A区2号溝跡平面図・土層断面図	30
図16	IV A区3号土坑跡平面図・土層断面図	31
図17	IV A区7号土坑跡平面図・土層断面図	31
図18	IV A区10号土坑跡平面図・土層断面図	31
図19	IV A区10号土坑跡出土遺物	31
図20	IV B区1号竪穴建物跡・1号土坑跡・平面図・土層断面図	32
図21	IV B区1号竪穴建物跡出土遺物	33
図22	IV C区9号土坑跡平面図・土層断面図	33
図23	IV C区1号溝跡平面図・土層断面図	34
図24	IV D区1号溝跡平面図・土層断面図	34
図25	IV E区1号溝跡平面図・土層断面図	35
図26	IV E区表土出土遺物	35
図27	IV F区西側1号溝跡平面図・土層断面図	37
図28	IV F区東側1号溝跡平面図・土層断面図	38
図29	IV F区1号溝跡出土遺物	38
図30	IV F区1・3号竪穴建物跡平面図・土層断面図	39
図31	IV F区1号竪穴建物跡出土遺物	40
図32	IV F区3号竪穴建物跡出土遺物	40
図33	IV F区2号竪穴建物跡平面図	40
図34	IV F区2号竪穴建物跡掘方平面図・土層断面図	41
図35	IV F区2号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図	41
図36	IV F区2号竪穴建物跡出土遺物	41
図37	IV F区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図・貯蔵穴エレベーション図	42
図38	IV F区4号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図	42
図39	IV F区4号竪穴建物跡出土遺物	43
図40	IV F区5号竪穴建物跡・電跡平面図・土層断面図	43
図41	IV F区5号竪穴建物跡出土遺物	44
図42	IV F区6号竪穴建物跡第一次電跡線道路平面図・土層断面図	44
図43	IV F区6号竪穴建物跡平面図・土層断面図	45
図44	IV F区6号竪穴建物跡出土遺物(1)	46
図45	IV F区6号竪穴建物跡出土遺物(2)	47
図46	IV F区10号土坑跡平面図・土層断面図	47
図47	IV F区32号土坑跡平面図・土層断面図	48
図48	IV F区32号土坑跡出土遺物	48
図49	IV F区表土出土遺物	49
図50	1区10号竪穴建物跡平面図・土層断面図	50
図51	2区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図	51
図52	2区1号竪穴建物跡掘方平面図	52
図53	2区2号竪穴建物跡出土遺物	52
図54	2区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図・貯蔵穴エレベーション図・掘方平面図・エレベーション図	53
図55	2区2号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図	53
図56	2区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図	54
図57	2区3号竪穴建物跡出土遺物	55
図58	2区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図・貯蔵穴・ピット土層断面図	56
図59	2区4号竪穴建物跡掘方平面図・エレベーション図	57



0060	2区4号整穴建物跡電路平面図・土層断面図	58
0061	2区4号整穴建物跡出土遺物(1)	58
0062	2区4号整穴建物跡出土遺物(2)	59
0063	2区5号整穴建物跡平面図・土層断面図・柱穴土層断面図・出土遺物	60
0064	2区1号孤立柱建物跡平面図・柱穴土層断面図・エレベーション図	61
0065	2区1号溝跡平面図・土層断面図	62
0066	2区1号溝跡出土遺物	62
0067	2区1号土坑跡平面図・土層断面図・出土遺物	63
0068	2区2号土坑跡平面図・土層断面図	63
0069	3区6号整穴建物跡平面図・土層断面図	64
0070	3区6号整穴建物跡掘方平面図	65
0071	3区6号整穴建物跡出土遺物(1)	65
0072	3区6号整穴建物跡出土遺物(2)	66
0073	3区7号整穴建物跡平面図・土層断面図・掘方平面図	67
0074	3区7号整穴建物跡電路平面図・土層断面図	68
0075	3区7号整穴建物跡出土遺物	69
0076	3区8号整穴建物跡出土遺物(1)	69
0077	3区8号整穴建物跡平面図・土層断面図・出土遺物(2)	70
0078	3区9号整穴建物跡平面図・土層断面図	71
0079	3区9号整穴建物跡出土遺物(1)	72
0080	3区9号整穴建物跡出土遺物(2)	73
0081	3区11号整穴建物跡平面図・土層断面図・出土遺物	74
0082	3区12号整穴建物跡平面図・土層断面図・出土遺物	75
0083	3区13号整穴建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図	76
0084	3区13号整穴建物跡掘方平面図	77
0085	3区13号整穴建物跡出土遺物(1)	78
0086	3区13号整穴建物跡出土遺物(2)	79
0087	3区13号整穴建物跡出土遺物(3)	80
0088	3区13号整穴建物跡出土遺物(4)	81
0089	3区13号整穴建物跡出土遺物(5)	82
0090	3区14号整穴建物跡平面図・土層断面図・掘方平面図・出土遺物	82
0091	3区15号整穴建物跡平面図・土層断面図	83
0092	3区15号整穴建物跡掘方平面図・出土遺物	84
0093	3区16号整穴建物跡平面図・土層断面図・掘方平面図・床下土坑エレベーション図	85
0094	3区16号整穴建物跡電路平面図・土層断面図・出土遺物	86
0095	3区17号整穴建物跡平面図・土層断面図	87
0096	3区17号整穴建物跡出土遺物	88
0097	3区2号溝跡平面図・土層断面図	89
0098	3区3号土坑跡平面図・土層断面図	89
0099	3区3号土坑跡出土遺物(1)	90
0100	3区3号土坑跡出土遺物(2)	91
0101	3区表土出土遺物	92
0102	4区1号整穴建物跡平面図・土層断面図・出土遺物	93
0103	4区2・3号整穴建物跡平面図・土層断面図・掘方平面図・床下土坑土層断面図	94
0104	4区2号整穴建物跡電路土層断面図	95
0105	4区2号整穴建物跡出土遺物	95
0106	4区4号整穴建物跡平面図・土層断面図・掘方平面図	96
0107	4区4号整穴建物跡出土遺物(1)	96
0108	4区4号整穴建物跡出土遺物(2)	97
0109	4区5号整穴建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図	98
0110	4区5号整穴建物跡掘方平面図	99
0111	4区5号整穴建物跡出土遺物	100
0112	4区6号整穴建物跡平面図・土層断面図	101
0113	4区6号整穴建物跡出土遺物(1)	101
0114	4区6号整穴建物跡出土遺物(2)	102
0115	4区1号道路跡平面図・土層断面図	102
0116	4区2・3号溝跡平面図・土層断面図	103
0117	4区3・4号溝跡平面図・土層断面図	104
0118	4区1・2号井戸跡平面図・土層断面図・エレベーション図	105
0119	4区2号井戸跡出土遺物	106
0120	4区2号井戸跡出土遺物(1)	107
0121	4区2号井戸跡出土遺物(3)	108

図122	4区1・3・7号土坑跡平面図・土層断面図	109
図123	4区表土出土遺物	109
図124	5区1・2号竪穴建物跡平面図・土層断面図	110
図125	5区1・2号竪穴建物跡掘方平面図・エレベーション図	111
図126	5区1号竪穴建物跡出土遺物(1)	111
図127	5区1号竪穴建物跡出土遺物(2)・2号竪穴建物跡出土遺物	112
図128	5区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘方平面図・貯蔵穴土層断面図・エレベーション図	113
図129	5区3号竪穴建物跡竈跡平面図・土層断面図・掘方平面図	114
図130	5区3号竪穴建物跡出土遺物(1)	115
図131	5区3号竪穴建物跡出土遺物(2)	116
図132	5区表土出土遺物	116
図133	6区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図・掘方平面図	117
図134	6区1号竪穴建物跡出土遺物	118
図135	6区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図	118
図136	6区2号竪穴建物跡掘方平面図	119
図137	6区2号竪穴建物跡出土遺物(1)	119
図138	6区2号竪穴建物跡出土遺物(2)	120
図139	6区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図	121
図140	6区3号竪穴建物跡出土遺物	121
図141	6区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図	122
図142	6区5号竪穴建物跡出土遺物	122
図143	6区1号柱穴列跡平面図・土層断面図	123
図144	6区1号井戸跡・6号土坑跡平面図・土層断面図	123
図145	6区1号井戸跡出土遺物	124
図146	低位置突帯階輪	130
図147	竪穴建物跡出土埴輪	131
図148	2区3号竪穴建物跡内1号土坑跡と出土骨磁器	132
図149	石橋地蔵久保遺跡出土黒書土器	133

## 写真図版目次

PL 1	石橋地蔵久保遺跡とその周辺(航空写真)
PL 2	I A区全景・1号竪穴建物跡、II A区1・3号竪穴建物跡
PL 3	II A区1号土坑跡、II C区全景・5号竪穴建物跡・1号土坑跡、III A区2号竪穴建物跡・1号土坑跡、III C区全景
PL 4	III C区1号竪穴建物跡・3号竪穴建物跡・1号溝跡、IV A区全景・2号溝跡
PL 5	IV A区2・3号溝跡・3号土坑跡、IV B区全景
PL 6	IV B区1号竪穴建物跡・1号溝跡・1号土坑跡、IV C区全景・2号竪穴建物跡
PL 7	IV C区1号溝跡、IV D区1号溝跡、IV E区全景、IV F区全景・1号溝跡
PL 8	IV F区1号溝跡
PL 9	IV F区1号溝跡・1～3号竪穴建物跡
PL 10	IV F区2号竪穴建物跡・3・4号竪穴建物跡
PL 11	IV F区5・6号竪穴建物跡
PL 12	IV F区6号竪穴建物跡、I区全景・10号竪穴建物跡、2区全景・1号竪穴建物跡
PL 13	2区1・2号竪穴建物跡
PL 14	2区2・3号竪穴建物跡
PL 15	2区3・4号竪穴建物跡
PL 16	2区4・5号竪穴建物跡・1号掘立柱建物跡
PL 17	2区1号溝跡、3区全景・6号竪穴建物跡
PL 18	3区6・7号竪穴建物跡
PL 19	3区7～9号竪穴建物跡
PL 20	3区11～13号竪穴建物跡
PL 21	3区13・14号竪穴建物跡
PL 22	3区14～16号竪穴建物跡
PL 23	3区15～17号竪穴建物跡・2号溝跡
PL 24	3区2号溝跡・1号土坑跡、4区全景・1・2号竪穴建物跡
PL 25	4区2～4号竪穴建物跡
PL 26	4区4～6号竪穴建物跡・2～4号溝跡・1号井戸跡
PL 27	4区2号井戸跡・3・7号土坑跡、5区全景・1～3号竪穴建物跡
PL 28	5区3号竪穴建物跡、6区全景・1～3・5号竪穴建物跡
PL 29	6区柱穴列跡・1号井戸跡・6号土坑跡

- PL 30 II A 区 1 号整穴建物跡、II C 区 5 号整穴建物跡、III A 区表土、III C 区 1 号溝跡、IV A 区 10 号土坑跡、IV B 区 1 号整穴建物跡、IV E 区表土、IV F 区 1 号溝跡・1～5 号整穴建物跡出土遺物
- PL 31 IV F 区 6 号整穴建物跡・32 号土坑跡出土遺物
- PL 32 IV F 区 32 号土坑跡・表土、2 区 2・3 号整穴建物跡出土遺物
- PL 33 2 区 3～5 号整穴建物跡・1 号溝跡・1 号土坑跡、3 区 6 号整穴建物跡出土遺物
- PL 34 3 区 6～9 号整穴建物跡出土遺物
- PL 35 3 区 9・11 号整穴建物跡出土遺物
- PL 36 3 区 9・11～13 号整穴建物跡出土遺物
- PL 37 3 区 13 号整穴建物跡出土遺物
- PL 38 3 区 13 号整穴建物跡出土遺物
- PL 39 3 区 13～17 号整穴建物跡・3 号土坑跡出土遺物
- PL 40 3 区 16・17 号整穴建物跡・3 号土坑跡出土遺物
- PL 41 3 区 3 号土坑跡・表土、4 区 1・2・4 号整穴建物跡出土遺物
- PL 42 4 区 4～6 号整穴建物跡出土遺物
- PL 43 4 区 6 号整穴建物跡・2 号井戸跡・表土、5 区 1 号整穴建物跡出土遺物
- PL 44 5 区 1～3 号整穴建物跡出土遺物
- PL 45 5 区 3 号整穴建物跡・表土、6 区 1・2 号整穴建物跡出土遺物
- PL 46 6 区 2・3・5 号整穴建物跡・1 号井戸跡出土遺物



## 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

**本事業** 本事業は、群馬県太田土木事務所によって計画された、太田市石橋町における主要地方道太田大間々線地方道路交付金事業に伴い、発掘調査による埋蔵文化財記録保存の措置が当事業団に委託されたものである。発掘調査時には「主要地方道太田大間々線交通安全施設等整備事業」に伴う発掘調査とされたが、整理業務の委託契約時に委託者側より前記事業名が呈示され、それに基づいて委託契約が締結され、事業が実施されることになった。

**本事業の意義と目的** 太田市の中央部に位置する石橋町一帯は、足利方面と足尾方面からの街道が交わる交通の要衝として、古くは周辺で生産された生糸の集荷場として賑わったと言われている。現代においても、主要地方道太田大間々線と同足利伊勢崎線が交差し、東武桐生線に沿った地域間交通の要衝であることには違いない。

主要地方道伊勢崎大間々線は、太田市街地とみどり市大間々町とを南北に結ぶばかりでなく、県内から足尾・日光方面へ向かう主要なルートの一部として、また、主要地方道足利伊勢崎線は、近年、特に太田市只上町の国道50号線と伊勢崎市三室町の国道17号線上武道路との間をショートカットする連絡路として利用されることが顕著であり、近年では双方方向ともに交通量が極めて多くなってきている。そのため、この両道路が交差し、東武鉄道桐生線の路切にも近接する石橋十字路では、かねてより重度の交通渋滞が問題となっていた。

日本道路公団（当時）による北関東自動車道太田及び藪塚インターチェンジの建設の動きを受けて、県土木部は、藪塚インターチェンジと太田インターチェンジの間に位置する当該箇所が、北関東自動車道・上武国道・国道50号線などの北関東における道路交通の大動脈相互の中継点に当たり、今後、さらなる交通量の増大に伴う渋滞の激化が予想されることと鑑みて、同箇所における渋滞の緩和と通行上の安全を確保するために、石橋交差点の拡幅工事を計画した。

**調査着手に至る調整過程** 平成13年度当初の県土木部（当時）と県教育委員会事務局文化財保護課（当時）との調整会議において、県土木部から、太田市石橋町における主要地方道太田大間々線交通安全施設等整備事業の計画が具体的に呈示され、工事範囲における埋蔵文化財包蔵の有無や発掘調査の必要性、さらにはそうした場合に要する期間及び経費額等についての照会がなされた。県教育委員会文化財保護課からは、調査対象地の南側約500mの位置には、全長102mの5世紀後半の大型前方後円墳で県指定史跡である鶴山古墳が位置し、また調査区の西北西約200mには、白鳳時代寺院跡の寺井庵寺が位置するなど、周辺に重要な遺跡が多く、埋蔵文化財の包蔵が濃密な地域であるため、当該箇所についても埋蔵文化財の包蔵が十分予想されたため、埋蔵文化財試掘調査の必要と、その結果、遺跡が発見された場合には、内容によっては工事計画の変更等の可能性まで視野に入れた協議が必要である旨が答申された。

県太田土木事務所の依頼を受けた県教育委員会文化課では、事業対象地の取得状況に応じて、平成13年度中に石橋交差点以西の主要地方道足利伊勢崎線の北側において第一回目の埋蔵文化財試掘調査を実施し、古代の溝跡等遺構の存在を確認した。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲ではなかったため、県教育委

員会文化課と太田市教育委員会文化財課との間で協議を経て、遺跡所在地の大字名と小字名をとって石橋地蔵久保遺跡と名付けられ、周知の埋蔵文化財包蔵地とされた。

県教育委員会文化課と県土木部との協議では、埋蔵文化財保護の観点から言えば、埋蔵文化財包蔵地における開発行為は、出来得るならば避けるべきであることが示されたが、県土木部側は、上記の事情から、交通上の渋滞緩和と安全確保のために当該箇所における工事はやむを得ぬところであるということで、以後、本格的に、記録保存の措置のための本調査に向けての本格的な調整協議が続けられた。

平成14年末に、県教委文化課が主要地方道足利伊勢崎線の南側で埋蔵文化財の範囲確認調査を実施し、その部分にまで埋蔵文化財の包蔵が広がっていることを確認したことを承けて、県太田土木事務所、県教委文化課、当事業団の三者の間で、記録保存のための発掘調査にむけての協議が継続的に進められた。

翌、平成15年1月付、太田土木事務所と当事業団との間で、本遺跡発掘調査の委託契約が締結され、2月3日から石橋交差点以西の主要地方道足利伊勢崎線の両側において発掘調査が実施されることになった。

## 第2節 調査の経過

**調査の経過** 発掘調査は県太田土木事務所の委託を受けた当事業団によって、主に佐波郡東村（当時）から藪塚本町（当時）南部を経て太田市北郊にかけて北関東自動車道（伊勢崎～県境地域）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に対応するために伊勢崎市三和町に開設された東毛調査事務所が事業を管掌し、平成14年度と17年度の調査を所管した。平成17年度末に東毛調査事務所が閉所され、平成18年度の調査は事務局調査研究部が所管した。

調査対象箇所は、主要地方道太田大間々線と同足利伊勢崎線が交差する太田市石橋町の石橋交差点を中心とする四方方向側で、総延長で東西に330m・南北に140mの範囲である。現在ある道路の拡幅工事に先立つ調査であるため、調査区の幅は最大で約15m、最小で0.8mに過ぎず、また、片側が交通量の激しい道路に接し、もう一方の片側は商店や民家が調査区との境を接して密集しており、上下水道・ガス管等の引き込み箇所や進入路を確保しながらの調査であったため、調査箇所が細切れにならざるを得ず、調査は困難を極めた。また、調査対象地は調査着手直前まで民家・商店等が建ち並んでいたため、地表面下の掘乱が甚だしく、遺構の残存状況は決して良好ではなかった。

平成14年度からの調査着手にあたって、調査を円滑に進めるために、調査対象地を、それぞれ太田大間々線・足利伊勢崎線を挟んで石橋十字路の東西南北四方方向に7箇所に分割し、調査対象地の呼称とした（図1）。また、調査区の測量基点は480.800、国家座標旧日本測地系第Ⅸ系 X36480、Y=43800、新日本測地系第Ⅸ系 X=363834.567、Y=44092.479に設定し、各グリッドは5m四方を一単位とし、調査区内に40グリッドを設定した。グリッドは国家座標 X軸と Y軸との交点の数値をそのまま呼称した。緯度は旧座標系で 36° 19' 40" 19893、新座標系で 36° 19' 51" 52965、経度は旧座標系で 139° 20' 43" 50442、新座標系で 139° 20' 31" 91555 である。

**平成14年度の調査（第一次調査）** 平成14年度の調査は、平成15年2月3日から3月7日までの約1ヶ月間、石橋交差点西側の主要地方道足利伊勢崎線の両側約1000mを対象に実施し、年度末一杯まで基礎整理、事務等を行った。足利伊勢崎線の北側では、調査対象地最西端から4区画（Ⅳ-A・B・C・D区）6

箇所、足利伊勢崎線の南側では9区画（Ⅰ-A、Ⅱ-A～E、Ⅲ-A～C区）を調査した。検出された主な遺構は、古墳時代後期～奈良時代の竪穴建物跡、古代の溝跡などである。調査区の幅が狭いため竪穴建物跡をまるまる1棟分検出できた箇所は皆無である。Ⅳ-B～D区で検出された正方位より約15度北に傾いて東西方向に一直線に流れる大溝は、後の平成18年度に実施された調査においても、Ⅳ区の東側に続くⅣ-E・F区でも続きの部分が検出された。

**平成17年度の調査（第二次調査）** 平成17年度の調査は、平成17年10月3日から12月9日まで、石橋交差点東側の、足利伊勢崎線の北側に接する拡幅部分1,850m<sup>2</sup>について実施した。南北方向の現道及び河川によって調査区は3箇所に分断された（1～3区）。全般的には、本調査事業に関わる調査区の中で最も南北幅を広く取ることが出来た調査区であるが、1区では河川護岸上の安全確保の必要性や電線・水道管等地下埋設物の存在、あるいは調査対象地に隣接して営業する店舗等との関連から制約が多く、県教委文化課との協議の上、幅僅か1m弱の範囲の調査にとどめざるをえなかった。奈良時代を主体とする竪穴建物跡、奈良・平安時代の小規模な掘立柱建物跡、奈良時代初期の南北溝跡、中近世の南北溝跡などの遺構が検出された。また、遺構調査終了箇所から漸次、旧石器の確認調査を実施したが、旧石器は検出されなかった。12月16日で現場を撤収し、年度末まで基本整理・事務等を実施した。

**平成18年度の調査（第三次調査）** 平成18年7月3日から10月13日にかけて、平成14年度に調査した石橋交差点西側のⅣ-D区の東側に続くⅣ-E・F区と太田大間々線の両側4～6区、合計1,700m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した。Ⅳ-F区では平成14年度の調査でⅣ-B～D区で検出された東西方向の大溝の続きの部分が検出され、上幅約4m、深さ約2m、断面逆台形を呈する大規模な溝であり、8世紀の竪穴建物跡を破壊して掘削されており、埋土中に天仁元年（1108）降下の浅間山火山灰As-B軽石の純層を確認することが出来ないため、それ以降の掘削あるいは堰直しがなされたものと考えられる。本遺跡において約130mに亘って直線的に走向している様子を明らかにすることが出来た。東西両側とも調査対象範囲の外に出てしまうため、全体の走行距離や方向を確実にすることは出来なかった。また、他に、奈良・平安時代の竪穴建物跡、近世の溝跡などが検出されている。本次調査を以て、本事業に関わる3箇年度に及んだ全ての調査を終了した。なお、遺構調査終了後に漸次、旧石器の確認調査を実施したが、旧石器は全く確認されなかった。

#### ・発掘調査日誌抄

##### （1）平成14年度

平成15年2月3日（月）調査担当者着任。発掘調査準備。

5日（水）ⅠA・ⅢAB区表土掘削着手。

6日（木）ⅠA区1・2号竪穴建物跡調査、ⅢA区1・2号竪穴建物跡調査。

7日（金）ⅠA・ⅡC～E・ⅢB～C区調査終了。ⅠA～B・ⅢA～C区調査続行。

17日（月）ⅣBC区調査着手。

20日（木）ⅣB区調査終了、ⅣA区表土掘削。

26日（水）ⅣA～C区全景写真撮影。

28日（金）ⅣD区溝跡調査着手。

3月5日（水）調査終了。

6日（木）ⅣAD区埋め戻し。

7日（金）現場撤収。

## 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

### (2) 平成17年度

平成17年10月3日(月) 調査担当者着任、2区表土掘削、遺構確認着手。

6日(木) 2区1号溝跡、堅穴建物跡調査着手。

25日(火) 2区全景写真撮影、3区表土掘削

26日(水) 2区調査終了、埋め戻し着手。3区遺構確認着手。

28日(金) 3区堅穴建物跡、溝・土坑・井戸跡等調査着手。

11月1日(火) 調査担当者1名交替。

8日(火) 3区西側全景写真撮影、旧石器確認調査着手。3区東側表土掘削着手。

9日(水) 3区西側旧石器確認調査終了、埋め戻し。

10日(木) 1区調査着手、10号堅穴建物跡調査。

14日(月) 1区調査終了、3区東側堅穴建物・溝・土坑跡等調査。

12月2日(金) 3区東側全景写真撮影、旧石器確認調査着手。

6日(火) 3区旧石器確認調査終了。

8日(木) 3区埋め戻し、調査終了。

12日(月) 調査区引き渡し。

### (3) 平成18年度

平成18年7月3日(月) 担当者着任。調査準備。

11日(火) 4区表土掘削、遺構確認着手。

13日(木) 4区溝跡等調査。

26日(水) 4区道路跡調査、IVF区調査着手。

31日(月) 4区1・2号堅穴建物跡、IVF区1号溝跡、1号堅穴建物跡調査。

8月11日(金) 4区2～4号堅穴建物跡、6区表土掘削、IVE区表土掘削、IVF区1号溝跡調査。

18日(金) 4区5号堅穴建物跡、5号溝跡、5号土坑跡等調査。

25日(金) 4区、IVE区、6区調査継続。

9月5日(火) 4区旧石器確認調査着手。IVF区1号溝跡調査。

15日(金) 4区旧石器確認調査終了、埋め戻し。6区堅穴建物跡等調査。IVF区1～6号堅穴建物跡調査。

26日(火) 5区表土掘削、遺構確認。6区調査終了、埋め戻し。IVF区1～6号堅穴建物跡調査。

10月3日(火) 5区1～3号堅穴建物跡調査。IVF区旧石器確認調査。

10日(火) 5区1～3号堅穴建物跡調査。IVF区旧石器確認調査終了、埋め戻し。

12日(木) 5区全景写真。3号堅穴建物跡平面図実測、掘方精査。

13日(金) 5区3号堅穴建物跡掘方平面図実測及び同全景写真、旧石器確認調査、埋め戻し。全調査を終了。

24日(金) 調査区引き渡し。

整理作業は当事業団資料整理部(担当:資料整理第2グループ)が担当し、当事業団分室において平成19年4月2日から平成20年3月31日まで1年間実施し、同年3月に発掘調査報告書を刊行した。



## ・基本土層

表土	表土：地表から約15～30cm、攪乱層
I	I層：厚さ約8cm、灰褐色土、現地表面から約8cmまで
II	II層：厚さ約13cm、黄灰褐色土
III	III層：厚さ約40cm、灰黄色土、灰色砂質土をブロック状に含む
IV	IV層：厚さ約19cm、若干黄色がかった褐色土
V	V層：厚さ約22cm、砂混じり褐色土
VI	VI層：厚さ約18cm、灰色砂層
VII	VII層：厚さ約5cm、最大径6.4cmの亜円礫混じり砂礫層
VIII	VIII層：厚さ約12cm、灰褐色砂層
IX	IX層：厚さ15cm以上、最大径14.5cmの亜円礫混じり灰褐色砂礫層

\*全調査対象地中、最も基本土層の検出に適した4区での調査結果による。土層中には、軽石粒子、顕著なテフラ粒子の濃集層準は検出されなかった。

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置と立地

**位置** 石橋地蔵久保遺跡は、以前は太田市と旧新田町の市町境まで約1kmの太田市城西端部に当たっていたが、平成17年の太田市と新田町との合併により、現在では太田市のほぼ中央に位置している。

調査区は主要地方道足利・伊勢崎線を挟んで南側と北側に、また、主要地方道太田・大間々線を挟んで東側と西側に調査区が分かれている。主要地方道太田・大間々線の東側には、東武鉄道桐生線が走っており、治良門橋駅周辺に展開する市街地の一角にあたっている。

**地形** 地形的には、渡良瀬川によって形成された大間々扇状地の扇中央部にあたり、標高約100m前後の平地である。

大間々扇状地は、南流する渡良瀬川によって形成された開析扇状地で、標高約200mのみどり市大間々町一帯を扇頂部として、現在の桐生市、太田市、伊勢崎市東北部などの地域にまたがり、扇頂から扇端まで南北約20km、東西約15km、平均勾配10パーミルという規模を呈する関東平野第三位、群馬県内筆頭の巨大な扇状地である。この大間々扇状地は、高位から桐原面（古期扇状地面）、藪塚面（新期扇状地面）の二つの扇状地からなり、太田市藪塚町から西長岡、天良、成塚、石橋町、寺井の平坦地はこの新期扇状地藪塚面上に形成されており、藪塚台地と通称されている。渡良瀬川はその後、八王子丘陵の東側に流路を変えているため、現在は現流河川のない欠水性の扇状地となっており、近世に用水路が開削されるまでは笠懸野と称される不毛の土地であった。この扇状地は、この地方の遺跡の立地に大きく関わっている。

**立地** 遺跡地は、桐生市との市境をなす八王子丘陵南麓の平地の市街地の中に立地する。この八王子丘陵は秩父古成層によって形成された足尾山塊の残丘で第三紀層であり、最高峰は標高298.9m、複雑な地質を有する。西側に当たる藪塚側には、なだらかな尾根がいくつも張り出しており、それらの支脈には凝灰岩が発達している。水利に恵まれない藪塚台地中西部に比べればこれらの谷には湧水が認められ、温泉が湧出する箇所も知られ、古くから集落が形成された様子が判明している。旧藪塚本町内から太田市島山・寺井にかけての遺跡の分布も、八王子丘陵西麓から南麓一帯に集中している。

八王子丘陵西麓に沿って帯状に展開する水田地帯は、近世の寛文4年（1664）に代官岡上景能の指揮によって岡登用水が計画されてから本格的に開田されたものであり、よく知られているように岡登用水の本格的活用も明治初頭以降のことであり、本格的な水田の展開もここ百数十年のことと考えられる。大間々扇状地中西部に比べて恵まれていたとは言っても、従来、水利の便が良好とは決して言い難い土地であったようである。

## 第2節 遺跡の歴史的環境

### 第1項 周辺の旧石器時代遺跡の動向

昭和61年から63年まで太田市教育委員会と成塚住宅団地遺跡発掘調査団が約10万㎡に亘って発掘調査を実施した、一級河川蛇川と東武鉄道桐生線を挟んで本遺跡の北側約300mのところの位置する成塚町の成塚住宅団地遺跡では旧石器時代の層位からではないが、上面から木葉形尖頭器やエンドスクレイパーが採集されている（太田市教育委員会・成塚住宅団地遺跡発掘調査団『成塚住宅団地遺跡』Ⅰ～Ⅱ-1～4～Ⅲ1990～92）。

本遺跡の北西約1.7kmの場所に位置し、八王子丘陵西麓の平地に立地する西長岡宿遺跡は、北関東自動車道の建設に伴って平成13年度より16年度まで調査を実施しているが、包含層中から黒色安山岩製のサイドスクレイパーが1点出土している（報告書未刊）。同じく北関東自動車道の建設に伴って平成14・15年度に当事業団が発掘調査した北西に隣接する西長岡横塚古墳群では、北側台地の斜面部分で石核やチップが出土している（報告書未刊）。

本遺跡の真東約2.5kmのところの位置し、金山丘陵の最北端の平尾根上に立地する強戸町～緑町～吉沢町にかけて所在する峯山遺跡では、かつてナイフ型石器、削器、抉入石器、槍先型尖頭器などが出土し（『太田市史 通史編 原始・古代』1995）、平成14年度から17年度にかけては北関東自動車道の建設に伴って当事業団が発掘調査を実施したが、浅間板鼻褐色軽石層から暗色帯上面にかけて角錐状石器やナイフ形石器など多量の旧石器が出土している（報告書未刊）。また、その南側に接する強戸口峯山遺跡では後期末の荒屋型彫刻刀が出土している（『太田市史 通史編 原始・古代』1995）。

峯山遺跡の西側に隣接するみどり町の萩原遺跡でも、北関東自動車道の建設に伴って当事業団が平成16年度から18年度にかけて調査を実施し、後世の遺構埋土中からではあるがナイフ型石器が出土している（報告書未刊）。

旧塚本町北東端の桐生市との旧市町境に近い位置、西に延びる八王子丘陵の一支丘上の南斜面に立地するつつじ山遺跡では、昭和25～26年に明治大学によって発掘調査が行われ、暗褐色粘土層から黒曜石ナイフ型石器、剥片、石核などが出土している。約2万2千年前くらいのもと考えられる（『塚本町誌』1991）。

### 第2項 周辺の縄文時代遺跡の動向

**草創期の遺跡** 旧石器が出土した峯山遺跡は、縄文時代草創期の土器が散布していると『太田市史 通史編 原始古代』（1995）にあるが、当事業団が平成14年度から着手した調査では、縄文時代草創期の土器は全く発見されていない（報告書未刊）。丘陵部頂上付近で早期及び前期の土器を伴う土坑跡や黒曜石製の石鏃、スクレイパー、剥片などが出土している。

成塚町成塚住宅団地では草創期の遺構は検出されていないが、草創期の柳葉形尖頭器が採集されている。

**早期の遺跡** また、同じく『太田市史 通史編 原始古代』（1995）には本遺跡の北東約1.6kmに位置する向山遺跡でも早期の土器が散布すると記すが、当事業団が北関東自動車道太田パーキングエリアの建設に

先立って平成15年度から発掘調査を実施した範囲では縄文時代の遺構は検出されていない（報告書未刊）。

このほか、旧石器が出土している西長岡町の西長岡宿遺跡からも包含層中から早期の燃糸文土器や押型文土器が多数出土しており、早期の屋外炉らしき遺構が検出されており、北西に隣接する西長岡横塚古墳群からも早期の土器片が包含層中から出土している（共に報告書未刊）。さらに本遺跡の北西約2kmに位置し、八王子丘陵南麓の低地に位置する菅塩町菅塩遺跡でも早期から後期にかけての包含層中より土器・石器が多数出土している（報告書未刊）。

旧藪塚本町域の南東に位置する八王子丘陵支脈の一つの先端部に立地する岩崎遺跡では、田戸下層式土器片が出土しているが、量は少なく、関連遺構も検出されていない。また、八王子丘陵西麓に位置する滝之入前遺跡からは早期後半茅山式の土器片が出土している（『藪塚本町誌』1991）。

**前期の遺跡** 前期の遺構は、昭和62年から平成5年まで一級河川蛇川の改修工事によって先立って当事業団によって調査された本遺跡の北側に隣接する成塚町成塚石橋遺跡で堅穴建物跡と落とし穴が検出されている（(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『成塚石橋遺跡』Ⅰ～Ⅲ 1988～96）。西長岡宿遺跡の北に隣接する西長岡横塚古墳群では包含層中から前期の土器片と石鏃などが出土している。

旧藪塚本町域では、前期中頃の黒浜式土器片が旧藪塚本町域の八王子丘陵南に位置する台山遺跡やその南側の愛宕神社西遺跡、八王子丘陵町城南端部に近い尾根上に立地する岩崎遺跡、同じく八王子丘陵西麓にある滝之入前遺跡などから出土している。前期後半の諸磯式土器片は、先述の旧石器が出土したつつじ山遺跡、前期黒浜式土器が出土した愛宕神社西遺跡・滝之入遺跡、諏訪山遺跡など、いずれも八王子丘陵尾根上の遺跡から出土している。つつじ山遺跡からは床面らしき遺構や柱穴痕跡なども検出されている（『藪塚本町誌』1991）。

**中期の遺跡** 本遺跡周辺でこの時期の集落が顕著に検出されたのは、成塚町成塚住宅団地で、中期後半の堅穴建物跡が14棟検出されている。出土土器には中部高地や東北地方の系統のものが含まれている。また、西長岡横塚古墳群でも中期の土器片が若干出土している（報告書未刊）。

旧藪塚本町域では、縄文時代中期の集落跡は、旧藪塚本町域では滝之入遺跡・中原遺跡などから検出されている。加曾利E式土器を主体とする時期である。滝之入遺跡では堅穴建物跡1棟と落とし穴・土坑などが多数検出された。八王子丘陵西麓の平地に立地する中原遺跡では数石堅穴建物跡が検出されている。両遺跡とも後期前半堀之内式にかけての遺構・遺物が発見されており、長い期間にわたって人々の営みが存続したことが判明している（『藪塚本町誌』1991）。

**後・晩期の遺跡** 西長岡宿遺跡では縄文時代後期の堅穴建物跡7棟、配石遺構約200基が検出されており、本遺跡周辺では縄文時代後期の遺構としてまとまった量である。配石遺構は方形のものが多く、列石、集石等、多様な形態を呈している。『太田市史 通史編 原始・古代』1995では、隣接する西長岡横塚古墳群で晩期の土器が採集されていると記すが、当事業団が北関東自動車道の建設に先立って実施した調査範囲では晩期の遺構・遺物は発見されていない。

旧藪塚本町域北部の八王子丘陵西麓に位置する石之塔遺跡では、後・晩期の遺構が発見されている（『藪塚本町誌』1991）。石圍炉跡、数石状遺構、配石状遺構、埋設土器などが検出されている。縄文時代の堀之内Ⅱ式や加曾利B式期の土器が出土しているが、主体となるのは安行Ⅲa式期の土器であり、この遺跡から出土した縄文土器の大部分を占める。さらに土偶・土板・岩板・耳飾りなど特殊な遺物の出土が多い。群馬県内において数少ない縄文晩期を主体とする遺跡として著名になった。

### 第3項 周辺の弥生時代遺跡の動向

周辺部に展開する弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡に比べて非常に少なく、旧藪塚本町域5箇所を数えるのみであり、いずれも旧町域東部の八王子丘陵西麓一帯である。

八王子丘陵西麓の現在水田地帯になっている平地に立地する藪塚町藪塚の元屋敷遺跡からは、弥生時代中期後半の竜見町式の壺型土器が出土しており、再葬墓の可能性が指摘されている。

八王子丘陵西麓すぐのところの緩傾斜地に立地する藪塚町中原の中原遺跡からも、中期後半ながら竜見町式よりは若干後代の壺型土器が出土し、壺棺として使用された土器である可能性がある。

八王子丘陵西麓に接する緩傾斜地に立地する滝之入遺跡では、後期前半の樽式の壺型土器が埋土中から出土しており、町域北部の、同じく八王子丘陵西麓に接する緩傾斜地に立地する石之塔遺跡からは後期後半の土器片が出土している。

平成16年度から当事業団によって北関東自動車道及び県道国定藪塚線並びに石田川流域調節池等の建設工事に伴って発掘調査が実施され、八王子丘陵西麓の平地の水田地帯の中に立地する藪塚町藪塚西野原遺跡では、県道国定藪塚線にかかる部分の調査と調節池にかかる部分の調査において弥生時代中期後半～後期の堅穴建物跡が計7棟検出されている（県道国定藪塚線にかかる部分のみ報告書刊行。（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団「西野原遺跡（1）（2）2006」）。

成塚町成塚石橋遺跡では、弥生時代後期樽式土器が出土した堅穴建物跡が7棟検出され、同型式土器出土の最東端を示している。このほか、八王子丘陵南西の支丘斜面上に立地する西長岡東山古墳群では中期後半の土器が出土しており、また西長岡横塚古墳群でも後期の土器が採集されているが、両遺跡ではこの時代の遺構は検出されていない。弥生時代における本地域の全般的な動向には未だ不明な点が少なくない。

### 第4項 周辺の古墳時代遺跡の動向

本遺跡周辺は東毛地域においても屈指の古墳密集地帯であり、古墳時代集落と併せ、牧草に暇がないほどである。

**集落** 古墳時代の集落跡は、縄文時代の集落や弥生時代の土器が出土した場所とはほぼ同様、東・北に八王子丘陵、西・南を大開々扇状地の台地にはさまれた低台地上に展開しており、その多くが複合遺跡である。地形上、人びとが生活する場所が本遺跡周辺では限られていた様子がわかる。

本遺跡の北側に近接する成塚町成塚住宅団地遺跡では、古墳時代前期の堅穴建物跡が約100棟、中期の堅穴建物跡が約360棟、後期から飛鳥白鳳期に至る堅穴建物跡は約400棟が検出されており、蛇川の流路に沿って長期に亘って大集落が営まれた様子が判明している。古墳時代中期には、一辺約100m前後の方形の範囲を溝と河川によって区画された集落が営まれており、これを豪族居館とみる見方もあるが、溝と河川によって画された範囲の中には顕著な大きさの堅穴建物跡がみられるわけでもなく、また掘立柱建物跡は全く検出されていないため、豪族居館と断定するには、まだ慎重であるべきであろう。古墳時代前期から終末期に続く集落跡は、本遺跡と成塚住宅団地遺跡の間に隣接する成塚石橋遺跡でも検出されており、本遺跡で検出された古墳時代後期～終末期の堅穴建物跡群との関連が想定できる。

八王子丘陵南西端の支丘上に立地する西長岡町の西長岡東山古墳群では、古墳時代初期～前期の方形周溝墓群や古墳時代後期の古墳群と共に古式土師器を出土する集落跡が検出されている。在地の弥生時代後期の樽式土器の系譜を引く土師器が出土しており、4世紀初頭頃の集落である。また、周溝墓群はいずれも溝底に4世紀中葉降下の浅間山火山灰 As-C 軽石及び6世紀中葉降下の榛名山二ッ岳火山灰 Hr-I の堆積が認められ、出土土器の示す年代観と矛盾しない。

八王子丘陵が南に向かって舌状に突出した台地上に立地する成塚町～北金井町～大鷲町にわたって所在する成塚町の向山遺跡・成塚向山古墳群では、北関東自動車道太田パーキングエリアの建設に伴って平成15・16年度に当事業団が発掘調査を実施しているが、古墳時代前期4世紀の方墳と共に前期初頭の吉ヶ谷式土師器を伴う集落跡が検出されている（報告書未刊）。

八王子丘陵下の平坦地では、前記した本遺跡に隣接する成塚町成塚住宅団地遺跡、成塚石橋遺跡のほか、北関東自動車道の建設に伴って調査が行われた西長岡宿遺跡や菅塩遺跡で古墳時代初期～前期の竪穴建物跡及び土器が検出・出土し、古墳時代初期～前期の集落が平坦地においても展開していた様子が判明している。また、藪塚町西野原遺跡では古墳時代後期の集落が検出されている。

**旧藪塚本町域の古墳** 昭和10年から翌年にかけて群馬県が県下に残存する古墳を一斉に調査し、その結果として昭和13年に公開された『上毛古墳総覧』には、旧藪塚本町域に所在が確認出来る古墳として121基が収録されている。その後、平成3年（1991）に刊行された『藪塚本町誌』編纂に関わる分布調査で、『上毛古墳総覧』収録外の古墳として新たに14基の古墳が確認されている。しかしながら町誌編纂時の調査によって確認できた旧町域内の古墳は55基に過ぎず、『上毛古墳総覧』以降、昭和末年までの間に旧町域に所在する古墳の半数以上が、何らかの形で破壊され消滅したことになる。

町誌編纂段階で確認された古墳55基のうち、本遺跡の一角を占める西野の古墳群以外は、湯之入、滝之入の両谷周辺の八王子丘陵西尾根上及びそこから伸びる緩傾斜地に造営されたものである。また、墳形は圧倒的に円墳が多く、規模は径5mから20mくらいと小型のものが多く。

湯之入と滝之入の谷に挟まれた八王子丘陵西尾根の先端部に立地する西山古墳は、全長34m、後円部径18m、後円部高4mの前方後円墳で、八王子丘陵西麓の平野部を睥睨するかのような尾根先端部の高所に位置し、湯之入・滝之入地区の八王子丘陵尾根上に展開する数十基に及ぶ古墳群の主墳的性格を有する古墳と考えられている。横穴式石室が設けられ、墳丘裾部に円筒埴輪配列の痕跡が認められるという。町誌では6世紀末～7世紀初頭の年代観が示されている。

同じく湯之入の尾根の奥の標高135mの地点に立地する北山古墳は、尾根の南斜面に山寄りに構築された径22mの横穴式石室を有する円墳である。埴輪の配列は現状では全く確認できず、町誌では6世紀終末から7世紀初頭頃の年代観が示されている。

また、同様に湯之入と滝之入山の谷に挟まれた八王子丘陵の山頂から南西方向に延びる尾根の末端、北東から南西方向に傾斜した標高およそ110mのところに位置する向山古墳は、墳丘はほとんど失われているが、山寄せ古墳としての形状をよくとどめており、横穴式石室を有する半径約11.4mの円墳と見られる。埴輪の配列はなく、石室は後世に大きく破壊されているが、太刀、刀子、鉄鏃、釵、金環など豊富な遺物が出土している。古墳下の基盤層に6世紀後半降下の榛名山二ッ岳火山灰の混入がわずかに認められるとのことで、この古墳の年代は6世紀後半以降と考えられるが、出土遺物から見て下限は7世紀前半と見られている。

このように旧藪塚本町域において、本遺跡に近接するエリアで古墳が築造されるようになるのは6世紀以降のことである。本遺跡周辺で最大の規模を有し、本遺跡の北西、約1.4kmに位置する太田市新田天良の二ッ

山古墳群の二つの前方後円墳（1号-全長74m、高さ6m、2号-全長45m、高さ6m）が築造された6世紀後半から7世紀初頭にかけて、その勢力下にある人びとによって築造されたものと見るのが妥当であろう。後述するように本遺跡からは低位突帯付埴輪片や大型の形象埴輪片が出土しているが、それらの埴輪が新田ニッ山古墳を盟主墳とする古墳群から持ち込まれた可能性が想定できる。ただ、ニッ山古墳群にそのままつながる西野原遺跡の古墳群と、湯之入と滝之入山の谷に挟まれた八王子丘陵の山頂から延びる尾根上に築かれた山寄せの古墳群とでは、やや様相を異にしており、山寄せの古墳群はそれらだけで西山古墳を盟主墳として、小規模な独自のまとまりを見せるようである。

後述するように、6世紀後半における地域最大の**新田ニッ山古墳群**から南へ約850mの位置に新田郡家部庁院が、また南西約850mの位置には寺井庵寺が位置している。この6世紀後半～7世紀初頭における地域最大の古墳からほど近い場所に、白鳳期に寺院が建立され、さらには地方支配のための官衙が造営されているわけである。評・郡制施行時に新田評・郡を担った在地豪族と、6世紀後半から7世紀初頭にかけて新田ニッ山古墳群を造営した氏族との直接の関連が想定できるかもしれない。

**太田市石橋町・成塚町周辺の古墳** 金山丘陵西北の突端部丘陵上に立地する中強戸の寺山古墳は、北関東自動車道の建設に伴って発掘調査が行われた**峯山遺跡**の南約100mに位置する全長55mの前方後方墳で、本遺跡周辺の初期古墳として著名である（『太田市史 通史編 原始古代』1995）。また、平成15・16年度に当事業団が調査した**成塚山古墳群**では、一辺約20mの4世紀古墳時代前期に築造された方墳が検出されている。『上毛古墳総覧』に掲載されていない古墳であり、平成11年度に太田市教育委員会が試掘調査を実施している。当事業団による本調査の結果、竪穴式の埋葬施設が2基検出され、銅製重圏文鏡、銅鏃、鉄鏃、鉄剣、鉄製工具、翡翠製勾玉、蛇紋岩製管玉、ガラス製小玉などが出土した。また、成塚町の成塚古墳群中にも前期の方形周溝墓が8基検出されている。

5世紀後半の大型古墳としては、本遺跡から約500m南南西の位置にある鳥山町鶴山古墳が特筆できる。大開々扇状地末端の低台地上に立地する全長102mの前方後円墳で、後円部墳頂には竪穴式石室を有し、鉄製甲冑類、石製模造品などが多数出土した（石川正之助・石鳥和夫「鶴山古墳出土遺物の基礎調査」1～6『群馬県立歴史博物館調査報告書』2～7 1986～91）。

平坦地に営まれた後期の群集墳は、本遺跡の北側に接する**成塚石橋遺跡**でもその一部が調査された**成塚古墳群**や**西長岡町の西長岡横塚古墳群**など、いずれも八王子丘陵の南西から南東の麓にかけて展開している。

成塚町には『上毛古墳総覧』所載の古墳が41基あり、太田市内においても一大古墳群を形成していたことがわかる。成塚住宅団地遺跡の発掘調査では、周溝墓8基と古墳3基が検出されている。さらに成塚石橋遺跡の発掘調査によって9基の古墳が調査され、古墳群の南限が、従来考えられていたよりもさらに広がっていたことが判明した。これらの調査によって新たに確認された古墳を併せると、太田市史編纂時点では、前期の方形周溝墓8基、中期の円形周溝墓4基、後期6世紀中葉から7世紀の古墳が62基の計74基が確認できる一大古墳群である。

西長岡山古墳群では、八王子山公園の建設に伴って昭和60年から平成元年にかけて前期の周溝墓4基と後期古墳15基が調査されている。当該箇所では『上毛古墳総覧』で11基の古墳を掲載しているが、調査された古墳と『上毛古墳総覧』に掲載されている古墳との照合は困難である。

一方、本遺跡からみて北東方向に当たる八王子丘陵南西から南東に至る尾根上には、ほかに41基の後期古墳から形成される**北金井の北金井御嶽山古墳群**や、36基の後期古墳からなる同じく北金井の大鷲古墳群、14基の後期古墳からなる**上強戸古墳群**など、後期古墳が群集している。

八王子丘陵南端に立地する成塚向山2号墳は、径約18mの6世紀の円墳で、古墳時代前期の1号墳や古墳時代前期の集落跡と同様に平成15・16年度に当事業団が発掘調査を実施した。南側に向かって舌状に突出して張り出した丘陵上の突端部分に位置し、同時期の古墳としては群を形成せずに単独で立地している点特徴的である。前期古墳である1号墳よりもさらに南側の丘陵の端、1号墳よりもやや低い位置にあり、南側に入り口を持つ横穴式石室を有する。石室内からは鉄鍬やガラス小玉、墳丘裾からは樹立状態の形象埴輪約20点・円筒埴輪約40点からなる埴輪列が出土した。

平坦地に立地する西長岡横塚古墳群は、6世紀後半を中心とし、7世紀後半まで継続している。前方後円墳1基、帆立貝式古墳1基、円墳21基の古墳からなり、『上毛古墳総覧』に掲載されている「強戸村27～45号墳」が該当する。これまで昭和15・54・60年の3次にわたって発掘調査が行われ、平成14年からは北関東自動車道の建設に伴って発掘調査が行われているが、北関東自動車道にかかる範囲には古墳は全く当たっていない。

このように本遺跡周辺一帯では、古墳時代の前期から後期にかけて、特に後期を中心に膨大な量の古墳が造営されており、古墳群に周囲を囲まれた中に本遺跡など太田市天良町・成塚町・石橋町・寺井町一帯の遺跡が所在すると言っても過言ではない。

**埴輪窯跡** 本遺跡の北約1.5kmの北金井の八王子丘陵南東斜面上では埴輪窯跡及び集積場跡が発見されている。前述したように、八王子丘陵南西から南東にかけての丘陵端部から平坦地にかけて、6世紀後半から7世紀前半にかけての後期古墳が連続と構築されているが、周辺古墳へ埴輪を供給した生産元である。

大正時代末に存在が確認され、昭和8年には付近から出土した人物埴輪など4個体が帝室博物館（現・東京国立博物館）に寄贈されるなど、早くからその存在は知られていた。

埴輪窯跡は南東から東斜面にかけて連続と構築されていた様子がうかがえ、十数基以上が存在していたようである。また、埴輪集積場は、緩斜面が階段状に整地されて数段にわたって存在していた様子が判明している。これらの稼働時期は概ね6世紀末頃に比定されている。

## 第5項 周辺の奈良・平安時代遺跡の動向

**古代の地方行政組織** 周知の通り、7世紀後半、古代国家が成立し地方支配体制が確立すると、地方は各段階に応じて国・評（のち郡）・五十戸（のち里）という地方行政組織に編成された。

**古代新田郡** 本遺跡の地は、律令制下の新田評、後の新田郡内の東端に位置している。古代の新田郡の領域は、西を早川水系、南を利根川、東から北を八瀬川・金山丘陵・八王子丘陵・鹿田山丘陵などを結んだ線を郡境とした、概ね近世・近代まで踏襲されていた郡域と変わらないものと考えられ、所謂「平成の大合併」後の太田市の西側約2/3に当たる地域に相当する。

新田郡の郡名「新田」は、『万葉集』の写本では「爾比多」、平安時代の『延喜式』や『和名抄』では「尔布多」と読みが振られており、「ニヒタ」とか「ニフタ」などと発音されていたと考えられる。周辺では「入田」と記載した墨書土器が多く出土しており、「ニフタ」と発音されていたことを裏付ける。

『和名抄』では、郡内に新田・津野・石西・祝人・淡甘・駅家の6郷があったとされている。郡名を負う新田郷と駅家郷は郡家や駅家が設置された官衙地区の周辺である郡域中央東部一帯、津野郷は田尾島町柏川周辺、石西郷は太田市街地南部の岩瀬川町周辺、祝人郷は八王子丘陵西麓の平坦地一帯などがそれぞれ有力



な比定地と考えられており、淡甘郷の位置だけが諸説あって定見をみていない。正倉院に所蔵されている調として都に運ばれた布に、「(表)上野国新田郡淡甘郷戸主矢田部根麻呂調黄壹返（表）（裏）天平勝寶四年十月主當（裏）」とあり、天平勝寶4年段階における郡司の氏名がわかる稀有な史料と言える（松嶋順正編『正倉院宝物銘文集』吉川弘文館1978）。また『東大寺要録』には、天平19年（747）に聖武天皇の勅命によって東大寺に1000戸の食封が輸入されたことを示す記事があり、その中に上野国新田郡内の50戸が含まれている。古代の新田郡内には、東大寺の維持管理資金を調達するために指定された封戸が存在していたのである。

なお、『万葉集』の東歌の中の上野国歌には、新田郡の地に関わるものが2首含まれている（土屋文明『萬葉集上野国歌私注』換乎堂1944）。

新田山 ねにはつかかな 吾によそりはしなる見らに あやにかなしも（3408）

（大意）新田山の嶺のように、寝たいものであるよ！。私の妻とみなが認めてくれていてる遠くにいるあの女のこと、しきりに愛しく思われて。

しらとはふ 小新田山のもる山の うら枯れせなな とこはにもがも（3436）

（大意）小新田山の、あの神様が祀られている山の、梢が枯れることがないように、私たちの仲も常緑の常盤木の葉のように普遍であって欲しいものよ。

前者の歌にみえる「新田山」は金山丘陵、後者の歌にみえる「小新田山」とは本遺跡から東北東約3kmの場所にある独立丘陵、丸山町の丸山のことを指すとする説があるが、確証はない。ただ、「新田山」と称されたのは、新田郡内で独立する大型の丘陵としてランド・マークにもなる金山丘陵を指すと考えることは、まず穏当な見解であり、後者の「小新田山」が丸山を指すかどうかの是非は別としても、これらの歌が、本遺跡周辺の情景を元に作歌されたものであることには違いない。

**古代新田郡家** 律令制下の新田郡の役所である郡家は、本遺跡の中心部分である石橋十字路から約800m西に位置する太田市天良町で発掘調査された天良七堂遺跡がそれに当たると考えられている。昭和30年に行われた発掘調査で、南北16m・東西7m、6間×3間の南北棟総柱大型礎石建物跡が検出され、付近から炭化米が多数出土した。この大型総柱礎石建物跡は、新田郡家正倉院を形成する倉庫群のうちの一棟と考えられ、この遺跡が新田郡家の遺跡である可能性が指摘された。平成19年5月の発掘調査によっても正倉院の一角を構成していたと考えられる大規模な総柱建物跡が発見され、さらに19年6月には主要地方道伊勢崎足利線沿いの北側、本遺跡調査区最西端から西へ約580mの位置から郡庁院の遺構が検出された。天良七堂遺跡が新田郡家の遺跡であることは確実となった。本遺跡に近接した場所から郡庁院跡が検出されたことで、本遺跡もそれらと一体の遺跡であった蓋然性が高くなり、郡家近接集落としての本遺跡の性格がかなり明確になったわけである。

新田郡家である天良七堂遺跡や新田郡家に関連する寺院の遺跡と考えられる寺井庵寺との位置関係からみて、本遺跡の所在する場所は、古代においては新田郡の新田郷に当たると考えられているが、古代の地方行政組織の末端である里（のち郷）は、元々が「五十戸」と称されたように、五十戸の人間集団の集合体を機械的に編成したものであって、現在の自治体のように領域としての範囲が必ずしも明確なものではない。しかしながら、本遺跡及び周辺で検出された集落が、里（のちに郷）という行政単位に組織されないことはあり得ないわけであるから、そのような意味においては、本遺跡で検出された集落は、律令制下に新田里（のちに新田郷）を構成する集落の一つであるとみられよう。

**東山道駅路と新田駅家・駅家郷** 『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条によれば、新田郡内には東山道駅路が

東西に貫通し、上野・下野両国から武蔵国への分岐点となった陸上交通上の要衝であり、官人の公務通行を支援すべく設けられた施設である新田駅家が置かれていた。古代において、官衙はそれぞれが比較的近辺にまとまって配置されていた様子が判明しているため、新田駅家も新田郡家からさほど遠くない場所に設置されていたものと考えるのが自然である。新田駅家の所在地としては、太田市新田村田から寺井にかけての場所に想定する意見が強い（『新田町誌』通史編1 1990）。

周知のように、宝龜2年（771）、武蔵国が東海道に所管換えとなり、新田駅家から南へと分岐して武蔵国府（現・東京都府中市）に至っていた東山道駅路武蔵路は駅路としての扱いは受けなくなった（『続日本紀』宝龜2年10月己卯条）。これによって、制度的には、新田駅家は駅路分岐点としての重要拠点から駅路路線上の一般的な駅家と同じになるわけで、官衙としての性格に大きな変更が生じたように感じられるが、新田駅家と武蔵国府とを結ぶ道路自体が実際に廃止されたわけではない。東山道駅路武蔵路が、道路そのものの若干の位置の変更はあるにせよ、ルートとして中世の鎌倉街道にはほぼ踏襲されていることからみても、そのことは明白である。東山道駅路武蔵路は、あくまでも駅路でなくなったというだけのことで、上野・下野両国間にわたる東山道駅路と武蔵国府・東海道駅路とを結ぶ連絡路的な官道として機能し続けたものと考えられる。それによって、駅路分岐点ではなくなったものの、東山道駅路と東海道駅路とを連絡する官道との分岐点として、古代陸上交通上の要衝としての重要性は、決して変わるものではなかったと見るべきであろう。

新田郡家の正倉院の倉庫群の一角をなすと考えられる大規模な総柱建物跡が検出されている天良町の天良七堂遺跡の西南西約1kmの地点、新田村田から新田小金井にかけて所在する入谷遺跡では、方約180mの範囲を溝によって区画した中に、5×3間の南北棟瓦葺礎石建物跡が2棟並列した施設の跡が発見されている。7世紀後半頃に造営され、8世紀中葉頃まで存続していたと考えられる。東北東約1kmの場所に所在する天良七堂遺跡が新田郡家と考えられるため、この入谷遺跡で検出された瓦葺の官衙風の施設を新田駅家とみる考え方が強い（『新田町誌』通史編1 1990、『太田市史』通史編 原始古代 1996）。ただ、現在までのところ、方約180mの区画の中に、5×3間の南北棟瓦葺総柱礎石建物跡が2棟しか検出されていないので、兵庫県などで検出されている山陽道駅路上の駅家遺跡の様相とはだいぶ異なっており、その確証に欠ける。

旧新田町内では、牛堀・矢ノ原ルートと称される高崎市南部の平地から玉村町を経て旧境町にかけて東西に貫く幅約12mの古代道路遺構に続く道路遺構と、その南側数百メートルの位置を、牛堀・矢ノ原ルートに並行して東西に貫く幅約10mの下新田ルートの二系統の駅路遺構が検出されている。また、北関東自動車道の建設に関わる調査では、さらに東に寄った金山丘陵の東麓地域である太田市東今泉町の地域で、約1kmにわたって幅約12mの古代道路遺構が検出され、これは牛堀・矢ノ原ルートにつながる道路遺構であると考えられている。

いわゆる下新田ルート上で検出されている幅約10mの古代道路遺構を延長すると、本遺跡の南側約170mの位置を通り、さらに牛堀・矢ノ原ルート上で検出されている古代道路遺構を延長すると本遺跡の南側約400mの位置を通ることになり、いずれにしても本遺跡は古代官道に非常に近い場所に所在したわけであり、本遺跡における古代集落の形成に際して、付近を通過する古代官道はそれなりの影響があったものと考えられる。

古代新田郡を構成した6郷のうち、駅家郷は、東山道駅路沿線に設けられた官人公務通行支援施設である新田駅家の業務に関わる労働徴発や経済基盤として設定された戸によって形成された郷である。新田郡家や新田駅家が設置された周辺は、概ね郡名を負う新田郷に当たると考えるのが自然であるが、その中から駅管理・運営に関わる戸が指定されて駅家郷が設定されたものと考えられる。新田郷と駅家郷とは明確な範囲

や領域が相互に独立していたわけではなく、新田郡家・駅家周辺の多数の戸の中から、それぞれが指定され、存在したとみるのが妥当であろう。そのような意味においては、本遺跡の地は、先に記したように、郡家や郡家関連寺院などとの位置関係からみて、新田郷の一角に当たると考えられるわけであるが、厳密に言えば、あるいは駅家郷を構成する集落の一つに指定されていた可能性も想定できないわけではないのである。

高崎市南部から玉村町、旧境町、旧新田町南部にかけて検出されている牛堀・矢ノ原ルートと、その延長上の道路と考えられる太田市東今泉町付近で検出された幅12mの古代道路遺構は、いずれも8世紀中葉から後半にかけて廃絶していることが調査の結果明らかになっており、牛堀・矢ノ原ルート、下新田ルートいずれも『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条に記載のある段階の東山道駅路とは異なる段階の駅路の跡とみられ、むしろ『延喜式』段階における東山道駅路は、牛堀・矢ノ原ルートや下新田ルートよりはかなり北側に位置する榛名山東麓から赤城山南麓の台地上を通過していたものと考えられる。平安時代の東山道駅路は、本遺跡の北方、旧藪塚本町域内を通過していたと想定できるが、旧藪塚本町域や太田市北部地域では、現在までのところ、古代の道路遺構が検出された遺跡はない。

**寺井廃寺** 本遺跡の西北西約300mの位置にあたる寺井廃寺は、石橋町から天良町にかけて太田市立強戸小学校と同中学校を中心とする一帯に所在したものと考えられ、7世紀後半から10世紀に及ぶ瓦が多数出土している。しかしながら建物基礎や礎石が地表に露出しているわけではなく、また昭和60年代に市立強戸小学校と同中学校との中間において太田市教育委員会が発掘調査を実施しているが、寺院に関わる遺構は全く検出されなかった。伽藍配置等は現段階では全く不明である。

創建年代が7世紀後半に遡ることや、8世紀段階には上野国分寺と同じ瓦が使用されていたとみられること、あるいは郡家と考えられる天良七堂遺跡との位置関係などからみて、新田郡領となった在地豪族による造営であり、新田郡家と密接な関係を有していた寺院と考えられる。本遺跡とは至近の距離にあり、本遺跡の性格を考える上で、先に述べた郡家周辺集落としての性格に併せて、大寺院周辺の集落としての特質も、常に考慮すべき重要な視点であると言える。

なお、蛇川の河川改修に伴って当事業団が平成4・5年度に発掘調査を実施した菅塩町の菅塩西両台遺跡においても、N-35°-Eの方向に一直線に延びる上幅約7m・深さ約1.8mの大溝の跡が検出されており、土層断面に流水の痕跡が確認できないことから、寺井廃寺の寺地を画する溝跡という見方が調査担当者によって示されている（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編『西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡・成塚石橋遺跡Ⅲ』1996）。

**周辺の奈良・平安時代集落と巨大製鉄遺跡** 旧藪塚本町域では、八王子丘陵西麓平地に立地する滝之入前遺跡、中原遺跡、石之塔遺跡、元屋敷遺跡、六地藏遺跡、薬師前遺跡などで古代の住居跡などが検出されているが、いずれも古墳時代後期から連綿と続く集落であり、この地域においては、6世紀後半から9世紀後半までの約300年間、人びとの居住形態にほとんど変化がなかった様子が見えてくる。

また、当事業団が調査した西野原遺跡の石田川調整池部分において、これまでに発見された中で東日本最大級とも言える巨大な製鉄遺構が検出されており、また、同じく当事業団が北関東自動車道の建設に伴って発掘調査した強戸町から緑町にかけて所在する峯山遺跡でも、8世紀前半頃の製鉄炉1基と新旧二時期の鍛冶遺構・堅穴建物跡5棟・土坑跡などからなる製鉄遺構が検出されており、炉体や多数の流動滓、鉄滓などが出土している。八王子丘陵西南麓から金山丘陵北麓一帯にかけて、広く製鉄・鍛冶の作業が行われていたことが伺える（報告書未刊）。

本遺跡周辺では、成塚住宅団地遺跡で奈良時代の堅穴建物跡370棟、平安時代の堅穴建物跡が前期161棟、

同中期の堅穴建物跡が36棟検出されており、集落を構成する住居の数量が、急速に減少している様子がかがえるが、弥生時代後期から連綿と続く集落は、平安時代後期まで続いている。また、本遺跡の北側に隣接する成塚石橋遺跡でも、古墳時代中期に急速に広がった集落が、奈良・平安時代まで続き、奈良時代の堅穴建物跡16棟、平安時代の堅穴建物跡24棟が検出されている。本遺跡で検出された集落も、これら隣接する集落と蛇川を間にするものの連続ないし関連するものと考えられる。

**奈良・平安時代の耕作地跡** 平成13年度から当事業団が周辺で北関東自動車道の建設に伴って実施した発掘調査では、西長岡町の西長岡横塚古墳群では平安時代の堅穴建物跡1棟と井戸跡・土坑跡・溝跡など、西長岡宿遺跡では同じく土坑跡と溝跡、菅塩町の菅塩遺跡群・成塚町の成塚遺跡群・大鷲町の大鷲遺跡では天仁元年(1108)降下の浅間山火山灰に覆われた水田跡が続いており、上強戸町の上強戸遺跡群では古墳時代から平安時代後期に亘って連綿と造られ続けた水田跡が何面にもわたって発見されている。とくに、上強戸遺跡群では、洪水層によって埋もれた7世紀末の水田跡が発見されている。水田跡の検出事例がぬきんで多い本県でも、また周辺地域においても、7世紀代に遡る水田跡の検出事例は初めてのことであり、注目すべき調査成果である(報告書未刊)。

本遺跡からみて、蛇川を挟んだ東側、八王子丘陵南麓と金山丘陵北麓の間に形成された低地では、連綿と水田が営まれていた様子が知られるのである。

## 第6項 中世以降における歴史的環境

**新田荘と中世豪族新田氏の成立と展開** 12世紀、上野国の平野部には天仁元年(1108)の浅間山大噴火による降灰によって壊滅した耕地を復興する過程で、各地で荘園や御厨が成立していった。仁安3年(1168)の「新田義重諱状」に示されている新田荘もそれらの一つとして形成された荘園である。

周知のように、新田荘は、源義家(長暦3年(1039)～嘉承元年(1106))の三男(異説あり)とされる従五位下前加賀介 源義国(寛治5年(1091)? - 久寿2年(1155))が、久安6年(1150)に右近衛大将藤原実能と京の路上でトラブルを起こし、恨んだ義国勢が実能邸を焼き払ったことによって勅勤を被り、坂東の下野国足利荘の別業に引退を余儀なくされた。義国は坂東に土着し、その長男である従五位下大炊助 源義重(? - 建仁2年(1202))は渡良瀬川を越えて上野国新田郡に入部して開発、久寿元年(1154)頃には新田郡南西部の「こかんの郷々」とよばれた19郷からなる荘園を成立させ、これを権門貴族である左衛門督(後に太政大臣)藤原忠雅(大治4年(1129)～建久4年(1193))(領家)と金剛心院(本所)とに寄進した。義重は、保元2年(1157)、下司職に任命され、新田荘を立荘、新田庄司を称した。嘉応2年(1170)に作成された「新田荘田畠在家注文」(正本文書)には、新田荘に属する39郷の田・畠・在家の数が記されているが、そこにみられる「やふつかの郷」が藪塚の地名の初見である。

新田義重の嫡男・義兼は、元久2年(1205)8月、將軍源実朝から新田荘12郷の地頭職に任じられた。これが鎌倉幕府による新田荘地頭職の初任である。新田義兼は従兄弟の子に当たる畠山(足利)義純を女婿に迎え、その間に生まれた畠山(足利)時兼は、建保3年(1215)3月、外祖父に当たる新田義兼の後室である新田尼から新田本宗家の所領であった新田荘田島郷など12郷を譲られ、將軍源実朝から地頭職に任じられ(「正本文書」)、さらに嘉祿2年(1226)には岩松郷(現:太田市岩松町一帯)の地頭職をも併せ、岩松郷に居住。以後、「岩松」を苗字に名乗った。岩松時兼は、新田尼から新田本宗家領の一部を相続した

ことによって、父系から見れば足利家一門でありながらも、新田家一門の有力庶子家として新田荘内に勢力を振るうことになった。

太田市尾島町世良田の長楽寺に伝存する「長楽寺源氏系図」に岩松家の系図も収録されているが、その史料によれば、岩松時兼の2男である氏兼が「寺井」を、また6男朝兼が「藪塚」を苗字として名乗っており、岩松氏の支族がこの地一帯を支配していたことがわかる。この長楽寺源氏系図によれば、藪塚六良（郎）朝兼には、仏門に入った一男子の他に「太良三良時綱」と「六良三良朝綱」の二人の男子がいたことになっているが、彼らの事績を物語る史料はなく、藪塚氏の居館の伝承・遺構ともに不明である。

その後の寺井氏・藪塚氏の事績は、本宗筋に当たる足利・新田両氏が激しく活動した南北朝期にも、史料上全く見えないので、動静は一切不明である。なお、『太平記』巻31に、北朝観応3・南朝正平7年（1352）に上野国において新田義貞の次男義興と三男義宗が挙兵した際の記事が伝えられるが、挙兵に参加した新田氏一門の中に「藪塚」氏を名乗る人物がおり、写本によってはその部分を「藪塚」と記すものがあって、藪塚氏の一門が、南北朝期には南朝方の新田氏に臣従していた可能性が指摘できるが、現在のところ確証は無い。

**岩松氏と由良氏による支配** 南北朝動乱の鎮定後、この地域を支配したのは鳥山氏と岩松氏であることが、15世紀中葉の享徳の乱の最中に岩松家当主持国によって作成されたと考えられる所領注文「新田荘内岩松方庶子方寺領等相分注文」（正本文書）に見える。同史料によれば、藪塚郷の半分を岩松家惣領の岩松持国が、半分を金山丘陵西南部に本拠を有する岩松庶子家の鳥山式部大輔が領有していたことが判明するが、この鳥山氏については不明な点が多い。

応永23年（1416）、前関東管領上杉禪秀氏憲が鎌倉公方足利持氏に対して起こした上杉禪秀の乱に際して新田党を糾合して上杉禪秀方に与した岩松家当主の満純は、岩松直国女を母に、新田義貞三男義宗を父として生まれた人物であり、新田本宗家の嫡宗である満純が岩松家を嗣いだことによって、岩松家は滅亡した新田本宗家に代わる新田家一門の惣領格として勢力を振るうことになった。

岩松満純の子・長純は、永享の乱（永享9、1437）が勃発すると將軍足利義教に召し出されて鎌倉公方討伐軍の将に任じられ、その戦功により岩松家の家督を回復して岩松家純と名乗り、享徳の乱（享徳3、1454）が起きると対立する一門の岩松持国・成純父子を誅殺して岩松家の内紛を平定し、文明元年（1469）には五十余年振りに本領である上野国新田郡を回復し、家臣の横瀬国繁（岩松満純の弟・新田貞氏末裔）をして金山丘陵に金山城築城させ居城となしたが、岩松家中では家臣である横瀬氏が次第に力を振るうようになっていった。

享禄年間（1528～32）、家臣横瀬氏の専横を排除しようとした岩松家当主の高純・昌純父子は逆に家臣横瀬氏に攻められて自害。岩松昌純に代わって岩松家の家督を嗣いだ昌純の弟・氏純も実権を横瀬氏に握られたままで、ついには自害させられるに至った。氏純の子の守純は、金山城を追われて山田郡妻（現：桐生市妻）に隠棲し、岩松家は家臣横瀬氏の下克上によって没落した。

金山城から主君・岩松守純を追放して、自ら金山城主となった横瀬成繁は、苗字として由良の姓を名乗り、戦国大名由良氏による当地支配がその後、しばらく続く。八王子丘陵には由良氏により、広沢茶白山の南約400mに位置する標高270mの山頂付近に八王子城が、また、湯之入の集落から初山峠に向かう道の鞍部北側の丘頂を削平して雷電山砦がそれぞれ築城されている。

**由良氏衰退** 天正2年（1574）3月下旬には上杉謙信が小田原北条氏方に属した由良氏領の桐生・新田を攻め、由良氏当主の国繁がこれを防戦するも、天正13年（1585）、小田原北条氏は臣従していた由良国繁

を攻めて屈服させ、金山城は小田原北条氏に接収され、当地一帯も北条氏の支配するところとなった。その北条氏も天正18年(1890)には豊臣秀吉に攻め滅ぼされ、当地一帯は江戸に移封された徳川家康の支配地に入った。江戸幕府成立後、由良家も岩松家とともに、新田氏支流の世良田得川氏の末裔を公称した徳川将軍家の本家筋に連なる名家の血筋と言う理由で、少壮ながらも旗本として召し抱えられるが、かつての新田荘の故地に影響力を及ぼすほどの存在ではなかった。

**本遺跡周辺において中世以降の遺構を検出した遺跡** 本遺跡周辺では、北関東自動車道の建設に先立って調査された西長岡町の西長岡横塚古墳群と西長岡宿遺跡、さらに菅塩町の菅塩遺跡群で、いずれも中世から近世にかけて溝跡などが検出されている。

とくに西長岡宿遺跡では、馬骨・馬歯が多数出土し、馬の歯と銅銭を収めた埋設桶も1個検出されている。この遺跡では、古墳時代後期から鞍馬祭祀・儀礼が行われていた様子が判明している(坂井隆「馬生贄祭祀遺構と『捏造』問題」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』22-創立25周年記念論文集-2004)。

また、大鷲町の大鷲遺跡群では、北関東自動車道の建設に伴う調査で、西側の微高地上で中世の掘立柱建物跡8棟と井戸跡4基・溝跡79条等を、東側の低地部では中世の水田跡が検出されている(報告書未刊)。

上強戸町の上強戸遺跡群では方形に何重にも巡る堀跡とその中に展開する掘立柱建物跡群・土壇墓跡群・製鉄炉跡などの遺構と多量の石造物が出土した。製鉄工房を伴う居館とそれに伴う墓城の一部に当たるものと考えられる。

表1 周辺の主な遺跡

番号	遺跡名	所在地	概	要
1	石橋地蔵久保	石橋町	古墳時代～平安時代集落・中近世溝跡	
2	寺井庵寺	石橋町	白鳳～平安時代寺院跡	
3	天良七堂遺跡	天良町	奈良・平安時代新田郡家跡	
4	二ッ山古墳群	天良町	後期前方後円墳	
5	寺井古墳群	寺井町	後期古墳群	
6	成塚石巻・永昌寺	成塚町	縄文時代前期・古墳時代前期～平安時代集落、周溝墓・古墳群	
7	成塚住宅団地	成塚町	縄文時代中期後半・弥生時代後期～奈良・平安時代集落、周溝墓・古墳群	
8	成塚遺跡群	成塚町	平安時代水田跡	
9	成塚向山	成塚町	前期古墳・後期古墳、古墳時代前期集落、平安時代堅穴建物跡	
10	寺裏	鳥山町	古墳時代後期集落	
11	亀山古墳	鳥山町	5世紀後半円墳	
12	鶴山古墳	鳥山町	5世紀後半前方後円墳	
13	八幡	鳥山町	縄文時代前期～後期・古墳時代中期・飛鳥～平安時代集落	
14	西野原	敷塚町	飛鳥・白鳳・奈良・平安製鉄遺跡・工房跡、古墳～平安集落	
15	西長岡東山古墳群	西長岡町	古墳時代前期集落跡・周溝墓群、古墳時代後期古墳群	

16	西長岡塚古墳群	西長岡町	古墳時代後期古墳群、奈良・平安時代集落、中近世溝跡
17	西長岡南	西長岡町	後期古墳群、古墳時代後期集落
18	西長岡宿	西長岡町	縄文時代後期集落・配石遺構、古墳時代集落
19	菅塩西両台	菅塩町	平安時代大溝跡
20	菅塩古墳群	菅塩町	後期古墳群
21	菅塩遺跡群	菅塩町	平安時代～中世水田跡
22	菅塩山崎古墳群	菅塩町	後期古墳群
23	熊形神社遺跡群	菅塩町	埴輪窯跡・集積場跡
24	大鷲古墳群	大鷲町	後期古墳群
25	大鷲遺跡	大鷲町	古墳時代後期・中世集落、平安時代～中世水田跡
26	上強戸古墳群	上強戸町	後期古墳群
27	上強戸遺跡	上強戸町	古墳時代後期～平安時代後期水田跡、中世居館跡・鍛冶工房跡・墳墓群跡

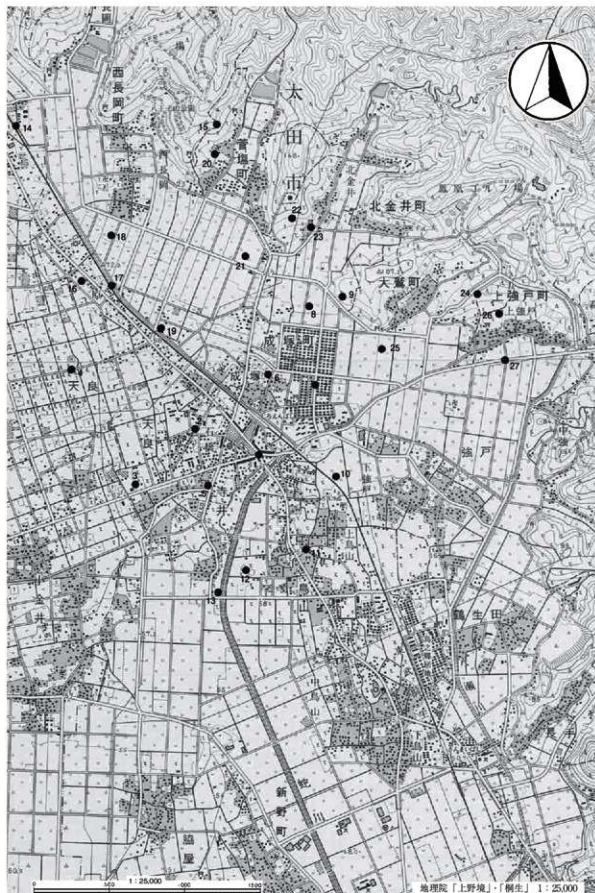


図1 石橋地藏久保遺跡の位置と周辺の主な遺跡



### 第3章 発見された遺構と遺物

#### 第1節 I区の遺構と遺物

平成14年度に発掘調査されたIA区は、主要地方道足利伊勢崎線に面した南側、調査区の最西端にあたる。竪穴建物跡のみ、1棟検出された。

##### (1) IA区1号竪穴建物跡

**位置**：IA調査区の西端、X425・Y-015Gr。 **主軸方位**：N-87°-E **重複**：なし **規模と形状**：調査対象範囲では、北辺と、竈が取り付く東辺の一部しか検出されなかったため、全容は不明であるが、長方形を呈していたものと考えられる。堀方の深さは約18cm。上面が後世に大きく掘削され、ほぼ堀方のみ検出できた。

**埋土**：ローム塊を含む暗褐色土ベース。 **床面**：明確に検出されなかった。 **竈跡**：東壁に構築される。両袖は住居内に若干張り出すが、ほぼ痕跡しか検出できなかった。 **時期**：6世紀後半。

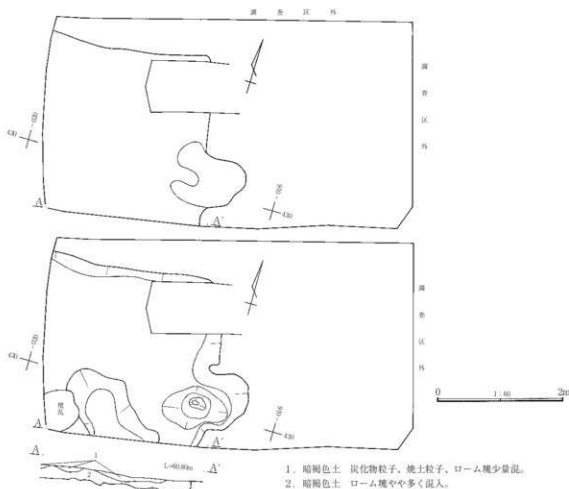


図2 IA区1号竪穴建物跡平面図(上)、堀方平面図(下)、土層断面図

## 第2節 II区の遺構と遺物

平成14年度に発掘調査されたII区は、主要地方道足利伊勢崎線に面した南側、調査区の最西端から2～4番目の区画で、南北に走る現在の生活道路によってA～C区の3区画に分けられた。竪穴建物跡5棟と土坑3基が検出された。

### 第1項 II A区

#### (1) II A区1号竪穴建物跡

位置：II A区のほぼ中央、X435・Y-985Gr。南側約半分が調査区外に出る。 主軸方位：N-88°-E 重複：北東隅を1号土坑跡に破壊される。3号竪穴建物跡の南西隅を破壊する。 規模と形状：北辺約4.4m・東西辺は一部が調査区外に出、南辺は完全に調査区外に出るため不明・深さ0.4m、長方形を呈するものと思われる。 埋土：暗褐色土ベース。 床面：地山をほぼ平坦に削り整えた上に、暗褐色土で硬質な床面を形成している。 掘り方：調査区南端壁際で床面下の小土坑が検出されている。 時期：6世紀後半。

#### (2) II A区3号竪穴建物跡

位置：II A区の北東隅、X440・Y-985Gr。南西隅部のみ検出。北側と東側の大部分が調査区外に出る。 主軸方位：不明 重複：南西隅をII A区1号竪穴建物跡及びII A区1号土坑跡に破壊される。 規模と形状：大部分が調査区外に出るため不明・深さ0.3m、長方形を呈するものと思われる。 埋土：暗褐色土ベース。 床面：地山を平坦に削り整えて形成。床面下の遺構等は検出されなかった。 掘り方：掘方と床面はほぼ一致。 時期：8世紀後半。

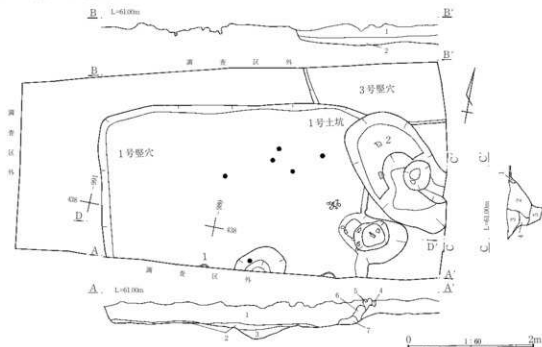


図3 II A区1・3号竪穴建物跡・1号土坑跡平面図・土層断面図

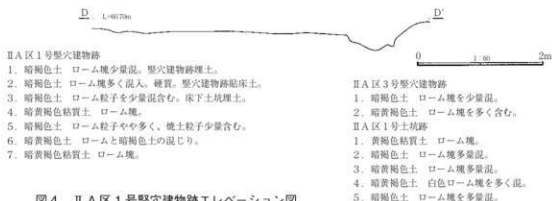


図4 II A区1号竪穴建物跡エレベーション図

## II A区1号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土質・形状	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・形状の特徴、備考
II A区1号	須臾器 杯	埋土	口径13、底径7.2、器高3.6、器厚0.5	①鈍い黄褐色 ②良好 ③粗面、1cm以下の白色胎土混入	輪軸成形、底部回転施削
II A区1号	須臾器 杯	埋土	推定口径13.2、推定底径8、器高3.6、器厚0.5	①浅黄色 ②良好 ③粗面	輪軸成形、底部回転施削



図5 II A区1号竪穴建物跡出土遺物

## (3) II A区1号土坑跡

位置：II A区の中央、東端部付近。II A区1号竪穴建物跡北東隅の東、II A区3号竪穴建物跡南西隅の南側に位置する。X435・Y-985Gr。重複：II A区1号竪穴建物跡の北東隅部及びII A区3号竪穴建物跡の南西隅部を破壊する。規模と形状：北西-南東方向に長い楕円形状を呈し、長径2.2m・短径1.2m・深さ0.52m。南東側が一部調査区外に出る。埋土：暗褐色土ベース。

## 第2項 II B区

## (1) II B区2号竪穴建物跡

位置：II B区のはほぼ中央・南より。X435・Y-980Gr。南側大部分が調査区外に出る。主軸方位：不明。重複：なし。規模と形状：北東隅部のみ検出。全容は不明。深さ0.34m、長方形を呈するものと思われる。埋土：暗褐色土ベース。床面：地山をほぼ平坦に削り整えた上に、暗黄褐色土で硬質な床面を形成している。掘り方：深さ10cm程度。床下の土坑等は検出されていない。時期：8世紀後半。

### 第3章 発見された遺構と遺物

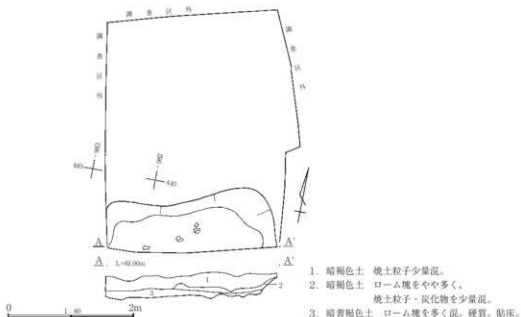


図6 II B区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図

### 第3項 II C区

#### (1) II C区5号竪穴建物跡

位置：II C区のはほぼ西端。X440・Y-970Gr。南側・西側の一部が調査区外に出る。主軸方位：N-90°・W。  
重複：II C区6号竪穴建物跡の西北側に破壊される。規模と形状：西辺と南辺が調査区外に出、西南部を掘乱によって破壊されるため、正確な形状は不明であるが、南北に長い幅広い長方形を呈していたものと考えられる。竈は、本遺跡でも異例にも西壁に取り付くが、西側の約1/3が調査区外に出るため、不明確な部分が多い。深さ0.4m。埋土：暗褐色土ベース。床面：地山をほぼ平坦に削り整えた上に、厚さ約15cmほど暗褐色土を敷き詰めて床面を形成している。床面下の遺構等はなし。時期：6世紀前半。

#### (2) II C区6号竪穴建物跡

位置：II C区の中央南端、X440・Y-970Gr。北東隅部のみ検出。南側の大部分が調査区外に出、西側はII C区5号竪穴建物跡に破壊される。主軸方位：不明。重複：南西隅をII A区1号竪穴建物跡及びII A区1号土坑跡に破壊される。規模と形状：大部分が調査区外に出るため不明・深さ0.3m、長方形を呈するものと思われる。埋土：暗褐色土ベース。床面：地山を平坦に削り整えてから暗黄褐色土によって床面を形成。掘り方：堀方は深さ約10cm強。床面下の遺構等は発見されなかった。時期：6世紀後半。

#### (3) II C区1号土坑跡

位置：II C区の中央、やや西寄り、北端部。II C区5号竪穴建物跡北東隅の北、X440・Y-975Gr。重複：なし。規模と形状：北側が調査区外に出るため形状は不明。現存長径0.9m・深さ0.34m。埋土：暗褐色土ベース。

## (4) II C区2号土坑跡

位置：II C区の東南隅。II C区6号竪穴建物跡北東隅の東、X440・Y970Gr。 重複：なし 規模と形状：東側が調査区外に出るため形状は不明。現存短径0.7m・深さ0.6m。 埋土：暗褐色土ペースとする。

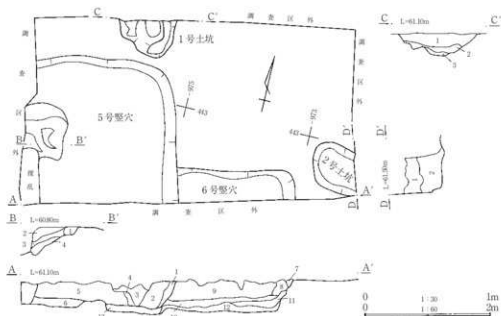


図7 II C区5・6号竪穴建物跡、1・2号土坑跡平面図・土層断面図

## II C区5・6号竪穴建物跡

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 暗褐色土 焼土粒子少量混。<br/>II C区5号竪穴建物跡埋土。</p> <p>2. 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子をやや多く混。<br/>II C区5号竪穴建物跡埋土。</p> <p>3. 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子を多く混。<br/>II C区5号竪穴建物跡埋土。</p> <p>4. 暗褐色土 焼土粒子・炭化物を多く混。<br/>II C区5号竪穴建物跡埋土。</p> <p>5. 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子を少量混。<br/>II C区5号竪穴建物跡埋土。</p> <p>6. 暗褐色土 ローム塊を多く、焼土粒子を少量混。<br/>II C区5号竪穴建物跡貼床。</p> <p>7. 暗赤灰褐色土 ローム塊の変色?。炭化物を多混。<br/>II C区6号竪穴建物跡埋土。</p> <p>8. 暗褐色土 ローム塊をやや多く混。<br/>II C区6号竪穴建物跡埋土。</p> <p>9. 暗褐色土 焼土粒子・ローム塊少量混。<br/>II C区6号竪穴建物跡埋土。</p> <p>10. 暗褐色土 ローム塊を多く、焼土粒子を少量混。<br/>II C区6号竪穴建物跡埋土。</p> | <p>11. 暗褐色土 ローム塊をやや多く含む。<br/>II C区6号竪穴建物跡埋土。</p> <p>12. 暗黄褐色土 ローム塊、砂粒を多く含む。<br/>II C区6号竪穴建物跡埋土。</p> <p>13. 暗黄褐色粘質土 II C区6号竪穴建物跡貼床。</p> <p>II C区5号竪穴建物跡埋土</p> <p>1. 暗黄褐色土 焼土粒子少量混。</p> <p>2. 暗灰褐色土 灰・炭化物・焼土塊など混。</p> <p>3. 暗灰褐色土 灰・炭化物・焼土粒子をやや多く混。</p> <p>4. 暗黄灰褐色土 灰を多く、炭化物・焼土粒子少量混。</p> <p>II C区1号土坑跡</p> <p>1. 暗褐色土 ローム塊少量混。</p> <p>2. 暗褐色土 ローム塊・焼土粒子少量混。</p> <p>3. 暗黄褐色土 ローム塊多混。</p> <p>II C区2号土坑跡</p> <p>1. 暗褐色土 ローム塊少量混。</p> <p>2. 暗褐色土 ローム塊多混。</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## II C区5号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋没状況	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
II C区5区 -1	土師器 杯	埋土 1/2	口径 12、器高 3.6、器厚 0.4	①鈍い橙色 ②良好 ③軽	口縁部内外面横線、体一底部外面横線 ・内面横線

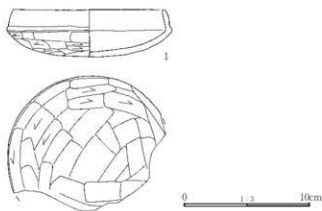


図8 II C区5号竪穴建物跡出土遺物

### 第3節 III区の遺構と遺物

平成14年度に発掘調査されたIII区は、主要地方道足利伊勢崎線に面した南側の最東端の調査区である。足利伊勢崎線に面した南側では、石橋交差点の西側のみが調査対象とされたので、足利伊勢崎線に面した南側では、III区が最東端の調査区と言うことになる。

南北に走る現在の生活道路によって、東からC・A区の2区画に分けられ、竪穴建物跡3棟と土坑跡2基が検出された。

#### 第1項 III A区

##### (1) III A区2号竪穴建物跡

位置：III A区の西端、X450・Y-945Gr。大部分が調査区外に出る。 主軸方位：不明 重複：大部分が調査区外に出るため不明。 規模と形状：竈の先端部のみ検出。

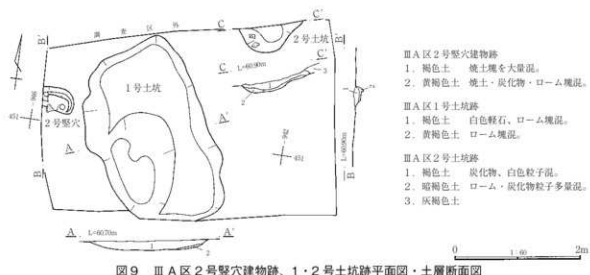
##### (2) III A区1号土坑跡

位置：III A区の中央、東端部付近。X445・Y-940Gr。 重複：なし。 規模と形状：北西-南東方向に長い楕円形状を呈し、長径2.2m・短径1.2m・深さ14cm。南東側が一部調査区外に出る。 埋土：褐色土ベース。

##### (3) III A区2号土坑跡

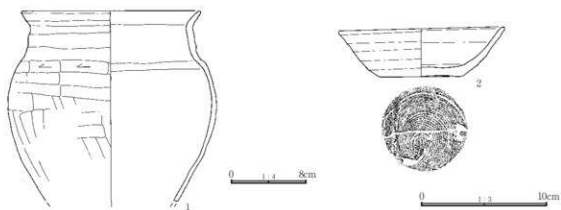
位置：III A区の北壁。X450・Y-940Gr。 重複：なし。 規模と形状：北側が調査区外に出るため形状不明。

深さ15cm。埋土：褐色土ベース。



## III A区表土

遺物番号	器種	土性状・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
III A区表-1	土師器 小型 壺	埋土、口縁一 体部2/3	口径14.3、残存器高15、 器厚0.3	①黒褐色 ②良好 ③黄赤 ④1mm以下・2mm以下灰白色粒子・非粒混	口縁一頸部内外面横溝、体一底部外面 施割・内面横・斜方向無
III A区表-2	須恵器 杯	埋土 ほぼ完形	口径13.1、底径6.6、残 器高3.7、器厚0.4	①鈍い黄褐色 ②良好 ③ 黄赤、径1mm以下の灰白色粒子混	轆轤成形、底部回転未切



## 第2項 III C区

## (1) III C区1号壑穴建物跡

位置：III C区の西端より。X455・Y-920Gr。北辺が調査区外に出る。主軸方位：E-35°-N 重複：なし  
規模と形状：上面が激しく削平を受けているため、床面付近でようやく検出できた。南辺3.2m・西辺2.6m以上・  
深さ10cm、方形状を呈していたものと考えられる。埋土：暗褐色土ベース。寛：東壁のほぼ中央に地  
山を削りだして形成されるが、上面の削平により、煙道等は検出できなかった。床面：地山をほぼ平坦に

削り、整形している。堀り方：堀方と床面とはほぼ一致。床下の土坑等は調査範囲では検出されていない。  
 時期：8世紀後半。

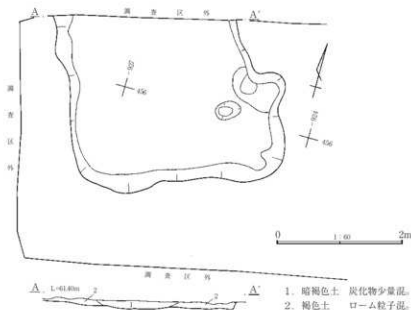


図 11 III C区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図

(2) III C区3号竪穴建物跡

位置：III C区のはほぼ中央。X455・Y-915Gr。南側が調査区外に出る。重複：西側をIII C区1号溝跡に破壊される。規模と形状：西辺はIII C区1号溝跡に破壊され、南辺は調査区外に出るため、東辺と北辺の約半分以下が辛うじて検出できた程度。全容はまったく不明である。確認された範囲での深さは33cm。  
 埋土：暗褐色土ベース。床面：地山をほぼ平坦に削り、整形している。堀方と床面とはほぼ一致。床下の土坑等は調査範囲では検出されていない。時期：8世紀後半。

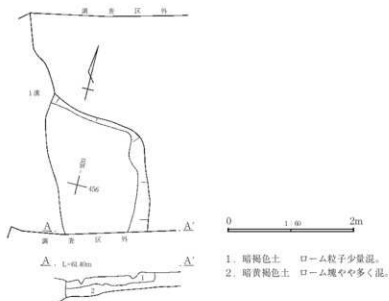


図 12 III C区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図



## (3) III C区1号溝跡

位置：III C区のはほぼ中央を南北に流れる。X455・Y-915～-920Gr. 南北端が調査区外に出る。重複：III C区3号竪穴建物跡の西辺を破壊する。規模と形状：確認全長4m、上幅2.8m、下幅1.4m、深さ40cm。埋土：明褐色砂質土をベースとする。時期：8世紀後半。

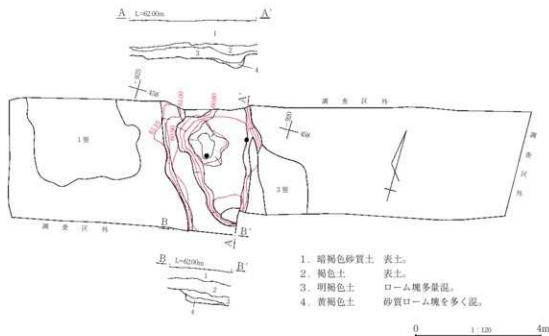


図13 III C区1号溝跡平面図・土層断面図

## III C区1号溝跡

遺物番号	器種	出土状況・埋土	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
III C区1溝-1	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径13、器高2.7、 器厚0.3	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面焼削・内面撫
III C区1溝-2	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径13、器高3.5、 器厚0.3	①鈍い橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面焼削・内面撫

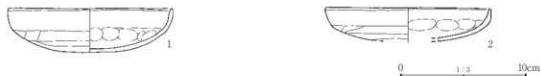


図14 III C区1号溝跡出土遺物

## 第4節 IV区の遺構と遺物

IV区は、主要地方道足利伊勢崎線に面した北側の調査区である。最東端の、石橋交差点に面したIV F区の部分で、一部、主要地方道太田大間々線の西側に面した調査区が逆L字型に取り付く。

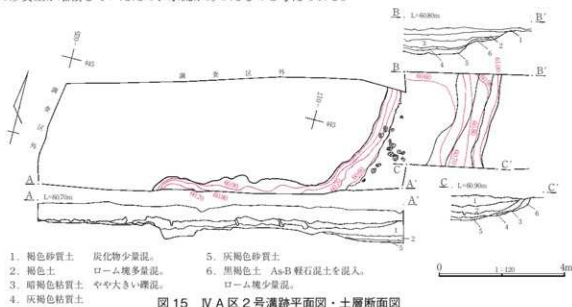
南北に走る現在の生活道路によって、東からA～F区の5区画に分けられ、IV A区からIV D区までが平成14年度に、IV E区・IV F区が平成18年度に調査された。

## 第1項 IV A 区

IV A 区は、主要地方道足利伊勢崎線の北側に面した最西端の調査区である。溝跡1条と土坑跡3基が検出された。

### (1) IV A 区 2号溝跡

**位置：**IV A 区のはほぼ中央。3・7号土坑跡の東、10号土坑跡の西。X440～450・Y-010～-015Gr。南西端と北端が調査区外に出る。**規模と形状：**確認全長5m、上幅3.6m、下幅1.7m、深さ98cm。南西方向から北に向かって蛇行して流れる。南北端ともに調査区外に出るため、全容は不明。主要地方道足利伊勢崎線を挟んだ南側では、連続する部分は確認されていない。一見、楕円形状に巡る古墳の周溝のようにみえなくもないが、埋土中からは顕著な遺物等は出土していないため、不明。**埋土：**暗褐色土をベースとする。最下層に砂質土が堆積していたため、水流があったものと考えられる。



### (2) IV A 区 3号土坑跡

**位置：**IV A 区の中央よりやや西寄り。IV A 区 2号溝跡の西。X440・Y-020Gr。**規模と形状：**ほぼ円形状を呈し、長径1.32m・短径1.28m・深さ32cm。**埋土：**褐色土ベース。

### (3) IV A 区 7号土坑跡

**位置：**IV A 区の中央よりやや西寄り。IV A 区 2号溝跡の西。X440・Y-015Gr。**規模と形状：**東西に長い楕円形を呈し、長径1.1m・短径0.78m・深さ12cm。**埋土：**褐色土ベース。

### (4) IV A 区 10号土坑跡

**位置：**IV A 区の東端。IV A 区 2号溝跡の東。X445・Y-001Gr。**規模と形状：**西端及び南北端が調査区外に出るため、形状不明。現存最大東西幅3.2m・深さ12cm。**埋土：**褐色土ベース。

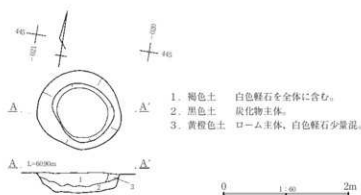


図16 IV区3号土坑跡平面図・土層断面図

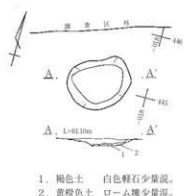


図17 IV区7号土坑跡平面図・土層断面図

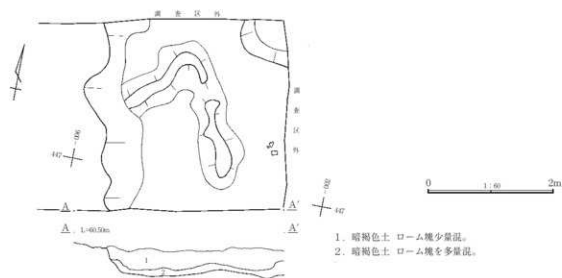


図18 IV区10号土坑跡平面図・土層断面図

## IV区10号土坑跡

遺物番号	器種	出土状況・発出層	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IV区10坑-1	土師器 杯	埋土 1/2	推定口径11、器高3.3、 器厚0.3	①鈍い橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体~底部外面施削・内面撫
IV区10坑-2	土師器 皿	埋土 1/2	推定口径16、器高3.5、 器厚0.4	①明褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体~底部外面施削・内面撫
IV区10坑-3	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径102、器高31、 器厚0.3	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体~底部外面施削・内面撫

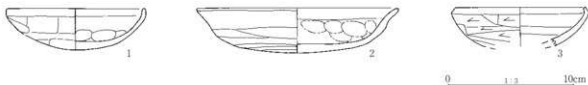


図19 IV区10号土坑跡出土遺物

## 第2項 IVB区

IVB区は、主要地方道足利伊勢崎線に面した北側で、西から二番目の調査区である。竪穴建物跡が1棟

と溝跡が1条、土坑跡が1基、検出された。

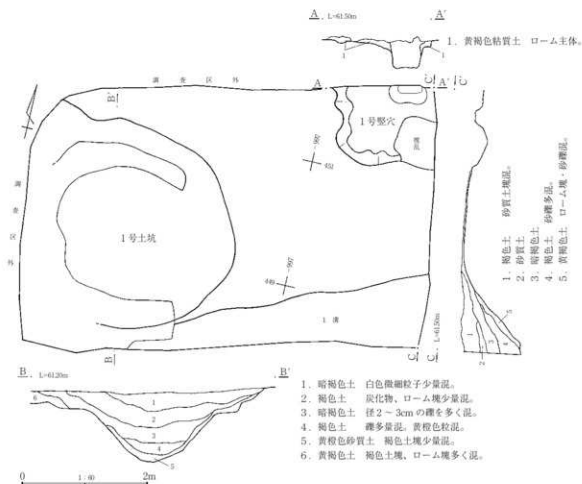
調査区の南端にかかるように、東西に走るIVB～F区1号溝跡の北の肩に当たる部分が検出されているが、この溝については、IVF区の項で詳説する。

(1) IVB区1号竪穴建物跡

位置：IVB区の北東端。X450・Y-995Gr.。北側と東側が調査区外に出る。重複：なし。規模と形状：調査区の北東端に、竪穴建物跡の南西隅のごく一部がかかって検出された。上面が激しく削平を受けているため、床面付近でようやく検出できている。南辺を一部攪乱されている。深さ10cm。埋土：黄褐色土ベース。床面：地山をほぼ平坦に削り、整形している。掘方と床面とはほぼ一致。床下の土坑等は調査範囲では検出されていない。時期：8世紀後半頃。

(2) IVB区1号土坑跡

位置：IVB区の西端。X445・Y-995Gr.。西側と南側が調査区外に出る。重複：IV区1号溝跡の北肩を破壊する。規模と形状：西側及び南側が調査区外に出るがほぼ円形を呈していたものと考えられる。南北径6.7m、深さ2.2m。埋土：暗褐色土ベース。床面：地山をほぼ平坦に削り、整形している。掘方と床面とはほぼ一致。床下の土坑等は調査範囲では検出されていない。時期：8世紀後半頃のものと考えられる。



IV B区1号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋没状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IV B区1号 -1	白玉	埋土	径1.35、厚0.15、孔径0.4	①青灰色	



図21 IV B区1号竪穴建物跡出土遺物

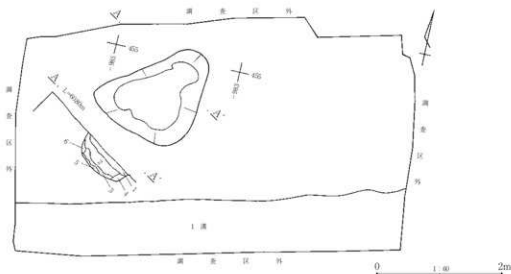
### 第3項 IV C区

IV C区は、主要地方道足利伊勢崎線に面した北側で、西から3番目と4番目の調査区。IV B区の、南北方向の生活道を挟んだ東隣と、同じく南北方向の生活道路を挟んだ、そのさらに東隣の調査区。

IV C西側の調査区では、IV B区から引き続いて検出されている東西方向のIV区1号溝跡北肩の続きのみが検出されている。一方、IV C東側調査区では、引き続きIV区1号溝跡の北肩の続きが検出されているほか、土坑跡が1基検出されている。

#### (1) IV C区9号土坑跡

位置：IV C東側調査区の中央、やや北寄り。IV区1号溝跡の北側、X450・Y-980Gr。規模と形状：北東・南西方向に長い不整形形状を呈する。長径1.9m・短径1.3m・深さ0.34m。埋土：暗褐色土ベース。



1. 暗黄褐色土 炭化物・ローム塊少量混。径1～2mmの白色軽石微量混。
2. 暗褐色土 炭化物・焼土粒子・ローム粒少量混。白色軽石微量混。
3. 暗褐色土 炭化物を多く、焼土・ローム粒少量混。
4. 暗黄褐色土 ローム塊多混。
5. 暗黄褐色土 ローム塊多量混。炭化物少量混。
6. 暗褐色土 ローム粒多混。

図22 IV C区9号土坑跡平面図・土層断面図

### 第3章 発見された遺構と遺物

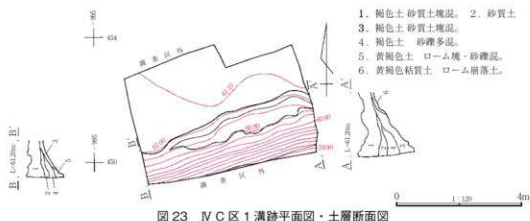


図23 IV C区1号溝跡平面図・土層断面図

### 第4項 IV D区

IV D区は、主要地方道足利伊勢崎線に面した北側で、西から5番目と6番目の調査区。IV C東側調査区の南北方向の生活道を挟んだ東隣と、同様に南北方向の生活道路を挟んだ、さらにその東隣の調査区。

IV D西側の調査区では、IV B区から引き続いて検出されている東西方向のIV区1号溝跡北肩の続きが検出されている。一方、IV D東側調査区では、引き続きIV区1号溝跡が検出されているが、はじめて溝底部が検出された。

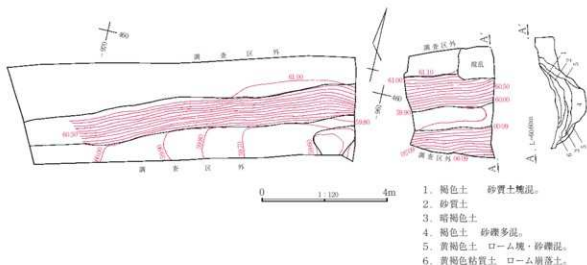


図24 IV D区1号溝跡平面図・土層断面図

### 第5項 IV E区

IV E区は、主要地方道足利伊勢崎線に面した北側で、西から7番目の調査区である。IV D東側調査区の南北方向の生活道を挟んだ東隣である。

IV B区から引き続いて検出されている東西方向のIV区1号溝跡の続きが検出されている。

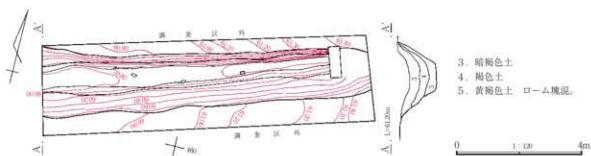


図25 IV区1号溝跡平面図・土層断面図

## IV区表土

遺物番号	器種	出土状況・埋蔵層	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・装飾の特徴、備考
IV E区表-1	土師器 杯	表土 1/3	推定口径16.5、器高5.3、 器厚0.6	①鈍い黄棕色 ②良好 ③ 緻密	口縁部内外縁露出、体外面施釉・内面施釉、底部外面 手持痕跡・内面施釉



図26 IV区表土出土遺物

## 第6項 IV区

IV F区は、主要地方道足利伊勢崎線の北側に面し、東端と東から2番目の調査区である。南北方向の生活道路によって東西の二区画に分けられる。

西側の調査区では、IV B区から引き続き検出されている東西方向のIV区1号溝跡の続きのみが検出されている。

東側の調査区では、主要地方道足利伊勢崎線に面した部分では、IV B区から引き続き検出されている東西方向のIV区1号溝跡の続きが検出されているが、北側に逆L字型に伸びる主要地方道太田大間々線の東側に面した部分では竪穴建物跡6棟が検出されている。

## (1) IV区1号溝跡

位置：IV B区から北側の肩にあたる部分が検出され、IV D区ではじめて溝底が検出され、IV F区ではじめて溝の両肩が検出され、幅が明らかになった。X445～480・Y-835～875Gr.。重複：IV F区6号竪穴建物跡の南辺を掘り込む。規模と形状：確認全長132m・最大上幅3.4m・下幅1.2m・深さ2.5m。上面は後世に掘削されている。断面は比較的シャープな逆台形状を呈し、N-72°-Eの方向で直線的に流れ、東西両端とも調査区外に続いている。西側調査区のはほぼ中央では、法面中段に径約30cm・深さ約20cm程度の浅い柱痕が4箇所検出された。平面形態は不整形形状を呈するが、溝の南北両側法面に構築されており、橋桁の痕跡の可能性が高い。底部には、掘削時の工具痕が連続して残っていた。埋土：土層の堆積状況から、水流があったことが確認できる。また、埋土層には、天仁元(1108)年降下の浅間山火山噴出物As-B軽石

の一次堆積が全く認められない。**遺構の意義**：本溝は、正方位に載らず、約250m南の位置をN-80°-Eの方向で東西方向に走る東山道駅路下新田ルートとも、さらにその400m南側を、N-83°-Eの方向でほぼ並行して東西方向に走る東山道駅路牛堀矢ノ原ルートとも、異なる走向であり、古代官道と同じ方向の地割りに載っているわけではない。南側に約400mも離れている東山道駅路牛堀矢ノ原ルートはもとより、発掘調査中に関連が取りざたされた下新田ルートとも無関係とみられる。7世紀後半の竪穴建物跡を掘り込んで破壊しているので、7世紀後半以降に掘削されたことは確実である。また、天仁元年降下の浅間火山山噴出物As-B軽石の純堆積層が堆積土中に認められないことから、本溝がそれ以降に掘削されたものであるか、あるいは、改修・清掃等が行われていたことがわかる。溝底からの遺物の出土もなく、本溝の掘削時期を確定することはできなかった。また、溝底絶後に、その上面に掘り込まれた後世の遺構は確認されていないため、溝の絶後時期も明確ではない。太田市市内の旧新田町域や、伊勢崎市内の旧境町域で検出された新田堀や牛堀などのような、古代以来の大規模な灌漑水路である可能性がある。新田堀用水は、石橋町の手前、美女木分水堰で屈折し、長堀に分岐しているが、美女木分水堰で屈折せずに新田堀を西に真っ直ぐ延ばしてくると、ほぼ本溝と同様の位置に達する。また、規模や位置からみて、本遺跡の北西に展開する新田郡家関連寺院である寺井庵寺に関連する区画溝という可能性も想定できるところであるが、寺井庵寺の中心部分と考えられる太田市立強戸小学校・同中学校中間の南側からは直線距離で約190m離れており、寺院域を区画する溝と考えるにはかなり離れすぎているきらいがある。**埋土**：褐色土をベースとする。**土層と火山灰**：平成18年度の調査時に株式会社古環境研究所に委託して実施した埋土試料の自然科学分析結果では、埋土下位からAs-Bに由来する可能性の高い軽石が検出されたことから、本溝の層位をAs-B軽石降下（天仁元年、1108年）以降のものとしているが、先述したように、本溝の埋土には水流の痕跡が明瞭であり、所謂溝さらいがたびたび行われていた可能性を想定すれば、必ずしもAs-B軽石降下以降の掘削とは言いつれないのである。**植物珪酸体分析から推定される植生と環境**：植物珪酸体分析の結果からは、埋土の堆積当時は、ススキ属、キビ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などはみられるものの、何らかの原因で、イネ科植物の生育にはあまり適さないような環境であったと考えられるという。溝埋土上層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、調査地点もしくはその周辺ではイネやムギ類を栽培する農耕が行われていたと推定されるということである。また、周辺の比較的乾燥したところには、ススキ属やチガヤ属、シバ属、キビ属、メダケ属（ネザサ節）などが分布しており、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと考えられるという。**珪藻分析から推定される堆積環境**：埋土の堆積当時は河川からの流水を受け、水生植物が生育する流水域や止水域、及び陸域の湿地へと連なる多様な環境が示唆され、このような環境が共存もしくは繰り返されていたと推定される。珪藻密度は低く、堆積環境の推定は困難であるという。珪藻密度が低い原因としては、珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境にあったことや、水流による淘汰を受けたこと、土層堆積の速度が速かったことなどの要因が考えられるとのことである。**花粉分析から推定される本溝周辺の植生と環境**：本溝の埋土中からはクワ科・イラクサ科、イネ科、ヨモギ属などの花粉が検出されたが、花粉密度は低く、いずれも少量である。中でもヨモギ属が優勢であり、イネ科、キク亜科などが伴われる。また、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属なども認められた。本溝埋土中からは、花粉があまり検出されないことから、植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下での、花粉など有機質遺体の分解が考えられるが、水流による淘汰も想定できる。少量ながらもヨモギ属、イネ科などが検出されていることから、それらが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境が示唆される。**時期**：古代～中世か。



第4節 IV区の遺構と遺物

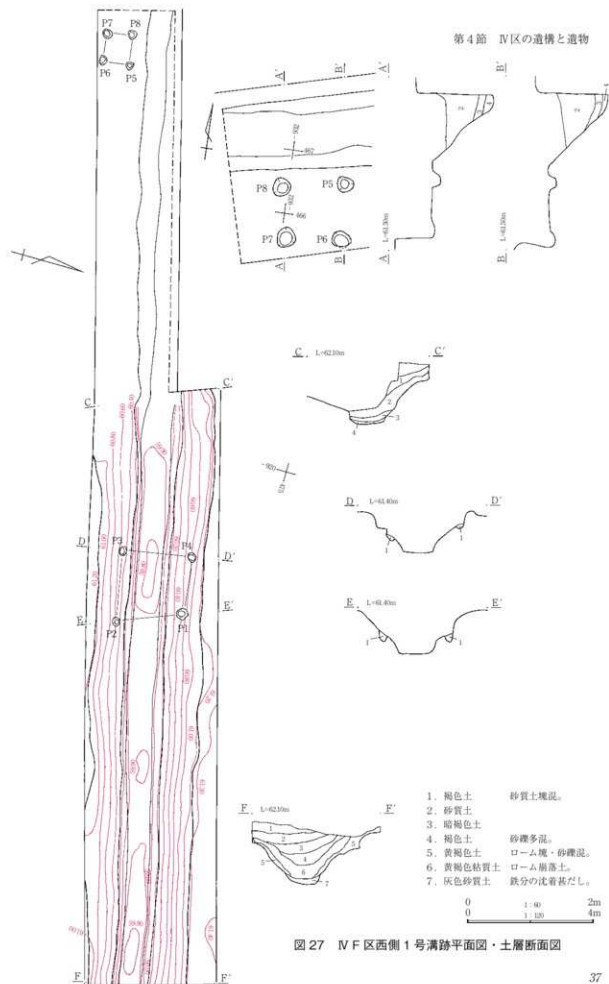


図27 IV F区西側1号溝跡平面図・土層断面図

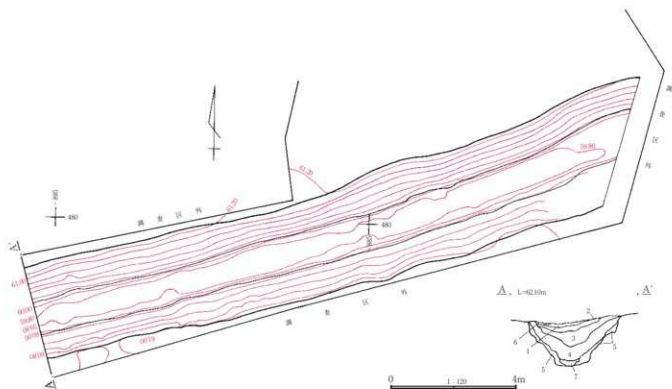


図28 IV F区東側1号溝跡平面図・土層断面図

IV F区1号溝跡

遺物番号	器種	出土状況・埋存状態	流量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IV F区1溝-1	土師器 杯	埋土 1/2	推定口径136、器高41、 器厚05	①鈍い褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面縦・斜方向撫
IV F区1溝-2	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径134、器高43、 器厚05	①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内面縦・斜方向撫
IV F区1溝-3	須恵器 杯	埋土 1/3	推定口径146、器高32、 器厚04	①灰色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部回転施削

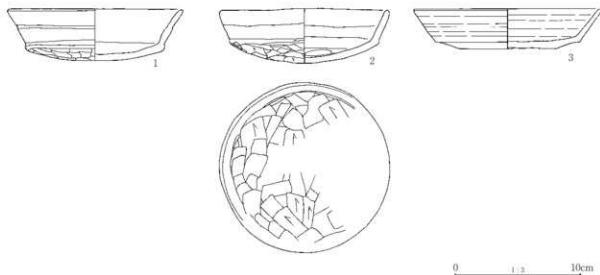


図29 IV F区1号溝跡出土遺物

## (2) IV F区1号掘立柱建物跡

位置：IV F区の最西端、X465・Y-930Gr。 主軸方位：N-13°-W 規模と形状：確認できたのは1間×1間、柱間8.5m四方。IV区1号溝跡の南側に接するように構築されるが、溝法面や溝内に柱痕がまったく確認できないため、橋脚ではないと考えられる。ただし、溝跡との位置関係からみて、溝と関連のある構造物であった可能性が高い。pit1:径30cm・深さ10cm、pit2:径30cm・深さ8cm、pit3:径32cm・深さ6cm、pit4:径30cm・深さ15cm。 時期：8世紀後半。

## (3) IV F区1号竪穴建物跡

位置：IV F区の北寄り。3号竪穴建物跡のすぐ南。X495・Y-885Gr。 重複：3号竪穴建物跡に隣接するが、後世に激しく攪乱されており、3号竪穴建物跡との新旧関係は不明である。 規模と形状：竪穴建物跡の北東隅付近が検出されているが、激しく攪乱されており、北辺と東辺のごく一部が検出されているに過ぎない。北東隅部も攪乱され破壊されている。深さ34cm。 埋土：褐色土をベースとする。 床面：地山を削り出して平坦に整形している。 堀方と床面とは一致している。 時期：8世紀後半。

## (4) IV F区3号竪穴建物跡

位置：IV F区の中央から北寄り。1号竪穴建物跡すぐ南側。X490・Y-880Gr。 重複：IV F区1号竪穴建物跡の南、IV F区4号竪穴建物跡のすぐ北に隣接する。後世に激しく攪乱されており、1号竪穴建物跡との新旧関係は不明である。4号竪穴建物跡は掘り込んで破壊している。 規模と形状：北東隅と東辺・南辺の一部が検出された。西辺は調査区外に出る。南東隅を後世に攪乱され、破壊されているが、西辺は約2.8mと、竪穴建物跡としては異例に短い。上面を甚だしく掘削され、床に近い部分で検出された。深さは16～20cm。竪穴跡は調査範囲では検出されなかった。 埋土：灰黄褐色土をベースとする。 床面：地山を平坦に削り整えて床面を形成している。 堀方と床面とは一致している。 時期：8世紀後半。

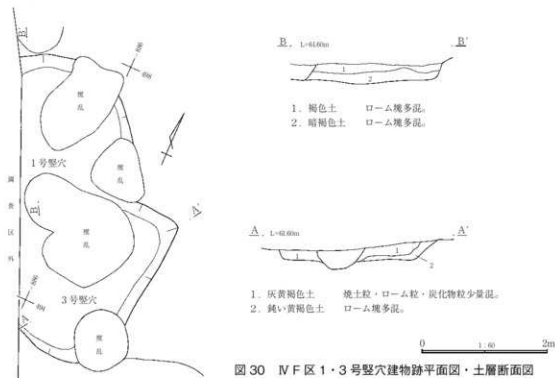


図30 IV F区1・3号竪穴建物跡平面図・土層断面図

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### IV F区1号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IV F区1型 -1	須恵器 杯	埋土 2/5	器定口径131, 器高33, 器厚0.4	①灰オリーブ色 ②良好 ③緻密	轆轤成形, 底部外面回転糸切
IV F区1型 -2	須恵器 高台 付碗	埋土 2/5	器定口径10, 残存器高 4.7, 器厚0.4	①灰白色 ②良好 ③面者, 径1cm以下の黒褐色粒子少量混	轆轤成形, 底部外面回転糸切



図31 IV F区1号竪穴建物跡出土遺物

#### IV F区3号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IV F区3型 -1	須恵器 杯	埋土 2/5	器定口径131, 器高32, 器厚0.4	①灰白色 ②良好 ③緻密	轆轤成形, 底部外面回転糸切後撫

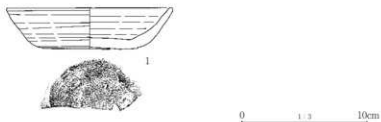


図32 IV F区3号竪穴建物跡出土遺物

#### (5) IV F区2号竪穴建物跡

位置：IV F区の北端付近。1号竪穴建物跡の北。X495・Y-885Gr。重複：北西側、北辺の一部を10号土坑跡に掘り込まれる。規模と形状：竈が取り付く南辺のごく一部が検出されたに過ぎず、東西辺は調査区外に出、北辺は不明確。深さ約22cm、掘方までの深さは約48cm。埋土：灰黄褐色土ベース。竈：南辺に取り付く。燃烧部と煙道の立ち上がりの部分のみ検出できた。残存状態は良くない。床面：地山を削った上に、厚さ約10～20cm程度灰黄褐色土を貼り床面を形成。床面下は起伏に富む。時期：8世紀後半。

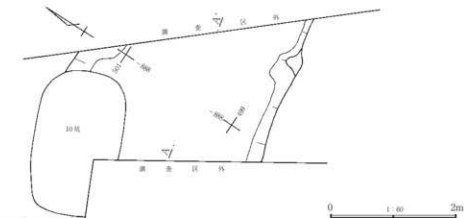


図33 IV F区2号竪穴建物跡平面図

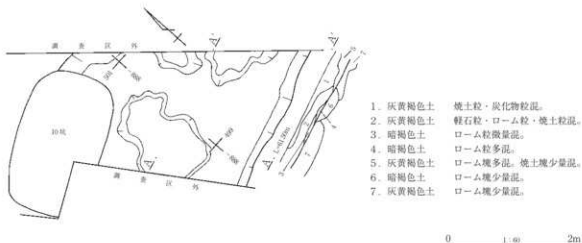


図34 IV F区2号竪穴建物跡堀方平面図・土層断面図

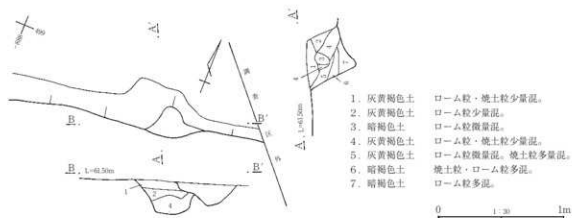


図35 IV F区2号竪穴建物跡堀方平面図・土層断面図

## IV F区2号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土状況・埋没部	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IV F区2型 -1	須恵器 杯	埋土 3/5	推定口径177、推定口径 112、器高51、器厚04	①橙色 ②不良 ③緻密	轆轤成形、底部外面回転糸切後回転挽削・内面撫、各部外面正位墨書「丈」
IV F区2型 -2	須恵器 杯	埋土 2/3	推定口径127、器高36、 器厚04	①黄灰色 ②やや不良 ③ 緻密	轆轤成形、底部外面回転挽削
IV F区2型 -3	須恵器 杯	埋土 1/2	口径135、器高36、器 厚04	①灰白色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部外面回転挽削

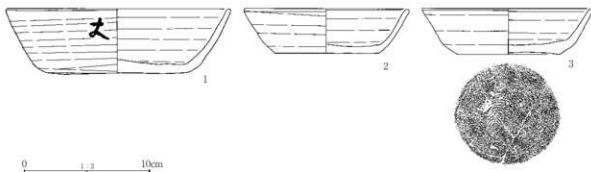
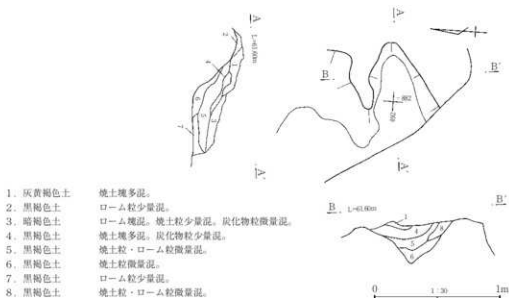
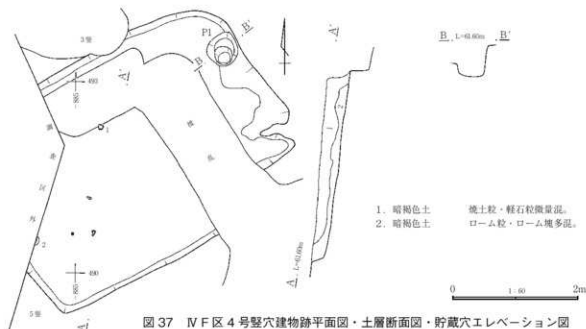


図36 IV F区2号竪穴建物跡出土遺物

(6) IV F区 4号竪穴建物跡

位置：IV F区の中央、やや北寄りの位置。西壁際。3号竪穴建物跡のすぐ南側。西側は調査区外に出る。X485～490・Y.880Gr. 主軸方位：N-83°-E 重複：北辺の一部を3号竪穴建物跡に掘り込んで破壊される。南側5号竪穴建物跡を大きく掘り込んで破壊する。規模と形状：西側が調査区外に出、北辺の一部を3号竪穴建物跡に破壊され、中央部を後世に攪乱されているため、不明な部分が多いが、長辺約4.7m・短辺約2.8m・深さ約32cm、北東・南西方向に横長の長方形形状を呈する。埋土：暗褐色土をベースとする。竈：南東隅コーナーに取り付く。地山を削りだして形成され、両袖は建物内に張り出す。上面が掘削されているため、燃焼室と煙道部の立ち上がりの部分のみが検出され、煙道部は全く検出できなかった。床面：地山を平坦に削り整えて形成。床面下の遺構等は検出されなかった。掘方と床面とはほぼ一致。時期：9世紀前半。



IV F区4号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土質・焼成状態	流量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴・備考
IV F区4型 -1	土師器 杯	埴土 2/5	器口径12、残存器高 2.7、器厚0.4	①鈍い橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体~底部外面直削・内面撫
IV F区4型 -2	須恵器 杯	埴土 2/5	器口径133、器高38、 器厚0.4	①灰白色 ②良好 ③緻密	輪轆成形、底部外面回転糸切後撫



図39 IV F区4号竪穴建物跡出土遺物

## (7) IV F区5号竪穴建物跡

位置：IV F区のはほぼ中央。4号竪穴建物跡の南、6号竪穴建物跡の北。X485・Y-880Gr。 主軸方位：N-93°  
E 重複：北側を4号竪穴建物跡に掘り込まれる。南側は6号竪穴建物跡を掘り込んで破壊するが、南側中央部は後世に大きく攪乱されている。西側は一部調査区外に出る。 規模と形状：西・南・東の各辺のごく一部が検出されたのみ。上面が大きく掘削され、北側を4号竪穴建物跡に大きく破壊され、南側を攪乱され、残存状態は良くない。東西辺約2.5m以上、南北辺2m以上、南北に長い長方形を呈していたものと考えられる。深さ約18cm。 埴土：黒褐色土ベース。 竈：北壁の南東隅寄りに取り付く。地山を削りだして形成され、両袖部は全く検出できなかった。燃焼部は竪穴建物の外に張り出して造られる。上面が掘削されているため煙道部及び煙道部の立ち上がりも不明確である。 床面：地山を平坦に削り整えて形成。掘方と床面とはほぼ一致している。床面下の遺構等は検出されなかった。 時期：9世紀前半。

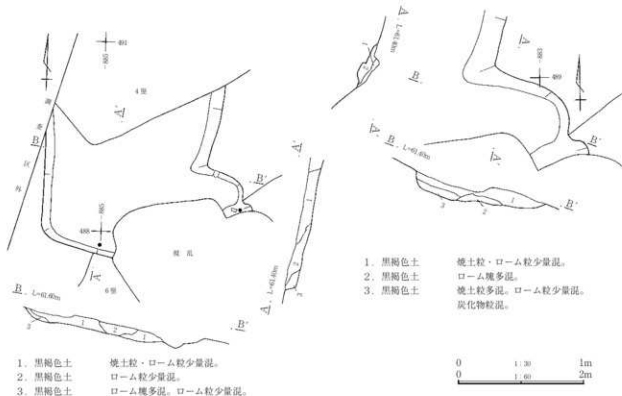


図40 IV F区5号竪穴建物跡・電跡平面図・土層断面図

IV F区5号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・発見状況	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IV F区5号 -1	須恵器 蓋	埋土、端部 破片	底径12、壁厚1	①浅黄色 ②良好 ③赤、II 土質Y-2a程度の硬胎好々粒	輪縁成形、外面端部に黒青 「土」



図41 IV F区5号竪穴建物跡出土遺物

(8) IV F区6号竪穴建物跡

位置：IV F区のはば中央。5号竪穴建物跡の南、1号溝跡の北。X480・Y-875～-880Gr。 重複：北側を5号竪穴建物跡に、南側をIV区1号溝跡にそれぞれ掘り込まれ、破壊されている。規模と形状：上面を大きく掘削され、北辺を5号竪穴建物跡に、南辺をIV区1号溝跡に掘り込まれて破壊されており、中央部と西辺を後世に攪乱されているため、不明な部分が多いが、東西辺約6.4m・南北辺約5.8m以上・深さ約40cm。ほぼ方形を呈していたものと考えられる。東壁に煙道部が検出されたが、その下の壁は明瞭であり、竈は新たに造り替えられたものと考えられる。新たに造り替えられた竈は、調査範囲では検出されなかった。埋土：黒褐色土ベース。貯蔵穴・ピット：東壁の外側に取り付く旧竈煙道の南西に旧竈に対応する貯蔵穴が検出された。旧貯蔵穴は長辺約70cm・短辺約62cm・深さ約24cm。また、建物内南西隅近くでピットが2基検出された。南側のpit1は長径約78cm・短径約68cm・深さ約28cm、北側のpit2は、径約50cm・深さ約20cm。ともに柱穴とは考えられない。床面：地山を平坦に削り整形している。掘方と床面とはほぼ一致し、床下の土坑等は検出されていない。時期：7世紀前半。

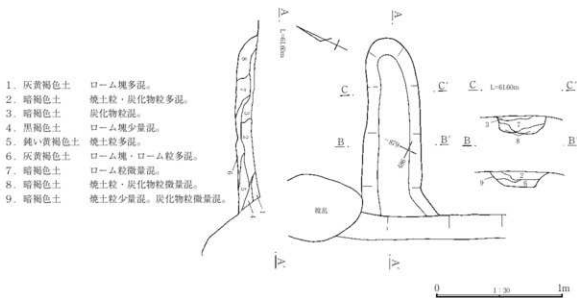


図42 IV F区6号竪穴建物跡第一次電跡煙道跡平面図・土層断面図



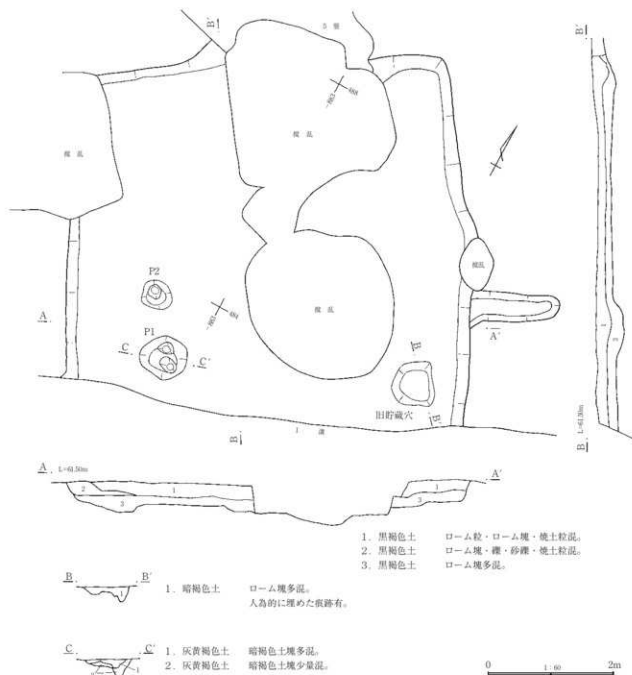


図43 IVF区6号竪穴建物跡平面図・土層断面図

## IVF区6号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋没層	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IVF区6型 -1	土師器 杯	埋土 3/4	推定口径124、残存器高 4.3、器厚0.5	①赤褐色 ②灰黄 ③黄赤、黄 黒 T-2mの赤褐色・暗褐色土層	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削 ・内面撫
IVF区6型 -2	土師器 杯	埋土 5/6	口径19.5、器高5.7、器 厚0.5	①赤褐色 ②灰黄 ③黄赤、黄 黒 T-2mの赤褐色・暗褐色土層	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削 ・内面撫
IVF区6型 -3	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径138、残存器高 5.8、器厚0.6	①赤褐色 ②灰黄 ③赤、黄 黒 T-2mの赤褐色・暗褐色土層	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削 ・内面撫
IVF区6型 -4	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径132、残存器高 4.3、器厚0.5	①赤褐色 ②灰黄 ③黄赤、黄 黒 T-2mの赤褐色・暗褐色土層	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削 ・内面撫

第3章 発見された遺構と遺物

IV F区6型 -5	土師器 小型 甕	床直 ほぼ定形	口径15.7、器高14.5、器 厚0.5	①赤褐色 ②良好 ③粗 密、径1mm以下～2mm程 度の黒褐色粒子を多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削 ・内面縦・斜方向撫
IV F区6型 -6	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	口径22.5、残存器高9、 器厚0.7	①にぶい黄褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面斜方向撫
IV F区6型 -7	土師器 高杯	床直 ほぼ定形	口径14.8、器高11.5、器 脚底径11.6、脚径4.1、 器厚0.6	①浅黄褐色 ②良好 ③粗 密、径1mm以下～2mm程 度の黒褐色粒子を多混	口縁部～体部上位内外面横撫、体部下位～ 脚部外面施削、脚底部外面施削後一部横撫、 脚底部内面横撫
IV F区6型 -8	土師器 高杯	床直 ほぼ定形	口径14.9、器高8.8、脚 底径11.6、脚径4.4、器 厚0.6	①浅黄褐色 ②良好 ③粗 密、径1mm以下～2mm程 度の黒褐色粒子を多混	口縁部～体部上位内外面横撫、体部下位～ 脚部外面施削、脚底部外面施削後一部横撫、 脚底部内面横撫
IV F区6型 -9	土師器 高杯	床直 ほぼ定形	推定口径14.5、器高8.1、 推定脚底径11.8、脚径 4.2、器厚0.7	①鈍い黄色 ②良好 ③粗 密、径1mm以下～2mm程 度の黒褐色粒子を多混	口縁部～体部上位内外面横撫、体部下位～ 脚部外面施削、脚底部外面施削後一部横撫、 脚底部内面横撫
IV F区6型 -10	土師器 高杯	床直 2/3	推定口径16.6、推定脚底 径12.1、脚部径4.1、器 高8.1、器厚0.5	①鈍い褐色 ②良好 ③粗 密、径1mm以下～2mm程 度の砂粒少量混	口縁部～体部上位内外面横撫、体部下位～ 脚部外面施削、脚底部外面施削後一部横撫、 脚底部内面横撫
IV F区6型 -11	土師器 高杯	埋土 1/2	口径12.2、脚底径12.1、 脚径4.2、残存器高8、 器厚0.6	①鈍い褐色 ②良好 ③粗 密	口縁部～体部上位内外面横撫、体部下位～ 脚部外面施削、脚底部外面施削後一部横撫、 脚底部内面横撫
IV F区6型 -12	土師器 高杯	埋土 2/3	口径11.7、脚部径4.5、 残存器高7、器厚0.6	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面撫、脚部外面施削、底部 内外面撫・内面施削
IV F区6型 -13	有孔石製品	埋土	長2.7、幅2.2、厚0.4	①緑灰色	
IV F区6型 -14	石製模造品 刺形	埋土	長3.9、幅1.8、厚0.5	①緑灰色	

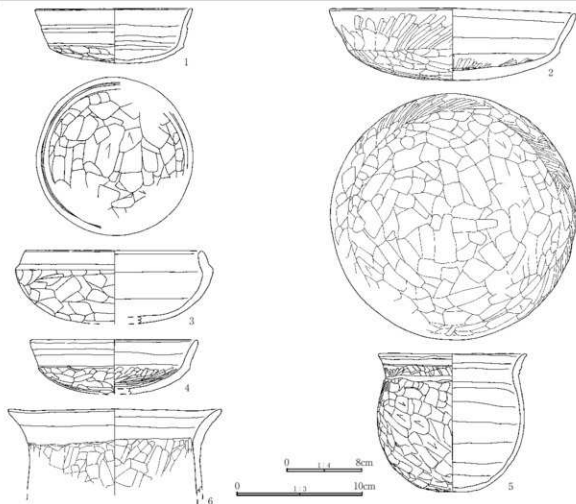


図44 IV F区6号竪穴建物跡出土遺物(1)

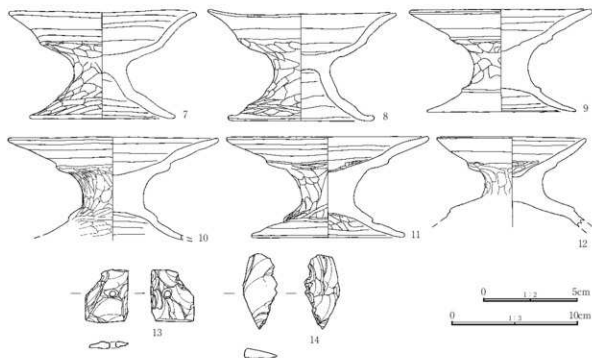


図45 IV F区6号竪穴建物跡出土遺物(2)

(9) IV F区10号土坑跡

位置：IV F区の北端付近。IV F区2号竪穴建物跡の北側、X500・Y-885Gr。重複：IV F区2号竪穴建物跡を掘り込む。規模と形状：東西に長い楕円状を呈する。長径約22m・短径約14m・深さ約12cm。埋土：黒褐色土ベース。

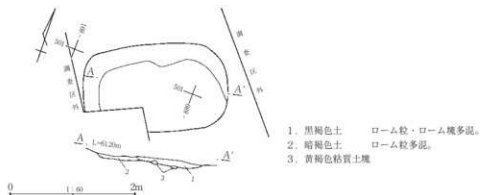


図46 IV F区10号土坑跡平面図・土層断面図

(10) IV F区32号土坑跡

位置：IV F区の南寄り。西壁際。IV区1号溝跡の北側。IV F区6号竪穴建物跡の西側。X485・Y-885Gr。重複：なし。規模と形状：西半分以上が調査区外に出るため、全容は不明である。径約1.5m・深さ約1m。円筒形の深い土坑。埋土：暗褐色土ベース。

第3章 発見された遺構と遺物

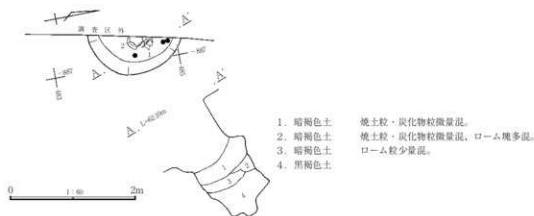


図 47 IV F 区 32 号土坑跡平面図・土層断面図

IV F 区 32 号土坑跡

遺物番号	器 種	出土状況・残存状況	法 量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IV F 区 32 坑-1	須恵器 碗	埋土	口径 16、器高 6.3、器厚 0.6	①黄灰色 ②良好 ③密着、径 1cm 以下の灰白色粒子少量混	轆轤成形、底部回転施削
IV F 区 32 坑-2	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部 1/2	口径 21.1、残存器高 188、 器厚 0.4	①棕色 ②良好 ③密着、径 1 mm 以下の灰白色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面撫
IV F 区 32 坑-3	須恵器 蓋	埋土	径 18.3、楕円径 2.7、器 高 5、器厚 0.6	①灰色 ②密着 ③中巻、径 1-2 mm 程度の灰白色・黒褐色粒子少量混	轆轤成形、外面回転施削

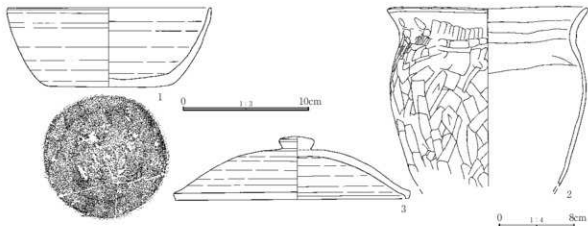


図 48 IV F 区 32 号土坑跡出土遺物

IV F 区表土

遺物番号	器 種	出土状況・残存状況	法 量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
IV F 区表-1	土師器 甕	埋土	口径 22.1、底径 5.7、器 高 32、器厚 0.4	①棕色 ②良好 ③密着、径 1m 以下の黒褐色・黒褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内 面縦・斜方向撫
IV F 区表-2	須恵器 円面 硯	埋土 破片	楕円径 6.3、器厚 1.2	①灰色 ②良好 ③密着、径 1cm 以下の黒褐色灰白色粒子混	轆轤成形
IV F 区表-3	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 12.4、器高 4.4、器 厚 0.5	①棕色 ②良好 ③密着	口縁部内外面横撫、体～底部外面施削・内 面撫
IV F 区表-4	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部上面破片	口径 13.6、残存器高 10.4、 器厚 0.9	①棕色 ②良好 ③やや粗い、 径 1cm 以下～2mm 程度の灰白色・黒 褐色・黒褐色粒子をやや多量混	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面縦・斜方向撫

IV F区表-5	須恵器 杯	埋土 5/6	口径132、器高34、器 厚0.5	①灰色 ②良好 ③悪化、径1m以下の灰白色粒子多量	轆轤成形、底部回転施削
IV F区表-6	朝顔形埴輪	埋土、口縁部 破片	器厚1	①赤褐色 ②良好 ③やや粗い、径1m以下～1mの赤褐色多量	内外面横撫、突部部貼付
IV F区表-7	形象埴輪 瓢か?	埋土、体部破 片	器厚2	①明赤褐色 ②良好 ③悪化、径1m以下～1mの灰白色粒子多量	外面縦方向刷毛目後面文状沈視、内面撫
IV F区表-8	円筒埴輪	埋土、体部破 片	器厚1.6	①赤褐色 ②良好 ③やや粗い、径1～1.5mの赤褐色、多量、灰白色粒子多量	外面縦方向刷毛目、内面横・斜方向刷毛目
IV F区表-9	円筒埴輪	埋土、体部破 片	器厚2.4	①鈍い黄褐色 ②良好 ③悪化、径1m以下の灰白色粒子多量	外面縦方向刷毛目、内面撫
IV F区表-10	円筒埴輪	埋土、体部破 片	器厚2.2	①明赤褐色 ②良好 ③悪化、径1m以下の灰白色粒子・赤褐色多量	外面突部部貼付後上下撫、内面撫
IV F区表-11	形象埴輪	埋土、体部破 片	器厚2	①鈍い褐色 ②良好 ③悪化、径1m以下の灰白色粒子・赤褐色多量	外面突部部貼付後上下撫、内面撫
IV F区表-12	有孔石製品	埋土、破片	長5.5、幅4.5、孔径0.3、 厚0.6	①青灰色	

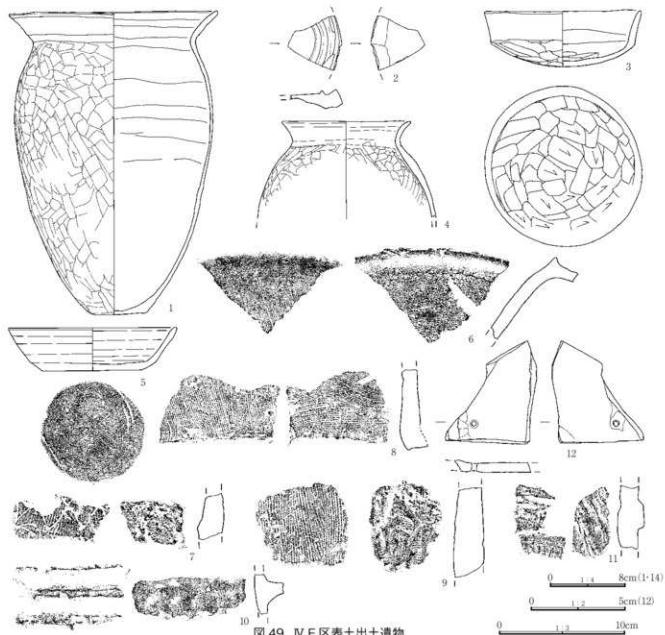


図49 IV F区表土出土遺物

## 第5節 1区の遺構と遺物

主要地方道足利伊勢崎線の北側に面した調査区で、南北方向に走向する生活道路及び水路を挟んで2区の東側にあたり、本道跡最東端の調査区である。

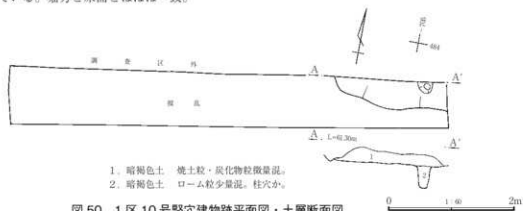
平成17年度に、調査区の中央を南北に走る生活道路を挟んだ東西両側の2箇所を調査した。面積は310㎡である。

調査区の北側には、商店や工場、宅地などが隣接し、水道管等の地下埋設物による破壊が甚だしい。また南側は、日常的に交通量の多い、主要地方道足利伊勢崎線に接しているため、調査の遂行は困難を極めた。進入路や埋設物箇所を確保しながら、調査区を小さく分割しながらの調査で、実際に、調査できた範囲は非常に狭い。

西側の調査区では、後世に大きく攪乱されており、遺構遺物はまったく検出できなかった。東側の調査区の東端から竪穴建物跡の一部らしき遺構が検出された。

### (1) 1区10号竪穴建物跡

位置：1区のほぼ中央。X480・Y-700Gr。 規模と形状：南辺のごく一部と竪穴建物跡の南西隅部が辛うじて検出できた程度で、竪穴建物跡のほとんどは調査区外に出るため、詳細は不明である。上面も後世に掘削され、攪乱されているため、残存状態は極めて悪い。柱穴らしい比較的しっかりとした掘方を有するピット状の遺構が検出されている。 埋土：暗褐色土をベースとする。 床面：地山を平坦に削り出して床面を形成している。掘方と床面とはほぼ一致。



## 第6節 2区の遺構と遺物

2区は、石橋交差点東側の、主要地方道足利伊勢崎線の北側に面した調査区である。石橋交差点から東へ3番目の調査区で、3区東側調査区とは、南北方向の現道を挟んだ東側に位置する。面積は461㎡である。現現道に面した非常に狭い範囲の調査区が多い本道跡においては、3区と並んで、比較的広く調査区が確保できた場所である。1区・3区と同じく、平成17年度に調査を行った。

5棟の竪穴建物跡が検出されたが、竪穴建物跡同士の重複が甚だしく、また、主要地方道足利伊勢崎線に

面して、商店や住宅が建ち並んでいた場所であったため、上面の掘削が著しくなされており、攪乱されている部分も少なくなく、堅穴建物跡は、いずれも床面付近でしか検出できなかった。残存状態は悪い。その他、1間四方の小規模な掘立柱建物跡1棟、南北方向に流れる近世の大溝跡1条、土坑跡2基が検出されている。

## 第1項 堅穴建物跡

### (1) 2区1号堅穴建物跡

位置：2区のほぼ中央。X475・Y-775Gr。 推定床面積：14.1㎡ 主軸方位：N-37°-E 重複：2区4号堅穴建物跡を掘り込む。 規模と形状：一辺約3.5m・深さ10cm・堀方まで深さ30cm方形状を呈する。南辺の一部と竈前にかけての広い範囲を攪乱されている。 埋土：暗褐色土ベース。 床面：地山を削り出した上に、暗褐色土の貼床を厚さ約5～8cm貼って、平坦に整えている。床面下のピットが2基検出された。

竈跡：北東側壁面のほぼ中央に取り付く。上面が大きく掘削されているため、残存状態は悪い。燃烧部・煙道等は地山を削りだして構築される。両袖は検出できなかった。煙道は平坦な燃烧部の奥壁から緩やかに立ち上がるが、燃烧部内の焼土・炭化物の堆積は余り顕著ではない。 時期：8世紀

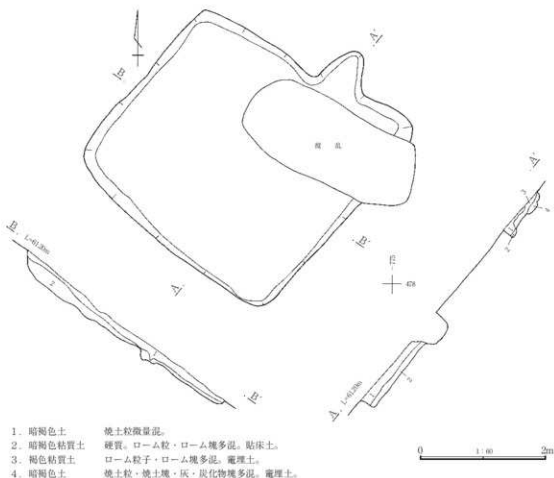


図 51 2区1号堅穴建物跡平面図・土層断面図

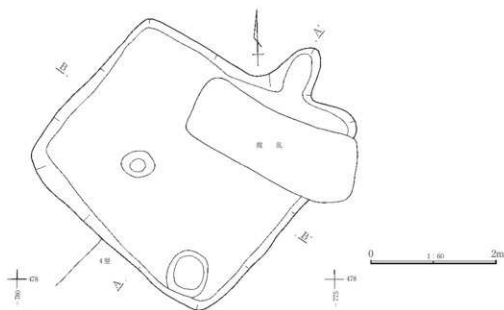


図52 2区1号竈穴建物跡堀方平面図

2区2号竈穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区2号-1	土師器 杯	埋土 1/5	器定口径14、残存器高 27、器厚0.6	①鈍い褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施削・内面撫

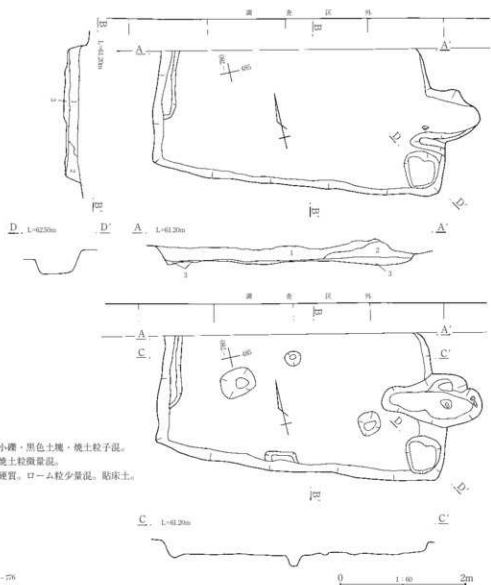


図53 2区2号竈穴建物跡出土遺物

(2) 2区2号竈穴建物跡

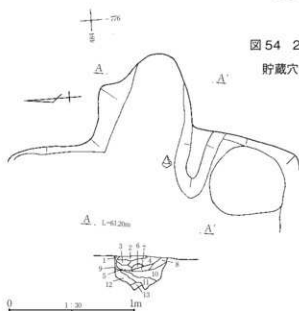
**位置：**2区のほぼ中央、北壁寄り、X480・Y-785Gr。 **主軸方位：**N-100°-E **規模と形状：**北側が半分以上調査区外に出るため、全体の形状は不明。南辺約4.6m・深さ25cm・堀方までの深さ30cm。 **埋土：**暗褐色土ベース。 **床面：**地山を削り出して整形した上に、最厚約10cm・最薄約2cm、暗褐色土の床を貼っている。床面下の土坑が検出された。 **竈跡：**東壁に取り付く。上面が掘削されているため、残存状況は悪い。燃焼部・煙道等は地山を削りだして構築される。南袖は住居内に大きく張り出し、粘土を貼り付けて形成しているが、北袖はほとんど確認できない。燃焼部は住居壁ライン上につくられる。煙道は平坦な燃焼部の奥壁から緩やかに立ち上がり、燃焼部内の焼土・炭化物の堆積は余り顕著ではない。 **時期：**8世紀





1. 暗褐色土 小礫・黑色土塊・焼土粒子混。
2. 褐色土 焼土粒微量混。
3. 暗褐色土 硬質。ローム粒少量混。粘床土。

図54 2区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図・  
貯蔵穴エレベーション図・堀方平面図・エレベーション図



1. 暗褐色土
  2. 暗褐色土
  3. 暗褐色土
  4. 暗褐色土
  5. 暗褐色土
  6. 暗褐色土
  7. 暗褐色土
  8. 暗褐色土
  9. 暗褐色土
  10. 暗褐色土
  11. 暗褐色土
  12. 暗褐色土
  13. 暗褐色土
- ローム塊・炭化物粒若干混。  
焼土粒微量混。  
焼土粒・焼土塊・炭化物粒多混。  
黑色土塊・焼土粒・焼土塊少量混。  
焼土粒・焼土塊多混。  
焼土粒・焼土塊・炭化物粒多混。  
炭化物粒微量混。  
焼土塊微量混。  
焼土粒・焼土塊・炭化物粒多混。  
焼土粒・ローム粒多混。  
焼土粒微量混。  
焼土粒微量混。

図55 2区2号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図

## (3) 2区3号竪穴建物跡

位置：2区の最東端。X475・Y-760Gr。重複：東側を南北方向に流れる2区1号溝跡に掘り込まれる。  
規模と形状：北側と東側が調査区外に出、西側を2区1号溝跡に掘り込まれ、破壊されるため、南東辺のごく一部が検出されたにすぎない。埋土：暗褐色土ベース。竈：西の調査区壁にこく一部がかかっており、土層断面図断面で確認できた。南西の壁に取り付いていたものと考えられる。床面：地山を平坦に削り整えて形成。堀方と床面はほぼ一致しているが、部分的に厚さ約10cm前後の暗褐色土黄褐色土による床面を貼っている。堀り方：堀方と床面とはほぼ一致。時期：9世紀前半。2区3号竪穴建物跡内1号土坑跡：調査区西壁際で確認された。径62cm・確認面からの深さ50cm。2区3号竪穴建物跡の床面で初めて確認できた土坑であり、竪穴建物跡によって上面が破壊されている。竪穴建物跡に先行した土坑跡と考えられる。土坑中央より、ほぼ完形の片把手付灰釉長頸壺が出土し、長頸壺内から極めて少量の火葬骨と炭化材料片が検出された。火葬墓と考えられる。土器そのものの年代観は、8世紀後半～9世紀初頭頃のものと考えられ、東海地方の製品とみられる（第4章第3節参照）。

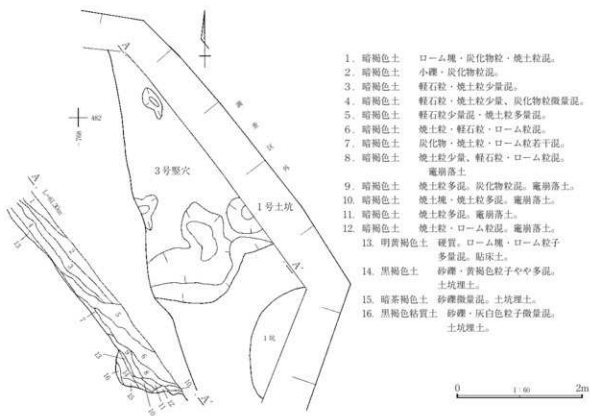


図56 2区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図

## 2区3号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋没状況	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴・備考
2区3号-1	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径126、残存器高3.1、器厚0.4	①鈍い橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横溝、体部～底部外面横溝・内面無
2区3号-2	須恵器 杯	埋土 完形	口径125、底径63、器高4.4、器厚0.4	①鈍い黄色 ②良好 ③緻密	胴輪成形、口縁部～体部内面磨光・内面黒色処理、底部回転糸切
2区3号-3	須恵器 杯	埋土 完形	口径128、底径61、器高3.3、器厚0.4	①灰色 ②良好 ③緻密	胴輪成形、底部回転糸切

2区3号-4	土師器 甕	埋土 2/3	器完口径192、残存器高 173、器厚04	①鈍い橙色 ②良好 ③緻 密	口縁部内外面横撫、体部外面施磨・内 面横撫
2区3号-5	土師器 甕	埋土 1/2	口径184、残存器高153、 器厚06	①鈍い黄橙色 ②良好 ③ 緻密、8mm以下の灰白色粒子散在	口縁部内外面横撫、体部外面施磨・内 面横撫
2区3号-6	灰釉陶器 片 把手付長頸甕	床下土坑 埋土・灰	口径34、最大径21.5、 残存器高21.5、器厚06	①灰白色 ②良好 ③緻密	輪縁成形、体部撫、底部回転施磨後高 台部貼付

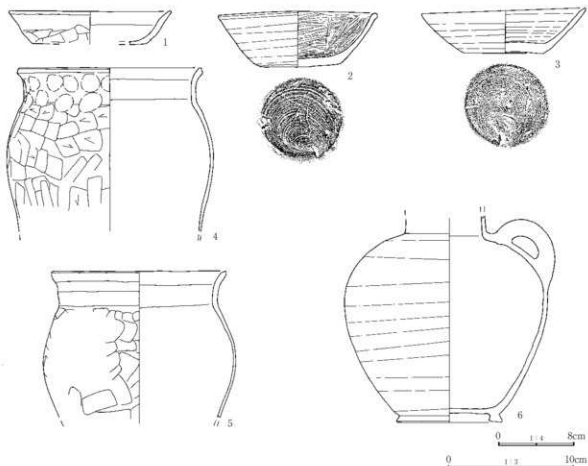


図57 2区3号竪穴建物跡出土遺物

#### (4) 2区4号竪穴建物跡

**位置:** 2区の中央からやや東寄り。X470・Y-770Gr。 検出床面積: 43.1㎡ 主軸方位: N-40°・W 重複: 東側を2区2号竪穴建物跡に掘り込まれる。 **規模と形状:** 上面を甚だしく掘削され、ほとんど床に近い部分で検出された。一辺約6.7m・深さ6cm・堀方までの深さは最大で20cm。方形状を呈する。 **埋土:** 暗褐色土ベース。 **床面:** 地山をほぼ平坦に削り整えた上に、厚さ10～14cm前後の暗褐色土による貼床を貼って平坦に整えている。 **竈跡:** 南西側壁面のほぼ中央に取り付く。上面が大きく掘削されているため、残存状態は悪い。燃焼部・煙道等は地山を削りだして構築され、建物跡の壁の外側に細長く伸びる。両軸は検出できなかった。煙道は平坦な燃焼部の奥壁から緩やかに立ち上がるが、燃焼部内の焼土・炭化物の堆積は余り顕著ではない。 **堀り方:** 床下のビット状の小穴が若干検出された。 **貯蔵穴:** 南西隅と南東隅の2箇所で検出された。南西隅の貯蔵穴1は、径約40cm・深さ約50cm。南東隅の貯蔵穴2は、径約70cm・深さ約50cm。 **時期:** 7世紀前半。

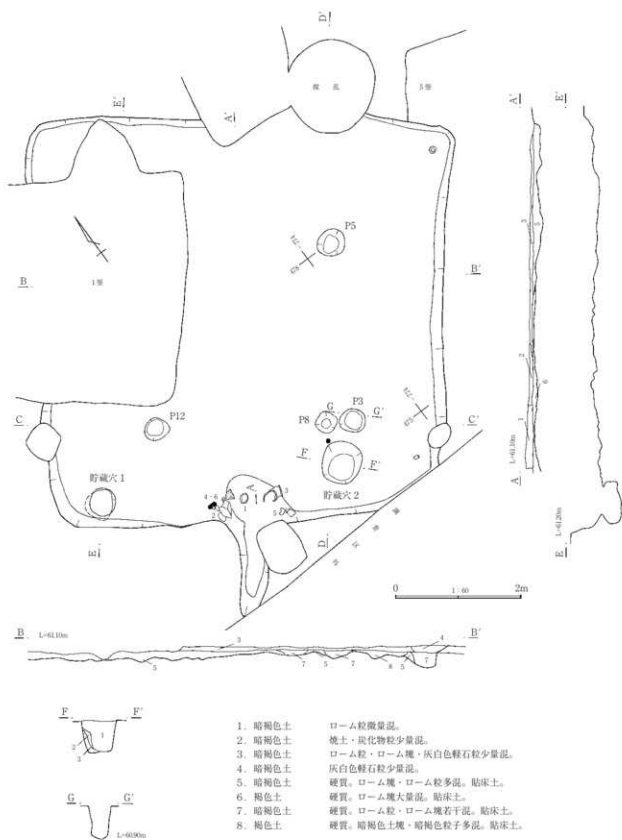


図58 2区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図、貯蔵穴・ピット土層断面図

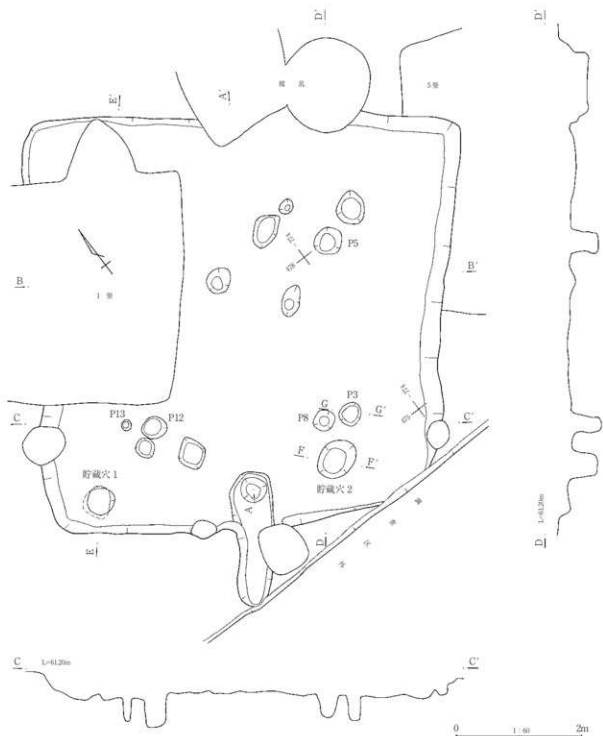


図59 2区4号竪穴建物跡地平面図・エレベーション図

### 第3章 発見された遺構と遺物

1. 黒褐色土

2. 暗黄褐色粘質土 ローム塊。

3. 暗褐色土

4. 暗褐色土

5. 暗褐色土

6. 暗褐色土

7. 暗褐色土

焼土粒・炭化物粒多混。

8. 暗褐色土

9. 黄褐色粘質土

ローム崩落土。

10. 暗褐色土

11. 暗褐色土

12. 暗褐色土

13. 黄褐色粘質土

ローム崩落土。

14. 暗褐色土

15. 暗褐色土

16. 暗褐色土

焼土粒多混。

17. 暗褐色土

焼土粒微量混。

18. 暗褐色土

焼土粒多混。

19. 暗褐色土

焼土粒多混。

20. 暗赤褐色土

焼土層。

21. 褐色砂質土塊

焼土塊。

22. 暗褐色土

焼土粒多混。

23. 暗黄褐色土

ローム崩落土。

24. 暗褐色土

焼土塊・ローム塊少量混。

25. 暗黄褐色土

ローム崩落土。

26. 暗黄褐色土

ローム崩落土。炭化物塊少量混。

27. 暗黄褐色土

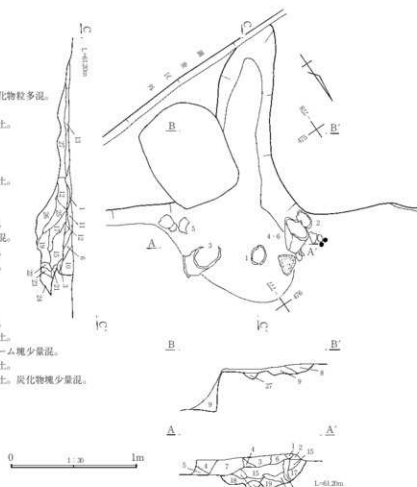


図60 2区4号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図

#### 2区4号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土質・状態・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴・備考
2区4号-1	土師器 杯	埋土 完形	口径13、器高4.7、器厚0.6	①黄V・黄褐色 ②良好 ③緻密	口縁一体部内外面横、底部外面直削・内面横
2区4号-2	土師器 杯	埋土 1/2	推定口径122、器高4、器厚0.7	①赤褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横削、体一底部外面直削・内面横
2区4号-3	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径118、残存器高4.2、器厚0.7	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横削、体一底部外面直削・内面横削方向放射状磨
2区4号-4	土師器 甕	埋土、口縁部 一部1/3	推定口径208、残存器高25、器厚1	①赤褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横削、胴一内部外面直削・内面縦・斜方向横
2区4号-5	土師器 甕	埋土、体部 一部破片	残存器高147、底径38、器厚0.5	①橙色 ②良好 ③緻密	体部一底部外面直削・内面横削
2区4号-6	土師器 甕	埋土、体部破片	残存径19、残存器高25、器厚0.5	①赤褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横削、胴一内部外面直削・内面縦・斜方向横
2区4号-7	石製 白玉	埋土 完形	径11、厚0.4、孔径0.3	①暗緑灰色	



0 1.3 10cm

図61 2区4号竪穴建物跡出土遺物 (1)

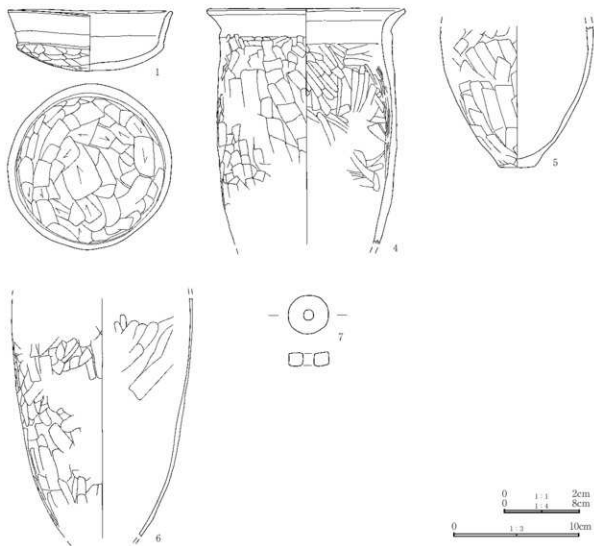


図62 2区4号竪穴建物跡出土遺物(2)

## (5) 2区5号竪穴建物跡

位置：2区の東寄り。X470・Y-765Gr。重複：南西側を2区4号竪穴建物跡に、北東側を2区1号溝跡と2区2号土坑跡にそれぞれ掘り込まれる。規模と形状：方形を呈するものと考えられるが、南東隅が調査区外に出、北東側・南西側を新しい遺構によって破壊されているため、全容は不明である。上面を大きく掘削されているため、残存状況は悪い。調査範囲では竈も検出されていない。深さ約24cm。埋土：暗褐色土をベースとする。床面：地山を平坦に削り整えて形成。床面上で3基のピットが検出できたが、柱穴とは考えにくい。床面下の遺構等は検出されなかった。堀方：床面とほぼ一致。

## 2区5号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋土	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区5号-1	蛇紋岩製 鎌草	埋土 完形	上径4.5、下径3.4、孔径 0.7、厚さ1.9	①青黒色	回転前成形

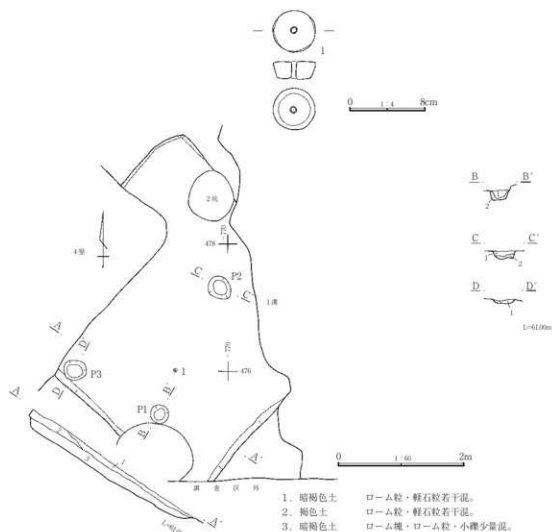


図 63 2区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図・柱穴土層断面図・出土遺物

## 第2項 掘立柱建物跡

### (1) 2区1号掘立柱建物跡

位置：2区の西端、X475・Y-780Gr。 主軸方位：N-34°-E 重複：なし。 規模と形状：1間×1間、北東・南西方向に長い長方形形状を呈する。長辺柱間約4.5m・短辺柱間約2.3m。激しく重複する竪穴建物跡群の西側の、竪穴建物跡が全くない空間に位置している。本建物跡の西側は、南北に走向する現道を含んで2区となるが、2区の東端でも激しく竪穴建物跡が重複しているので、竪穴建物跡を営むことを避けた空間に、この小規模な掘立柱建物が建てられていたものと考えられる。pit1:長径約50cm・短径約45cm・深さ約20cm、pit2:径約60cm・深さ約50cm、pit3:径約58cm・深さ約30cm、pit4:長径50cm・短径約45cm・深さ約30cm。pit2の土層断面では、柱痕が明確に確認できた。柱痕の径は約12cmである。



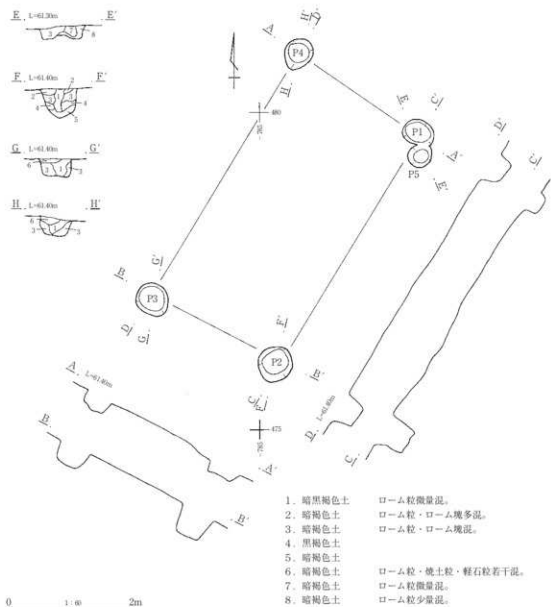


図64 2区1号据立柱建物跡平面図・柱穴土層断面図・エレベーション図

### 第3項 溝跡

#### (1) 2区1号溝跡

**位置:** 2区の東端。X470～480・Y-765Gr。 **重複:** 2区3号竪穴建物跡の西側を、2区5号竪穴建物跡の東側をそれぞれ掘り込む。 **規模と形状:** 確認全長約9.8m・最大上幅約3.6m・下幅約2.6m・深さ約1m。断面は緩やかな逆台形状を呈し、ほぼ南北方向に直線的に流れ、南北両端とも調査区外に続く規模の大きい溝。土層の堆積状況から水流があったことが確認できた。調査区外東隣に、現在も北西・南東方向に水路が流れているので、その前身である可能性がある。 **埋土:** 灰褐色土ベース。 **時期:** 出土遺物から近世のものと考えられる。

### 第3章 発見された遺構と遺物

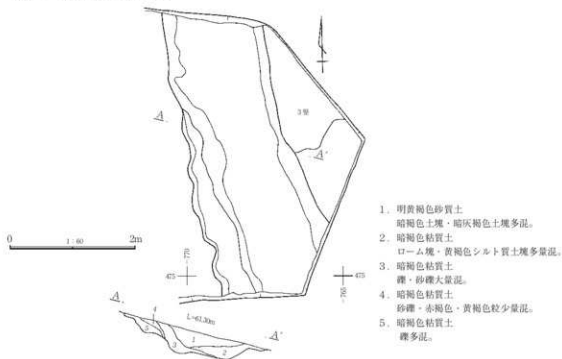


図 65 2区1号溝跡平面図・土層断面図

#### 2区1号溝跡

遺物番号	器 種	材質・器種	法 量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区1溝-1	土師器 杯	埴土 1/2	推定口径9.1、器高17.3、 器厚0.4	①褐色 ②良好 ③緻密	輪軸整形、底部回転糸切
2区1溝-2	砥石石製 砥石	埴土	現存長8.4、現存幅4.5、 現存厚1.3	①灰白色	表面擦過痕有、全面摩耗
2区1溝-3	砥石石製 砥石	埴土	現存長3.9、現存幅2.8、 現存長2.7	①鈍い褐色	表面擦過痕有、全面摩耗

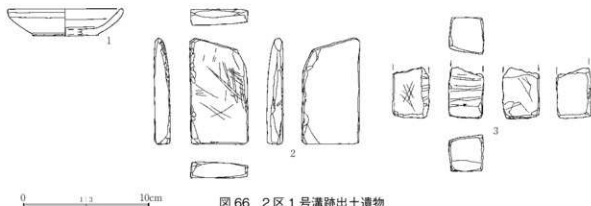


図 66 2区1号溝跡出土遺物

### 第4項 土坑跡

#### (1) 2区1号土坑跡

位置：2区の東端。2区3号竪穴建物跡の南側。X475・Y-765Gr。規模と形状：東側半分以上が調査区外に出るため、全容は不明である。確認最大径1.7m、深さ40cm。埴土：暗褐色土ベース。

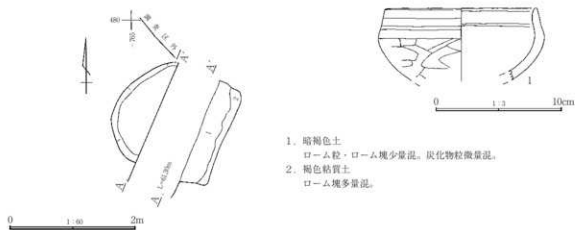


図 67 2区1号土坑跡平面図・土層断面図・出土遺物

## 2区1号土坑跡

遺物番号	器種	出土状況・埋蔵層	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
2区1坑-1	土師器 甕	埋土 1/6	推定口径121、残存器高54、器厚0.7	①鈍い黄褐色 ②良好 ③赤黒、若干箇所に赤褐色粒子を少量混	口縁部内外面飾、体部～底部外面施削・内面飾

## (2) 2区2号土坑跡

位置:2区の中央から東寄り)の位置。X475・Y-770Gr.。重複:2区4号竪穴建物跡を掘り込む。規模と形状:南北にやや長い楕円形状。長径約81cm・短径約72cm・深さ約18cm。埋土:暗褐色土ベース。



図 68 2区2号土坑跡平面図・土層断面図

## 第7節 3区の遺構と遺物

3区は、石橋交差点の東側で、主要地方道足利伊勢崎線に面した北側の調査区のうち、石橋交差点に寄った西側の調査区で、平成17年度に調査された。面積は1,079㎡である。本遺跡におけるすべての調査区の中で、対象範囲として最も広い範囲を調査できた箇所である。しかしながら、1・2区同様、主要地方道足利伊勢崎線に面して、もともと商店や宅地が建ち並んでいた場所であり、上面の掘削が甚だしく、攪乱されている部分も少なくないので、遺構の残存状態は悪い。竪穴建物跡はいずれも浅くか、あるいは床面近くで辛うじて検出できた程度である。竪穴建物跡は、3区の東側で激しい重複が認められる。

竪穴建物跡11棟、南北方向に走向する比較的小規模な溝跡1条、土坑跡1基が検出されている。いずれも古墳時代後期～飛鳥・白鳳時代～奈良時代のものである。

第1項 竪穴建物跡

(1) 3区6号竪穴建物跡

位置：3区の最西端・石橋交差点寄り、X485・Y-840Gr。床面積：23.4㎡ 主軸方位：N-50°-W 重複：2号溝跡を破壊する。規模と形状：長辺約4.8m・短辺約4.6m・深さ32cm・堀方の深さ40cmの北西-南東方向に僅かに長い長方形を呈する。北西側と南西側の壁際のみ周溝が顕著に検出できた。周溝の上幅は、25～30cm前後。埋土：黒褐色土ベース。床面：地山を削り整えた上に、暗褐色土の貼床を厚さ約5～8cm貼って、平坦に整えている。床面下のピットが2基検出された。竈跡：北東側壁面のほぼ中央に取り付けていたものと考えられるが、その部分が調度攪乱されており、詳細は不明である。貯蔵穴：南東側、庭のすぐ傍らに位置し、規模は長径約48cm・深さ約50cm。時期：7世紀後半。

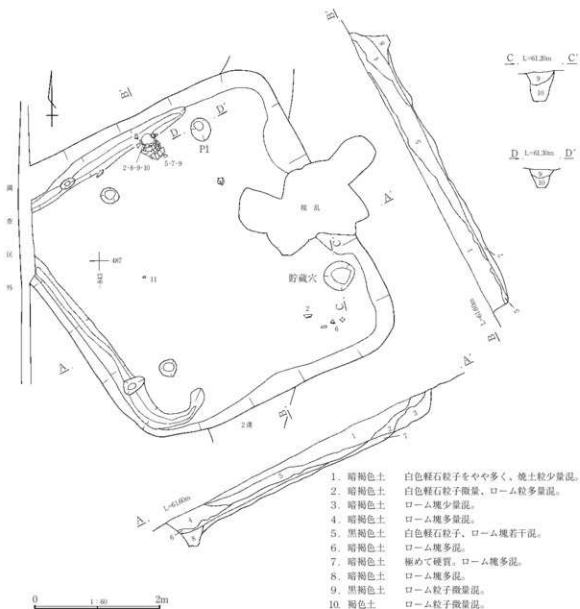


図 69 3区6号竪穴建物跡平面図・土層断面図

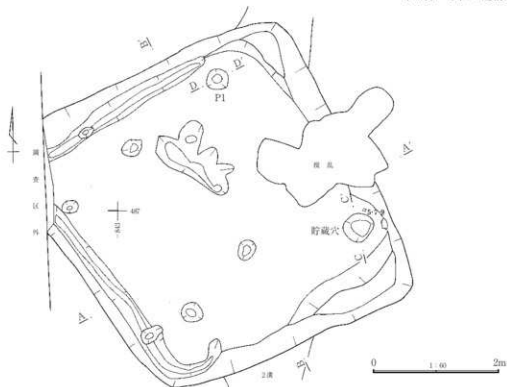


図70 3区6号竪穴建物跡掘方平面図

## 3区6号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土質・形状	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区6号-1	土師器 杯	埋土 2/3	推定口径146、器高49、 器厚0.9	①褐色 ②良好 ③緑、白 黒胎土・緑胎土	口縁部内外面横撫、体部一底部外面施 削・内面撫
3区6号-2	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径132、器高36、 器厚0.4	①赤褐色 ②灰 ③緑、白 黒胎土・緑胎土	口縁部内外面横撫、体部一底部外面施 削・内面撫
3区6号-3	土師器 杯	埋土	推定口径137、残存器高 4.5、器厚0.6	①赤褐色 ②灰 ③赤、白 黒胎土・緑胎土	口縁部内外面横撫、体部一底部外面施 削・内面撫後縦方向放射状施磨
3区6号-4	土師器 杯	埋土	推定口径147、残存器高 4.2、器厚0.7	①純V・褐色 ②良好 ③赤 胎土・黒胎土・緑胎土	口縁部内外面横撫、体部一底部外面施 削・内面撫
3区6号-5	土師器 小型 広口壺	埋土、口縁～ 体部1/3	推定口径125、残存器高 8.4、器厚0.8	①純V・褐色 ②良好 ③赤 胎土・黒胎土・緑胎土	口縁部内外面横撫、体部一底部外面施 削・内面撫・斜方向施磨
3区6号-6	土師器 小型 広口壺	埋土、口縁～ 体部1/3	推定口径14、残存器高 7.1、器厚0.7	①純V・赤褐色 ②良好 ③ 緑、白胎土・緑胎土	口縁部内外面横撫、体部一底部外面施 削・内面撫後縦方向施磨
3区6号-7	土師器 高杯	埋土、杯身部 2/3	口径16.2、残存器高42、 器厚0.8	①赤褐色 ②灰 ③緑、白 黒胎土・赤胎土・緑胎土	杯身口縁～体部内外面横撫
3区6号-8	土師器 高杯	埋土、杯身・ 底	推定口径151、残存器高 6、器厚0.8	①純V・赤褐色 ②良好 ③ 緑、白胎土・緑胎土	口縁～杯底部内外面撫後斜方向施磨、 杯底部内面施磨
3区6号-9	土師器 瓶	埋土 ほぼ完形	口径23.7、器高27.2、底 径8.1、器厚1	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面撫
3区6号-10	土師器 瓶	埋土 ほぼ完形	口径17、器高20.1、底 径6.8、器厚0.9	①明赤褐色 ②良好 ③緻 密	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面撫
3区6号-11	滑石製 白玉	埋土 完形	径1.6、厚0.4、孔径0.3	①明緑灰色	

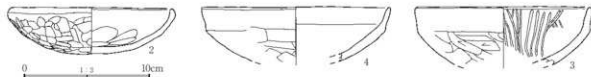


図71 3区6号竪穴建物跡出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

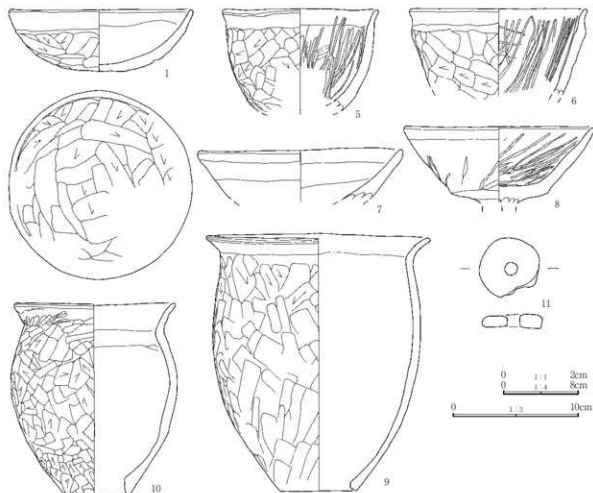


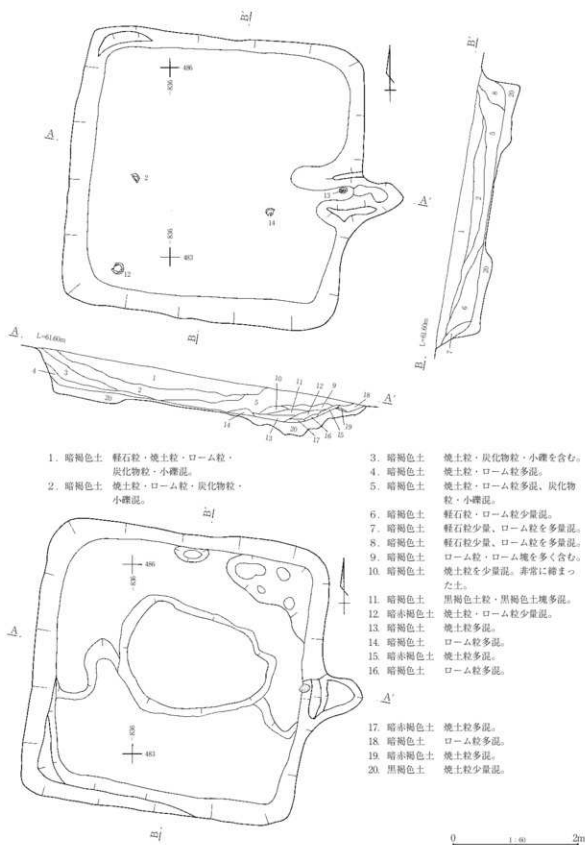
図72 3区6号竪穴建物跡出土遺物(2)

(2) 3区7号竪穴建物跡

位置：3区の西端寄り、3区6号竪穴建物跡の東隣、X480・Y-830Gr。 検出床面積：20.3㎡。 主軸方位：N-93°-E 重複：なし 規模と形状：1辺約4.3m・深さ53cm・堀方までの深さ62cmの方形状を呈する。埋土：暗褐色土ベース。床面：地山を削り出して整形した上に、最厚約18cm・最薄約2cm、暗褐色土の床を貼っている。床面下の遺構等は検出されなかった。竈跡：東壁のほぼ中央に取り付く。燃烧部・煙道等は地山を削りだして構築される。両袖は住居内に大きく張り出し、粘土を貼り付けて形成している。燃烧部は住居壁の内側につくられる。煙道は平坦な燃烧部の奥壁から緩やかに立ち上がるが、燃烧部内の焼土・炭化物の堆積は余り顕著ではない。 時期：8世紀

(3) 3区8号竪穴建物跡

位置：3区の中央部西北寄り。X485・Y-830Gr。 検出床面積：15.8㎡ 主軸方：N-34°-E 重複：北東側、3区9号竪穴建物跡の西北隅を掘り込む。 規模と形状：長辺約4.2m・短辺約4m・深さ約30cm、ほぼ方形を呈する。北東側壁のほぼ中央部に竈が取り付くものと思われるが、北東壁から中央にかけて大きく攪乱されており、竈はまったく残存していない。埋土：暗褐色土ベース。床面：地山を平坦に削り整えて形成。床面下の遺構等は検出されなかった。掘り方：堀方と床面とはほぼ一致。 時期：8世紀後半。



- |                                                                                                 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 暗褐色土 軽石粒・焼土粒・ローム粒・炭化物粒・小礫混。</p> <p>2. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化物粒・小礫混。</p>                         | <p>3. 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・小礫を含む。</p> <p>4. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒多混。</p> <p>5. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒多混、炭化物粒・小礫混。</p> <p>6. 暗褐色土 軽石粒・ローム粒少量混。</p> <p>7. 暗褐色土 軽石粒少量、ローム粒を多量混。</p> <p>8. 暗褐色土 軽石粒少量、ローム粒を多量混。</p> <p>9. 暗褐色土 ローム粒・ローム塊を多く含む。</p> <p>10. 暗褐色土 焼土粒を少量混。非常に締まった土。</p> <p>11. 暗褐色土 黒褐色土粒・黒褐色土塊多混。</p> <p>12. 暗赤褐色土 焼土粒・ローム粒少量混。</p> <p>13. 暗褐色土 焼土粒多混。</p> <p>14. 暗褐色土 ローム粒多混。</p> <p>15. 暗赤褐色土 焼土粒多混。</p> <p>16. 暗褐色土 ローム粒多混。</p> |
| <p>17. 暗赤褐色土 焼土粒多混。</p> <p>18. 暗褐色土 ローム粒多混。</p> <p>19. 暗赤褐色土 焼土粒多混。</p> <p>20. 黒褐色土 焼土粒少量混。</p> |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |

図73 3区7号竪穴建物跡平面図・土層断面図・堀方平面図

1. 暗褐色土 焼土粒・粘土粒微量混。
2. 褐色土 ローム塊。
3. 暗褐色土 ローム粒、ローム塊少量混。
4. 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒、ローム粒多混。
5. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒多混。
6. 暗褐色土 ローム塊多混。
7. 暗褐色土 焼土粒微量混。

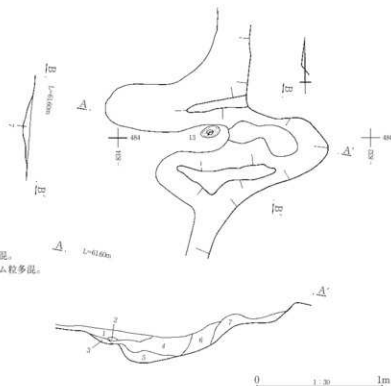


図74 3区7号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図

3区7号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区7号-1	土師器 杯	埋土 3/4	口径126、器高36、器厚0.8	①鈍い褐色 ②良好 ③黒色、径1mm以下の黒色粒子少量混	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面施
3区7号-2	土師器 杯	埋土 完形	口径15.1、器高4.6、器厚0.6	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面施
3区7号-3	土師器 皿	埋土 2/3	口径16.7、残存器高45、器厚0.7	①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密	口縁～体部内外面施磨、体部～底部外面施磨・内面施
3区7号-4	土師器 杯	埋土 1/4	推定口径104、残存器高3、器厚0.6	①赤褐色 ②胎土 ③胎土の繊維状粒子を含む	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面施
3区7号-5	土師器 皿	埋土 1/6	推定口径178、残存器高34	①鈍い褐色 ②良好 ③赤褐色、径1mm以下の黒色粒子少量混	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面施
3区7号-6	土師器 杯	埋土 1/5	推定口径128、残存器高3.6	①鈍い褐色、②良好、③緻密	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面施
3区7号-7	土師器 杯	埋土 1/7	推定口径119、残存器高2.7	①鈍い褐色、②良好、③緻密	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面施
3区7号-8	土師器 杯	埋土	推定口径118、残存器高2.9	①鈍い褐色、②良好、③緻密	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面施
3区7号-9	土師器 杯	埋土	推定口径124、推定器高34、器厚0.7	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部外面横磨、体部外面施磨・口縁～体部内面黒色施磨後施磨
3区7号-10	土師器 杯	埋土、口縁～体部破片	推定口径139、推定器高3.7、器厚0.3	①褐色 ②良好 ③赤褐色、径1mm以下の黒色・黒褐色粒子を含む	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面施
3区7号-11	土師器 杯	埋土、小破片	残存長3.8、残存幅4.9、器厚0.7	①鈍い褐色 ②良好 ③赤褐色、径1mm以下の黒色粒子少量混	体部外面施磨・内面施、体部外面正位黒書「乙」
3区7号-12	土師器 皿	埋土	口径16.1、推定器高32、器厚0.6	①褐色 ②良好 ③赤褐色、径1mm以下の黒色・黒褐色粒子を含む	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面横方向施磨
3区7号-13	土師器 杯	埋土	推定口径14、推定器高3.75、器厚0.5	①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面横方向施磨
3区7号-14	土師器 杯	埋土	推定口径133、推定器高4.4、器厚0.6	①褐色 ②良好 ③赤褐色、径1mm以下の黒色・黒褐色粒子を含む	口縁部内外面横磨、体部～底部外面施磨・内面横方向施磨



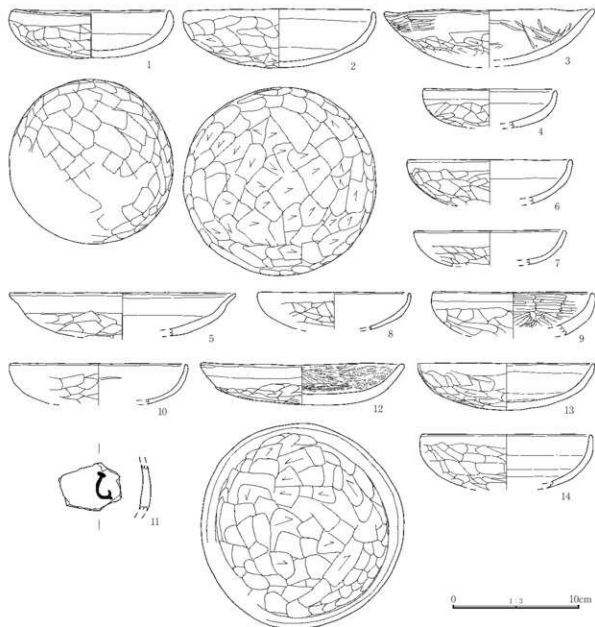


図75 3区7号竪穴建物跡出土遺物

## 3区8号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区8号-1	須臾器 杯	埴土 1/3	推定口径13、残存器高 3.4、器厚0.6	①灰色 ②灰 ③埴土 胎土の構成成分は、灰化土質に類似	轆轤成形、底部磨削
3区8号-2	砥石石製 砥石	埴土	現存長105、現存幅37、 現存厚3.5	①灰色	表裏面擦過痕、全面摩耗



図76 3区8号竪穴建物跡出土遺物 (1)

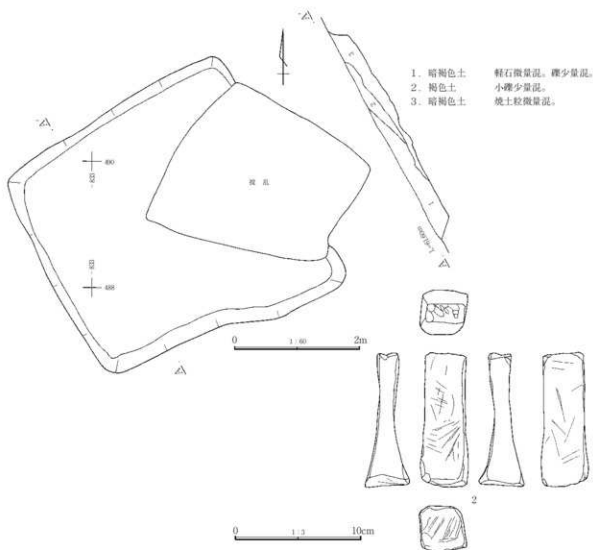


図77 3区8号竪穴建物跡平面図・土層断面図・出土遺物(2)

(4) 3区9号竪穴建物跡

**位置:** 3区の中央から西寄り、調査区北端に取り付く。X485・Y-825Gr。 **主軸方位:** N-33°-E **重複:** 南西隅を3区8号竪穴建物跡に破壊される。 **規模と形状:** 上面を甚だしく掘削され、床に近い部分で検出された。一辺約6.1m・深さ0.23m。方形を呈する。 **埋土:** 暗褐色土ベース。 **床面:** 地山を平坦に削り整えて形成。床面下の遺構等は検出されなかった。 **竈跡:** 北東側壁面に取り付くものと考えられるが、本体は調査区外に出るため、詳細は不明。 **掘り方:** 掘方と床面とはほぼ一致。 **貯蔵穴:** 北東側、竈のすぐ傍らに位置し、規模は径約70cm・深さ約40cm。 **時期:** 6世紀中葉。

(5) 3区11号竪穴建物跡

**位置:** 3区の南東端。X475・Y-795Gr。 **重複:** なし。 **規模と形状:** 北西壁の一部が検出されたのみ。内部も攪乱されており、詳細は不明。深さ約40cm。 **埋土:** 暗褐色土ベース。 **床面:** 地山を平坦に削り整えて形成。床面下の遺構等は検出されなかった。 **掘り方:** 床面とはほぼ一致。



図78 3区9号竪穴建物跡平面図・土層断面図

## 3区9号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・保存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区9号-1	土師器 杯	床直 完形	口径139、器高57、器厚0.4	①明赤褐色 ②良好 ③やや粗い、径1~3cmの赤褐色粒子やや多量	口縁部内外面横溝、体部外面施部・内面施後縦方向放射状施部
3区9号-2	土師器 杯	床直 完形	口径136、器高57、器厚0.7	①明赤褐色 ②良好 ③やや粗い、径1~3cmの赤褐色粒子やや多量	口縁部内外面横溝、体部外面施部・内面施後縦方向放射状施部
3区9号-3	土師器 杯	床直 完形	口径133、器高56、器厚0.5	①黄褐色 ②良好 ③粗密、径1~3cmの赤褐色粒子やや多量	口縁部内外面横溝、体部外面施部・内面施後縦方向放射状施部
3区9号-4	土師器 杯	床直 2/3	口径135、器高51、器厚0.5	①鈍い黄褐色 ②良好 ③粗密、径1~3cmの赤褐色粒子多量	口縁部内外面横溝、体部外面施部・内面施後縦方向放射状施部
3区9号-5	土師器 杯	床直 3/4	口径134、器高54、器厚0.6	①鈍い褐色 ②良好 ③粗密、径1~3cmの赤褐色粒子やや多量	口縁部内外面横溝、体部外面施部・内面施後縦方向放射状施部
3区9号-6	土師器 杯	床直 完形	口径129、器高48、器厚0.6	①鈍い褐色 ②良好 ③粗密、径1~3cmの灰白色粒子少量	口縁部内外面横溝、体部外面施部・内面施後縦方向放射状施部
3区9号-7	土師器 杯	床直 ほぼ完形	口径141、器高49、器厚0.5	①褐色 ②良好 ③やや粗い、径1~3cmの赤褐色粒子やや多量	口縁部内外面横溝、体部外面施部・内面施後縦方向放射状施部
3区9号-8	土師器 杯	床直 ほぼ完形	口径126、器高58、器厚0.7	①明赤褐色 ②良好 ③粗い、径1~3cmの赤褐色粒子やや多量	口縁部内外面横溝、体部外面施部・内面施
3区9号-9	土師器 杯	埋土 断面口径14、残存器高2.5、器厚0.5		①明赤褐色 ②良好 ③粗い、径1~3cmの灰白色・赤褐色粒子	口縁部内外面横溝、体部外面施部・内面施
3区9号-10	土師器 婁	埋土、口縁部一部欠失	口径143、器高87、器厚0.7	①赤褐色 ②良好 ③粗い、径1~3cmの灰白色・赤褐色粒子	口縁部内外面横溝、体部・底部外面施部、体部・底部内面施

第3章 発見された遺構と遺物

3区9型 -11	土師器 広口 壺	埋土。口縁部 一部欠失	推定口径108、残存器高 84、底径37、器厚09	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部~底部外面 横撫、体部~底部内面斜・横方向撫
3区9型 -12	土師器 壺	埋土 1/5	推定口径88、残存器高 79、器厚09	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部外面横撫・内面横撫、器部内外面 横撫、体部外面横撫・底部内面横・斜方向撫
3区9型 -13	土師器 高杯	床直 完形	口径143、脚底径126、器 高126、脚径35、器厚08	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫で、杯身~脚部外面横撫 ・杯身内面横・斜方向撫、脚部内外面撫
3区9型 -14	土師器 高杯	貯蔵穴内 完形	口径171、脚底径143、器 高148、脚径36、器厚1	①鈍褐色 ②良好 ③緻密、口縁部 1~2cm程度に赤・黒色粘り子	杯身~脚部外面横撫・内面横撫、杯部内外面横撫 ・杯身内面横・斜方向撫、脚部内外面撫
3区9型 -15	土師器 脚付 壺	床直 完形	口径151、底径116、脚 径4、器高16、器厚12	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫で、体部~脚部外面横撫 ・内面斜・横方向撫後斜方向撫、脚底部撫
3区9型 -16	土師器 甕	床直 2/3	口径163、残存器高152 ・器厚1	①鈍い黄色 ②良好 ③緻 密	口縁部内外面横撫で、頸部~体部外面 横撫・内面斜・横方向撫
3区9型 -17	土師器 甕	埋土 胴~底部1/3	胴部残存最大径276、底 径7、残存器高189、器 厚09	①鈍い橙色 ②良好 ③緻 密	胴部~底部外面横撫削り・内面斜・横方 向撫
3区9型 -18	土師器 甕	埋土 胴~底部1/2	胴部残存径236、底径72、 残存器高29、器厚08	①鈍い橙色 ②良好 ③緻 密	胴部~底部外面横撫削り・内面斜・横方 向撫
3区9型 -19	蛇紋岩製 漆部 穿流状石製品	埋土	長92、幅27、器厚06	①暗オリーブ灰色	表裏両面削底多数

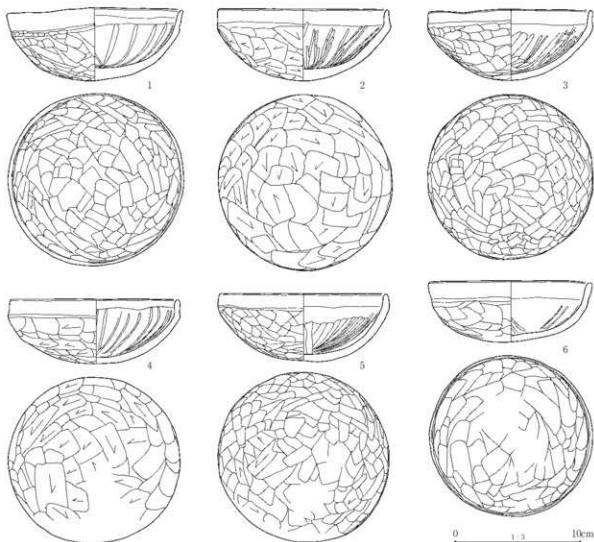


図79 3区9号竪穴建物跡出土遺物(1)

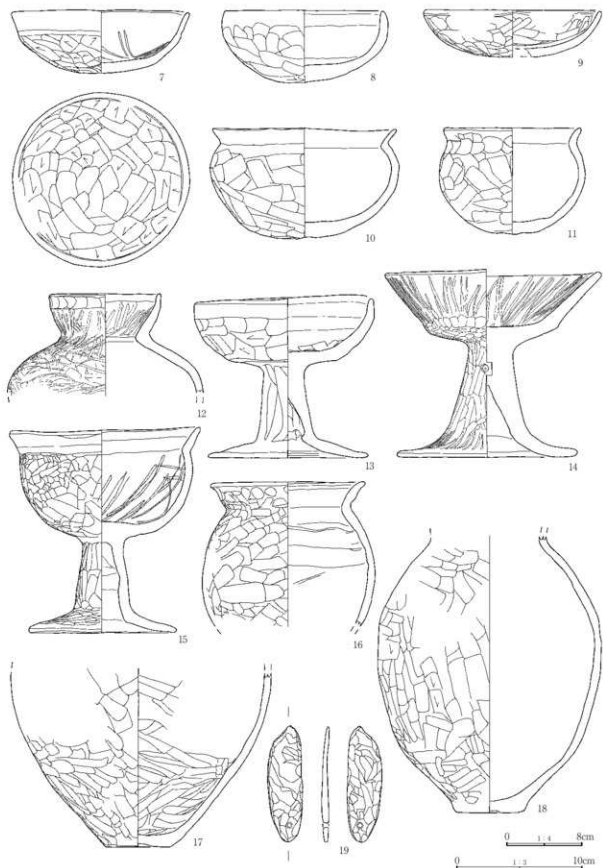
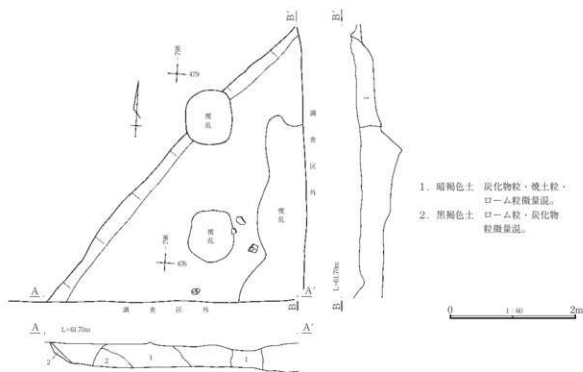


図80 3区9号竪穴建物跡出土遺物(2)



3区11号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋没状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区11型 -1	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径124、器高42、 器厚05	①鈍い黄褐色 ②良好 ③ 緻密、灰白色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面鈍削 ・内面撫
3区11型 -2	土師器 蓋	埋土 破片	残存長74、残存幅58、 器厚06	①灰白色 ②良好 ③緻密	輪縁成形、外面中央部に黒書「西」

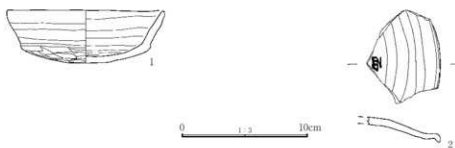


図81 3区11号竪穴建物跡平面図・土層断面図・出土遺物

(6) 3区12号竪穴建物跡

位置：3区の北東端。X485・Y-795Gr。重複：南側を3区13号竪穴建物跡に掘り込まれる。西側北側は攪乱されている。規模と形状：東壁のごく一部が検出されたのみ。上面が大きく掘削され、西側及び北側を大きく攪乱され、南側を3区13号竪穴建物跡によって掘り込まれており、詳細は不明。深さ約11cm。埋土：暗褐色土ベース。床面：地山を平坦に削り整えて形成。床面下の遺構等は検出されなかった。堀方：床面とはほぼ一致。

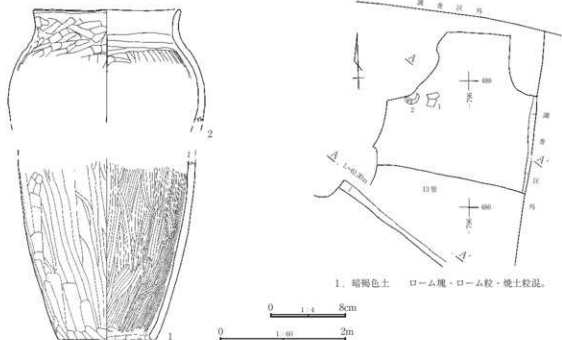


図82 3区12号竪穴建物跡平面図・土層断面図・出土遺物

## 3区12号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土質・形状	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・形状の特徴・備考
3区12号 -1	土師器 甕	埋土	残存最大径187、残存器 高192、底径96、器厚07	①鈍い黄棕色 ②良好 ③ 緻密	体部一底部外面施釉・内面縦・斜方向 施釉
3区12号 -2	土師器 甕	埋土	墓定口径156、残存器高 119、器厚07	①胎土 ②やや粗い胎土 ③黄棕色・赤・黒焼付痕	口縁部内外面施釉、体部外面施釉・内 面縦・斜方向施

## (7) 3区13号竪穴建物跡

**位置:** 3区の東端。X480・Y-795Gr。 **重複:** 北側を3区12号竪穴建物跡を掘り込む。 **規模と形状:** 東壁が調査区外に出るため、全体の形状は不明であるが、一辺5m以上の長方形を呈するものと考えられる。完全に調査できているのは西辺のみで、西辺の長さは約5.5m、深さは約40cm。掘り方までの深さは約43cmである。上面が掘削されているため、床近くで確認されている。 **埋土:** 暗褐色土ベース。 **柱穴:** 4基検出された。pit1: 径44cm・深さ40cm、pit2: 径40cm・深さ30cm、pit3: 径28cm・深さ60cm、pit4: 径39cm・深さ58cm。いずれもしっかりした掘方を有する。 **床面:** 地山を平坦に削り整形した上に約0.2～10cmの褐色土による貼床を貼っている。 **堀方:** 床面下の土坑が検出された。 **時期:** 8世紀。

## (8) 3区14号竪穴建物跡

**位置:** 3区の中央部からやや東寄りの北端。X490・Y-810Gr。 **重複:** なし。 **主軸方位:** N-90°-E **規模と形状:** 北壁が調査区外に出るため、全体の形状は不明であるが、南辺は約2.6m・深さ約20cm・掘り方までの深さは最大で約40cm。上面が大きく掘削されている。完全に調査できているのは南辺のみである。 **埋土:** 暗褐色土ベース。 **竈:** 東壁に取り付く。燃焼部・煙道等は地山を削りだして構築され、軸は住居内に大きく張り出し、粘土を貼り付けて形成し、燃焼部は住居壁の内側につくられる。北東側を攪乱されているため残存状況不良。 **床面:** 地山を荒く削り出した上に、厚さ約2～20cmの暗褐色土による貼床を貼っている。 **堀方:** 特に東側半分で凹凸が激しい。 **時期:** 9世紀。

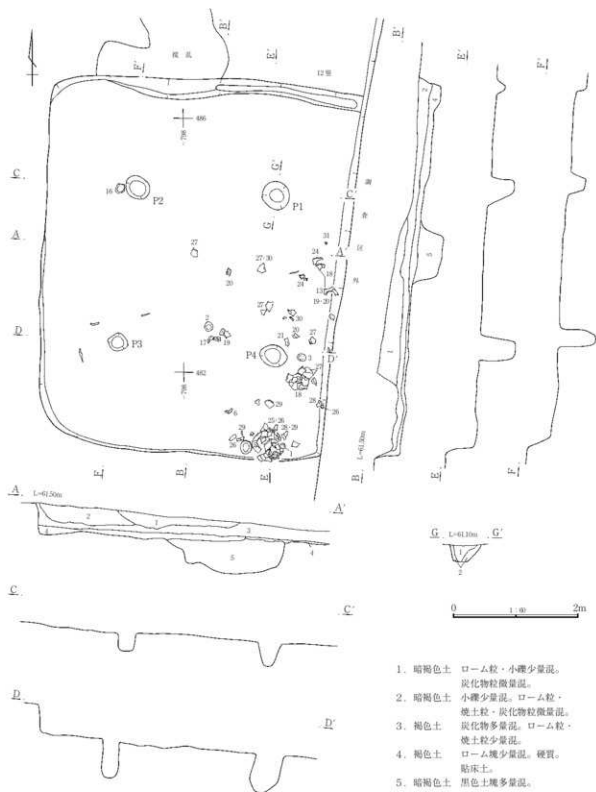


図83 3区13号竪穴建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図



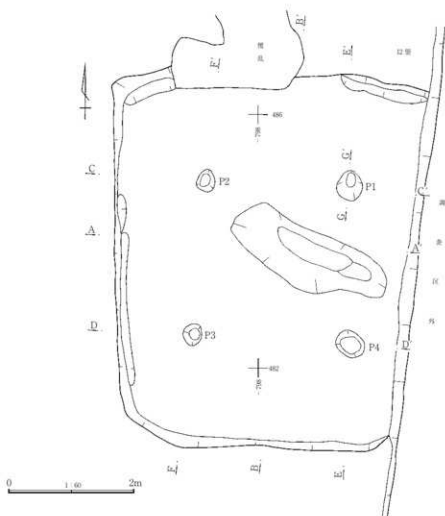


図 84 3区 13号竪穴建物跡掘方平面図

## 3区 13号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状況	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区 13堅 -1	土師器 杯	埋土 完形	口径 11.7、器高 3.7、器 厚 0.4	①にぶい褐色 ②良好 ③ 緻密	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫
3区 13堅 -2	土師器 杯	埋土 ほぼ完形	口径 14、器高 4.2、器厚 0.5	①にぶい褐色 ②良好 ③緻密、口 縁部下部の色・形も胎土に少し 異なる	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫
3区 13堅 -3	土師器 杯	埋土 完形	口径 14.2、器高 4.5、器 厚 0.4	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫
3区 13堅 -4	土師器 杯	埋土 4/5	口径 15.7、器高 4.3、器 厚 0.4	①褐色 ②良好 ③緻密、口縁部 口縁部～2cm程度の間に、胎土に少し 異なる	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫
3区 13堅 -5	土師器 杯	埋土 4/5	口径 12.8、器高 3.5、器 厚 0.5	①鈍い褐色 ②良好 ③緻 密	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫
3区 13堅 -6	土師器 杯	埋土 4/5	口径 12.1、器高 3.9、器 厚 0.3	①褐色 ②良好 ③緻密、口縁部 口縁部～2cm程度の間に、胎土に少し 異なる	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫
3区 13堅 -7	土師器 杯	埋土 4/5	口径 14.3、器高 4.5、器 厚 0.5	①褐色 ②良好 ③緻密、口縁部 口縁部～2cm程度の間に、胎土に少し 異なる	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫
3区 13堅 -8	土師器 杯	埋土 1/2	口径 14.4、器高 4.6、器 厚 0.4	①黒褐色 ②良好 ③緻密、口縁部 口縁部～2cm程度の間に、胎土に少し 異なる	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫
3区 13堅 -9	土師器 杯	埋土 1/3	口径 12.1、器高 3.3、器 厚 0.4	①褐色 ②良好 ③緻密、口縁部 口縁部～2cm程度の間に、胎土に少し 異なる	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫
3区 13堅 -10	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径 12.3、残存器高 3.3、器厚 0.4	①成程褐色 ②良好 ③緻密、口縁部 口縁部～2cm程度の間に、胎土に少し 異なる	口縁部内外面横撫、体部～底部外面撫 刷・内面撫

第3章 発見された遺構と遺物

3区13号 -11	土師器 杯	埋土 1/5	推定口径119、残存器高 41、器厚0.5	①浅黄褐色 ②良好 ③緻 密	口縁部内外面横撫、体部-底部外面施 刷・内面撫
3区13号 -12	土師器 杯	埋土 1/6	推定口径148、残存器高 37、器厚0.4	①鈍い褐色 ②良好 ③緻 密、径1mm以下の灰白色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体部-底部外面施 刷・内面撫
3区13号 -13	土師器 杯	埋土 1/8	推定口径143、残存器高 29、器厚0.3	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部-底部外面施 刷・内面撫
3区13号 -14	土師器 杯	埋土 1/10	推定口径139、残存器高 37、器厚0.6	①鈍い褐色 ②良好 ③緻 密	口縁部内外面横撫、体部-底部外面施 刷・内面撫
3区13号 -15	須恵器 蓋	床直 完形	径174、筒径33、器高 4、器厚0.9	①灰白色 ②やや不良 ③ 緻密	轆轤成形、筒部貼付
3区13号 -16	須恵器 転用 碗	床直 5/6	径145、器高3、器厚 1.1	①黄灰色 ②良好 ③緻密、 径1mm以下の灰白色粒子やや多量混	轆轤成形、底部凹状部、腹に細かな溝 を斜めに切っている。底部内面に磨 痕及び磨痕残る。
3区13号 -17	土師器 杯	埋土 2/3	口径139、残存器高43、 器厚0.4	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 径1mm以下の灰白色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体-底部外面施 刷・内面撫
3区13号 -18	土師器 甕	埋土 1/2	口径243、器高34.4、器 厚0.5	①褐色 ②良好 ③緻密、径1-3 mmの灰白色・赤褐色粒子をやや多量	口縁部内外面横撫、頸-体部外面施 刷、体部内面斜・横方向撫
3区13号 -19	土師器 甕	埋土 1/5	推定口径226、残存器高 148、器厚0.8	①明褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部外面施 刷・内面斜・横方向撫
3区13号 -20	土師器 甕	埋土、口縁- 体部破片	推定口径228、残存器高 67、器厚0.4	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部外面施 刷・内面縦・斜方向撫
3区13号 -21	土師器 甕	埋土、口縁- 体部破片	推定口径217、残存器高 75、器厚0.5	①褐色 ②良好 ③緻密、径 1mm以下の黒褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体部外面施 刷・内面縦・斜方向撫
3区13号 -22	土師器 甕	埋土、口縁- 体部破片	推定口径166、残存器高 66、器厚0.4	①褐色 ②良好 ③緻密、径 1mm以下の砂粒多量混	口縁部内外面横撫、体部外面施 刷、体部内面斜方向撫
3区13号 -23	土師器 甕	埋土、口縁- 体部1/3	推定口径22、残存器高 21、器厚0.4	①褐色 ②良好 ③緻密、径 1mm以下の黒褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体部外面施 刷、体部内面斜・縦方向撫
3区13号 -24	須恵器 胸転 用規	床直 ほぼ完形	径177、器高47、器厚 0.6	①灰白色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部凹状部施刷り後高合部 貼付、底部内面に磨痕及び磨痕残
3区13号 -25	須恵器 横瓶	埋土、口縁- 体部一部欠	残存器高344、胴径47、 頸径174、頸高54、器厚0.7	①灰色 ②良好 ③緻密	口縁轆轤成形、体部横轆轤成形、口 孔粘土板貼付精密
3区13号 -26	須恵器 甕	埋土、口縁- 体部1/2	口径149、残存器高148、 器厚0.9	①黄灰色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、体部内面叩
3区13号 -27	須恵器 横瓶	埋土	器高266、推定器長367、 器厚1.2	①暗灰色 ②良好 ③緻密	口縁部欠失、体部内外面叩、横端部 粘土板貼付
3区13号 -28	須恵器 甕	埋土、口縁部- 肩部片	推定口径267、残存器高 142、器厚1.1	①灰色 ②良好 ③緻密	口縁部轆轤成形、体部内外面叩
3区13号 -29	須恵器 大甕	埋土、口縁- 底部約4/5	口径259、器高457、器 厚1.4	①鈍い黄褐色 ②やや不 良 ③緻密	轆轤成形
3区13号 -30	須恵器 甕	埋土 ほぼ完形	口径191、器高328、器 厚1.4	①黒色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部内外面叩
3区13号 -31	蛇紋岩製 紡 錘車	埋土 完形	上径46、下径37、孔径 0.7、厚さ1.7	①青黒色	回転成形
3区13号 -32	土師質 土鉢	埋土 完形	長さ67、幅19、孔径 0.6	①灰褐色 ②良好 ③緻密	外面施刷後、撫

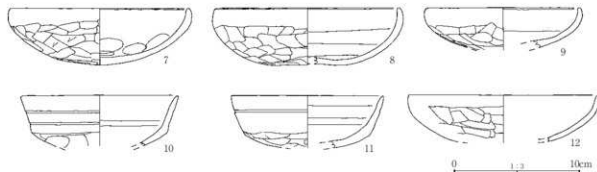


図85 3区13号竪穴建物跡出土遺物(1)

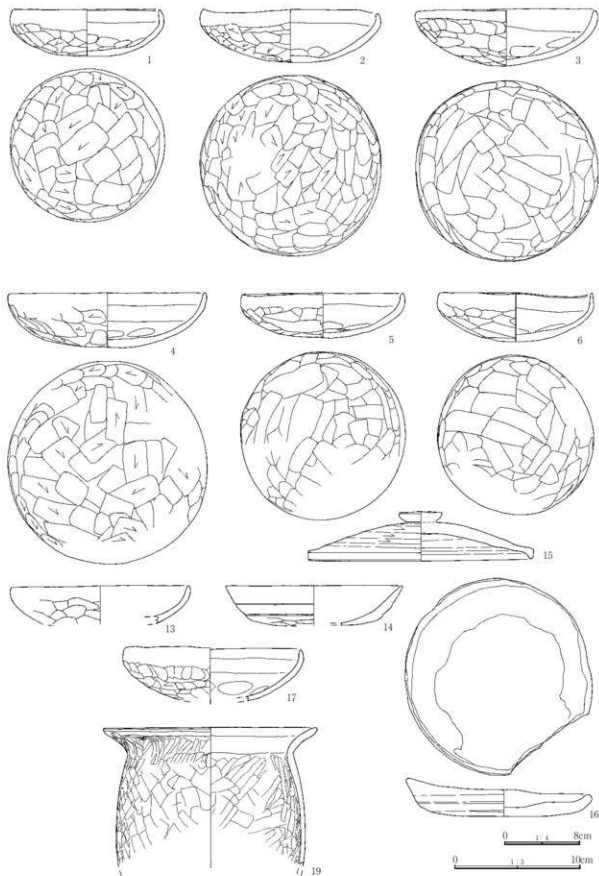


図86 3区13号竪穴建物跡出土遺物(2)

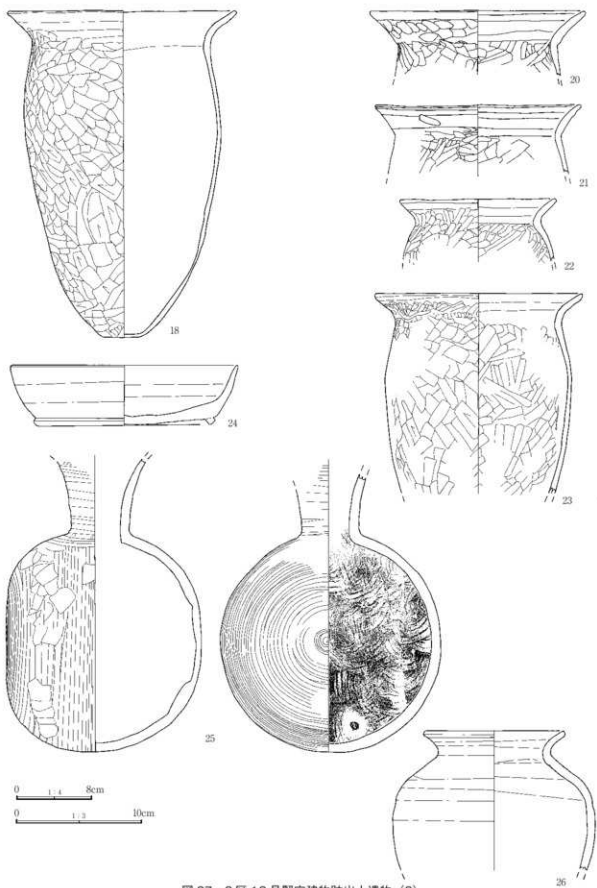


図87 3区13号竪穴建物跡出土遺物 (3)

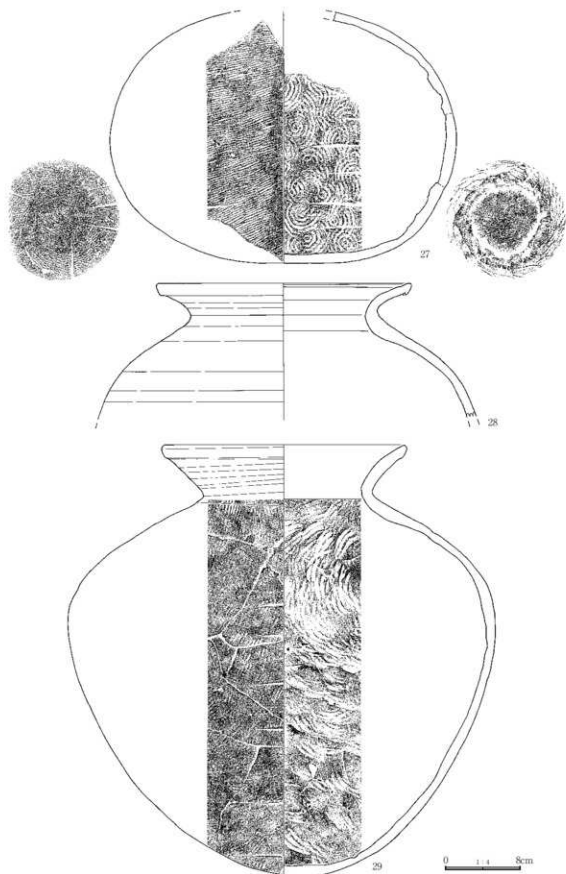


図88 3区13号竪穴建物跡出土遺物(4)

第3章 発見された遺構と遺物

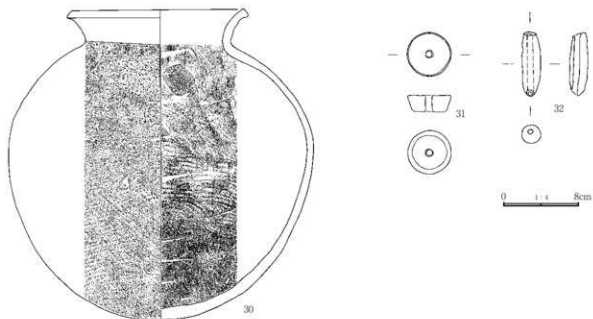
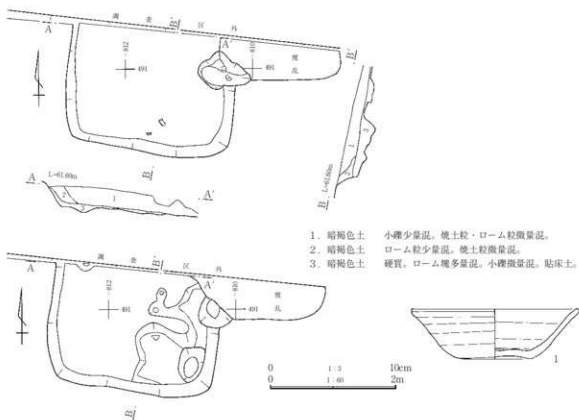


図89 3区13号竪穴建物跡出土遺物 (5)



1. 暗褐色土 小礫少量混。焼土粒・ローム粒微量混。
2. 暗褐色土 ローム粒少量混。焼土粒微量混。
3. 暗褐色土 硬質。ローム塊多量混。小礫微量混。粘土土。

3区14号竪穴建物跡

遺物番号	器 種	出土状況・埋没状況	法 量 (cm)	①色調 ②焼成 ③釉土	器形・整形の特徴、備考
3区14号 -1	須恵器 杯	埋土 1/4	推定口径128、器高39、 器厚0.4	①黄灰色 ②良好 ③緻密	轆轤成形。底部回転糸切

図90 3区14号竪穴建物跡平面図・土層断面図・堀方平面図・出土遺物

## (9) 3区15号竪穴建物跡

位置：3区の中央部からやや東寄り。X480・Y-805Gr。重複：3区16号竪穴建物跡の北辺を掘り込む。  
 主軸方位：N-90°-E 規模と形状：北東隅、西辺、南辺の一部と中央部が大きく攪乱され、完全に検出できた辺はなく、不明の部分が少なくない。長辺約4.7m・短辺約3.6m・深さ47cm・堀方までの深さは最大で約52cm。南北に長い長方形を呈する。上面が大きく掘削されている。北辺及び西辺の一部で周溝が検出された。埋土：暗褐色土ベース。竈：東壁に取り付く。燃焼部・煙道等は地山を削りだして構築され、袖は住居内に僅かに張り出し、粘土を貼り付けて形成している。燃焼部は住居壁にかかる位置につくられる。上面が掘削されており、中央部を攪乱されているため残存状況はあまり良くない。床面：地山を荒く削り出した上に、厚さ約2～5cmの暗黄褐色土による貼床を貼っている。堀方：荒く、特に南西隅一帯で凹凸が激しい。時期：8世紀。

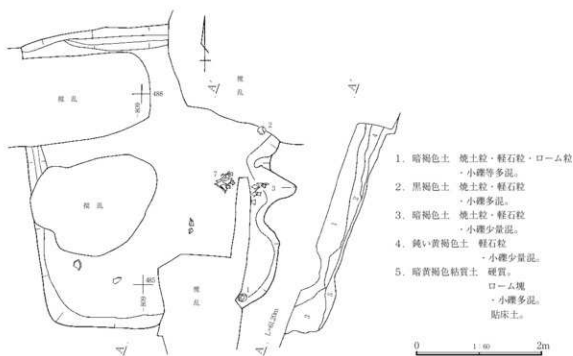


図91 3区15号竪穴建物跡平面図・土層断面図

3区15号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土質・形状	法量 (cm)	①色調 ②地成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区15号 -1	土師器 杯	埋土 完形	口径13、器高39、器厚 0.4	①鈍い黄褐色 ②良好 ③ 緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面掘削・内面撫
3区15号 -2	土師器 杯	埋土 1/2	口径14.7、器高46、器 厚0.5	①橙色 ②良好 ③径1mm 以下の砂粒多混	口縁部内外面横撫、体～底部外面掘削・内面撫
3区15号 -3	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径128、器高37、 器厚0.3	①鈍い橙色 ②良好 ③緻 密	口縁部内外面横撫、体～底部外面掘削・内面撫
3区15号 -4	土師器 杯	埋土 1/2	推定口径13、残存器高 3.4、器厚0.4	①鈍い橙色 ②良好 ③緻 密 胎土中に軽石・小礫を 含む	口縁部内外面横撫、体～底部外面掘削・内面撫
3区15号 -5	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径146、器高36、 器厚0.3	①黄褐色 ②良好 ③緻密、胎 土中に軽石・小礫を少量 含む	口縁部内外面横撫、体～底部外面掘削・内面撫
3区15号 -6	須恵器 杯	埋土 1/3	推定口径126、器高34、 器厚0.6	①黄灰色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部中心部回転掘削・底部 縁辺手持掘削
3区15号 -7	土師器 壺	埋土、口縁部 ～体部2/3	口径23、残存器高20.7、 器厚0.4	①黄褐色 ②良好 ③緻密、胎 土中に軽石・小礫を少量 含む	口縁部内外面横撫、体部外面掘削・内 面斜方向撫

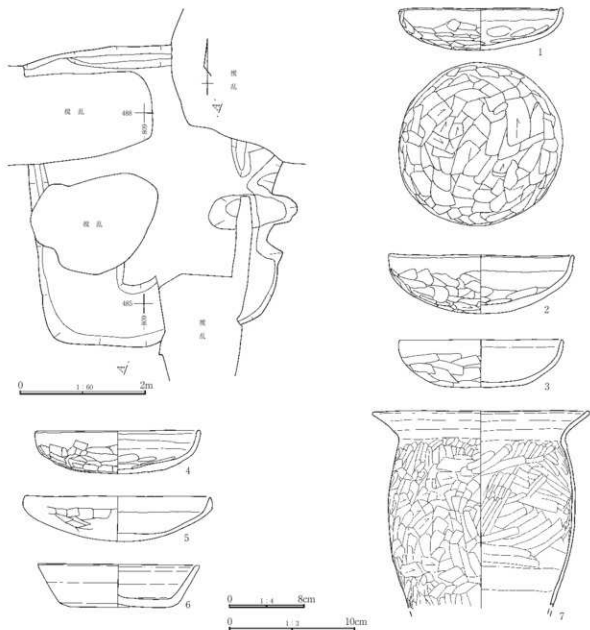


図92 3区15号竪穴建物跡堀方平面図・出土遺物

(10) 3区16号竪穴建物跡

位置：3区の中央部からやや東寄り。X480・Y800Gr。 重複：3区15号竪穴建物跡に南西辺を掘り込まれる。 主軸方位：N-47°-E 規模と形状：北東隅、北辺、西辺、南辺・東辺の一部と中央が攪乱され、完全に検出できた辺はなく、不明の部分が少なくない。長辺約5.5m・短辺約4m以上・深さ32cm・堀方までの深さは最大で約48cm。東西に長い長方形を呈する。上面が大きく掘削されている。 埋土：暗褐色土をベースとする。 竈：東壁に取り付く。燃烧部・煙道等は地山を削りだして構築され、軸は住居内に大きく張り出し、粘土を貼り付けて形成している。燃烧部は住居内につくられる。上面が掘削されているため残存状況はあまり良くない。 床面：地山を荒く削り出した上に、厚さ約2～5cmの暗黄褐色土による貼床を貼っている。 堀方：荒く、全般的に凹凸が激しい。 時期：8世紀。



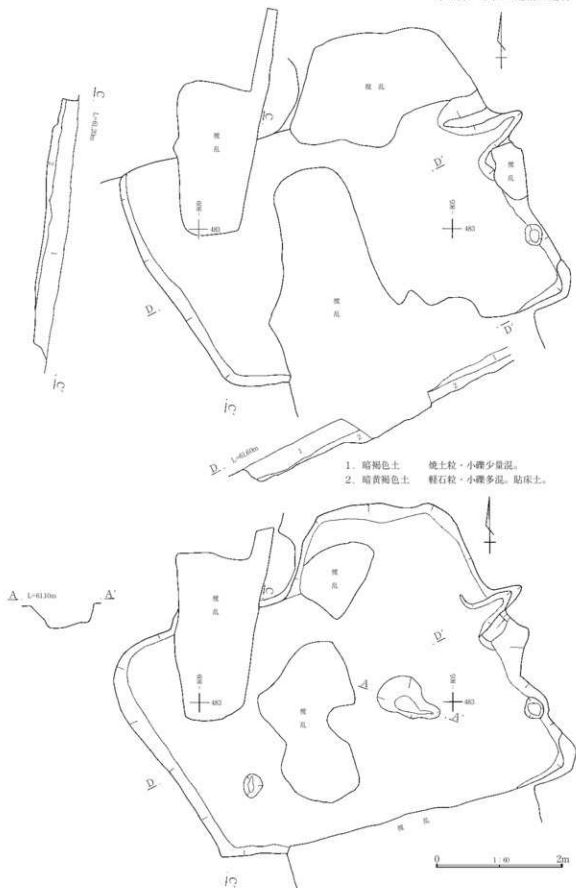
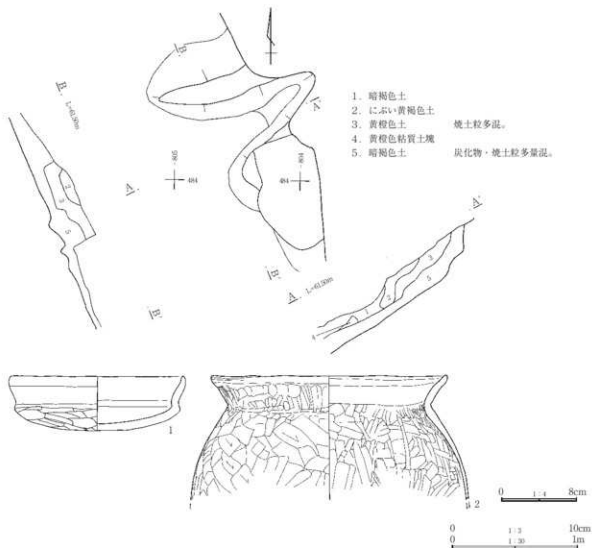


図93 3区16号竪穴建物跡平面図・土層断面図・堀方平面図・床下土坑エレベーション図



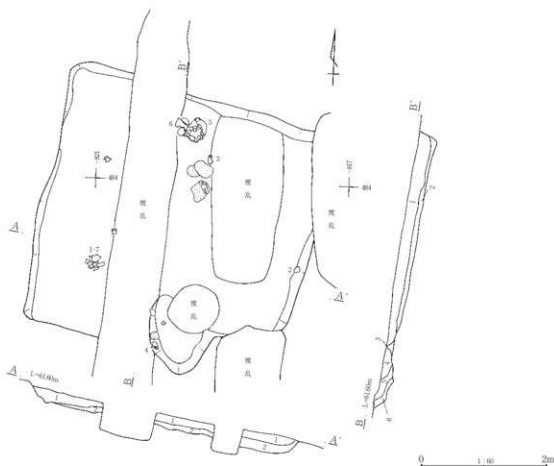
3区16号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土質・状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区16型 -1	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径136、器高44、 器厚0.6	①赤小粒 ②灰 ③赤黄、白 灰・土質の混合・手・黒色付着	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施 刷・内面撫
3区16型 -2	土師器 甕	埋土 1/5	推定口径25、残存器高 129、器厚1	①明褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部外面施刷、体 部外面横・斜方向撫

図94 3区16号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・出土遺物

(11) 3区17号竪穴建物跡

位置:3区の中央部。X480・Y815Gr。 検出床面積:18.2㎡ 主軸方位:N-12°-W 規模と形状:北辺、南辺・東辺の一部と中央部が大きく攪乱され、不明の部分が少なくない。南北辺約4.2m・東西辺約4m以上・深さ32cm。方形状を呈する。上面が大きく掘削されている。 埋土:黒褐色土ベース。 竈:南壁に取り付く。燃焼部・煙道等は地山を削りだして構築されているが、上面を大きく掘削され、前庭部を攪乱され、ほとんど堀方の状態で検出されており、残存状況は悪い。 床面:地山を平坦に削り出して整形している。 堀方:床面とはほぼ一致。 時期:6世紀中葉。



- |          |                      |
|----------|----------------------|
| 1. 黒褐色土  | 軽石粒・ローム粒・ローム塊少量混。    |
| 2. 暗褐色土  | ローム粒・ローム塊・軽石粒・小礫少量混。 |
| 3. 暗褐色土  | ローム粒・ローム塊多混。         |
| 4. 暗赤褐色土 | 焼土粒・焼土塊多混。甍埋土。       |
| 5. 暗褐色土  | 焼土粒・ローム粒少量混。甍埋土。     |
| 6. 暗褐色土  | ローム粒・ローム塊混。甍埋土。      |

図95 3区17号竪穴建物跡平面図・土層断面図

## 3区17号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土質・形状	法量 (cm)	①色調 ②地成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区17型 -1	土師器 杯	埋土 完形	口径146、器高55、器厚0.5	①赤褐色 ②良好 ③胎土 F-lam06-B-黒地・褐色胎土	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施磨・内面撫後縦方向放射状施磨
3区17型 -2	土師器 碗	埋土 1/5	推定口径138、残存器高43、器厚0.6	①赤褐色 ②胎土 ③胎土 B7-lam08-B-黒地・褐色胎土	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施磨、内面撫
3区17型 -3	土師器 碗	埋土 1/3	推定口径132、残存器高6、器厚0.8	①赤褐色 ②胎土 ③胎土 B-lam706-B-黒地・褐色胎土	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施磨、内面撫
3区17型 -4	土師器 小型 壺	埋土 3/5	口径122、残存器高79、器厚0.9	①明赤褐色 ②良好 ③胎土	口縁部内外面横撫、体部外面施磨・内面横・斜方向撫
3区17型 -5	土師器 壺	埋土 ほぼ完形	口径18、器高319、器厚0.7	①赤褐色 ②良好 ③胎土 F-lam0706-B-黒地・褐色胎土	口縁部内外面横撫、体部外面施磨・内面横・斜方向撫
3区17型 -6	土師器 壺	埋土、口縁～ 体部1/2	推定口径164、残存器高222、器厚0.6	①鈍い赤褐色 ②良好 ③胎土 B-lam0706-B-黒地・褐色胎土	口縁部内外面横撫、体部外面施磨・内面斜方向撫
3区17型 -7	土師器 壺	埋土、口縁～ 体部破片	推定口径239、残存器高79、器厚0.8	①明赤褐色 ②良好 ③胎土	口縁部内外面横撫、体部外面施磨・内面横・斜方向撫

第3章 発見された遺構と遺物

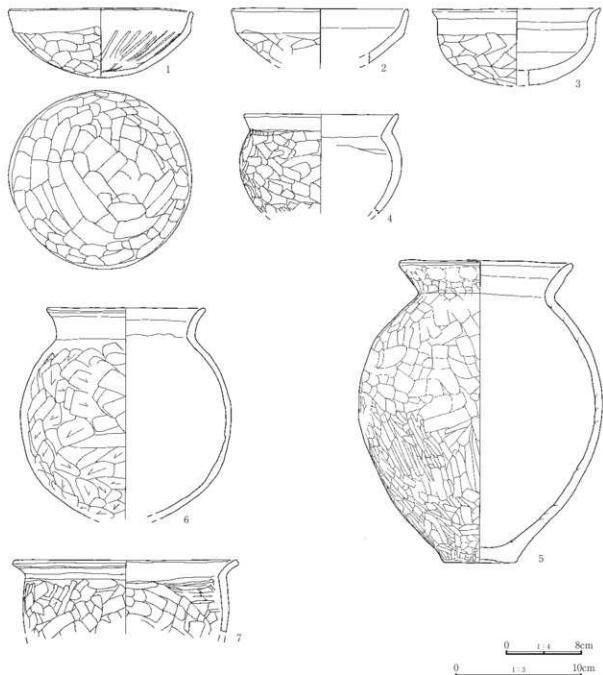


図96 3区17号竪穴建物跡出土遺物

第2項 溝跡

(1) 3区2号溝跡

位置：3区の東端寄り、X480～495・Y-835～840Gr。 重複：3区6号竪穴建物跡に中央を掘り込まれる。  
 規模と形状：確認全長10.5m・最大上幅1.3m・下幅0.6m・深さ0.35m。断面は緩やかな逆台形状を呈し、  
 ほほ南北方向に直線的に流れ、南北両端とも調査区外に続く。 埋土：灰褐色土ベース。 時期：8世紀。

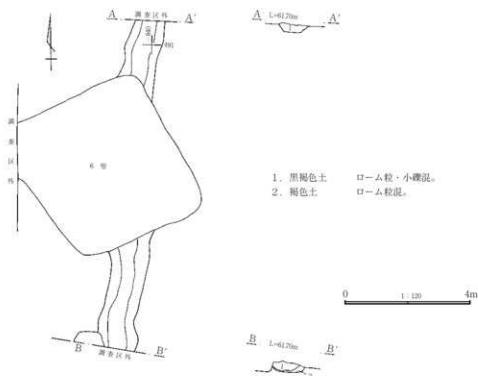


図97 3区2号溝跡平面図・土層断面図

### 第3項 土坑跡

#### (1) 3区3号土坑跡

位置：3区の中央から西南寄りの位置。X480・Y-825Gr。重複：なし 規模と形状：最大径2.8m、深さ1.34m。東西に長い楕円形状を呈する。埋土：暗褐色砂質土ベース。

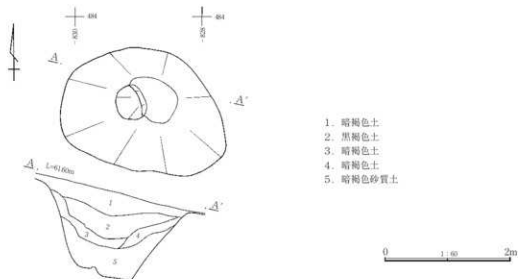


図98 3区3号土坑跡平面図・土層断面図

3区3号土坑跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区3坑-1	土師器 椀	埋土 1/6	推定口径128、残存器高 4.3、器厚0.6	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施刷、内面斜方向施磨
3区3坑-2	土師器 杯	埋土 1/8	推定口径148、残存器高 3.4、器厚0.6	①灰～赤褐色 ②良好 ③やや粗い、 口径以下～5cmの赤褐色胎土	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施刷、内面撫・黒色処理
3区3坑-3	土師器 杯	埋土 1/10	推定口径12、残存器高 2.6、器厚0.6	①純い・黄褐色 ②良好 ③ 緻密	口縁部内外面横撫、体部～底部外面施刷、内面撫
3区3坑-4	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	推定口径182、残存器高 7、器厚0.9	①黒褐色 ②良好 ③粗い、口径 以下～5cmの赤褐色胎土	口縁部内外面横撫、体部外面施刷・内 面横・斜方向撫
3区3坑-5	形象埴輪	埋土、脚部破 片	厚さ1.8	①純い・黄褐色 ②良好 ③ 緻密、口径以下～5cmの赤褐色胎土	外面縦方向刷毛目、内面縦・斜方向撫
3区3坑-6	円筒埴輪	埋土、脚部破 片	厚さ1.7	①純い・黄褐色 ②良好 ③ 緻密、口径以下～5cmの赤褐色胎土	外面縦方向刷毛目、後部分的に斜方向 撫、内面縦・斜方向撫
3区3坑-7	円筒埴輪	埋土、体部破 片	厚さ1.4	①褐色 ②良好 ③やや粗い、口径 以下～5cmの赤褐色胎土	外面縦方向刷毛目、突帯部貼付後上下 撫、内面縦方向撫
3区3坑-8	円筒埴輪	埋土、体部破 片	厚さ1.6	①純い・黄褐色 ②良好 ③ やや粗い、口径以下～5cmの赤褐色胎土	外面縦方向刷毛目、内面縦・斜方向撫
3区3坑-9	円筒埴輪	埋土、体部破 片	厚さ1.7	①純い・黄褐色 ②良好 ③ やや粗い、口径以下～5cmの赤褐色胎土	外面縦方向刷毛目、内面縦・斜方向撫
3区3坑-10	円筒埴輪	埋土、体部破 片	厚さ1.9	①褐色 ②良好 ③粗い、口径 以下～5cm程度の赤褐色胎土	外面縦方向刷毛目、突帯部貼付後上下 撫、内面縦・斜方向撫

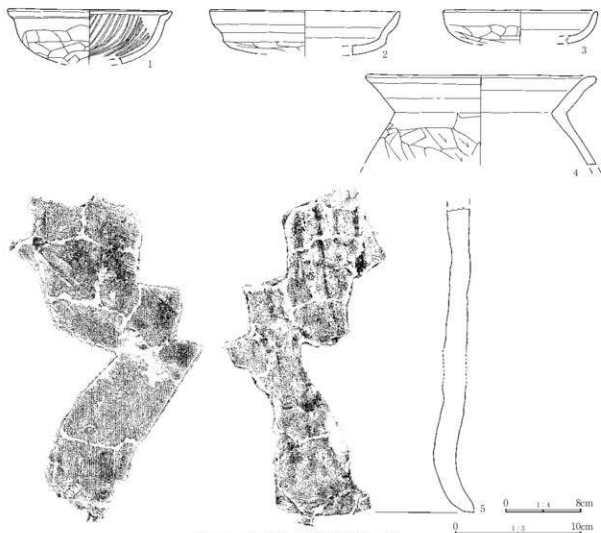


図99 3区3号土坑跡出土遺物(1)

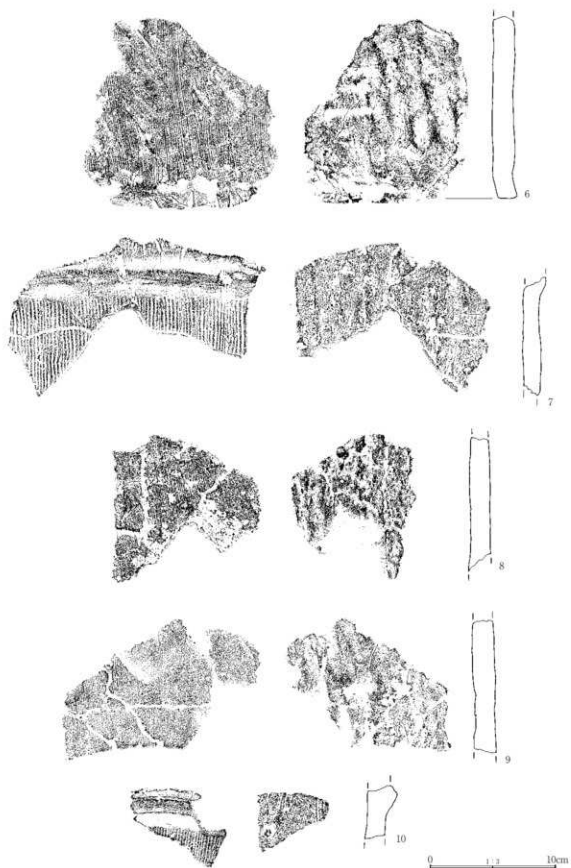


図100 3区3号土坑跡出土遺物(2)

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### 3区表土

遺物番号	器種	出土状況・発掘位置	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
3区表-1	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	想定口径158、残存器高 5.7、器厚1.1	①橙色、②良好、③緻密	口縁部内外面横撫、体部内外面撫
3区表-2	須恵器 杯	埋土 1/3	想定口径112、残存器高 4.1、器厚0.6	①鈍い黄橙色 ②良好 ③ 緻密	轆轤成形、底部撫で後高台貼付

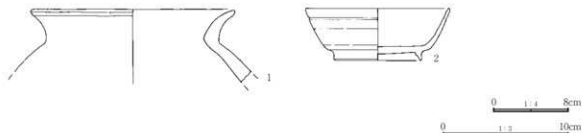


図101 3区表土出土遺物

## 第8節 4区の遺構と遺物

4区は、石橋交差点の南側で、主要地方道太田大間々線の東側に面した調査区である。平成18年度に調査された。面積は510㎡である。南西・北東方向に走る生活道路によって、4・1・4・2・4・3の3区に分割して調査を行った。各調査区同様、主要地方道太田大間々線に面し、また、東武鉄道桐生線治良門橋駅に至近の場所であるため、もともと商店や宅地が建ち並んでいた場所であり、上面の掘削が甚だしく、攪乱されている部分も少なくないで、遺構の残存状態は極めて悪い。堅穴建物跡はいずれも浅くか、あるいは床面近くで辛うじて検出できた程度である。

堅穴建物跡6棟、ほぼ北西・南東方向に走向する比較的小規模な溝跡4条、井戸跡2基、土坑跡1基が検出されている。堅穴建物跡は、いずれも古墳時代後期～飛鳥・白鳳時代～奈良時代のものである。1号溝跡と2号溝跡は、北西・南東方向に走向する道路跡の、北東側と南西側の側溝にあたるものと考えられる。この道路跡は、堅穴建物跡群との重複関係から、堅穴建物跡群より新しい時期の、中世以降のものと考えられる。

### 第1項 堅穴建物跡

#### (1) 4区1号堅穴建物跡

位置：4-1区の南端近く、石橋交差点寄り。X510・Y-875Gr。重複：4区2号溝跡に掘り込まれる。規模と形状：南西隅付近が検出されたに過ぎず、大部分は調査区外に出るため、全容はまったく不明である。南西隅一帯も中近世の道路跡の側溝である2号溝跡に大きく破壊されている。埋土：灰黄褐色土ベース。床面：地山を削り整えて整形。掘方と床面とはほぼ一致している。時期：8世紀



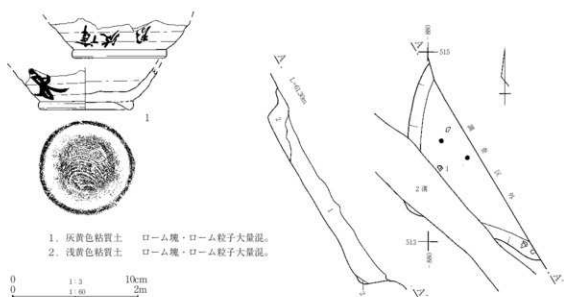


図 102 4区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図・出土遺物

## 4区1号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋没状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴・備考
4区1号-1	須恵器 碗	埋土、底一部位破片	底径7.5、残存器高3.2、器厚0.5	①灰黄色 ②良好 ③細密	甕輪成形、底部回転糸切接合部認め、外部端正な磨き「裏」、内部外面両面黄褐色「裏」

## (2) 4区2号竪穴建物跡

位置：4-2区の南東隅、X520・Y-886Gr。 主軸方位：N-0°-E・W 重複：東側を4区3号竪穴建物跡に掘り込まれる。規模と形状：東北隅部が調査区外に出、東側大部分が4区3号竪穴建物跡に掘り込まれ、南側が後世に攪乱されているため、南北辺のそれぞれ一部と西辺が検出された。西辺は3.6m・北辺は4.2m以上・深さ55cm。東西に長い長方形を呈するものと考えられる。埋土：灰黄褐色土ベース。床面：地山を削り出して平坦に整形して。床面と堀方はほぼ一致しているが、床面下の土坑が5基検出された。

竈跡：北壁のほぼ中央に取り付くものと推定される。燃焼部・煙道等は地山を削りだして構築される。両軸等はほとんど確認できない。燃焼部は、ほぼ住居壁に並行する位置に内側につくられる。煙道は平坦な燃焼部の奥壁から緩やかに立ち上がる。時期：8世紀

## (3) 4区3号竪穴建物跡

位置：4-2区の南東隅、X520・Y-886Gr。 重複：4区2号竪穴建物跡の西側を掘り込む。規模と形状：東側大部分が調査区外に出るため、全容はまったく不明である。西辺の一部が確認されたに過ぎない。深さ約53cm。埋土：灰黄褐色土ベース。床面：地山を削り出して平坦に整形して。床面と堀方はほぼ一致している。時期：8世紀後半。

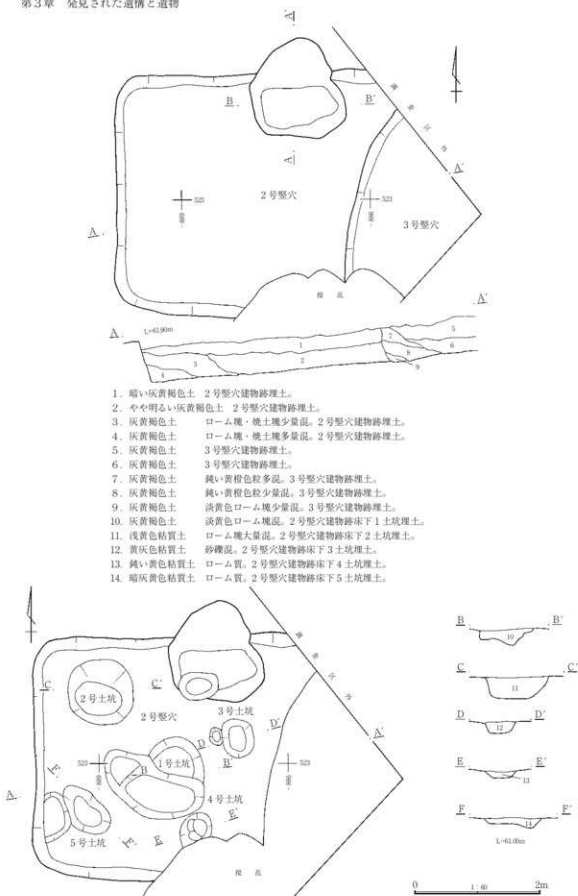


図103 4区2・3号壑穴建物跡平面図・土層断面図・堀方断面図・床下土坑土層断面図

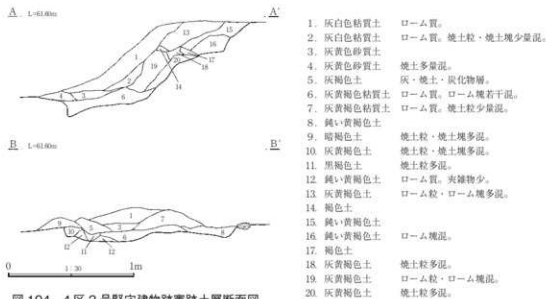


図104 4区2号竪穴建物跡電跡土層断面図

## 4区2号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴。備考
4区2号-1	須恵器 杯	埋土 1/2	推定口径146、底径8.7、 器高34、器厚0.5	①赤褐色 ②灰 ③赤、白 B7=焼成・鈍い・灰地胎土	轆轤成形、底部回転脱脂、底部外面黒 書「新田」「柳々」
4区2号-2	須恵器 高台 付碗	埋土 1/2	推定口径18、器高5.9、 底径12、器厚0.6	①灰白色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、高台部貼付
4区2号-3	土師器 甕	埋土 2/3	口径21.2、底径5.1、器 高28.8、器厚0.4	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横筋。体部～底部外面横 筋・内面斜・横方向撫
4区2号-4	土師器 甕	埋土、口縁 ～体部破片	推定口径206、残存器高 5.1、器厚0.4	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横筋。体部～底部外面横 筋・内面斜・横方向撫
4区2号-5	鉄鎌	埋土 完形	長19.3、幅25～37、厚 0.2～0.35		

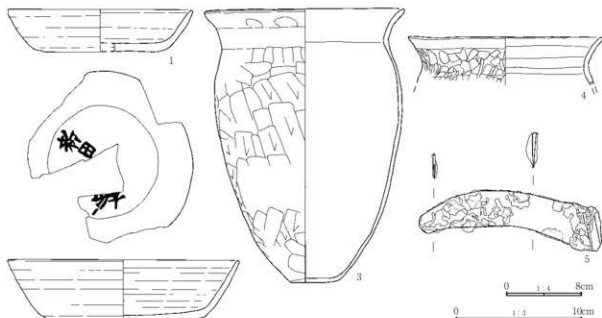
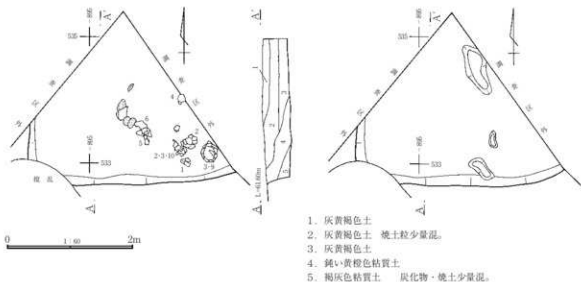


図105 4区2号竪穴建物跡出土遺物

(4) 4区4号竪穴建物跡

位置：42区の北東隅。調査区北西端に取り付く。X530・Y-890Gr。重複：なし。規模と形状：北・東・西側が調査区外に出るため、全容は不明である。南辺と西辺のごく一部が検出できたに過ぎない。南東隅部は後世に攪乱され、破壊されている。深さ約49cm。埋土：灰黄褐色土ベース。床面：地山を平坦に削り整えて形成。堀方と床面とはほぼ一致しているが、床面下からは若干凹んだ堀方の掘り込みが検出された。時期：8世紀。



1. 灰黄褐色土
2. 灰黄褐色土 焼土粒少量混。
3. 灰黄褐色土
4. 鈍い黄褐色粘質土
5. 褐灰色粘質土 炭化物・焼土少量混。

図106 4区4号竪穴建物跡平面図・土層断面図・堀方平面図

4区4号竪穴建物跡

遺物番号	器種	埋土・埋積層	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区4号-1	土師器 杯	埋土	推定口径119、器高37、器厚0.4	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横溝、体部~底部外面横溝・内面横溝
4区4号-2	土師器 碗	埋土	推定口径181、器高67、器厚0.7	①黄~褐色 ②良好 ③準、B1a/B7~2a間の褐色・灰白胎土少量混	口縁部外面横溝、体部~底部外面横溝、体部内面横溝が僅かに残存、底部内面横溝残存、面欠損土器
4区4号-3	土師器 皿	埋土	推定口径18、器高3.8、器厚0.4	①橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横溝、体部~底部外面横溝・内面横溝
4区4号-4	土師器 杯	埋土	口径149、器高4.6、器厚0.4	①黄~褐色 ②胎 ③準、B1a/B7~2a間の褐色・灰白胎土少量混	口縁部内外面横溝、体部~底部外面横溝・内面横溝
4区4号-5	土師器 皿	埋土	推定口径185、器高4.4、器厚0.6	①橙色 ②良好 ③準、B1a/B7~2a間の褐色・灰白胎土少量混	口縁部内外面横溝、体部~底部外面横溝・内面横溝
4区4号-6	土師器 皿	埋土	推定口径17、器高3.3、器厚0.4	①橙色 ②良好 ③準、B1a/B7~2a間の褐色・灰白胎土少量混	口縁部内外面横溝、体部~底部外面横溝・内面横溝
4区4号-7	土師器 皿	埋土	推定口径181、推定器高3.9、器厚0.4	①鈍い褐色 ②良好 ③準、B1a/B7~2a間の褐色・灰白胎土少量混	口縁部内外面横溝、体部~底部外面横溝・内面横溝
4区4号-8	土師器 甕	埋土、口縁~体部破片	推定口径149、器高8、器厚1.6	①鈍い褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横溝、体部~底部外面横溝・内面横溝・斜方向溝
4区4号-9	土師器 甕	埋土、口縁~唇部破片	口径23.3、残存器高127、器厚0.5	①黄~褐色 ②胎 ③準、B1a/B7~2a間の褐色・鈍胎土少量混	口縁部内外面横溝、体部~底部外面横溝・内面斜方向溝
4区4号-10	土師器 甕	埋土、口縁~体部破片	推定口径25.6、残存器高107、器厚0.8	①鈍い褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横溝、体部~底部外面横溝・内面縦・斜方向溝

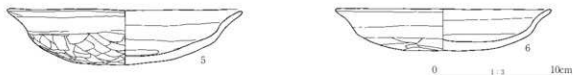


図107 4区4号竪穴建物跡出土遺物(1)

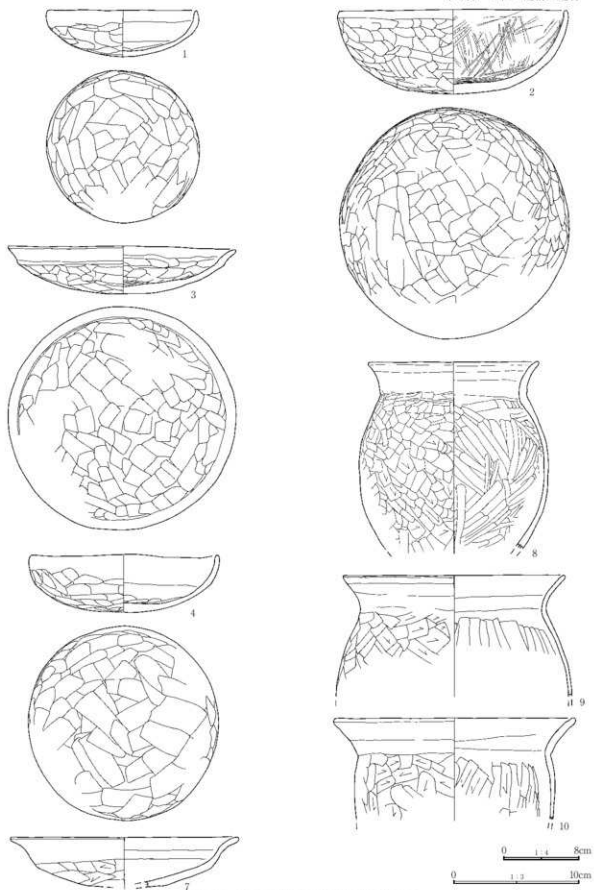


図108 4区4号竪穴建物跡出土遺物(2)

(5) 4区5号竪穴建物跡

位置：43区の中央。X530・Y-890Gr。 重複：東よりの部分、竈前を3号溝跡によって掘り込まれ破壊されている。規模と形状：北壁と西壁、南壁と東壁の一部が検出されている。竈は東側の壁に取り付くものと想定できるが、竪穴建物跡の東側約1/3を4区3号溝跡によって大きく破壊されているため、竈の痕跡しか確認できなかった。長辺約4.3m・短辺約3.9m・深さ約58cm、東西に長い長方形を呈するものと考えられる。埋土：黒褐色土ベース。床面：地山を平坦に削り整えて形成し、堀方と床面とはほぼ一致しているが、部分的に床面下の浅い土坑跡が検出されている。時期：8世紀。

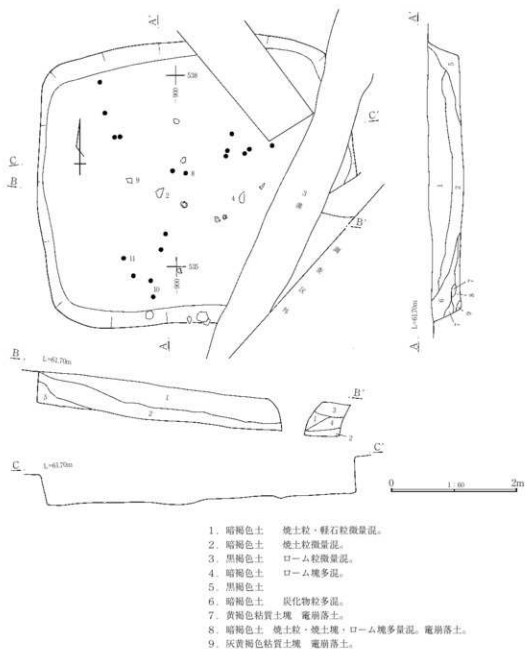


図 109 4区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図・エレベーション図

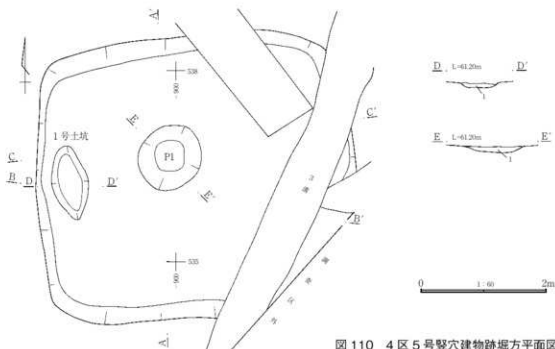


図 110 4区5号竪穴建物跡方平面図

## 4区5号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区5号-1	土師器 杯	埋土、口縁～ 体部破片	推定口径 153、残存器高 4.7、器厚 0.5	①鈍い黄褐色 ②良好 ③ 緻密	口縁部内外面横溝、体部外面施劃・内 面撫後縦方向暗文
4区5号-2	須恵器 杯	埋土	推定口径 15、底径 9、器 高 3、器厚 0.6	①鈍い黄褐色 ②良好 ③ 緻密	轆轤成形、底部回転施劃後高台部貼付
4区5号-3	須恵器 盤	埋土	推定口径 188、底径 152 、器高 3.7、器厚 0.4	①灰色 ②良好 ③兼有、口 縁以下は黒褐色・胎土粒子少量	轆轤成形、底部回転施劃後高台部貼付
4区5号-4	須恵器 盤	埋土	推定口径 188、底径 152 、器高 3.7、器厚 0.4	①灰色 ②良好 ③兼有、口 縁以下の黒褐色・胎土粒子少量	轆轤成形、底部回転施劃後高台部貼付
4区5号-5	須恵器 盤	埋土	推定口径 207、底径 158 、器高 3.7、器厚 0.4	①灰黄色 ②良好 ③兼有、 径 1m以下の黒褐色胎土少量混	轆轤成形、底部回転施劃後高台部貼付
4区5号-6	須恵器 盤	埋土	推定口径 14、推定底径 10.1、器高 3.9、器厚 0.4	①灰黄色 ②良好 ③兼有、 径 1m以下の黒褐色胎土少量混	轆轤成形、底部回転施劃後高台部貼付
4区5号-7	須恵器 杯	埋土	推定口径 196、推定底径 11.6、器高 5.7、器厚 0.6	①灰白色 ②良好 ③兼有、 径 1m以下の灰白・黒褐色胎土少量混	轆轤成形、底部回転施劃
4区5号-8	須恵器 杯	埋土	推定口径 128、推定底径 8.6、器高 3.4、器厚 0.4	①灰白 ②やや粗 ③兼有、口 縁以下は黒褐色の黒褐色胎土やや多(産)	轆轤成形、底部回転糸切
4区5号-9	須恵器 杯	埋土	推定口径 162、残存器高 4.4、器厚 0.5	①灰白 ②良好 ③兼有、口 縁以下の黒褐色胎土やや多(産)	轆轤成形
4区5号-10	須恵器 蓋	床直	径 152、柄み部径 47、 器高 2.6、器厚 0.4	①灰白色 ②良好 ③兼有、口 縁以下は黒褐色の灰白・黒褐色胎土混	轆轤成形、外面回転施劃後撫・柄部貼 付、内面撫で
4区5号-11	須恵器 蓋	床直	推定径 163、柄み部径 3.8、器高 4.3、器厚 0.5	①灰白色 ②良好 ③兼有、口 縁以下は黒褐色の灰白・黒褐色胎土混	轆轤成形、外面回転施劃後撫・柄部貼 付、内面撫で
4区5号-12	土師器 羹	埋土、口縁～ 肩部破片	推定口径 132、残存器高 5.9、器厚 0.4	①赤褐色 ②良好 ③やや粗、口 縁以下は黒褐色の灰白・黒褐色胎土混	口縁部内外面横溝、頸～体部外面施劃 ・内面斜方向撫
4区5号-13	土師器 杯	埋土、底部破 片	残存長 5.9、残存幅 4.3、 器厚 0.6	①鈍い褐色 ②良好 ③緻 密	底部外面回転施劃・内面撫、底部外面 に黒書「入田」
4区5号-14	土師器 杯	埋土、底部破 片	器厚 0.4	①鈍い褐色 ②良好 ③緻 密	底部外面施劃・内面撫、底部外面黒書 判読不能
4区5号-15	土師器 杯	埋土、口縁 部～底部破 片	残存長 1.9、残存幅 2.5、 器厚 0.4	①褐色 ②良好 ③緻密	底部外面回転施劃、底部外面に黒書・ 判読不能
4区5号-16	鉄製・刀子	埋土、刃部完 存、基部欠	現存長 11、幅 1、厚 0.3		

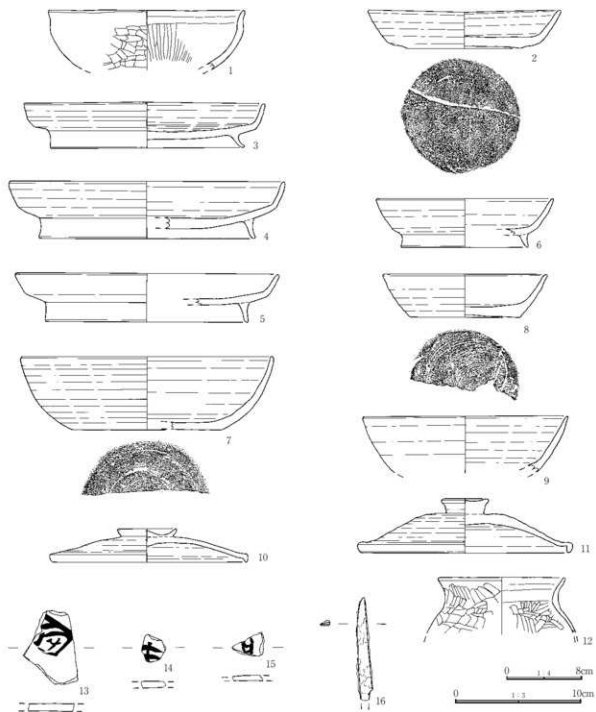


図 111 4区5号竪穴建物跡出土遺物

(6) 4区6号竪穴建物跡

位置：43区の北西隅。X525・Y900Gr.。重複：中央を4区2号溝跡と4区2号井戸跡に掘り込まれ破壊される。規模と形状：中央を溝跡と井戸跡に破壊され、南側と西側が調査区外に出るため、北東隅が検出されたに過ぎず、全容は不明である。深さ約68cm。埋土：灰黄褐色土ベース。床面：地山を平坦に削り整えて形成。掘方と床面とはほぼ一致している。床下の遺構等も検出されていない。時期：8世紀。



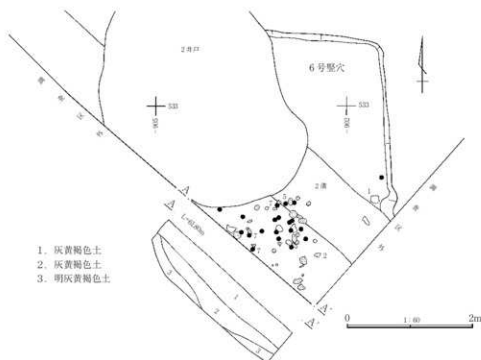


図112 4区6号竪穴建物跡平面図・土層断面図

## 4区6号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区6号-1	土師器 杯	埋土	推定口径11、器高3.5、器厚0.4	①褐色 ②良好 ③赤土	口径～体部内外面横撫、底部外面焼削・内面撫
4区6号-2	土師器 杯	埋土	推定口径146、残存器高5、器厚0.7	①褐色 ②良好 ③赤土	口径～体部内外面横撫、底部外面焼削・内面撫
4区6号-3	須恵器 杯	埋土	推定口径178、底径11、器高4.3、器厚0.7	①褐色 ②良好 ③赤土	口径～体部内外面横撫、底部外面焼削・内面撫
4区6号-4	土師器 杯	埋土	推定口径131、器高3.5、器厚0.5	①褐色 ②良好 ③赤土	口径～体部内外面横撫、底部外面焼削・内面撫
4区6号-5	土師器 杯	埋土	推定口径117、残存器高3.2、器厚0.4	①褐色 ②良好 ③赤土	口径～体部内外面横撫、底部外面焼削・内面撫
4区6号-6	土師器 釜	埋土・口径～頸部破片	推定口径24、残存器高6.7、器厚0.7	①鈍い褐色 ②良好 ③赤土	口径部内外面横撫、体部外面焼削・内面斜方向撫
4区6号-7	須恵器 大甕	埋土・口径～肩部破片	推定口径246、残存器高19.5、器厚1.1	①黄灰色 ②良好 ③緻密	口径～頸部横撫成形、体部内外面叩

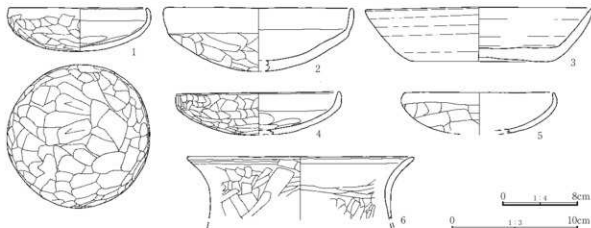


図113 4区6号竪穴建物跡出土遺物(1)

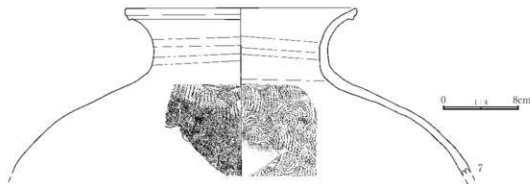


図 114 4区6号竪穴建物跡出土遺物(2)

## 第2項 道路跡

### (1) 4区1号道路跡

位置：4-1区の南西壁に沿う。X505～515・Y-870～-885Gr。 重複：なし。 規模と形状：両側溝を有する。幅は両側溝心々間で約2.2～3m、路面幅では1.6～2.2m、確認全長132m。北東側の側溝を4区2号溝跡、南西側の側溝を4区1号溝跡としている。南西側の側溝である4区1号溝跡は、4-1区でのみ検出され、両側溝を有する道路跡と確認できたのは、4-1区だけである。北東側の側溝である4区2号溝跡は、4-2・4-3区でも引き続き検出されている。路面に当たる部分では、顕著な硬化面は検出されなかった。走向はほぼN-45°-W。現在の主要地方道太田大間々線よりもやや西に振れているが、概ね、隣接して並行する位置に当たる。太田大間々線に先行する、北西方向から南東方向に向かう旧来の道路の遺構である可能性が指摘できる。竪穴建物跡群を破壊しているため、それらよりはかなり新しい時期のものと考えられる。4区1号溝跡：上幅60cm以上・深さ10cm。断面は極めて浅く、緩やかな逆台形状を呈している。南西側約半分は、調査区外に出るため全容は不明。北西・南東両端は、さらに調査区外に続く。埋土は、暗灰黄色砂質土ベース。

4区2号溝跡：上幅約60～110cm・深さ約35～60cm。北西・南東両端は、さらに調査区外に続く。南西側の側溝である4区1号溝跡よりはしっかりとした矩方を有し、断面は4区1号溝跡よりもシャープな逆台形状を呈する。埋土は北東側側溝4区1号と同様、暗灰黄褐色砂質土。 時期：中世以降、近世か。

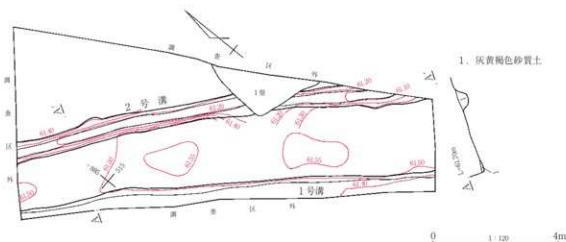


図 115 4区1号道路跡平面図・土層断面図

### 第3項 溝跡

4区では、溝跡が4条検出されており、おおむね、現在の主要地方道太田大間々線に沿って、北西方向から南東方向に走向する溝跡である。

先述したように、41区で検出された1号溝跡と2号溝跡は、幅員約24m程度の道路の両側溝と考えられ、すでに触れたので、ここでは4区で検出されたそれ以外の4区3号溝跡と4区4号溝跡について記述する。

これらの溝跡は、いずれも堅穴建物跡群を破壊しており、堅穴建物跡群よりはかなり新しい時期の、中世以降のものと考えられる。

#### (1) 4区3号溝跡

**位置：**42区の南西壁に沿って、4区2号溝が廃絶した跡に、ちょうど重なるようにその埋土に掘り込まれる。42区と43区の間、南西・北東方向に現在の主要地方道太田大間々線にはほぼ直角に交差する生活道路の下で、緩やかなL字形を描いて北東方向に屈曲し、43区で検出された4区5号堅穴建物跡の東側、竈前付近を大きく破壊する。X520～540・Y-895Gr。  
**重複：**42区では4区2号溝跡に重なるように、その上面に掘り込まれ、43区では4区5号堅穴建物跡を破壊し、調査区外に出る。  
**規模と形状：**確認全長のべ約17m・深さ約50cm。断面は緩やかな逆台形状を呈している。南西側約半分は、調査区外に出るため全容は不明。  
**埋土：**灰褐色砂質土ベース。  
**時期：**近世以降。

#### (2) 4区4号溝跡

**位置：**42区の中央からやや東寄り。4区2号堅穴建物跡の北、4区4号堅穴建物跡の南。X520～530・Y-885～890Gr。  
**規模と形状：**全長のべ約8.5m・深さ約48cm。断面は逆台形状を呈している。北西から南東方向に走向するが、北側で若干北寄りに屈曲する。4区2号堅穴建物跡のすぐ北側から掘り込まれ、4区4号堅穴建物跡の南側の手前で止まる、短い溝。  
**埋土：**灰褐色砂質土ベース。  
**時期：**近世以降。

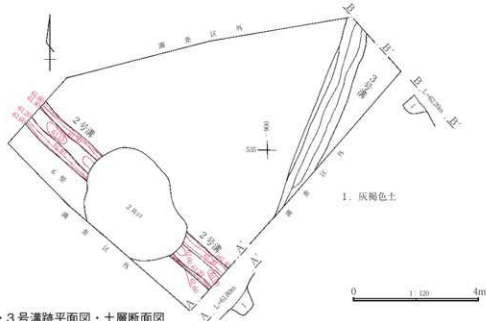


図 116 4区2・3号溝跡平面図・土層断面図

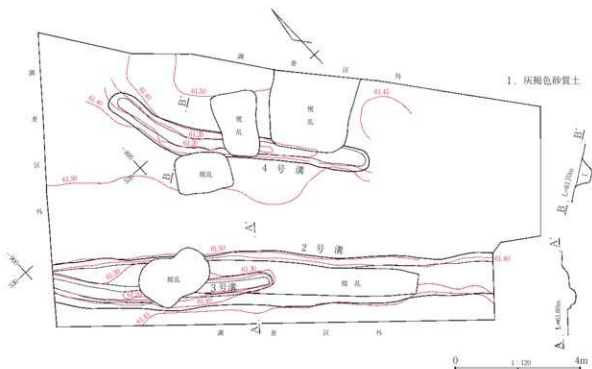


図 117 4区3・4号溝跡平面図・土層断面図

## 第4項 井戸跡

4区では、土坑跡が2基検出されている。いずれも近世から近代にかけての新しい井戸である。近世～近代の町屋に付随するものと考えられる。先述したように、調査対象地は、調査に着手するまで、現在の主要地方道足利伊勢崎線及び太田大間々線に面して商店や工場、宅地などが密集している箇所であった。東西及び南北の交通の要衝で、鉄道の駅にも至近であることがその理由であろうが、これら近世～近代の遺構の検出によって、現在の街並みの形成が江戸時代まで遡ることが、考古学的にも判明したのである。

### (1) 4区1号井戸跡

**位置：**4-2区の中央、北東壁寄りの位置。X525・Y-890Gr。 **規模と形状：**北東側およそ半分以上が調査区外に出るため、全容は不明であるが、上部が漏斗状に広がる形状を呈している。最大径は1.6m。筒部分の径は約74cmであるが、確認面から約1.4mの深さまでしか調査されておらず、底部は未検出であった。

**埋土：**灰黄褐色粘質土をベースとする。 **時期：**近世～近代か。

### (2) 4区2号井戸跡

**位置：**4-2区の東南隅。X525・Y-900Gr。 **重複：**4区2号溝跡及び6号竪穴建物跡を掘り込んで破壊する。

**規模と形状：**長径約3.8m・短径約3m・深さ約1.5mの南北に長い楕円形土坑状の堀方を有し、その底部から長径2.2m・短径1.7mの筒状の井戸部が掘り込まれている。筒状の井戸部はまったく調査されていないので、不明。近世～近代のものと考えられる。

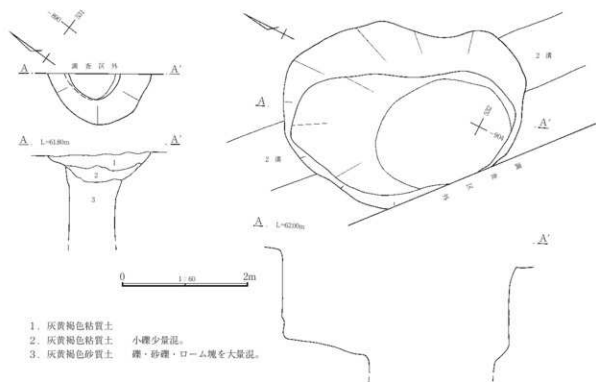


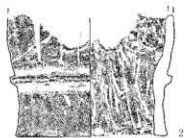
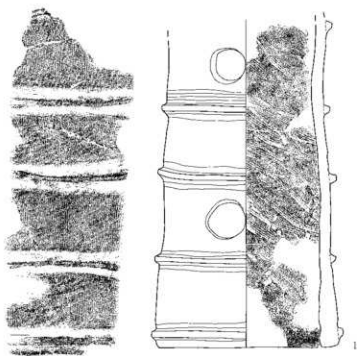
図 118 4区1・2号井戸跡平面図・土層断面図・エレベーション図

## 4区2号井戸跡

遺物番号	器 種	出土状況・埋蔵位置	法 量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
4区2井-1	低位突部付円筒埴輪	埋土、体部～底部破片	径 29.4、残存器高 48、器厚 3	①褐色 ②良好 ③緻密	外面縦方向刷毛目、突部部貼付、突部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-2	円筒埴輪	埋土、体部破片	器厚 1.4	①褐色 ②良好 ③緻密	外面縦方向刷毛目、突部部貼付、突部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-3	家形埴輪	埋土、体部破片	器厚 2.1	①鈍い褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の緑色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付後突部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-4	家形埴輪	埋土、体部破片	器厚 2.3	①明赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の緑色	外面縦方向刷毛目、突部部貼付後突部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-5	円筒埴輪	埋土、体～底部破片	器厚 2.3	①褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付後突部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-6	円筒埴輪	埋土、体部破片	器厚 1.8	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付後突部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-7	円筒埴輪	埋土、体～底部破片	器厚 2.5	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付後突部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-8	円筒埴輪	埋土、体部破片	器厚 2.2	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付後突部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-9	家形埴輪	埋土、体部破片	器厚 4.7	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付後突部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-10	馬形埴輪	埋土、止金具部分破片	器厚 3	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	馬具表現貼付、外面縦方向刷毛目、内面縦方向向撫
4区2井-11	円筒埴輪	埋土、口縁～体部破片	器厚 2.5	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付、突部部上下横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-12	朝顔形埴輪	埋土、体部破片	器厚 3	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付、突部部上下横撫、内面横・斜方向刷毛目
4区2井-13	朝顔形埴輪	埋土、体部破片	器厚 3.2	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付、突部部上下横撫、内面横・斜方向刷毛目
4区2井-14	埴輪(不明)	埋土、体部破片	器厚 1.7	①赤褐色 ②良好 ③緻密、 H1mm以下-2mm程度の赤褐色・赤褐色粒子少量混	外面縦方向刷毛目、突部部貼付、突部部上下横撫、内面斜方向向撫

第3章 発見された遺構と遺物

4区2井-15	円筒埴輪	埋土、口縁部破片	器厚 1.8	①赤褐色 ②良好 ③密着、 1mm以下の所白色灰子・砂粒混	口縁端部横撫、外面横撫、内面斜方向刷毛目
4区2井-16	円筒埴輪	埋土、口縁部破片	器厚 1.3	①赤褐色 ②良好 ③密着、1mm以下 -2mm間の赤褐色・黒褐色良好状	口縁端部横撫、外面縦方向刷毛目、内面斜方向刷毛目
4区2井-17	円筒埴輪	埋土、口縁部破片	器厚 1.4	①赤褐色 ②良好 ③密着、1mm以下 -2mm間の赤褐色・黒褐色良好状	口縁端部横撫、外面縦方向刷毛目、内面斜方向刷毛目
4区2井-18	円筒埴輪	埋土、口縁部破片	器厚 1.5	①赤褐色 ②良好 ③密着	口縁端部横撫、外面縦方向刷毛目、内面横方向刷毛目
4区2井-19	形象埴輪	埋土、体部破片	器厚 2.1	①褐色 ②良好 ③中程度、 且1-3mmの赤褐色・黒褐色多量	外面刷毛目、突帯部貼付、内面毛目
4区2井-20	円筒埴輪	埋土、底部破片	器厚 2.4	①褐色 ②良好 ③中程度、且 1-3mmの赤褐色・黒褐色多量	底部撫、外面刷毛目、内面斜方向刷毛目



0 1.6 30cm

図 119 4区2号井戸跡出土遺物 (1)

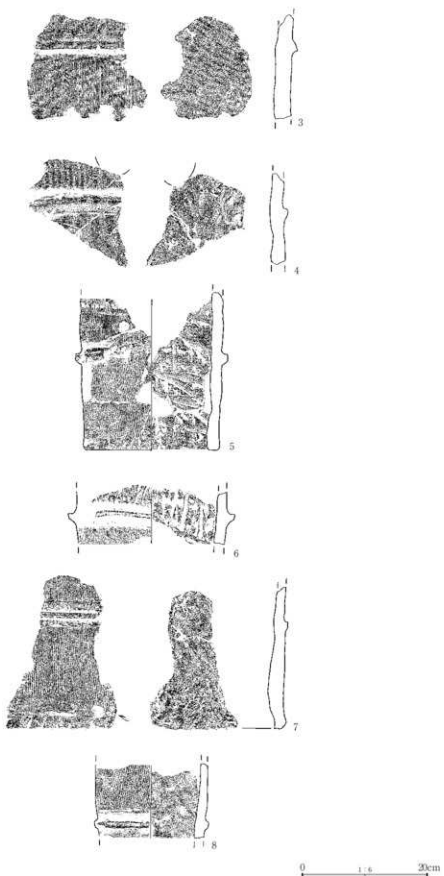


図120 4区2号井戸跡出土遺物(2)

### 第3章 発見された遺構と遺物

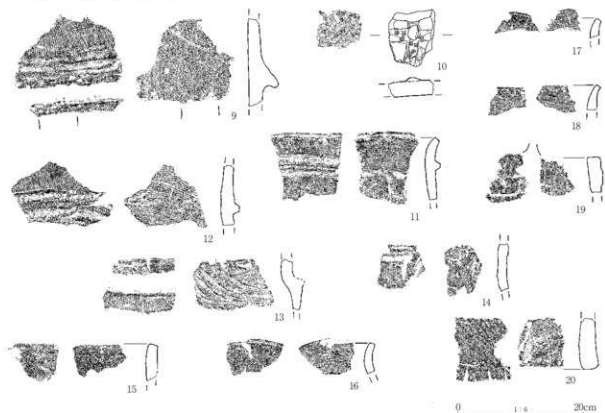


図 121 4区2号井戸跡出土遺物 (3)

## 第5項 土坑跡

### (1) 4区1号土坑跡

位置：4-1区のはば中央、北東端際。4区1号竪穴建物跡のすぐ北西隣。X510・Y-875Gr。 重複：なし。  
規模と形状：東側が調査区外に出るため、全容は不明である。確認最大径約1.3m・深さ約10cm。 埋土：  
灰黄褐色土をベースとする。

### (2) 4区3号土坑跡

位置：4-2区のはば中央、やや南寄り付近。西側を4区2号溝跡、東側を4区3号溝跡に挟まれ、南側には  
4区2号竪穴建物跡が接する。X525、Y-165Gr。 重複：なし。 規模と形状：径約1.4mの不整形円形状を  
呈する。深さ32cm。 埋土：黒褐色土をベースとする。

### (3) 4区7号土坑跡群

位置：4-2区の北西端付近。西側を4区2号溝跡、東側を4区3号溝跡に挟まれた一帯。X525・Y-895Gr。  
重複：なし。 規模と形状：径約40cm前後・深さ約30～60cm前後の柱穴状のピットが、北西・南東方向  
に一直線に3基、その中心のピットからほぼ直角に南西方向に、中心ピットを入れて同じく一直線に3基、  
平面「T」字状に並ぶ小穴群。配置からみて一連のものと考えられ、なんらかの構造物の柱痕のようにみえ  
るが、用途等は現段階では不明である。 pit1：長径約40cm・短径約34cm・深さ約40cm、pit2（「T」字



型の中心部分)：長径38cm・短径32cm・深さ約50cm、pit3：長径約40cm・短径約31cm・深さ約28cm、pit4：長径約50cm・短径約38cm・深さ約42cm、pit5：長径約36cm・短径約34cm・深さ約30cm。柱間はピットの心々間で約50cm前後であるが、最も南西側に突き出したpit5と、その手前のpit4との間のみ1mと他とは倍近い間隔が取られている。埋土：褐色土ベース。時期：古代か。

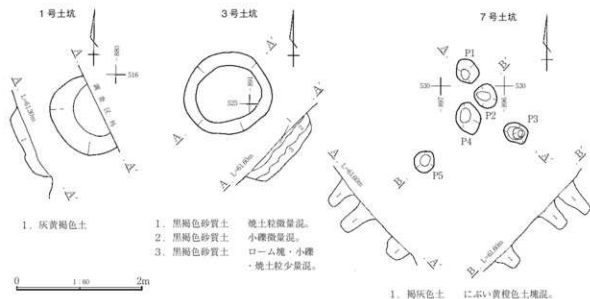


図122 4区1・3・7号土坑跡平面図・土層断面図

## 4区表土

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴・備考
4区表-1	土師器 甕	埋土、口縁一部破片	測定口径24.2、残存器高11.4、器厚0.6	①鈍い橙色 ②良好 ③緻密	外面縦方向刷毛目、突部部貼付、突部上下横撫、内面斜方向刷毛目

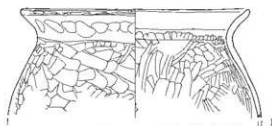


図123 4区表土出土遺物

0 1:4 8cm

## 第9節 5区の遺構と遺物

5区は、石橋交差点の南側で、主要地方道太田大間々線の東側に面した調査区である。平成18年度に調査された。面積は230㎡である。各調査区同様、主要地方道太田大間々線に面し、また、東武鉄道桐生線治良門橋駅にもほど近い場所であるため、もともと商店や宅地が建ち並んでいた場所であり、上面の掘削が甚だしく、攪乱されている部分が全調査区の中でも最も多い場所なので、遺構の残存状態は極めて悪い。堅穴建物跡はいずれも浅くか、あるいは床面近くで辛うじて検出できた程度である。

また、堅穴建物跡3棟が検出されている。堅穴建物跡はいずれも古墳時代後期～飛鳥・白鳳時代～奈良時代のものである。調査区の東西幅は約4m強程度であるため、堅穴建物跡のごく一部しか検出できなかった。

(1) 5区1号竪穴建物跡

位置：5区の南端。X415・Y-830Gr。 重複：東壁の北寄りの部分を5区2号竪穴建物跡に掘り込まれる。  
 規模と形状：東壁の北寄りの部分を5区2号竪穴建物跡に掘り込まれ、東壁の南寄りの部分と北及び南壁の一部、西壁の全部は調査区外に出るため、全容は不明である。南北は1辺約6.4m・東西は約4.2m以上の規模を呈する大規模な竪穴建物跡であったとみられる。深さは約32cm、堀方までの深さは約40cmである。竈も調査範囲では検出されていない。 柱穴：南東隅 (pit1)・南西隅 (pit2)・北東隅 (pit3) の3箇所で見出された。pit1：長径約50cm・短径約40cm・深さ約60cm、pit2：長径約45cm・短径約39cm・深さ約60cm、pit3：長径約60cm・短径約50cm・深さ約74cm。 埋土：暗灰黄色粘質土ベース。 床面：地山をほぼ平坦に削り整えて整形し、部分的に4～10cm程度のローム土で床を貼っている。 時期：7世紀後半。

(2) 5区2号竪穴建物跡

位置：5区の南端。X415・Y-830Gr。 重複：5区1号竪穴建物跡の東壁を掘り込んで破壊している。 規模と形状：北西隅部と西辺のごく一部が検出されたに過ぎず、9割方が調査区外に出るため、全容は全く不明である。竪穴建物跡の深さは約50cm。検出された北壁と西壁の一部の壁際には、上幅約48cm・深さ約4cm程度の周溝が取り付いている。 埋土：褐灰色粘質土ベース。 床面：地山を削り出して平坦に整形している。床面と堀方はほぼ一致しており、床面下の土坑等は検出されなかった。 時期：8世紀。

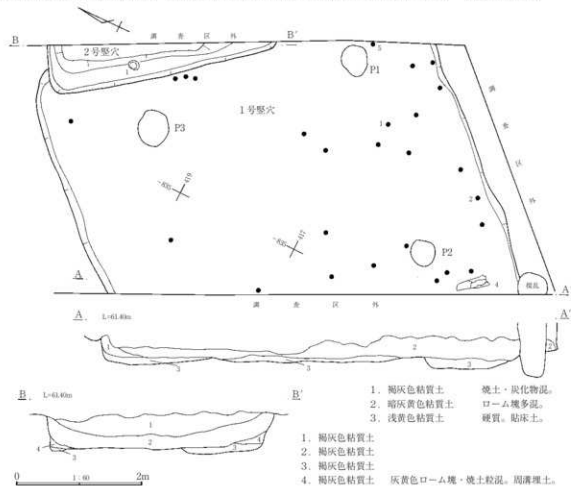


図124 5区1・2号竪穴建物跡平面図・土層断面図

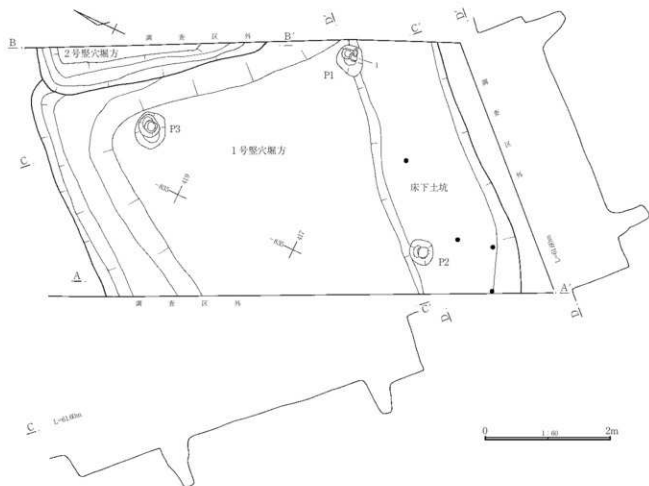


図125 5区1・2号壱火建物跡堀方平面図・エレベーション図

## 5区1号壱火建物跡

遺物番号	器種	出土状況・状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
5区1壱-1	土師器 碗	埋土 約2/3	口径149、器高8、器厚1.6	①鈍い黄橙色 ②良好 ③粗い	口縁部内外面横撫、体部～底部内外面抛削
5区1壱-2	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	鑑定口径145、残存器高7.5、器厚0.4	①鈍い黄橙色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部～底部外面抛削・内面縦・斜方向撫
5区1壱-3	土師器 小型 甕	埋土	口径14.7、底径8、器高5.6、器厚0.6	①赤中粒 ②良好 ③中粒、口縁部2cmの灰白色子・赤中粒混	口縁部内外面横撫、体部～底部外面抛削・内面縦・斜方向撫
5区1壱-4	形象埴輪 破片	床直、馬形埴輪脚1脚	現存長47.1、幅14.8	①橙色 ②良好 ③緻密	底面撫、外面縦方向刷毛目、脚底部踏表現切欠有
5区1壱-5	白玉	埋土	径14、厚0.5、孔径0.25	①暗緑灰色	

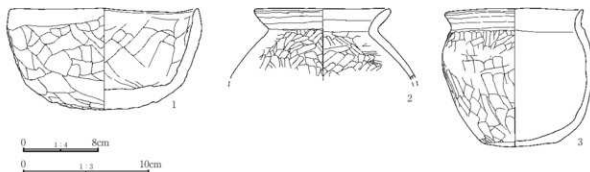


図126 5区1号壱火建物跡出土遺物 (1)

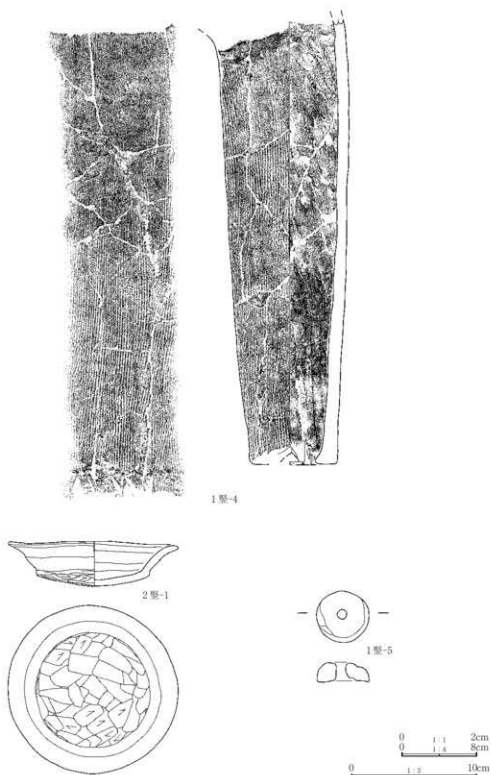


図 127 5区1号竪穴建物跡出土遺物 (2)・2号竪穴建物跡出土遺物

5区2号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋没部	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
5区2号-1	土師器 杯	埋土 完形	口径13.5、底径9、器高 3.5、器厚0.6	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁～体部内外面横撫、底部外面施刷 ・内面撫後黒色処理

## (3) 5区3号竪穴建物跡

位置：5区のほぼ中央からやや北寄りの位置。X425・Y-835Gr。 主軸方位：N-68°-E 重複：なし。 規模と形状：北東隅から北辺にかけて、大きく攪乱されており、南辺の一部と西辺は調査区外に出るため、全容は全く不明である。 埋土：褐灰色粘質土ベース。 竈：東壁の中央部からやや南寄りの位置に取り付く。竈は地山を削りだして造られ、南側の袖は粘土を貼って大きく住居内に張り出すが、北側の袖は全く確認できなかった。 燃焼部・煙道等は地山を削りだして構築される。燃焼部は、ほぼ住居壁の内側につくられる。煙道は平坦な燃焼部の奥壁から緩やかに立ち上がる。 床面：地山を削り出して整形し、浅黄色ローム土を約20～35cm程度厚く貼り付けて平坦面を形成している。 堀方：床面下浅い凹みに富む。 時期：8世紀。

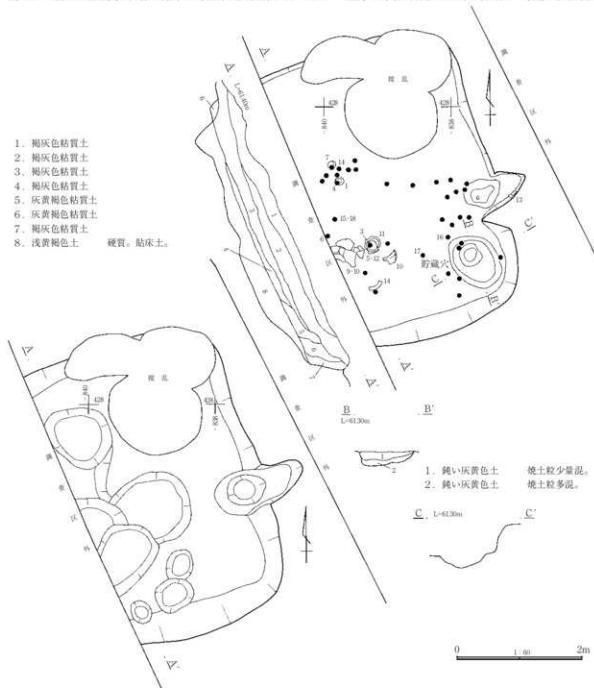


図128 5区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図・堀方平面図・貯蔵穴土層断面図・エレベーション図

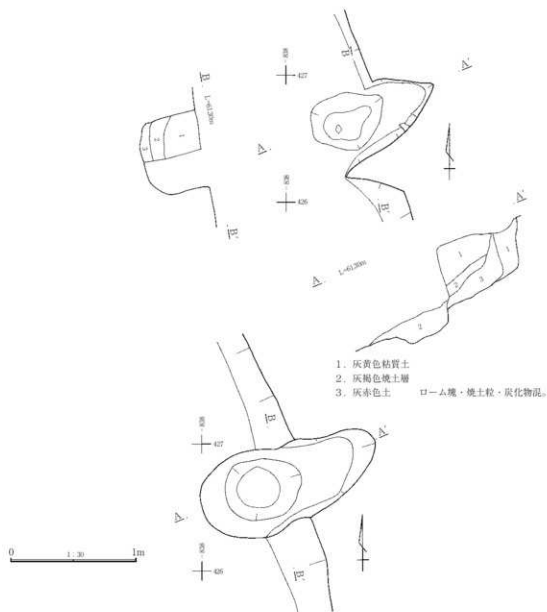


図 129 5区3号竪穴建物跡電跡平面図・土層断面図・堀方平面図

5区3号竪穴建物跡

遺物番号	器 種	出土状況・埋没状況	法 量 (cm)	①色調②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
5区3号-1	土師器 杯	埋土 4/5	口径13、器高3.5、器厚 0.4	①橙色 ②良好 ③赤、 B11~1m程度の灰色・胎土粒子混	口縁部内外面横撫、体~ 底部外面挽削・内面横撫
5区3号-2	土師器 杯	埋土 1/2	口径13.1、器高3.8、器 厚0.5	①鈍い橙色 ②良好 ③や や粗い	口縁部内外面横撫、体~ 底部外面挽削・内面横撫
5区3号-3	土師器 杯	埋土 1/2	推定口径13、器高3.6、 器厚0.5	①鈍い橙色 ②良好 ③紅、 B1m以下の灰色・胎土粒子混	口縁部内外面横撫、体~ 底部外面挽削・内面横撫
5区3号-4	土師器 杯	埋土 1/3	推定口径126、残存器高 3、器厚0.5	①鈍い橙色 ②良好 ③緻 密	口縁部内外面横撫、体~ 底部外面挽削・内面横撫
5区3号-5	土師器 杯	埋土 1/4	推定口径124、残存器高 3.6、器厚0.7	①鈍い黄橙色 ②良好 ③ 径1m以下の灰白色粒子微量混	口縁部内外面横撫、体~ 底部外面挽削・内面横撫
5区3号-6	須恵器 杯	埋土 5/6	口径148、底径79、器 高34、器厚0.5	③灰白色 ②良好 ④中粗、 B1m以下の暗赤・胎土特	轆轤成形、底部外面回転挽削、体部外 面正位黒書「奉」
5区3号-7	須恵器 杯	埋土 3/4	口径124、器高36、器 厚0.5	①灰白色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部外面手持挽削

5区3号-8	須恵器 杯	埋土 1/3	壺定口径127、器高39、 器厚0.5	①灰白色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部外面糸切
5区3号-9	土師器 甕	埋土 ほぼ完形	口径23、底径5.6、器高 36.5、器厚0.6	①明赤褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体・底部外面施削、 体・底部内面横・斜方向撫
5区3号 -10	土師器 甕	埋土 2/5	口径24.8、残存器高21、 器厚0.7	①明褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部外面施削、体 部内面横・斜方向撫
5区3号 -11	土師器 甕	埋土 2/5	口径23.8、残存器高12、 器厚0.6	①鈍い黄褐色 ②良好 ③ 緻密	①縁部内外面横撫、頸～体部外面施削、 頸部内面横撫、体部内面横・斜方向撫
5区3号 -12	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	壺定口径17.6、残存器高 18.1、器厚0.6	①鈍い褐色 ②良好 ③緻、 H <sub>max</sub> 70620磁片9粒	口縁部内外面横撫、頸～体部外面施削、 頸部内面横撫、体部内面横・斜方向撫
5区3号 -13	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	壺定口径11.8、残存器高 13.7、器厚0.4	①褐色 ②良好 ③緻密、H 1m以下の黒褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、頸～体部外面施削、 頸部内面横撫、体部内面横・斜方向撫
5区3号 -14	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	壺定口径24、残存器高 8.1、器厚0.7	①鈍い褐色 ②良好 ③緻、 H <sub>max</sub> 70620磁片9粒	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面横・斜方向撫
5区3号 -15	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	壺定口径22、残存器高 11.9、器厚0.4	①鈍い褐色 ②良好 ③緻、 H <sub>max</sub> 70620磁片9粒	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面横・斜方向撫
5区3号 -16	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	壺定口径23.8、残存器高 7.8、器厚0.5	①褐色 ②良好 ③緻密、H 1m以下の灰白色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面横・斜方向撫
5区3号 -17	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	壺定口径21.6、残存器高 6.9、器厚0.5	①褐色 ②良好 ③緻密、H 1m以下の灰白色・赤褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面横・斜方向撫
5区3号 -18	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	壺定口径20、残存器高 7.2、器厚0.5	①鈍い褐色 ②良好 ③緻、 H <sub>max</sub> 70620・緑磁片9粒	口縁部内外面横撫、体部外面施削・内 面斜方向撫

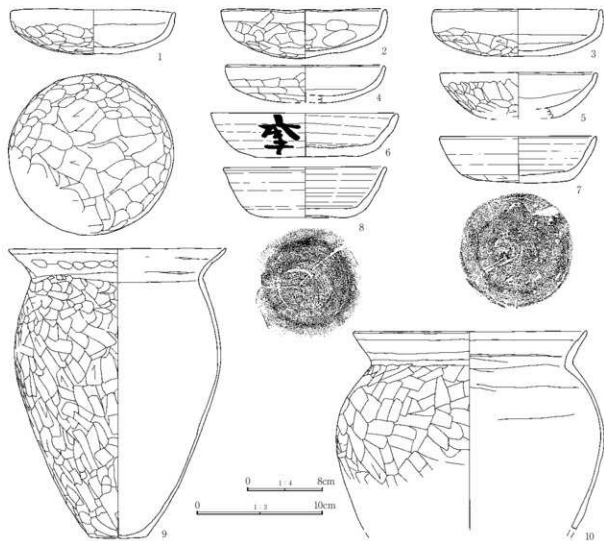


図130 5区3号竈穴建物跡出土遺物(1)

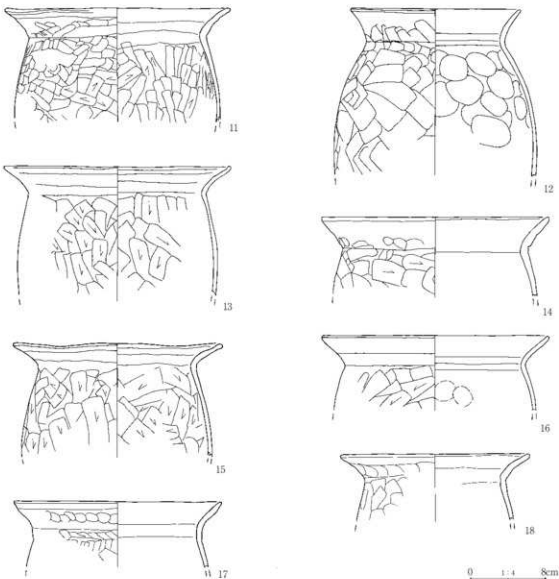


図131 5区3号竪穴建物跡出土遺物(2)

5区表土

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
5区表-1	土師器 甕	埋土、口縁・体部破片	推定口径17、残存器高8.1、器厚11.4	①色調 ②焼成 ③胎土 ①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部外面施削、体部内面縦・斜方向撫

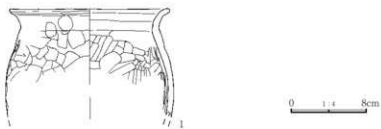


図132 5区表土出土遺物



## 第10節 6区の遺構と遺物

6区は、石橋交差点の南側で、主要地方道太田大間々線の西側に面した調査区である。平成18年度に調査された。面積は210㎡である。各調査区同様、主要地方道太田大間々線に面し、また、東武鉄道桐生線治良門橋駅にもほど近い場所であるため、もともと商店や宅地が建ち並んでいた場所であり、上面の掘削が甚だしく、攪乱されている部分が多く、遺構の残存状態は極めて悪い。竪穴建物跡はいずれも浅くか、あるいは床面近くで辛うじて検出できた程度である。

また、竪穴建物跡4棟、柱穴列1条、井戸跡1基、土坑跡1基が検出されている。竪穴建物跡は、いずれも古墳時代後期～飛鳥・白鳳時代～奈良時代のものである。調査区の東西幅は約1.5～3mと非常に狭く、竪穴建物跡はごく一部分しか検出できなかったため、詳細については明らかに出来ないものが多い。

## (1) 6区1号竪穴建物跡

位置：6区の南端付近。X405・Y-840Gr。規模と形状：上面を掘削され、東西辺が調査区外に出るため、北辺と南辺の一部が検出されているに過ぎない。南北幅約3.7m・深さ約30cm・堀方までの深さは約59cm。埋土：灰黄褐色土ベース。床面：地山をほぼ平坦に削り整えて整形し、部分的に10～30cm程度の暗灰黄褐色粘質土による貼り床を貼っている。堀方は凹凸に富む。時期：8世紀後半。

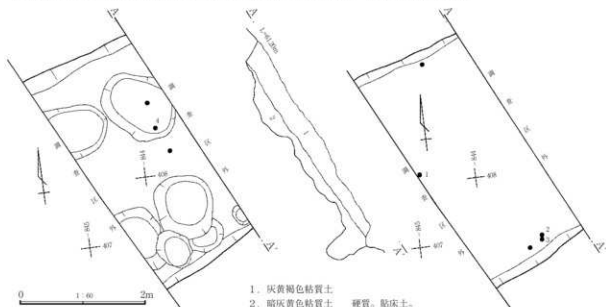


図133 6区1号竪穴建物跡平面図・土層断面図・堀方平面図

## 6区1号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋没状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
6区1竪-1	須恵器 杯	埋土 1/2	推定口径134、推定底径 84、器高39、器厚06	①鈍い橙色 ②やや不良 ③緻密	轆轤成形、底部回転糸切
6区1竪-2	須恵器 杯	埋土 3/4	口径132、底径72、器 高41、器厚06	①濁灰色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部回転糸切
6区1竪-3	須恵器 杯	埋土 3/4	口径13、底径73、器高 37、器厚03	①濁灰色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部回転糸切後縁辺部手持 差削
6区1竪-4	須恵器 杯	埋土 2/3	口径13、底径72、器高 33、器厚04	①灰白色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部回転差削

第3章 発見された遺構と遺物

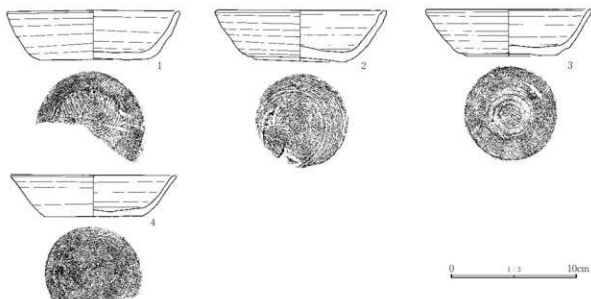


図 134 6区1号竪穴建物跡出土遺物

(2) 6区2号竪穴建物跡

位置：6区の中央よりやや南寄りの位置。6号土坑跡の南。X420～430・Y850～855Gr。 規模と形状：北辺と南辺のごく一部が検出されたに過ぎず、東西両側が調査区外に出るため、全容は全く不明である。検出されている範囲での南北幅は約7.8m。深さは約20cm。掘方までの深さは約50cm前後。北壁が不自然に屈曲しているのが不審であるが、検出範囲が狭いために詳細は不明。 埋土：灰黄褐色土ベース。 床面：地山を削り出して平坦に整形し、厚さ5～20cm前後の灰褐色粘質土を貼り付けて平坦面を造り、床面を形成している。掘方はやや凹凸に富む。 時期：8世紀後半。

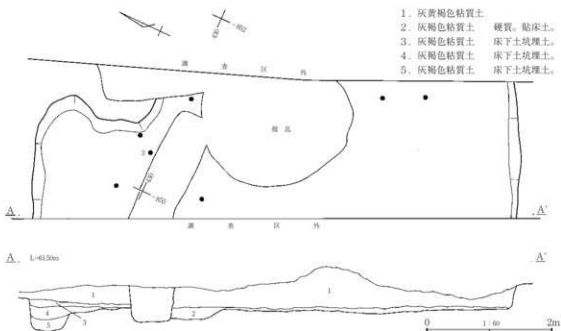


図 135 6区2号竪穴建物跡平面図・土層断面図

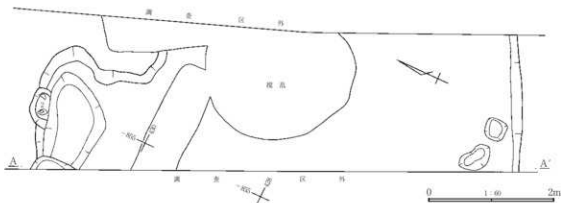


図136 6区2号竪穴建物跡掘方平面図

## 6区2号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
6区2型-1	土師器 杯	埋土	推定口径12、器高31、器厚0.5	①褐色 ②良好 ③緻密、厚1mm以下の灰白色・黒褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削・内面撫
6区2型-2	須恵器 杯	床直	口径132、底径67、器高38、器厚0.5	①灰色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部回転糸切後撫、底部内面磨き「丁」
6区2型-3	須恵器 杯	埋土	推定口径132、推定底径62、器高4、器厚0.6	①灰色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部回転糸切
6区2型-4	須恵器 高台付椀	埋土	推定口径156、推定底径82、残存器高57、器厚0.5	①灰白色 ②良好 ③緻密	轆轤成形、底部回転糸切後撫、高台部貼付
6区2型-5	須恵器 蓋	埋土、破片	推定径171、器厚0.4	①灰白色 ②良好 ③緻密	轆轤成形
6区2型-6	須恵器 大甕	埋土、口縁～頸部破片	推定口径40、残存器高158、器厚1.3	①灰白色 ②良好 ③緻密、厚1-2mmの灰白・黒褐色粒子少量混	口縁～頸部轆轤成形
6区2型-7	有孔石製品	埋土	長32、幅2.3、厚0.4	①暗緑灰色	
6区2型-8	土師器 杯	埋土	口径15.4、器高4.3、器厚0.3	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削・内面撫
6区2型-9	土師器 杯	埋土	口径14.1、器高4、器厚0.7	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削・内面撫
6区2型-10	土師器 杯	埋土	推定口径12、残存器高32、器厚0.5	①褐色 ②良好 ③緻密、厚1mm以下23mmの黒褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削・内面撫
6区2型-11	土師器 杯	埋土	推定口径159、残存器高4、器厚0.4	①褐色 ②良好 ③やや粗い、厚1mm以下23mmの黒褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削・内面撫
6区2型-12	土師器 杯	埋土	推定口径131、残存器高37、器厚0.6	①褐色 ②良好 ③やや粗い、厚1mm以下23mmの黒褐色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削・内面撫
6区2型-13	土師器 杯	埋土	推定口径132、残存器高3.6、器厚0.3	①褐色 ②良好 ③緻密、厚1mm以下の灰白色粒子少量混	口縁部内外面横撫、体～底部外面横削・内面撫
6区2型-14	須恵器 杯	埋土	口径133、器高39、器厚0.5	①褐色 ②やや不良 ③緻密	轆轤成形、底部回転糸切
6区2型-15	土師器 甕	埋土、口縁～体部破片	推定口径225、残存器高64、器厚0.9	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部外面横削、体部内面縦・斜方向撫
6区2型-16	土師器 甕	埋土、口縁～体部破片	推定口径25、残存器高64、器厚0.9	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横撫、体部外面横削、体部内面縦・斜方向撫
6区2型-17	土師貫 土師	埋土	長8.65、幅1.8、孔径0.6	①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密	外面横削後撫



図137 6区2号竪穴建物跡出土遺物 (1)

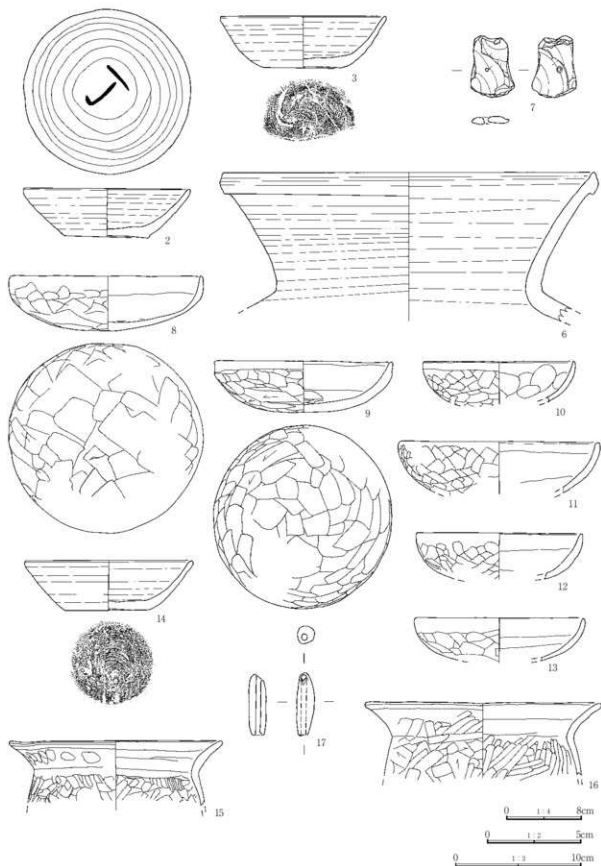


図138 6区2号竪穴建物跡出土遺物(2)

## (3) 6区3号竪穴建物跡

位置：6区のほぼ中央。6号土坑跡の西。X415・Y-850Gr.。規模と形状：東辺が検出されただけで、大部分は調査区西壁外に出てしまうため、詳細は不明である。南北幅は約2.5mと小さい。深さ約54cm。埋土：暗灰黄色土ベース。床面：地山を平坦に削り出して形成。掘方と床面とはほぼ一致。時期：9世紀前半。

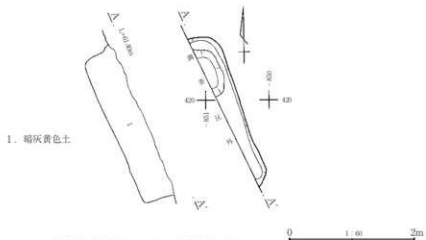


図139 6区3号竪穴建物跡平面図・土層断面図

## 6区3号竪穴建物跡

遺物番号	器種	出土状況・埋土	流量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
6区3号-1	土器 杯	埋土 完形	口径14.6、器高5、器厚 0.7	①灰黄色 ②良好 ③軟 密	口縁～体部上面内外面横襖、体～底部 外面施削・内面撫

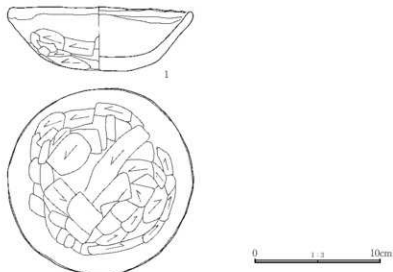


図140 6区3号竪穴建物跡出土遺物

## (4) 6区5号竪穴建物跡

位置：6区のほぼ中央。6号土坑跡の南、1号竪穴建物跡の北。X410・Y-845Gr.。規模と形状：南北辺が検出されただけで、東西両側は調査区外に出るため、詳細は不明である。南北幅は約2.6mと小さい。深さ約32cm。埋土：灰茶褐色土ベース。床面：地山を平坦に削り出して形成。掘方と床面とはほぼ一致。時期：8世紀後半。

第3章 発見された遺構と遺物

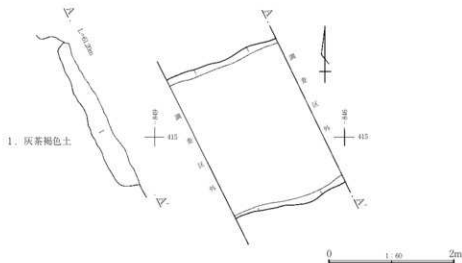


図 141 6区5号竪穴建物跡平面図・土層断面図

6区5号竪穴建物跡

遺物番号	器種	土質・焼成	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
6区5号-1	埴器 杯	埋土 1/2	推定口径88、器高29、 器厚0.3	①鈍い黄褐色 ②良好 ③緻密	輪軸成形、底部回転彫削
6区5号-2	土師器 甕	埋土 3/5	口径21.4、残存器高24.4、 器厚0.3	①黒褐色 ②良好 ③緻 密	口縁部内外面横撫、体部外面彫削、体 部内面横撫

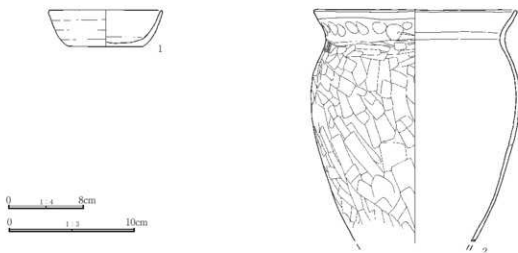


図 142 6区5号竪穴建物跡出土遺物

(5) 6区1号柱穴列跡

位置：6区のはほぼ中央。2号竪穴建物跡の南西、3号竪穴建物跡の北東。X420・Y-850Gr.。 主軸方位：N-25°-W 規模と形状：北西方向から南東方向に pit3 基が一直線に並ぶ。柱間は心々で1.9mから1.2mとまちまちである。pit1：長径約50cm×短径約40cm×深さ約24cm、pit2：長径約60cm×短径約48cm×深さ約44cm、pit3：長径約42cm×短径約40cm×深さ約34cm。 埋土：灰褐色土ベース。

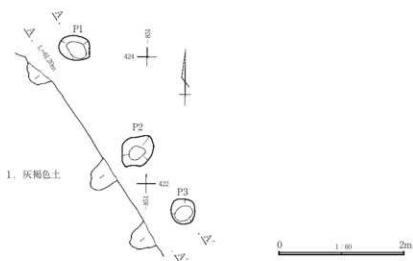


図 143 6区1号柱穴列跡平面図・土層断面図

## (6) 6区1号井戸跡

位置：6区の北端、調査区西壁にかかる。X435・Y-855Gr。規模と形状：東側が調査区外に出るため、全容は不明であるが、確認最大径約2.4m・深さ約1m以上。安全確保のため、深さ約1.1mまでしか調査されていない。埋土：灰黄褐色土と砂礫層をベースとする。

## (7) 6区6号土坑跡

位置：6区のほぼ中央、5号竪穴建物跡の南。調査区東壁にかかる。X415～420・Y-845Gr。規模と形状：東側が調査区外に出るため、全容は不明であるが、確認最大径約4.28m・深さ約61cm。埋土：灰黄褐色粘質土ベース。



図 144 6区1号井戸跡・6号土坑跡平面図・土層断面図

第3章 発見された遺構と遺物

6区1号井戸跡

遺物番号	器種	出土状況・残存状態	法量 (cm)	①色調 ②焼成 ③胎土	器形・整形の特徴、備考
6区1井-1	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	推定口径 23、残存器高 8.1、器厚 11.4	①明赤褐色 ②良好 ③ 緻密	口縁部内外面横溝、胴部～体部外面彫削、 胴部内面横溝、体部内面縦・斜方向溝
6区1井-2	土師器 甕	埋土、口縁～ 体部破片	推定口径 22.6、残存器高 6.9、器厚 0.5	①褐色 ②良好 ③緻密	口縁部内外面横溝、胴部～体部外面彫削、 胴部内面横溝、体部内面縦・斜方向溝

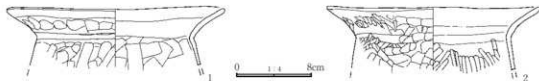


図 145 6区1号井戸跡出土遺物



## 第4章 調査成果の整理とまとめ

### 第1節 出土した埴輪について

ハツ場ダム調査事務所調査研究部資料整理グループ専門嘱託員 新山 保和

#### 1. はじめに

石橋地蔵久保遺跡からは、3区3号土坑・5区1号堅穴建物跡・4区2号井戸跡・遺構外から埴輪片が多数出土している。この埴輪片の中で、器形の復元可能な個体が1点出土している。口縁部は欠損しているが、胴部から底部まで残存する6条突帯以上の大型円筒埴輪（図119-1）である。この埴輪は、特徴的なプロポーションをしており、極めて低い位置に突帯を貼付する点に特徴を持つ。この埴輪は、「低位置突帯埴輪」と呼称される多条突帯埴輪である。筆者はかつて、この「低位置突帯埴輪」を3つに分類し、その系譜について検討を加えたことがある<sup>1)</sup>（新山2007b）。今回は、この検討を踏まえて、本遺跡出土の低位置突帯埴輪について私見を述べてみたい。その前に、本遺跡出土の埴輪について特徴的な点を述べることにする。

#### 2. 出土遺物

##### (1) 3区3号土坑

3区3号土坑からは、6点の埴輪片が出土している。すべて円筒埴輪で、個体としては3個体（図99-5、図100-6・8・9、図100-7・10）に分けられる。焼成・胎土ともすべて共通しており、径5mm前後の小石を中心に砂礫を多く含む。図100-6の底部片を見ると、7cm幅の板状粘土を丸めて基底部とし、その上に幅1～2cmの粘土を輪積みして成形する。ハケメには2種類あり、細かいハケメ（1cmに8本）と粗いハケメ（1cmに5本）に大別ができる。細かいハケメ個体（図99-5、図100-6・8・9）の外側調整は、底部付近まで直線的にタテハケを施す。内側調整は、全体的に丁寧な指ナデを施すが、部分的に輪積み痕が残存する。粗いハケメ個体（図100-7・10）の外側調整はタテハケで、内側調整は工具痕が明瞭な粗いナデを施す。図99-5の破片は、底部片で底部付近でやや外反する特徴的なプロポーションを呈する。

##### (2) 4区2号井戸跡

4区2号井戸跡からは、埴輪片143点が出土している。円筒埴輪12点、朝顔形埴輪2点、形象埴輪6点で、形象埴輪の種類は馬形埴輪1点、家形埴輪3点、不明2点を数える。掲載が20点（図119～121）、非掲載123点（内訳は円筒埴輪の口縁部片3、胴部片115点、底部片3点、朝顔形埴輪片2点）を数える。

##### ①掲載遺物

2・5は円筒埴輪の基部で、6.5cm～9cmの粘土板を折り曲げて成形し、その上に幅1～2cmの粘土紐を輪積みする。2の外側調整は基本的にタテハケで、底部付近のみナメハケを施す。5の内側調整は底部付近のみ指ナデを丁寧に施し、それより上部はハケメ及び指ナデを施すが、規則性なく雑であるため輪積み痕が部分的に残る。3・4・9は家形埴輪の壁部と見られる。9には長方形のスカシ孔があり、入口部を表現する。6は胴部で、幅1～1.5cmの粘土紐を輪積みして成形する。内側はナデ調整が不良のため、輪積み痕が部分的に残る。7・8は同一個体の円筒埴輪である。内側は指ナデ調整で、底部から6.5cm前後まで指頭圧痕が認め

られ、丁寧に調整を施す。他の円筒埴輪と比較してやや小振りで、スカシ孔も小さく突帯も1cm前後と低いのが特徴である。胎土・色調にも特徴があり、赤褐色が強い。胸形埴輪窯産か。10は馬形埴輪片で、辻金具を粘土貼付と刺突で表現する。11・15～18は口縁で、17・18には×字状の線刻が施される。12・13は朝顔形埴輪の頭部である。14・19は不明形象埴輪である。14は低い横位の粘土紐に直角に連結して半円状の粘土紐を貼付し、人物埴輪片か馬形埴輪片と見られる。19は低い幅広の突帯を貼付し、突帯のすぐ上にスカシ孔を穿つ。20は底部片で、底面に板目痕が残る。基部は、右側端部が左側端部に乗るように接合する（R接合）。

#### ②全体の様相

口縁部片は掲載5・非掲載3点を含めた8点が出土している。胎土や色調などの相違点からすべて別個体と見られる。底部片は掲載5・非掲載2点の7点が出土している。底部片も口縁部片同様すべて別個体と見られる。また、口縁部片に対応する底部片は見受けられない。胴部片は、少なくとも10個体以上に分類できる。その中で、口縁部片や底部片と同一個体の胴部片もあると考えられるが、全体として15～20個体分の埴輪が出土していると思われる。これらの相違は、共通項が少ない点から同一製作者集団の中の製作者の相違ではなく製作者集団の相違と考えられる。その他に形象埴輪も複数出土しており、かなりバラエティがある。一古墳樹立の埴輪が混入したと見るよりは、複数の古墳の埴輪が混入した印象を受ける。

#### ③低位置突帯埴輪（図119）

残存高5条6段の低位置突帯埴輪で、スカシ孔は3段目から千鳥状に交互に穿孔する。底径29.4cm・残存高48cmを測り、口縁部まで達していないことからさらに高くなるものと見られる。外面はタテハケ調整で、上から下まで一気にハケ調整を施さず、1段から2段くらいまでのスパンでタテハケ調整を施す。内面は基本的にナナメハケ調整で、底部すれすれまで調整を施す部分がある。最下段の突帯は、底部から1cm前後の高さに貼付されており、筆者の1類に相当する。第2段からは約11・12・11・12cmの突帯間を持ち、規格性がうかがえる。プロポーションは、最大径を底部径に持ち、口縁にいくに従って窄まっていく。普通円筒埴輪のプロポーションとは逆転しているが、倒立技法の痕跡は認められない。他の4区2号井戸跡出土の埴輪と比較すると、橙色が強くやや焼成が弱い印象を受ける。以上のような特徴を踏まえて、次に主に形態や焼成・胎土の比較から、時期や出土遺構について考えてみたい。

#### ④小結（表1）

低位置突帯埴輪は、5～6条突帯が主流を占める多条突帯埴輪である。本例に類似する5条以上低位置突帯埴輪と見てみると、七奥山古墳・綿貫観音山古墳・小泉大塚越3号墳・中二子古墳・金冠塚古墳・兵庫塚古墳・猿楽古墳群1号墳から出土している（図146）。胎土・色調を見ると、最も類似するのは今泉口八幡山古墳や胸形神社埴輪窯集積跡出土の埴輪が挙げられる。今泉口八幡山古墳の埴輪は胸形神社埴輪窯産と見られており、両者に近い本遺構の低位置突帯埴輪は、胸形神社埴輪窯産と考えられる。胸形神社埴輪窯産と見られる低位置突帯埴輪出土古墳を見ると、6世紀後半が中心であることから、本遺跡出土の低位置突帯埴輪も6世紀後半の所産と考えられる。次に出土遺構であるが、低位置突帯埴輪など大型埴輪が井戸枠に転用される事例があるので<sup>2)</sup>、本遺跡も同様な事例とも考えられるが、遺構や埴輪の検出状況からはその状況は見受けられない。井戸跡から低位置突帯埴輪が出土した遺跡に、オトカ塚遺跡が挙げられる。この井戸跡からは、大型馬形埴輪を含め多数の埴輪が出土している。器種は、朝顔・普通円筒・低位置・家・蓋・盾持人・馬形埴輪で、多条突帯埴輪が多く見られる。オトカ塚遺跡からは、削平された古墳が検出されており、多くの埴輪が出土している。本古墳の事例と類似することから、墳丘が削平された段階で井戸に廃棄されたものと

も考えられるが、本遺跡内から古墳の削平された痕跡が検出されていないので、判断が難しい。結論は今後の周辺調査に期待したい。

古 墳 名	所 在 地	墳 形	折返口縁	分 類
堂山稲荷古墳（一ノ宮3号墳）	富岡市	前方後円墳	○	I～III類
七興山古墳	藤岡市	前方後円墳	○	II～III類
小林古墳群K-2号墳	藤岡市	埴輪棺		II類
本郷埴輪室	藤岡市	埴輪室		
猿田II遺跡	藤岡市	埴輪室	○	II～III類
綿貫観音山古墳	高崎市	前方後円墳	○	I・II類
小泉大塚越3号墳	玉村町	前方後円墳		I～III類
オトカ塚古墳	玉村町	前方後円墳		II類
中二子古墳	前橋市	前方後円墳		I・II類
金冠塚古墳	前橋市	前方後円墳	○	II～III類
上植木光仙房遺跡E・F区2号墳	伊勢崎市			I類
兵庫塚古墳	太田市	前方後円墳		I類
旧新田町森下出土	太田市			II類
世良田源訪下56号墳	太田市	円墳		II類
朝子塚古墳	太田市	前方後円墳		II類
西長岡東山古墳群第3号古墳	太田市	帆立貝形古墳		II類
猿塚古墳群1号墳	太田市	円墳		II類
太田天神山古墳	太田市	前方後円墳		II類
女体山古墳	太田市	帆立貝形古墳		I類
今泉口八幡山古墳	太田市	前方後円墳		I・II類
駒形神社埴輪室集積	太田市	埴輪室	○	II類
古海松塚25号墳	大泉町	円墳		II類
舟山古墳	板倉町	前方後円墳		I類

表2 古墳出土低位置突帯円筒埴輪集成表

### (3) 5区1号竪穴建物跡

5区1号竪穴建物跡出土の埴輪は、器高47.1cmを測る馬形埴輪の脚部である。底部に蹄表現の切り込みを施す。外面調整にタテハケを施すが、2種類のハケメを用いている。全体に粗いハケメで調整後、脚上部のみに細かいハケメ調整を施す。胴部円筒埴輪や朝顔形埴輪、形象埴輪（人物・家・馬・大刀など）がカマドの煙道や構材に転用された事例（図147）が散見することから、本例も同様な転用例と見られる<sup>31</sup>。

### (4) 遺構外

遺構外からは、6点の埴輪片が出土している（図49-6～11）。6は朝顔形埴輪の口縁部片と見られる。内面に剥離痕が認められることから、擬口縁状に外反した突出部の上に、さらに口縁部が伸びるものと見られる（擬口縁接合）。7は、形象埴輪片（駒？）と見られる。外面に鋸歯状の線刻を施文する。線刻は右から左に施文する。8は円筒埴輪の基底部で、底面に板状圧痕が認められる。9・10は胴部片、11は幅広の極めて低い突帯を持つ胴部片で、形象埴輪片である。

### 3. まとめ

最後に、低位置突帯埴輪について今後の展望を述べてみたい。低位置突帯埴輪は、基本的に前方後円墳や盟主墳に伴う埴輪で、あまり一般的な埴輪ではない特徴的な埴輪といえる。関東では主に群馬・栃木県を中心に出土しており、群馬県では藤岡市の泉田・本郷埴輪窯、太田市は胸形神社埴輪窯、栃木県では唐沢ゴルフ場埴輪窯から出土している。拙稿でも触れたが、群馬県における低位置突帯埴輪の生産拠点は、主に藤岡市の泉田・本郷埴輪窯の藤岡産と、胸形神社埴輪窯の東毛産の2拠点があったものと見られる。この2大埴輪生産地の埴輪は、低位置突帯埴輪という埴輪を供給する点で共通する一方で、大阪府日置荘埴輪窯出土の埴輪との類似性が指摘されている(入江2002)<sup>4)</sup>。この3埴輪窯からは、低位置突帯埴輪と高い確率で共存する(森田・鈴木1990) 貼付口縁の技法を用いた円筒埴輪が出土する点でも共通し、低位置突帯埴輪の技法の全国的な関連性がうかがえる。この低位置突帯埴輪の技法は、円筒埴輪だけではなく形象埴輪にも見られる技法である。特に、石見型埴輪の基部が低位置突帯である点は注目される<sup>5)</sup>。群馬県からは、石見型埴輪が前二子古墳と一ノ宮4号墳から出土している。前二子古墳の石見型埴輪は、全体の様相が分かるものは2個体出土しており、3分割と4分割の2種類が出土している。3分割の石見型埴輪が基部まで残っており、低位置突帯埴輪である。一ノ宮4号古墳の埴輪に低位置突帯の埴輪は見受けられないが、隣接する一ノ宮3号古墳(堂山稲荷古墳)から低位置突帯埴輪が出土している。この他にも、石見型埴輪と低位置突帯埴輪、貼付口縁円筒埴輪の3者には高い共存性がうかがえる<sup>6)</sup>。この3者の関連性を追うことにより、古墳時代の地域間交流が垣間見えてくると思われる。今後の課題としたい。

#### 註

- 1) 基底部から第1突帯の下端部までの計測値を基準とし、Ⅰ類は突帯が基底部にありそのまま底部になるもの、Ⅱ類は突帯の位置が基底部から3cm前後の高さに位置するもの、Ⅲ類は突帯の位置が基底部から5cm前後の高さに位置するもの、3つに分類する。その中で、低位置突帯埴輪と呼称されるものはⅠ・Ⅱ類であり、Ⅲ類は低位置突帯埴輪類型と呼称すべきものであり、本来的な意味での低位置突帯埴輪は前者であることを指摘した。
- 2) 大阪府太田遺跡(勤柯・江浦1987)が挙げられる。
- 3) カマドの構築材として埴輪を用いる事例は、浜町遺跡・上笠榎南遺跡・上植木光仙房遺跡・舟橋遺跡・三ツ木遺跡・三ツ木Ⅲ沼遺跡・小角田前遺跡・成塚石橋遺跡などが挙げられる。
- 4) 入江氏は、本郷埴輪窯・胸形神社埴輪窯・日置荘埴輪窯出土の埴輪を比較して、その類似性の高さを指摘している。特に、胸形神社埴輪窯と日置荘埴輪窯出土の人物埴輪は、その特異な作風に共通性がうかがえる。また、高橋氏は、藤岡産埴輪である七俣山古墳の埴輪と大阪府日置荘埴輪窯出土の埴輪の類似性を挙げ、大阪府日置荘埴輪窯は七俣山古墳の埴輪工人を呼び寄せて作った可能性を指摘する(高橋1994)。
- 5) 形象部から底部まで残存する事例は少ないが、石見遺跡(末永1935)や岩室池古墳(楠本1985)などが挙げられる。
- 6) 石見型埴輪は、出土に地域的な偏在が見られる。例えば、岡山県の石見型埴輪は、吉備の東辺部に偏って分布しており、備中では確認されていない。この石見型埴輪に伴って貼付口縁の円筒埴輪が出土している。

#### 挿図出典

図146・147 各報告書より転載

#### 引用文献

天笠洋一 1996『今泉口八幡山古墳発掘調査報告書』太田市教育委員会

- 井川達雄・大西雅広 1989「舟橋遺跡」〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第92集
- 石塚久則 1996「猿楽遺跡」〔太田市史 通史編原始古代〕太田市
- 井上 太 1981「4まとめ (2) 古墳時代」〔本宿・郷土遺跡〕富岡市文化財保護協会
- 入江正則 2002「日置荘遺跡埴輪窯P-1出土埴輪に関する覚え書き」〔大阪文化財論集〕Ⅱ (財)大阪府文化財センター  
pp.149～167
- 大木伸一郎 1984「三ツ木遺跡」〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大木伸一郎 1985「小角田前遺跡」〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大江正行 1995「小角田前Ⅰ・Ⅱ遺跡」〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第192集
- 大西雅広ほか 1985「上並根南遺跡」〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 岡部修一・天竺洋一 1991「西長岡東山古墳群 (第Ⅲ次) A区」〔埋蔵文化財発掘調査年報〕1 太田市教育委員会
- 小郷利幸・豊島雪絵・行田裕美 2007「日上山古墳群Ⅱ」〔津山市埋蔵文化財発掘調査報告書〕第78集 津山市教育委員会
- 柏木一男 2001「一ノ宮本宿・郷戸遺跡Ⅱ・一ノ宮古墳群」〔富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書〕第27集 群馬県富岡市教育委員会
- 橋元哲夫 1985「岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡」〔天理市埋蔵文化財調査報告〕第2集 天理市教育委員会
- 志村晋 1992「七槻山古墳」〔範囲確認調査報告書〕Ⅷ 群馬県藤岡市教育委員会
- 末永雅雄 1935「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」〔奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告〕第13冊 奈良県
- 藤橋俊夫・江浦洋 1987「太井遺跡 (その2) -調査の概要-」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 杉山晋作ほか 2004「猿田Ⅱ遺跡の調査」〔国立歴史民俗博物館研究報告〕第120集 国立歴史民俗博物館
- 高島英之 2007「上植木光仙房遺跡」〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第399集
- 高橋文壽 1994「埴輪生産の展開」〔考古学研究〕第41巻第2号 考古学研究会 pp.27～48
- 津金澤吉茂ほか 1980「群馬県藤岡市本郷埴輪窯跡出土の埴輪について」〔群馬県立歴史博物館紀要〕第1号 群馬県立歴史博物館
- 徳江秀夫 1998「縄貫観音山古墳Ⅰ 墳丘・埴輪編」〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 第242集
- 戸所慎策・前原豊 1995「中二子古墳」〔大宮公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報〕Ⅲ 前橋市教育委員会
- 新田町誌編纂委員会 1987「兵車塚古墳」〔新田町誌 第2巻資料編 (上)〕新田町
- 中里正憲 2003「オトカ塚遺跡」〔玉村町埋蔵文化財調査報告書〕第62集 玉村町教育委員会
- 新田町誌編纂委員会 1987「森下出土の埴輪」〔新田町誌 第2巻資料編 (上)〕新田町
- 新山保和 2007 a「栃木県出土の低位置突帯埴輪」〔古墳文化〕Ⅱ 國學院大学古墳時代研究会 pp.71～83
- 新山保和 2007 b「群馬県出土の低位置突帯埴輪」〔研究紀要〕25 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.45～60
- 庭山邦幸・渡辺幸 2005「浜町遺跡」〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第358集
- 布施和男 1981「金冠塚 (山王二子山) 古墳調査概報」前橋市教育委員会
- 前原豊・伊藤良・戸所慎策 1995「前二子古墳」〔大宮公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報〕Ⅱ 前橋市教育委員会
- 松井龍彦 1995「下田中道遺跡・下田中川久保遺跡」〔財〕群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第186集
- 三浦京子 1988「良良田源詰下遺跡」〔尾島町埋蔵文化財発掘調査報告書〕第13集 群馬県新田郡尾島町教育委員会
- 宮田毅 1991「太田市駒形神社埴輪窯跡埴輪集積場」〔考古学ジャーナル〕No.331 ニュー・サイエンス社 pp.16～22
- 宮田毅 1996「駒形神社埴輪窯跡」〔太田市史 通史編原始古代〕太田市
- 宮塚義人・三浦京子 1993「小泉大塚越遺跡」〔玉村町埋蔵文化財調査報告書〕第10集 玉村町教育委員会
- 森田久男・鈴木勝 1980「栃木県における後期古墳出土の埴輪の一様相」〔栃木県史研究〕第19号 pp.71～86
- 和田一之輔 2006「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」〔考古学研究〕第53巻第3号 考古学研究会 pp.69～89

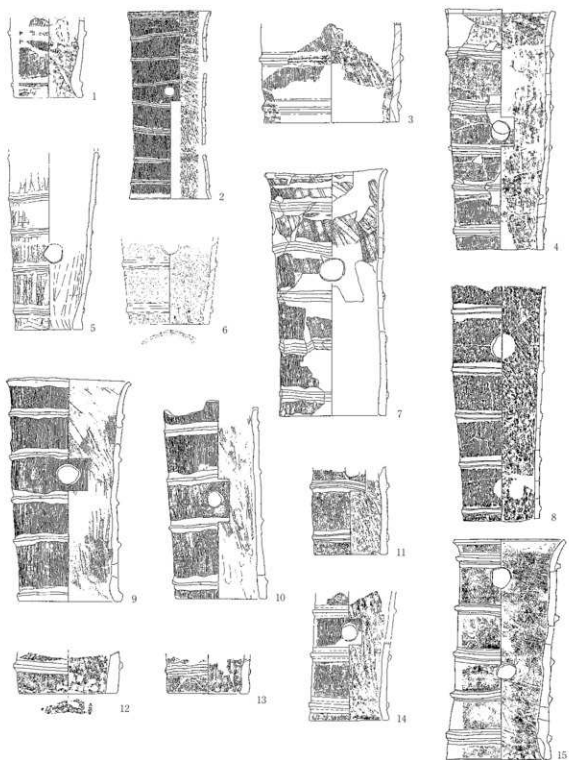


図 146 低位置突帯埴輪

- 1 堂山稲荷古墳 2 七輿山古墳 3 猿田Ⅱ遺跡 4 總貫観音山古墳 5 小泉大塚越3号墳  
 6 オトカ塚古墳 7 中二子古墳 8 金冠塚古墳 9 兵庫塚古墳 10 旧新田町出土 11 世良田諏訪下56号墳  
 12 今泉口八幡山古墳 13 古海松塚25号墳 14 西長岡東山古墳群第3号墳 15 猿楽古墳群1号墳 (S=1/10)

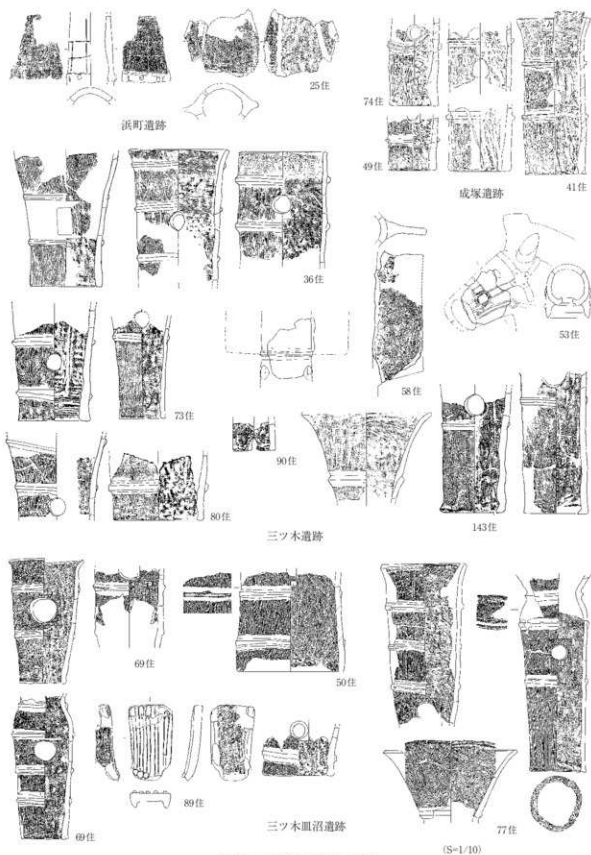


図 147 雙穴建物跡出土埴輪

## 第2節 2区3号竪穴建物跡内1号土坑跡出土の火葬骨について

先述したように、2区3号竪穴建物跡内の調査区西壁際で確認された径62cm・確認面からの深さ50cmの2区3号竪穴建物跡内1号土坑跡からは、ほぼ完形の、8世紀後半～9世紀初頭頃のものと考えられる東海地方産の片把手付灰軸長頸壺が出土し、長頸壺内から極めて少量の火葬骨と炭化材片が検出された。他の遺物は全く検出されていない。

この土坑は、2区3号竪穴建物跡の床面で初めて確認できた土坑であり、竪穴建物跡によって上面が破壊されている。竪穴建物跡に先行した土坑跡と考えられる。火葬骨が入っていたほぼ完形の片把手付灰軸長頸壺は、土坑のほぼ中央より出土した。長頸壺の口縁部は欠けており、竪穴建物建設に伴って地山が掘り込まれた際に破壊されたものと考えられる。長頸壺の口縁に蓋状のものが存在していたか否かは明らかではない。

火葬人骨は、最大長約5mm～10mmの小片が30点ほど検出されている。これらの人骨の色は、灰白色～白色を呈しており、比較的高温で被熱を受けたと推定される。残念ながら、人骨が獣骨かを確実に同定できる部位は検出されなかったため、不明である。

また、取められていた蔵骨器の大きさに比して、検出された骨の量は極めて少なく、取骨がほんの一部しか行われなかった可能性が高い。東日本タイプの葬法では、ほとんど全ての火葬骨を取骨（拾骨）するのに対し、西日本タイプの葬法では、ほんの一部しか取骨しないことが知られている。もしこの骨が人骨であるならば、現代の西日本タイプの葬法であると推定される。

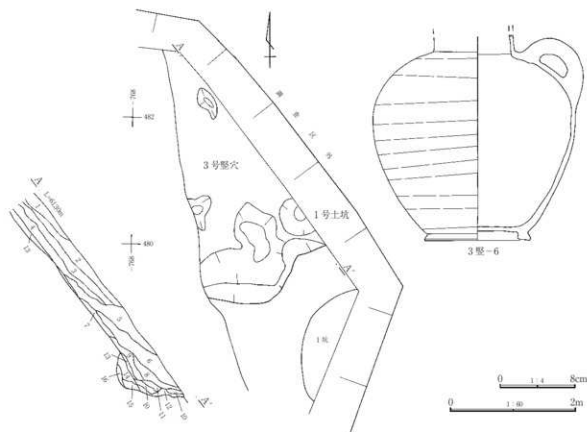


図148 2区3号竪穴建物跡内1号土坑跡と出土骨蔵器



## 第3節 出土した墨書土器について

遺物番号	出土遺構	器種	文字記入部位方向	釈文
ⅡF区2 壺-1	ⅡF区2号壺穴建物跡埋土	須恵器・杯	体部外面正位	丈
ⅡF区5 壺-1	ⅡF区5号壺穴建物跡埋土	須恵器・蓋	蓋部外面	土
3区7 壺-11	3区7号壺穴建物跡埋土	土師器・杯	体部外面正位	乙
3区11 壺-2	3区11号壺穴建物跡埋土	須恵器・蓋	蓋部外面	西
4区1 壺-1	4区1号壺穴建物跡埋土	須恵器・碗	体部外面・正位 体部外面・倒位 体部外面・倒位 体部外面・倒位	東 津 波 郡
4区2 壺-1	4区2号壺穴建物跡埋土	須恵器・杯	底部外面	梶カ・新田
4区5 壺-13	4区5号壺穴建物跡埋土	土師器・杯	底部外面	入田
4区5 壺-14	4区5号壺穴建物跡埋土	土師器・杯	底部外面	(判読不能)
4区5 壺-15	4区5号壺穴建物跡埋土	土師器・杯	底部外面	(判読不能)
5区3 壺-6	5区3号壺穴建物跡埋土	須恵器・杯	体部外面・正位	奉
6区2 壺-2	6区2号壺穴建物跡埋土	須恵器・杯	底部内面	丁

表 石橋地蔵久保遺跡出土墨書土器一覧

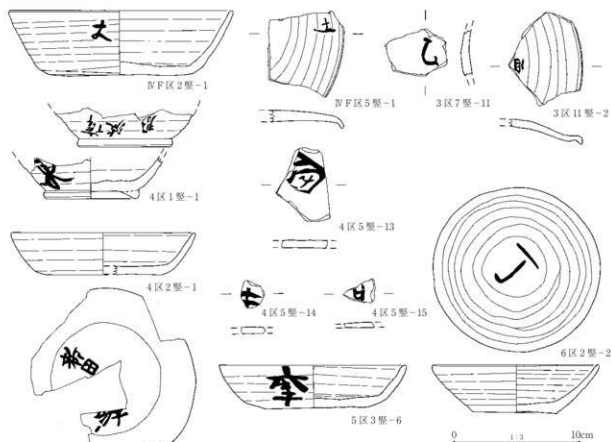


図 149 石橋地蔵久保遺跡出土墨書土器

#### 第4章 調査成果の整理とまとめ

本遺跡から出土した文字資料は、いずれも墨書土器で、11点ある。刻書はない。古代寺院や郡家郡庁院に近接し、調査対象範囲が極めて限定されているとはいえ約50棟弱の堅穴建物跡が検出されているような集落遺跡としては、極めて少ない部類である。

**出土状況** 墨書土器は、いずれも堅穴建物跡の埋土中から出土している。埋土中からの出土であるので、各資料の出土状況にさしたる特徴はない。11点中5点が4区からの出土で、一見、4区からまとめて出土しているようにみえるが、全体の点数が少ないので、特徴とまで言い切れることは出来ないだろう。

同じ遺構から複数の墨書土器が出土している例は、4区5号堅穴建物跡から出土している3点(4区5号-13～15)のみであるが、4区5号-14・15の2点は、小破片であり、記されている文字を全く判読することが出来ないで、文字の異同も不明である。調査対象範囲が限られていることもあって、墨書土器が出土した遺構が、遺跡内の特定のエリアに集中しているということもなく、また各々の資料の、それぞれ出土した各遺構内における出土状況を検討しても、特に共通したりあるいは際立った特色を指摘できるものはなかった。

集落遺跡から出土する墨書土器は、集落内における各種集団が、祭祀・儀礼等の行為に際して、集団の標識として特定の文字を記したものと考えられているが(平川南・天野努・黒田正典「古代集落と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』22 1989、のち同氏著『墨書土器の研究』吉川弘文館 2000に収録、関和彦「古代村落の再検討と村落首長」『歴史学研究』626 1991、のち、同氏著『日本古代社会生活史の研究』校倉書房 1994に収録)、本遺跡出土の資料では、判読可能な墨書土器全9点に、それぞれ記されている文字がすべて異なっているため、同じ文字が記された複数の土器が、ある程度特定のエリアに集中して出土するような傾向を指摘することが出来ず、墨書土器出土個体数の僅少さと相俟って、墨書された文字から集落内の小集団の動向を窺い知ることは困難である。

**文字記入の状況** 4区1号-1には、現状では、須恵器高台付椀の体部外面に、正位で大きく「東」の文字が、同じく体部外面に倒位で小振りに「漳」と「波」と「郡」という文字が、横に並列して記されている。正位に大きく記された「東」という文字を手前側にすると、その横に隣接して倒位で「漳」と「波」の文字が記され、「波」の字から若干間隔をあけて「郡」の字が記されている。なお、本例では、口縁部から体部上半分くらいにかけてが欠失しているため、さらに文字が記されていた可能性もある。1点の土器の複数箇所に文字が記されているのは本例のみであり、後はいずれも一箇所のみの記載である。

文字が記入されている部位に関して言えば、底部が4例、体部が4例、蓋外面が2例となる。文字の記入位置はまちまちである。一般的に、関東地方における集落遺跡出土の墨書土器では、体部に記入される例が多いのに対し、官衙遺跡出土の墨書土器では底部外面に記されるものが多いという傾向がある。本遺跡は、先述するように、古代新田郡家およびその関連寺院遺跡と非常に近い位置にあり、もう少し、官衙的な特色が認められても良いような気がするが、本遺跡出土の墨書土器からは、そこまでの官衙的な特徴を見出すことは出来ない。

**器種** 器種の点で言えば、本遺跡出土の墨書土器は、10点中、須恵器が7点を占める。この点も、墨書土器の全般的な傾向としてはやや異例であり、墨書土器の出土が特に顕著な関東地方の奈良・平安時代集落遺跡出土資料の全般的な傾向では、概して土師器の方が多いという特色がある。ただし、文字が記された土器の器種は、その遺跡出土土器全体の傾向と同様なのであり、特に、須恵器ないし土師器のどちらかが選ばれて、文字が記入されたというような事例は全く見受けられない。本遺跡においても、須恵器の流通・消費の頻度が一般に比べて高かったために、文字が記入された土器にも須恵器の割合が高いというだけのこと

であろう。本遺跡が所在する群馬県太田市一帯は、上野国内でも須恵器生産が盛行した地域であり、本遺跡の約2km南東に位置する金山丘陵には、須恵器窯が多く造られていたことがわかっている。

実際、須恵器窯が多い遠江西部、尾張、美濃、出雲西部などの地域においては、奈良・平安時代集落遺跡出土土器の中での須恵器の占める割合の高さに比例して、墨書土器にも須恵器が多い傾向が指摘できる（藤田憲宏「墨書・刻書土器の出土傾向とその背景」吉村武彦編『古代文字資料のデータベースの構築と地域社会の研究-平成11～13年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書』2002、高島英之「墨書・刻書土器からみた古代の出雲地域」『出雲古代史研究』15 2005、のち高島英之「古代東国地域史と出土文字資料」東京堂出版 2006 に収録）。

**記載内容** 単語が記載されたのは、4区2区-1の「新田」と、4区5区-13の「入田」の2点のみで、はかばか、いずれも1文字のみ記したものである。4区2区-1の「新田」と4区5区-13の「入田」は、ともに新田郡の郡名を記したものであり、本遺跡を含む天良七堂遺跡周辺一帯ではこれまでも同様の例がいくつか出土している。「新田」「入田」と記載された墨書土器の出土は、本遺跡と、近接する新田郡家都府院跡及び新田郡家関連寺院跡との密接な関連を示す資料として注目できる。

また、記載内容の点で注目されるのは、4区1区-1で、先述したように、現状では、須恵器高台付碗の体部外面に、正位で大きく「東」の文字が、同じく体部外面に倒位で小振りに「津」と「波」と「郡」という文字が、横に並列して記されている。正位に大きく記された「東」という文字を手前側にすると、その横に隣接して倒位で「津」と「波」の文字が記され、「波」の字から若干間隔を空けて「郡」の字が記されている。なお、本例では、口縁部から体部上半分くらいにかけてが欠失している。さらに文字が記されていた可能性もある。1点の土器の複数箇所文字が記されているのは本例のみであり、とくに、正位で記された「東」と、倒位で記された「津」「波」「郡」の3文字とは、明らかに異なる様相を呈しており、記載の時期や目的は異なるものと考えられる。具体的な目的までは、資料そのものからは窺い知ることが出来ないが、「津」は新田郡津野郷、「波」は新田郡祝人（はふり）郷と、それぞれ郡内の郷名との関わりを想定できるような文字であり、「郡」の文字の記載と併せて、本遺跡と、近接する郡院跡との密接な関連を示す内容と考えられる。なお、この4区1区-1では、倒位で記された新田郡関連とみられる3文字が、いずれも体部の割れ口を意識的に避けるような位置に、しかも割れ口にそって雁行型に記されているようにもみられることから、体部が欠損した後に、習俗的な意味合いで記された可能性も想定できる。

ほかに記載内容の点で注目できるのは、Ⅳ区2区-1の「丈」が丈部氏、Ⅳ区5区-1の「土」が土師氏の、それぞれ氏族名にかかわる可能性が考えられる。ただし、それぞれ1文字のみの記載なので、如何様にも解釈が可能であり、如何とも言い難い。

いずれにせよ、新田郡家都府院跡から北東に約600m強という、近い距離にある本遺跡からは、出土した墨書土器の総点数は少ないものの、「新田」「入田」という郡名を記載したものや、「郡」という文字や、郡内の郷名にかかわる文字などが記されたものがあり、先述したように、郡院や郡家関連寺院など郡中樞施設と本遺跡との密接な関連が想定できるような資料があり、本遺跡の特質を考える上で、重要な資料とすることが出来るだろう。

また、円面視の破片や、墨痕及び摩耗痕が良く残る転用視も合計3点出土しており、墨痕及び摩耗痕の顕著な転用視の存在は、当地における識字層の存在を示唆する。この点も、郡中樞施設と本遺跡との関連を考慮する上で、重要な視点の一つであろう。

## 第4節 まとめ

**本遺跡検出遺構の時期** これまでみてきたように、本書で報告する主要地方道伊勢崎大間々線地方道路交付金事業に伴う石橋地蔵入保遺跡の調査では、奈良時代を主体とし、古墳時代中期から平安時代中期の集落遺跡が検出された。関東地方の古代集落遺跡では、おおむね、古墳時代後末期、飛鳥・白鳳期頃から形成され、古墳時代後末期と平安時代9世紀頃が集落のピークであるという消長過程をとることが多い。むしろ、奈良時代・8世紀を主体とする集落は概して少数である。しかしながら本遺跡では、調査対象範囲が限られているとはいえ、6世紀代と考えられる堅穴建物跡が検出されているもの、それらの数はごく少数であり、また、通常のケースでは堅穴建物跡の数が非常に多くなる9世紀代のものも少ない。本遺跡における堅穴建物跡の主体は、あくまでも7世紀後半から8世紀代である。

本遺跡で検出された遺構群の主体がその時期と言うことで、真っ先に想起されるのは、東北に近接する寺井廃寺や、それとの密接な関連が想定されている新田郡家正倉院跡と考えられてきた天良七堂遺跡との関連であろう。

**寺井廃寺** 寺井廃寺は、太田市石橋町から寺井町・天良町にかけての一带にあたる。本遺跡と同様、大間々線状地南東端の低台地上に立地しており、本遺跡とは連続した台地上にある。

太田市立強戸小学校と同中学校の敷地内及びその南側にかけは、戦前から古瓦の散布地として知られ、古代寺院の遺跡が存在するものと考えられてきたが、基壇跡や礎石等が地表面上に全く露出しておらず、詳細は不明であった。現状でも、古代寺院の痕跡等は全く認められない。強戸中学校の校庭や、南側に接する住宅地の地表下から礎石や古代の瓦が発見されたことがあるので、漠然とそのあたりに寺院の中心城が存在したものと考えられている。昭和60年代に太田市教育委員会が、寺域の北半部にかかると考えられる強戸小学校と同中学校との中間地点で発掘調査を実施したが、寺院主要部に関わる遺構は全く発見されなかった。

現在も、伽藍配置等は全く不明なままであるが、古代の遺物を確認することができる範囲がそれなりの広がりであることや、最も早い時期のもので、7世紀後半から末頃のものと考えられる面連鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦や三重弧文軒平瓦がこれまでに多数出土しており、創建の時期を示すものと考えられている。また、上野国分寺創建期とまったく同じ紋様・技法を有する三重圈文縁単弁五葉蓮華文軒丸瓦・外区内側に珠文を配する偏行唐草文軒平瓦も多数出土している。まとまった発掘調査が行われていないにもかかわらず、一帯で相当数の瓦がこれまでに出土していることや、創建時と考えられる瓦が飛鳥の川原寺式のものであり、後に上野国分寺創建期の瓦も使用されていること、国分寺創建事業とも関連するような規模の大きな寺院であったと考えられる。

こうした7世紀後半から末頃の白鳳期に創建された比較規模の大きな寺院の遺跡は、これまでに東北から九州まで700箇所以上発見されており、各地の地方豪族層によって建立されたと考えられている。『日本書紀』に収められた説話にも、地方豪族層による、この時期の盛んな造寺・造像・造経・法会・信仰などの様子がしばしば登場し、白鳳期創建地方寺院の存在を史料の上から裏付けている。寺井廃寺については、関連する史料が全く遺っておらず、当時の寺名すら不明であるが、新田評督・郡司に任用された有力な在地首長層によって建立された寺院であり、西側に隣接して新田評・郡家と密接な関連を有する、新田評・郡随一の大寺であったと考えられる。

IV区で検出された確認全長132m・最大上幅394m・下幅12m・深さ2.5mの規模を有し、N-72°Eの方

向で直線的に流れる大溝（1号溝跡）は、正方位に載らず、約250m南の位置をN-80°-Eの方向で東西方向に走る東山道駅路下新田ルートとも、さらにその400m南側を、N-83°-Eの方向でほぼ並行して東西方向に走る東山道駅路牛堀矢ノ原ルートとも離れている上に、異なる走向であり、古代官道と同じ方向の地割りに載っているわけではない。この溝は、南側に約650mも離れている東山道駅路牛堀矢ノ原ルートはもとより、発掘調査中に関連が取りざたされた下新田ルートとも無関係とみられるが、規模や位置からみて、寺井庵寺に関連する区画溝という可能性も想定できるところであった。しかしながら、寺井庵寺の中心部分と考えられる太田市立強戸小学校・同中学校中間の南側からこの溝の位置までは、直線距離で約200m前後離れており、寺域を区画する溝と考えるにはかなり離れすぎているきらいがある。寺井庵寺の伽藍配置や寺域が全く明らかになっていない現状で、これ以上の判断は難しいところであるが、白鳳期創建の地方寺院の類例では、伽藍枢要部から寺域辺までの距離が200m近くになるような大規模な例はないので、この溝と寺井庵寺寺域との関連は想定しない方が良さそうである。

よく知られているように、都の官大寺や地方でも国分寺などの場合、その運営費は国家から支給されていた。地方寺院でも、官寺に準ずる寺院として政府の認可を得た定額寺についても同様であった。

東京国立博物館が所蔵する九条家本「延喜式」の紙背史料の一つである「長元三年上野国不与解由状案」（所謂「上野国交替実録帳」）は、長元3年（1030）度における新田上野国司の交替事務引継に関する書類の草案であるが、この史料には、国司交替時点で失われたままになっている官庁舎や備品などの公有財産が列挙されている。この、「長元三年上野国不与解由状案」には、定額寺として数箇寺があげられている。寺井庵寺クラスの規模や立地を有する寺院の場合は、定額寺に列せられていたものと推測するのが自然であろうが、実録帳にみえるどの寺院に相当するのかは、具体的な寺名を示すような文字資料でも出土しない限り明らかにはしがたい。

故に、寺井庵寺についても、国家からの経済基盤の給付は当然のことながら存在していたであろうが、寺を建立した在地首長層の負担や、寺院独自の経済活動も存在していたはずである。周知の通り、「日本霊異記」に収録された説話からは、地方寺院における、寺院独自の経済活動として、銭・米・穀類・酒などの周辺民衆への貸し付けによる利子収入の取得や交易による商業活動などが広く行われ、場合によっては商人に経済活動を委託することさえ行われていた様子うかがうことが出来る。また、「日本霊異記」には、「某寺の某（方角）の里・村」という表現がしばしばみられるが、都の官大寺と地方寺院とを問わず、寺辺の「里」は、こうした寺院の経済活動が行われた場であり、寺と関係して生きる人々が集住して形成された集落とみることが出来る。寺井庵寺という新田評・郡唯一の大寺周辺に位置する本遺跡で検出された集落においても同様、住民と寺井庵寺との密接な関連が想定されてしかるべきであろう。また、「日本霊異記」や「東大寺諷諭文稿」（9世紀初頭成立）などの文献によれば、古代において、都の官大寺に所属する官度僧がしばしば地方に赴いて地方寺院での法会に参加したりして、都と地方とを往復していた様子が判明している。古代の地方寺院は、都の官大寺の僧と在地の民衆が直接に接する場所であり、そうした稀有な場であるという点も、本遺跡における歴史的環境として、視野に入れておくべき点であろう。

**新田評・郡家 天良七堂遺跡** 従来から新田郡家と考えられてきた天良七堂遺跡は、本遺跡のほぼ中央に当たる石橋交差点から西へ約800m、調査区最西端からの距離は、約600mであり、寺井庵寺の西側に当たる。本遺跡や寺井庵寺と同じく、大間々原状地層端に当たる低台地上に立地しているが、本遺跡・寺井庵寺と天良七堂遺跡との間には浅い浸食谷が存在している。この地の畑では、古くから炭化米が検出できることでよく知られており、いつ頃からか、地元には、現在、金山丘陵の南麓に位置している大光院（慶長18年（1611）

#### 第4章 調査成果の整理とまとめ

徳川家康が、徳川将軍家菩提寺の芝・増上寺の呑龍を開山に迎え、徳川家の遠祖とされる新田義重を追善供養するために建立した浄土宗寺院)が、かつてこの地にあったとする伝承が伝えられている。

昭和30年、当時、群馬大学教授であった尾崎喜左雄が発掘調査を実施し、ほぼ正方位の6×3間の東西に長い南北棟総柱礎石建物跡を検出した。南北辺18m・東西辺8m、桁行9尺等間・梁間8尺等間で設計された建物とみられ、礎石は径約70～100cm・厚さ約50cm前後で、安山岩質凝灰岩である。礎石が無くならない箇所では、礎石の下に据え付けられたであろう根石が検出された。礎石の表面は火を受けて赤く変色したり剥離したりしており、また多量の炭化米が出土した。炭化米の層は、部分的には厚さ20cmにも及んでいる。多量の炭化米の出土と、この建物の構造が総柱建物であることからみて、この建物は米倉であり、郡家正倉院を構成する倉庫群の一つと考えられる。この昭和30年の群馬大学による調査の折りには、この建物跡の南方約100mほどの位置からも礎石が何点か検出されており、さらに昭和60年頃に新たに1個の礎石が検出されている。さらに平成3年度に太田市教育委員会が実施した調査においても、南方地区で異なる建物跡が検出されており、この天良七堂遺跡が新田郡家正倉院に当たることがほぼ確実とされてきた。

これまでの各地における郡家遺跡の調査事例では、郡家に近接して、白鳳期に建立された古代寺院跡が存在していることからみれば、天良七堂遺跡が新田郡家で、それと密接な関連を有する寺院が寺井庵寺と、郡家と関連寺院とのセット関係がここでも成立するのである。

ちなみに、群馬県内では、郡家の遺構自体はまだ確認されていないところが多いとされているが、群馬郡家と前橋市総社町の山王庵寺、伊勢崎市上植木本町の三軒屋遺跡(佐佐木郡家)と伊勢崎市本間町の上植木庵寺、吾妻郡家と東吾妻町金井の金井庵寺などが、郡家とそれと密接な関連を有する白鳳期創建寺院とのセット関係にある遺跡群と考えられている。

**新田駅家** 先にも述べたように、新田郡内には東山道駅路が東西に貫通し、「延喜式」兵部省諸国駅伝馬条によれば、上野・下野两国から武蔵国への分岐点となった陸上交通上の要衝であり、官人の公務通行を支援すべく設けられた施設である新田駅家が置かれていた。古代において、官衙はそれぞれが比較的近辺にまわって配置されていた様子が判明しているため、新田駅家も新田郡家からさほど遠くない場所に設置されていたものとするのが自然である。新田駅家の所在地としては、太田市新田村田から寺井にかけての場所に想定する意見が強い(『新田町誌』通史編1 1990)。

天良七堂遺跡の西南西約1kmの地点、新田村田から新田小金井にかけて所在する入谷遺跡では、方約180mの範囲を溝によって方形に区画した中に、5×3間の南北棟瓦葺礎石建物跡が約80m隔てて2棟並列して建ち並ぶ施設の跡が発見されている。7世紀後半頃に造営され、8世紀中葉頃まで存続していたと考えられている。東山道駅路牛堀矢ノ原ルートに面しており、この官衙風の施設を新田駅家とみる考え方が強い(『新田町誌』通史編1 1990、『太田市史』通史編 原始古代 1996)。ただ、現在までのところ、方約180mの区画の中に、構造から倉庫とみられる5×3間の南北棟瓦葺総柱礎石建物跡が2棟しか検出されていないので、兵庫県などで検出されている山陽道駅路上の駅家遺跡の様相とはたいぶ異なっており、その確証に欠ける。

**東山道駅路遺構** 旧新田町内では、牛堀・矢ノ原ルートと称される高崎市南部の平地から玉村町を経て旧境町にかけて東西に貫く幅約12mの古代道路遺構に続く道路遺構と、その南側数百メートルの位置を、牛堀・矢ノ原ルートに並行して東西に貫く幅約10mの下新田ルートの二系統の駅路遺構が検出されている。また、北関東自動車道の建設に関わる調査では、さらに東に寄った金山丘陵の東麓地域である太田市東今泉町の地域で、約1kmにわたって幅約12mの古代道路遺構が検出され、これは牛堀・矢ノ原ルートにつながる道

路遺構であると考えられている。

いわゆる下新田ルート上で検出されている幅約10mの古代道路遺構を延長すると、本遺跡の南側約170mの位置を通り、さらに牛堀・矢ノ原ルート上で検出されている古代道路遺構を延長すると本遺跡の南側約400mの位置を通ることになり、いずれにしても本遺跡は古代官道に非常に近い場所に所在したわけであり、本遺跡における古代集落の形成に際して、付近を通過する古代官道はそれなりの影響が想定できよう。

**郡の成立と展開** 律令国家は、中央の行政制度を整備するに併せて、整然とした地方行政制度を作り出した。中央政府にとって、地方の統治はその根幹に関わる最重要課題であり、国司・評督（のちに郡司）がそれぞれに付託された行政権力を体現し、行使する場として国府・郡家などの地方官衙が設置されたのである。

国の下部機関の地方行政単位である評は、8世紀初頭の大宝令制によって中国風に「郡」と改称されるが、実質的な内容が変質したわけではなく、単なる呼称の変更と考えられている。

郡も、令制では国と同じように格付けがなされていたが、その基準は管轄下の里（のち郷と改称、以下「郷」で統一する）の数の多寡であった。20郷以下16郷以上を大郡、12郷以上を上郡、8郷以上を中郡、4郷以上を下郡、2郷以上を小郡と定められた。管轄下の郷の多寡によって郡の格付けが定められたのは、郡の官人たちの実務量の差によるということなのだろう。

郡には郡の官衙として郡家が設置されていた。この郡家に勤務する郡の官人が郡司である。古代の郡の官衙のことを「郡衙」と呼ぶこともある。古代の史料上、郡の官衙を指す言葉ではない。このような理由から、最近では、とくに文献史学の研究者を中心に、史料の上にもみられる「郡家」という用語を使用することが多くなってきている。歴史的にみれば、古代において郡の官衙のことを意味した「郡家」という用語を使用するのがより適切と言うべきであろう。

**郡司** 郡司は、はじめ、郡が「評」と称されていた時代には「評造」・「評督」などと呼ばれたが、大宝令制によって、大領・少領・主政・主帳の四等官に整備された。

大領・少領は部内を治め、行財政全般と司法の一部を担当し、主政は公文書の審理などを、主帳は文書作成を分担していた。その他に定員外の下級職員や多くの係丁を抱えて、その機能を維持していたのである。係丁には、書記を務める「郡書生」や「案主」、雑務の使い走りである「驅使」など多種の業務に携わった者がいた。

一般的には国司・郡司と併称されるが、この両者には大きな違いがある。先にも述べたように国司は、中央の貴族から任命され、都から派遣されてきて地方行政を統括するが、令の規定によって、郡司は地方豪族からの選任、言わば現地採用であった。また、郡司は律令制本来の位階体系からも外れており、任期の定めもなく、かつて国造の任に就いた者の一族の中で世襲されることが多かった。郡司の制度には、大化前代からの氏族制的な原理が生き続けていたのである。任免に関わる事務は、令の規定では式部省が管轄し、国司の推挙によって郡司補候補者が都の式部省に直接赴き、そこで試問を受けて、政務能力があるとみなされた場合に任命されることになっていた。これは、在地首長出身の終身官で、位階体系にもよらない、言わば旧来の支配体系を引き留めているような郡司といえども、あくまでも国家が任命した一地方官であるという、中央集権国家としての権威を体現し付与させるものであり、また、国司の推挙が必ずしも通るとは限らない点は、国司の恣意による影響力を排除する建前によるところと考えられる。郡司の補任は、原則としてその地域の実情に照合した上で判断されるものであった。

律令国家は、地方支配を実行するに当たって、古墳時代以来、地域において伝統的かつ宗教的な権威と実効的な支配力と豊富な財力を有してきた在地首長層を国家における支配者層の末端として温存し、取り込む

ことによって、早急な中央集権国家体制の確立と、実効的な地域支配、租税の確保を素早く成し遂げたわけである。東アジア世界を巡る国際関係の緊迫化に対応するために早急に中央集権国家体制を確立せざるを得なかったヤマト王権にとっては、その方法こそが、地方支配体制を整備する上で、最も手取り早く、確実かつ有効な方法であったのであろう。中央から一時的に派遣されてきた国司とは異なり、古くからその土地に根ざした有力者から任命されたわけであるから、民衆に直結した地方行政・徴税・徴発などの実務は、まず郡司が処理した。とくに、租税の徴収については、実質的に郡司が中心的な役割を担っていた。

もちろん地域社会における政治的な立場は国司よりも下位に設定されていたわけであるが、先にも述べたように徴税に際しては主導的な役割を担い、軽微な司法行刑や監察など治安維持を含む地方行政の実務を執り行っていたために、律令国家の地方支配は、郡司を媒介として成立していたとさえ言うことができる。

郡司に任用されるような地方豪族たちは、在地首長として独立性が高く絶大な権力を有していた立場から、国家の地方支配機構の末端官僚として位置づけられる代わりに、国家からは郡司として職田を支給されたり叙位されたりと支配者層としての多くの特権を国家から保証されていた。地方豪族としての豊富な経済力をバックに、中央政府やそれが行う国分寺建立などの国家的事業に出資することの功績を評価され、五位以上の貴族の地位を得た郡司層も現れた。しかし、9世紀頃から進んだ地方行政改革で国司の権限が強化され、さらに10世紀にかけて次第に国司が受領化して請負制に転じていくと郡司の在地社会における権限は相対的に下り、地域における郡司の地位は低下していく。この時期の郡司たちは、民衆たちとともにしばしば国司苛政闘争を起こして国司に対抗するようになる。やがて、それまで郡司に任用されていたような在地豪族層は、地域支配に実権を有しなくなった郡司の地位に就くよりも、遷任国司たちに代わって実質的な国府行政を担う国府の在庁官人となって地域支配を継続していくようになり、郡司制は事実上消滅していく。

**郡家の構造** 「長元三年上野国不分解由状案」(所謂「上野国交替実録帳」)には、国司交替時点で失われたままになっている官庁庁舎や備品などの公有財産が列挙されている。当時、郡家の建物施設は、律令制成立時に比べると、全く壊滅的と言って良い状況にあったため、その時点で「無実」となっている各郡の郡家の建物施設の列挙は、ほとんどが元来あった施設の列挙と同義という状況である。この史料が、因らずも郡家の構造を知る上で稀有な史料となっている所以である。この史料からは、郡家に「正倉」「郡庁」「館」「厨」などの施設が存在していたことを読み取ることが出来る。

**正倉** 正倉は、租税や出挙の利息として徴収した稲を収蔵・保管した施設である。この記録で、何よりもまず冒頭に正倉が採り上げられており、その記載も極めて詳細である。郡家は、租税の徴収や労働力・兵士の徴発事務を最も大きな職務とする郡司の勤務する官衙であり、租税の徴収と保管を第一義とする施設であったことを、その点からも裏付ける。

また、この正倉には、「東第二土倉」、「西第四板倉」などのように、方角と番号、倉の構造などが注記され、正倉がいくつかの群にわかれ、各群ごとに縦または横に整然と建ち並んでいたことが想像できる。倉庫令には、倉は高く乾燥した場所に設けることと、そばに池や溝を掘ること、倉から50丈(約150m)以内に館舎を建ててはならないことが規定されている。これは稲穀を長期間保管するために火災や湿気や獣鳥虫害を防ぐ必要があり、他の建物から距離を置く必要があったからであるが、実際に、発掘調査された郡家遺跡の様相をみると、かなりのばらつきがあったようである。郡家の正倉は、小は2間四方から大は6間四方以上に及ぶ総性の倉庫が、いくつかの群にわかれ、縦・横方向に棟方向を揃えて十数棟が建ち並び、「院」と呼ばれる一郭を形成していた。そして、この正倉院こそが、郡家の中心的役割を示す、象徴的かつ特徴的な施設と言えるだろう。



倉庫令の規定にみられるように、郡家正倉院の建物配置や構造にはかなりきめ細かい配慮がなされていたにもかかわらず、しばしば火災によって焼失する事件があったことが史料にみえている。福島県白河市関和久遺跡（陸奥国白河郡家跡）、福島県郡山市郡山台遺跡（陸奥国安達郡家跡）、茨城県筑西市古郡遺跡（常陸国新治郡家跡）、千葉県我孫子市日秀西遺跡（下総国相馬郡家跡）などの郡家遺跡では、発掘調査時に大量の炭化米が出土しており、史料の記述を裏付けている。先述したように本遺跡に近接する上野国新田郡家跡天良七堂遺跡でも大量の炭化米が出土し、またかつて調査で検出された礎石に火を受けた痕跡が認められるなど、郡家正倉院が火災に罹災したことを推測させる。

**郡庁** 一方、郡庁は、郡家の政庁であり、郡司以下が日常の政務を執り、また在地の民衆に郡司の権威と権力を貫徹させる場として、裁判・刑罰の執行を行うところである。「長元三年上野国不和解由状案」ほかの史料によれば、「庁屋」「副屋」「向屋」「公文屋」「長屋」などの名称が付された数棟の建物で構成されていたことがわかる。「庁屋」「公文屋」が郡庁の正殿・前殿・後殿、「副屋」「長屋」「向屋」などが脇殿に当たるのであろう。

**館** 「館」は各郡毎に3～4あり、いずれも「宿屋」「向屋」「副屋」「厨」もしくは「厩」からなる。近年の研究によれば、公使臣の往来や国司の部内巡行等に際しての宿泊施設とみる説が有力である。

**厨家** 「厨家」は供食施設で、各郡ともに画一的に「竈家」「納屋」「備屋」「酒屋」等で構成されていた。国司の部内巡行では各郡の郡家を巡検することになっており、そうした際には饗宴も行われた。また、供食施設としての機能から、食料調達活動や交易などを担っており、郡家機構の経済活動の実務を担当していた。

**郡家の特徴** 長元三年上野国不和解由状案にみえる郡家の諸施設の構成は以上の通りであるが、近年の各地における発掘調査の進展によって、これらの史料の記載を裏付けるような郡家の遺構が次々と発見されている。現在、全国で発掘調査された郡家の遺跡は、推定地を含めて約70箇所にはのぼっている。

発掘調査によって明らかになっている郡家遺跡における諸施設の配置には、いくつかの類型がみられるものの、郡によってかなりバラエティに富んでいる。同じ国内でもそれぞれの郡家の遺構は、建物配置の大きな構成こそ共通しているが、規模や建物配置の細部、構造等はまちまちである。また、同じ郡であっても時期によってその配置が大きく変化するなどの多様性が認められる。各国国府の国庁が、いずれも宮館における官衙施設と酷似し、画一的な構造をとっている様子とは大きく異なっている。このような郡家建物群の非画一性は、中央政府が、郡家の構造や建物配置を、必ずしも画一的に規格化する意図も、必要性も認めなかったという事情によるものと考えられる。郡家の多様性は、律令制の官僚制の外にあって、律令制成立以前からの在地支配の原理を維持した郡司制の特質を体現していると言えるのである。

**新発見の新田郡家郡庁院跡と本遺跡** 本遺跡整理作業実施中の平成19年6月、石橋交差点から主要地方道足利伊勢崎線に沿って西に約800m、本遺跡調査区の最西端であるIV A区の西端からは約580mの足利伊勢崎線に面した北側の場所から新田郡家郡庁院の遺構が発見された。平成19年5月初旬から太田市教育委員会が宅地造成に先立って約1万㎡強の範囲を発掘調査していた場所である。

郡庁院の建物は、中央に位置する約10m×19mの東西に長い基壇建物跡を中心に、その両側に長さ約50mもの規模を有する東西に細長い建物跡が東・西・南・北にコの字状に検出された。東・西・南・北で検出された建物の間は、各建物の外周に繋がる1本柱の掘立柱列で長方形に区画されており、この区画された範囲が郡庁院と考えられる。柱間数など詳細はまだ公表されておらず、現時点では北側に位置するであろう主屋あるいは正殿に相当する建物の存在する位置にまで発掘調査が及んでいないこともあり、不明な部分が少ないが、東・西・南・北の各辺で検出された長大な建物群はそれぞれ郡庁院の東西脇殿と南殿及

び北殿と考えられる。郡庁院南辺の中央に取り付く南殿は、東南隅が現在の足利伊勢崎線下に入ってしまうため、確認できていない。

現段階では、東西脇殿には、位置を若干ずらして建て替えがなされた痕跡が明瞭に確認でき、とくに東脇殿は、建て替え後に正方位にかなり近い方向に修正されている。また、東西脇殿外周間の距離は90mに及ぶ。これまでに全国各地で発見されている郡庁院の一般的な大きさは、ほぼ一辺約50m程度であり、これまでの調査事例にない、3倍以上という破格の規模である。

現在のところ、なにゆえ新田郡の郡庁院がこのような巨大な規模であったのかは定かではない。正倉院やその他の郡家内の施設についても、郡庁院と同様、一般的な郡家のそれよりも大きいのか否かという問題もある。ただ、正倉院については、それを構成していた倉庫のうちの数棟が確認され、調査されているに過ぎず、その他の施設については状況は全く不明である。郡庁院が破格の大きさであることの原因や意義については、郡家の他の施設の様相がある程度明らかになってから検討すべき課題であろう。

ただ、天良七堂遺跡で発見された郡庁院が、最短距離で本遺跡からわずか580m弱と非常に近い位置にあることからみて、従来より漠然と考えられてきた郡家近接集落という特質は、より強固なものになったと言える。

郡庁院跡の発掘成果は、まだほとんど報告されていないので、遺構の創建・廃絶の年代や建物跡群の正確な規模をはじめ、不明な点が多い。郡庁院で検出された建物群は、掘立柱建物跡なので遺物の出土がほとんど無い。また、この場所では、他の遺構との重複関係がほとんど無く、後世に掘り込まれて破壊されていることも無いので、これらの遺構の年代を確定することは難しいのも事実である。評制施行の当初からこの地に新田評家が営まれたとすれば、官衙の創建年代は7世紀中葉～後半ということになる。隣接する寺井庵寺の創建が白鳳期と考えられるところからみれば、評制施行の当初からこの地に評家が造営されたとみるのが妥当であろう。

また、前述したように、天良七堂遺跡の北約850m、寺井庵寺の北西約850mの場所には6世紀後半から7世紀初頭頃に造営されたと考えられている地域最大の前方後円墳である新田二ツ山古墳群がある。評・郡家及び関連寺院は、地域における古墳時代後期最大の古墳に近接して造営されているわけであり、前代から地域を支配した在地首長勢力が、律令制下でも引き続き新田評・郡の長官として、地域支配を実行した可能性が高い。

いずれにしても、前述したように、本遺跡の集落が、7世紀後半から8世紀を主体とすることは、律令期官衙の存続年代と一致しており、本遺跡の集落が、近接して新田郡家・同関連寺院との関連によって消長しているものと考えられる。本遺跡から出土している硯類や「入田」「新田」と記された墨書土器などの遺物は、本遺跡と新田郡家・同関連寺院との関係を端的に示している。

## 参考文献

- ・伊勢崎市教育委員会編『三軒屋遺跡Ⅰ－上野国佐位郡衛正倉跡の調査』2007
- ・茨城県考古学協会編『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸国河内郡を中心として』2005

- ・太田市史編纂委員会編『太田市史 通史編 原始古代』太田市 1996
- ・太田市教育委員会編『成塚住宅団地遺跡-成塚住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1990
- ・堅田 理『日本の古代社会と僧尼』法蔵館 2007
- ・群馬県史編纂委員会編『群馬県史 通史編2 原始古代2』群馬県 1991
- ・群馬県立歴史博物館編『第70回企画展 古代のみち-たんけん! 東山道駅路-』2001
- ・古代交通研究会編『日本古代道路事典』八木書店
- ・埼玉考古学会編『埼玉考古学会シンポジウム 坂東の古代官衙と人々の交流』2002
- ・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『年報』22～25 2003～2006
- ・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『太田市八幡遺跡』1990
- ・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『成塚石橋遺跡-一級河川蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1988
- ・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『成塚石橋遺跡Ⅱ-一級河川蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1991
- ・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『西長岡南遺跡・菅塩両台遺跡・成塚永昌寺遺跡・成塚石橋遺跡Ⅲ-一級河川 蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』1996
- ・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『西長岡南遺跡Ⅱ・Ⅲ-一級河川蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1997
- ・静岡県考古学会編『静岡県考古学会2005年度シンポジウム 古代の役所と寺院-郡衙とその周辺』2006
- ・鈴木景二「都鄙間交通と在地秩序」(『日本史研究』379 日本史研究会 1994)
- ・土屋文明『萬葉集上野国歌私注』換乎堂 1944
- ・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構編 2003
- ・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物編 2004
- ・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『地方官衙と寺院』2005
- ・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『郡衙周辺寺院の研究』2006
- ・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編『古代官衙・集落研究会 古代地方行政単位の成立と在地社会 研究報告資料』2007
- ・新田町誌編纂委員会編『新田町誌 第1巻 通史編』新田町 1990
- ・新田町教育委員会編『入谷遺跡』Ⅰ～Ⅳ 1982～2002
- ・新田町教育委員会編『境ヶ谷戸・原宿・上野井Ⅱ遺跡-送電線建設に伴う境ヶ谷戸遺跡、原宿遺跡、上野井Ⅱ遺跡の発掘調査報告書』1994
- ・新田町教育委員会編『前六供遺跡・後谷遺跡・西田遺跡-県道伊勢崎新田線道路整備に伴う発掘調査報告書』2000
- ・吉田一彦『民衆の古代史-『日本霊異記』に見るもう一つの古代』風媒社 2006



# 写 真 图 版





石橋地蔵久保遺跡とその周辺 (南より)



石橋地蔵久保遺跡 (上空真上より)



I A区全景 (東より)



I A区1号壑穴建物跡土層断面 A-A' (北より)



I A区1号壑穴建物跡土層断面 B-B' (東より)



I A区1号壑穴建物跡全景 (西より)



I A区1号壑穴建物跡電跡堀方全景 (西より)



II A区1号壑穴建物跡土層断面 (北より)



II A区1号壑穴建物跡全景 (西より)



II A区3号壑穴建物跡堀方全景 (西より)





Ⅱ A 区 1 号土坑跡土層断面 (西より)



Ⅱ C 区全景 (西より)



Ⅱ C 区 5 号竪穴建物跡掘方全景 (西より)



Ⅱ C 区 1 号土坑跡土層断面 (南より)



Ⅱ C 区 2 号土坑跡土層断面 (西より)



Ⅱ A 区 2 号竪穴建物跡電跡遺物出土状況 (西より)



Ⅲ A 区 1 号土坑跡全景 (南より)



Ⅲ C 区全景 (西より)



ⅢC区1号壑穴建物跡土層断面(南より)



ⅢC区1号壑穴建物跡全景(西より)



ⅢC区1号壑穴建物跡竈跡全景(西より)



ⅢC区3号壑穴建物跡、1号溝跡土層断面(北より)



ⅢC区3号壑穴建物跡全景(西より)



ⅢC区1号溝跡全景(南より)



ⅣA区全景(西より)



ⅣA区2号溝跡土層断面(北より)



IV A区2号溝跡土層断面(北より)



IV A区2号溝跡全景(北より)



IV A区2号溝跡全景(北より)



IV A区3号溝跡土層断面(北より)



IV A区3号溝跡全景(西より)



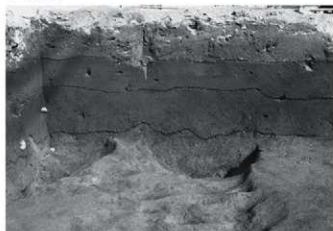
IV A区3号土坑跡土層断面(南より)



IV A区3号土坑跡全景(南より)



IV B区全景(西より)



IV B区1号竪穴建物跡土層断面（西より）



IV B区1号竪穴建物跡全景（西より）



IV B区1号溝跡土層断面（西より）



IV B区1号土坑跡土層断面（東より）



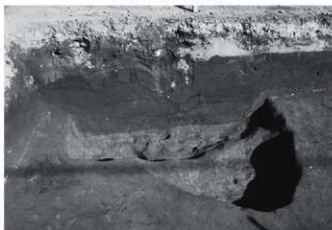
IV B区1号土坑跡全景（北より）



IV C区全景（西より）



IV C区2号竪穴建物跡方全景（西より）



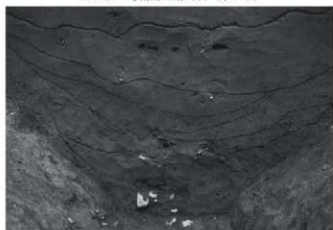
IV C区2号竪穴建物跡方全景（南より）



IV C区1号溝跡土層断面（東より）



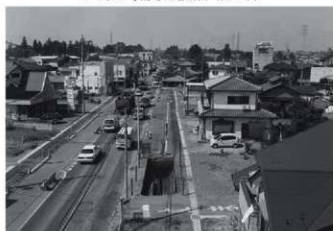
IV C区1号溝跡全景（東より）



IV D区1号溝跡土層断面（西より）



IV D区1号溝跡全景（西より）



IV E区全景（南東より）



IV F区全景（西より）



IV F区全景（東より）



IV F区1号溝跡全景（西より）



IV F区1号溝跡土層断面 (東より)



IV F区1号溝跡全景 (東より)



IV F区1号溝跡調査状況 (東より)



IV F区1号溝跡底部 (東より)



IV F区1号溝跡底部 (東より)



IV F区1号溝跡底部 (東より)



IV F区1号溝跡底部 (東より)



IV F区1号溝跡底部 (東より)



IV F 区1号溝跡底部(東より)



IV F 区1~3号竪穴建物跡全景(北より)



IV F 区1号竪穴建物跡全景(西より)



IV F 区2号竪穴建物跡土層断面(南より)



IV F 区2号竪穴建物跡全景(西より)



IV F 区2号竪穴建物跡電路土層断面 A-A'(西より)



IV F 区2号竪穴建物跡電路土層断面 B-B'(北より)



IV F 区2号竪穴建物跡電路掘方土層断面 A-A'(西より)



IV F区2号竖穴建物跡電跡堀方土層断面 B-B' (北より)



IV F区3号竖穴建物跡全景 (西より)



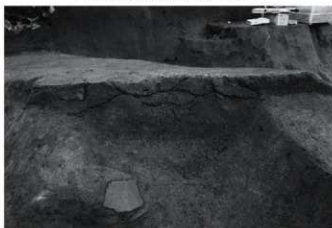
IV F区4号竖穴建物跡土層断面 (東より)



IV F区4号竖穴建物跡全景 (西より)



IV F区4号竖穴建物跡電跡堀方土層断面 A-A' (南・北)



IV F区4号竖穴建物跡電跡土層断面 (西より)



IV F区4号竖穴建物跡電跡堀方土層断面 B-B' (東・西)



IV F区4号竖穴建物跡電跡全景 (西より)





IV F区5号壑穴建物跡土層断面 A-A' (東より)



IV F区5号壑穴建物跡土層断面 B-B' (南より)



IV F区5号壑穴建物跡全景 (西より)



IV F区5号壑穴建物跡電跡土層断面 A-A' (東・西)



IV F区5号壑穴建物跡電跡土層断面 A-A' (東・西)



IV F区5号壑穴建物跡電跡土層断面 B-B' (北・南)



IV F区5号壑穴建物跡電跡土層断面 B-B' (北・南)



IV F区5・6号壑穴建物跡掘方全景 (北より)



IV F区6号壑穴建物跡掘方全景（西より）



IV F区6号壑穴建物跡内1号土坑跡全景（西より）



IV F区6号壑穴建物跡内1号ピット全景（西より）



1区全景（東より）



1区10号壑穴建物跡全景・土層断面（南より）



2区全景（西より）



2区1号壑穴建物跡土層断面 A-A'（東より）



2区1号壑穴建物跡土層断面 B-B'（南より）



2区1号壑穴建物跡全景(南より)



2区1号壑穴建物跡竈跡土層断面(西より)



2区1号壑穴建物跡竈跡全景(東より)



2区1号壑穴建物跡掘方全景(南より)



2区2号壑穴建物跡土層断面 A-A' (南より)



2区2号壑穴建物跡土層断面 B-B' 全景(東より)



2区2号壑穴建物跡全景(西より)



2区2号壑穴建物跡竈跡土層断面(西より)



2区2号竪穴建物跡電跡堀方全景(西より)



2区2号竪穴建物跡堀方土層断面 A-A'(南より)



2区2号竪穴建物跡堀方土層断面 B-B'(西より)



2区2号竪穴建物跡堀方全景(西より)



2区3号竪穴建物跡土層断面(西より)



2区3号竪穴建物跡全景(北より)



2区3号竪穴建物跡電跡堀方全景(北より)



2区3号竪穴建物跡堀方全景(北より)



2区3号竪穴建物跡内1号土坑跡全景(北より)



2区4号竪穴建物跡土層断面 A-A'(東より)



2区4号竪穴建物跡土層断面 B-B'(南より)



2区4号竪穴建物跡全景(北より)



2区4号竪穴建物跡電跡土層断面 A-A'(北より)



2区4号竪穴建物跡電跡土層断面 B-B'(北より)



2区4号竪穴建物跡電跡土層断面 C-C'(東より)



2区4号竪穴建物跡電跡遺物出土状況



2区4号竪穴建物跡遺跡全景(南より)



2区4号竪穴建物跡掘方全景(南より)



2区5号竪穴建物跡全景(東より)



2区5号竪穴建物跡掘方全景(北より)



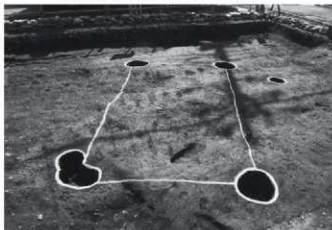
2区5号竪穴建物跡内1ピット(南より)



2区5号竪穴建物跡内2ピット(南より)



2区5号竪穴建物跡内3ピット(南より)



2区1号掘立柱建物跡全景(北より)



2区1号溝跡土層断面 A-A' (北より)



2区1号溝跡全景 (北より)



3区東側全景 (西より)



3区西側全景 (東より)



3区6号竪穴建物跡土層断面 (西より)



3区6号竪穴建物跡遺物出土状況 (南西より)



3区6号竪穴建物跡全景 (西より)



3区6号竪穴建物跡内1ピット土層断面 (東より)



3区6号壑穴建物跡内1ピット(東より)



3区6号壑穴建物跡掘方全景(南より)



3区7号壑穴建物跡土層断面 A-A'(南より)



3区7号壑穴建物跡土層断面 B-B'(東より)



3区7号壑穴建物跡全景(西より)



3区7号壑穴建物跡電路土層断面 A-A'(南より)



3区7号壑穴建物跡電路土層断面 B-B'(西より)



3区7号壑穴建物跡電路全景(西より)





3区7号竪穴建物跡竈跡堀方土層断面 A-A' (北より)



3区7号竪穴建物跡堀方全景 (西より)



3区8号竪穴建物跡土層断面 A-A' (南西より)



3区8号竪穴建物跡堀方全景 (東より)



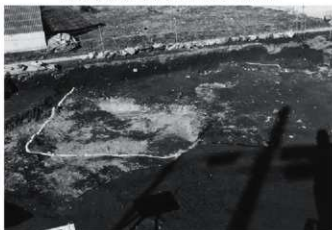
3区9号竪穴建物跡遺物出土状況 (南より)



3区9号竪穴建物跡遺物出土状況 (南より)



3区9号竪穴建物跡堀方土層断面 (南より)



3区9号竪穴建物跡堀方全景 (南より)



3区11号竪穴建物跡全景(西より)



3区11号竪穴建物跡土層断面 A-A'(西より)



3区11号竪穴建物跡土層断面 B-B'(北より)



3区12号竪穴建物跡土層断面(南より)



3区12号竪穴建物跡遺物出土状況(北より)



3区12号竪穴建物跡全景(西より)



3区13号竪穴建物跡土層断面 A-A'(南より)



3区13号竪穴建物跡土層断面 B-B'(東より)



3区13号竪穴建物跡遺物出土状況(南より)



3区13号竪穴建物跡遺物出土状況(南より)



3区13号竪穴建物跡遺物出土状況(南より)



3区13号竪穴建物跡全景(西より)



3区13号竪穴建物跡掘方全景(南より)



3区14号竪穴建物跡全景(南より)



3区14号竪穴建物跡全景(西より)



3区14号竪穴建物跡掘方全景(西より)



3区14号竪穴建物跡土層断面 A-A' (南より)



3区14号竪穴建物跡土層断面 B-B' (東より)



3区15号竪穴建物跡全景 (西より)



3区15号竪穴建物跡場方全景 (西より)



3区15・16号竪穴建物跡土層断面 A-A' (北より)



3区15・16号竪穴建物跡土層断面 B-B' (北西より)



3区15・16号竪穴建物跡土層断面 C-C' (西より)



3区15・16号竪穴建物跡土層断面 D-D' (北西より)



3区15・16号竪穴建物跡遺物出土状況(北より)



3区16号竪穴建物跡全景(西より)



3区16号竪穴建物跡竈跡全景(西より)



3区16号竪穴建物跡堀方全景(南より)



3区17号竪穴建物跡遺物出土状況(北より)



3区17号竪穴建物跡全景(北より)



3区17号竪穴建物跡竈跡全景(北より)



3区2号溝跡土層断面 A-A'(北より)



3区2号溝跡土層断面B-B' (南より)



3区2号溝跡全景 (北より)



3区1号土坑跡全景 (西より)



41区全景 (北より)



41区全景 (南より)



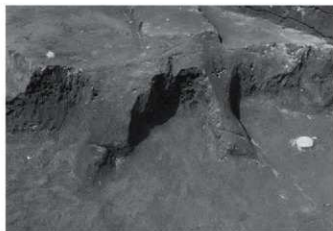
42区全景 (南より)



41区1号竪穴建物跡全景 (北西より)



42区2号竪穴建物跡遺物出土状況



4-2区2号竪穴建物跡電跡全景(南より)



4-2区2号竪穴建物跡堀方全景(南より)



4-2区2・3号竪穴建物跡土層断面(南より)



4-2区2・3号竪穴建物跡全景(南より)



4-2区3号竪穴建物跡電跡全景(東より)



4-2区4号竪穴建物跡土層断面(南より)



4-2区4号竪穴建物跡遺物出土状況(南より)



4-2区4号竪穴建物跡遺物出土状況(北より)



4-2区4号竪穴建物跡全景(東より)



4-3区5号竪穴建物跡遺物出土状況



4-3区5号竪穴建物跡掘方全景(南より)



4-3区6号竪穴建物跡全景(東より)



4-2区2・3号溝跡土層断面(南より)



4-2区4号溝跡土層断面(南より)



4-2区4号溝跡全景(南より)



4-2区1号井戸跡全景(西より)





4-3区2号井戸跡全景（北東より）



4-2区3号土坑跡全景（南より）



4-2区7号土坑跡全景（南より）



5区全景（西より）



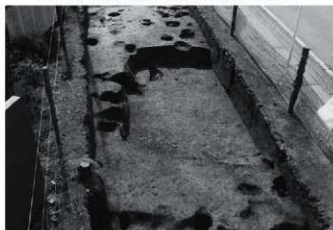
5区1号竪穴建物跡遺物出土状況（北東より）



5区1号竪穴建物跡馬形埴輪出土状況（南より）



5区1・2号竪穴建物跡掘方全景（北より）



5区3号竪穴建物跡全景（北より）



5区3号竖穴建物跡通路全景(西より)



5区3号竖穴建物跡堀方全景(北より)



6区全景(北より)



6区5号竖穴建物跡土層断面(東より)



6区1号竖穴建物跡全景(東より)



6区2号竖穴建物跡全景(南より)



6区3号竖穴建物跡全景(東より)



6区5号竖穴建物跡全景(南より)



6区柱穴列跡全景 (西より)

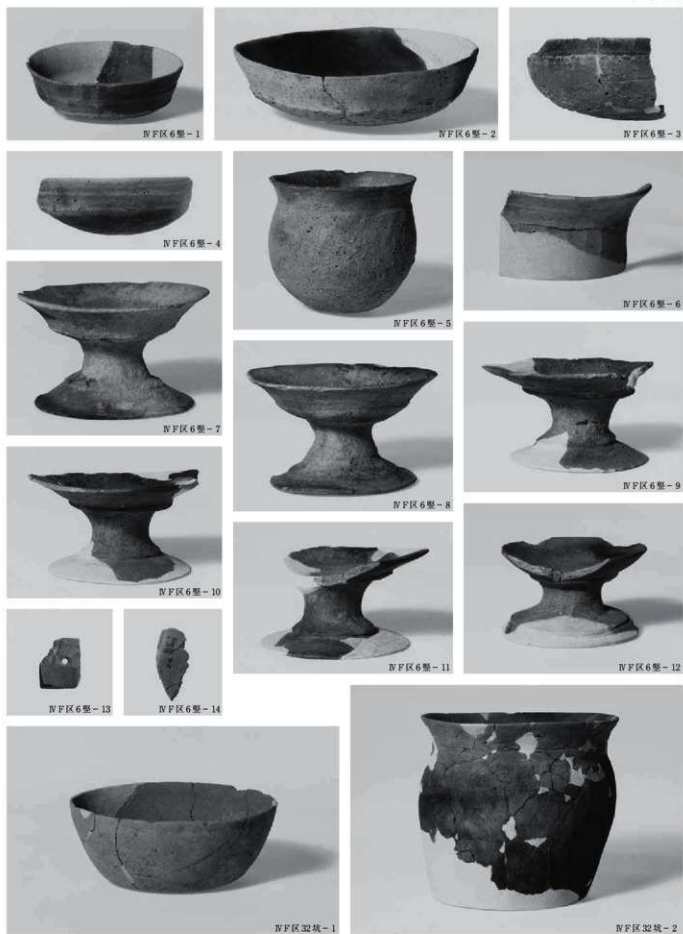


6区1号井戸跡全景 (西より)



6区6号土坑跡全景 (西より)

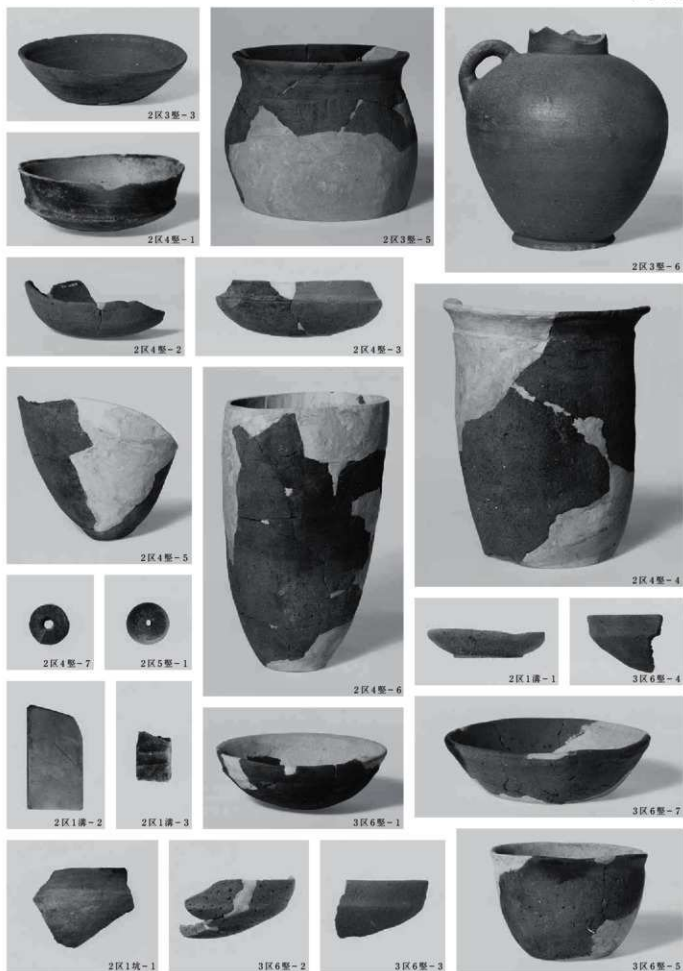




IV F 区 6 号壘穴建物跡・32 号土坑跡出土遺物



IV F 区 32 号土坑跡・表土、2 区 2・3 号竖穴建物跡出土遺物



2区3-5号壑穴建物跡・1号溝跡・1号土坑跡、3区6号壑穴建物跡出土遺物



3区6～9号竖穴建物跡出土遺物





3区9号-3



3区9号-4



3区9号-5



3区9号-6



3区9号-7



3区9号-8



3区9号-9



3区9号-10



3区9号-11



3区9号-13



3区9号-12



3区9号-16



3区9号-15

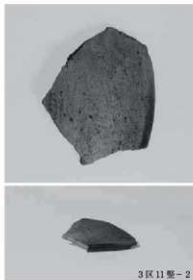


3区9号-14



3区11号-1

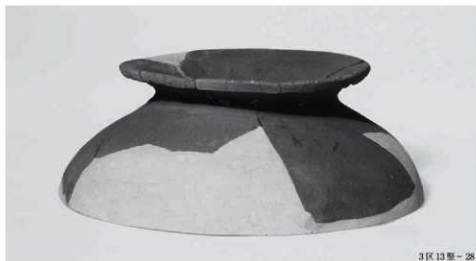
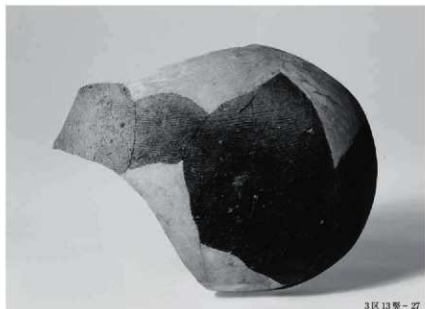
3区9・11号竖穴建物跡出土遺物



3区9・11～13号整穴建物跡出土遺物



3区13号壺穴建物跡出土遺物



3区13号窖穴建物跡出土遺物



3区13壺-29



3区14壺-1



3区15壺-1



3区15壺-2



3区15壺-3



3区15壺-6



3区15壺-5



3区15壺-4



3区15壺-7



3区17壺-1



3区16壺-1



3区3坑-1

3区13～17号壺穴建物跡・3号土坑跡出土遺物



3区16壘-2



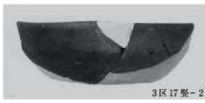
3区17壘-5



3区17壘-7



3区17壘-6



3区17壘-2



3区17壘-3



3区17壘-4



3区3坑-2



3区3坑-3



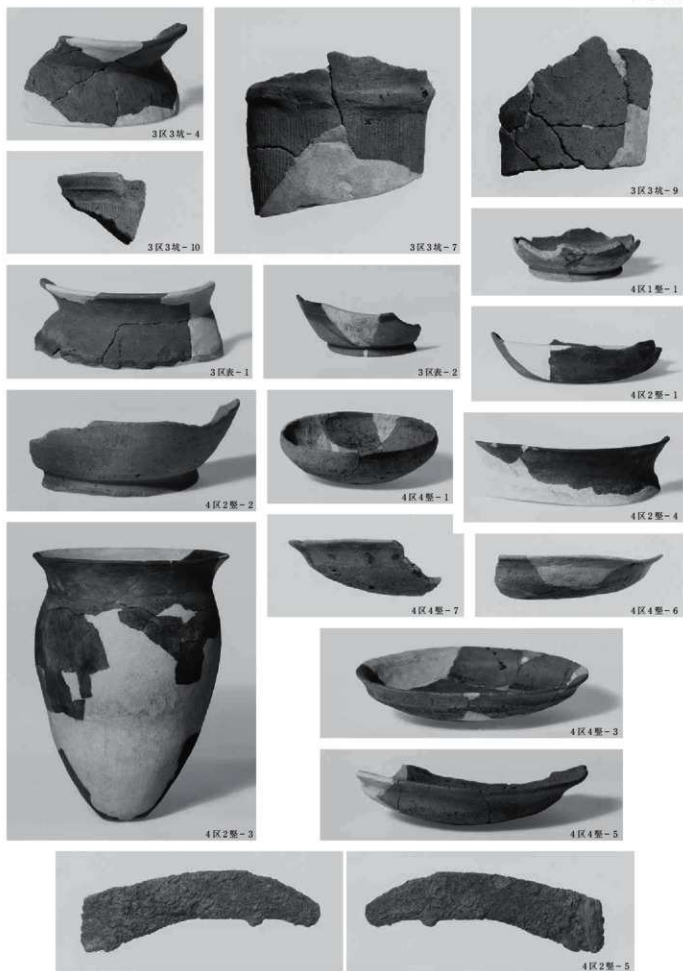
3区3坑-8



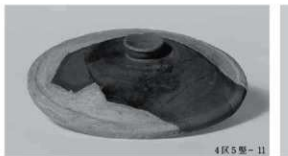
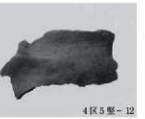
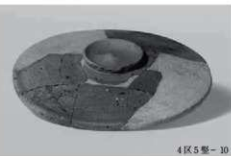
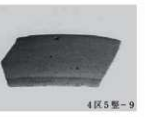
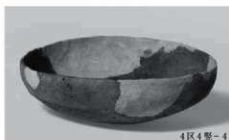
3区3坑-6



3区3坑-5

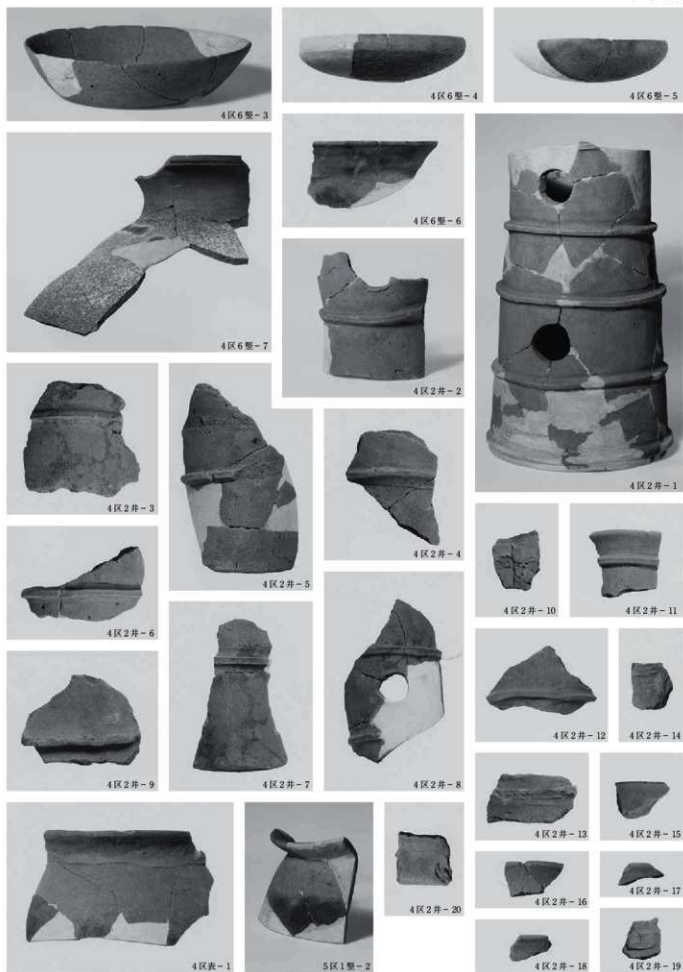


3区3号土坑·表土、4区1·2·4号整穴建物跡出土遺物



4区4～6号竪穴建物跡出土遺物



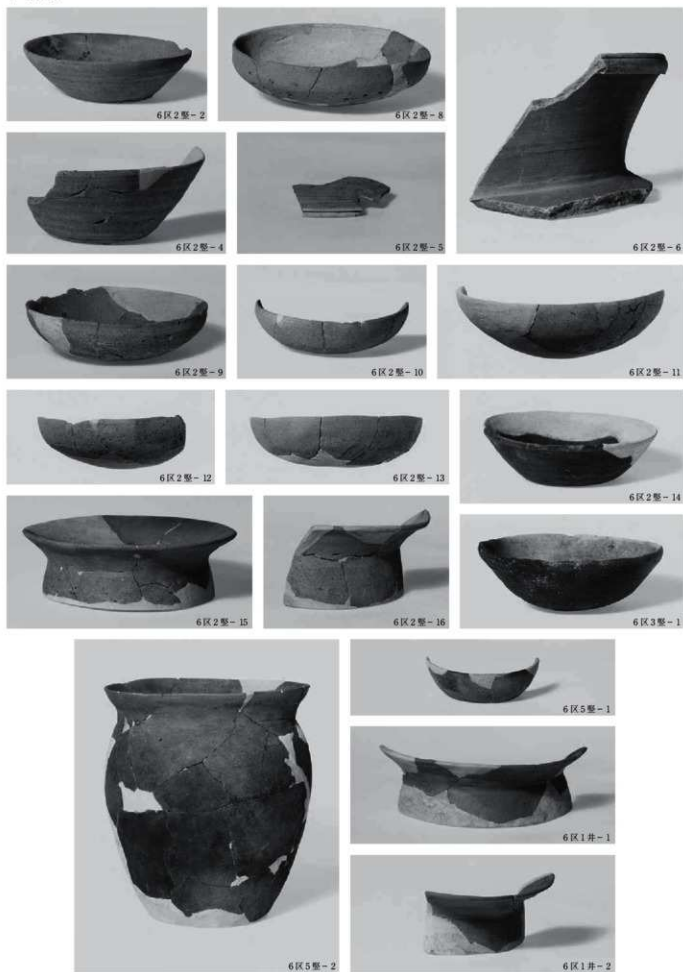


4区6号窑穴建物跡・2号井戸跡・表土。5区1号窑穴建物跡出土遺物



5区1～3号壘穴建物跡出土遺物





6区2・3・5号壘穴建物跡・1号井戸跡出土遺物

## 報告書抄録

書名ふりがな	いしばしじぞうくほいせき
書名	石橋地藏久保遺跡
副書名	主要地方道太田大間々線地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	425
編著者名	高島英之
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080331
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	いしばしじぞうくほいせき
遺跡名	石橋地藏久保遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしいしばしまち
遺跡所在地	群馬県太田市石橋町
市町村コード	10205
遺跡ID	21005-00929
北緯(日本測地系)	361940
東経(日本測地系)	1392040
北緯(世界測地系)	361952
東経(世界測地系)	1392029
調査期間	20030203-20061013
調査面積	4770
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	奈良
遺跡概要	古墳～平安-堅穴建物跡・掘立柱建物跡・溝跡-土師器・須恵器
特記事項	奈良・平安時代上野国新田郡家及び関連寺院跡周辺集落
要約	主要地方道太田大間々線と主要地方道足利伊勢崎線が交差する太田市石橋町石橋交差点の四方向側の拡幅工事に先立って発掘調査が実施され、古墳時代後期、奈良・平安時代の集落跡が検出された。集落の初瀬は6世紀後半頃で、主体は8世紀中葉から後半にかけてである。整理作業中に、本遺跡の東、約700mの位置から古代新田郡家行政跡の遺構が検出された。本遺跡のすぐ北側には新田郡家関連寺院跡と考えられる寺井庵寺が所在し、以前からこの地域一帯が古代新田郡の中核地帯とみられてきたが、新田郡家行政跡の発見によって、本遺跡も郡家及び郡家所属寺院などに近接した官衙周辺集落としての性格がより明確になった。そのことを裏付けるような、硯や「新田」「入田」などの郡名が記された墨書土器が出土している。



財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第425集

## 石橋地蔵久保遺跡

主要地方道太田大間々線地方道路交付金事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成20年3月25日 印刷

平成20年3月31日 発行

編集／発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北桶町下箱田784 番地2

電話 0279(52)2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org>

印刷／杉浦印刷株式会社

---